

Hans-Jörg Ronsdorf

陣営の転換

古い人から新しい人へ



陣営の転換

古い人から新しい人へ

Hans-Jörg Ronsdorf

Christliche Literatur-Verbreitung e. V.

Postfach 11 01 35 · 33661 Bielefeld

初版 2011年

© 2011 by CLV · Christliche Literatur-Verbreitung

Postfach 11 01 35 · 33661 Bielefeld

インターネット：www.clv.de

装丁：アンドレアス・フェット（Andreas Fett）、typtop、マイナーツハーゲン
（Meinerzhagen）

組版：CLV

印刷・製本：GGP Media GmbH、ペースネック（Pößneck）

ISBN 978-3-86699-310-5

目次

まえがき	12
1. 遊覧飛行	14
2. 着陸——さて、これからどうする？	27
2.1 自由か奴隷か——ただし両方ではない	27
2.2 自由の戒め	28
2.3 逃げることと立ち向かうこと	29
2.4 感情	30
2.5 古い船長と新しい船長のいる船	31
2.6 全速前進！	32
2.7 私たちの父	33
2.8 神が望んでおられること	34
2.9 あの方は盛んになり、私は衰えなければならない！	35
2.10 新しいいのちを図で表すと	36
2.11 全体を一目で	39
2.12 山歩き	41
2.13 アダムからキリストへ	42
2.14 私たちの救いのために、まず何が起こらなければならなかったのか？	42
3. ローマ人への手紙5章12～21節：アダムからキリストへ	44
3.1 12節：すべての始まり	45
3.1.1 「罪」と「もろもろの罪」	46
3.1.2 罪と死	46
3.1.3 墮落と原罪	47
3.1.4 一つの単純な戒め	48
3.2 13節：律法が与えられる前の罪	50
3.3 14節：来たるべき方のひな型、アダム	51
3.3.1 アダムとキリスト	52
3.4 15節：キリストによって、損害は償われて余りある	52
3.5 16節：違反がもたらすものと、恵みの賜物がもたらすもの	53
3.6 17節：死の支配はキリストによって終わらされる	53
3.7 18節：断罪と、いのちをもたらす義認	55
3.8 19節：罪人としての法的な立場と、義人としての救いにおける立場	56
3.9 20節：律法はすべての罪を明るみに出す	57
3.10 21節：死から永遠のいのちへ	58

3.11 ローマ人への手紙5章12～21節の概観	59
4. ローマ人への手紙6章：罪の力から自由に	60
4.1 陣営の転換：アダムからキリストへ	60
4.2 1～2節：恵みは罪を犯してよいという許可証なのか？	61
4.2.1 私たちは罪とその力に対して死んだのです！	62
4.3 3～4節：キリストとその死につくバプテスマ	62
4.3.1 死につくバプテスマ	63
4.4 4節：新しいいのちへとよみがえらされて	66
4.5 5節：キリストの死と復活において、キリストと一つにされて	67
4.6 6節：古い人はともに十字架につけられた	69
4.6.1 古い人	70
4.6.2 古い人が十字架につけられること	71
4.6.3 罪のからだ	72
4.7 7節：罪から放免されて	73
4.8 8～9節：キリストとともに死といのちを分かち合う	75
4.9 10節：罪に対して死なれたキリスト	76
4.10 11節：罪に対しては死んだ者、神に対しては生きている者と認める	78
4.11 12節：からだに対する罪の支配は打ち碎かれる	79
4.12 13節：今こそ自分を神に献げる	80
4.13 14節：律法の下ではなく、恵みの下に	80
4.14 まとめ	82
4.15 ゴルゴタの十字架と罪	83
4.16 ローマ人への手紙6章15～23節：恵みの下に生きる、解放された者たち ..	83
4.17 救いの直説法と救いの命令法	83
4.18 15節：恵みの目的	87
4.19 16節：罪の奴隷か、義の奴隷か	88
4.20 17節：心から従う——もはや罪の奴隷ではない	88
4.21 18節：義の奴隷	90
4.22 19節：神の義と聖さに自分を差し出す	90
4.23 20～22節：実を結ばない生き方から永遠のいのちへ	91
4.24 23節：永遠の断罪ではなく、永遠のいのち	93
5. ローマ人への手紙における律法	95
6. ローマ人への手紙7章：律法から自由に	97
6.1 ローマ人への手紙7章の意味と位置づけ	98
6.2 御霊と肉の戦い？	98
6.3 義人であると同時に罪人？	99

6.4 新しく生まれているのか、いないのか？	100
6.5 ローマ人への手紙7章：必ず通るべき経験なのか？	101
6.6 ローマ人への手紙7章の「人」とはだれか？	103
6.7 ローマ人への手紙7章1～6節：律法に対して死んだ	104
6.7.1 1節：律法が適用されるのは生きている者だけ	104
6.7.2 2～3節：律法から逃れる唯一の道	104
6.7.3 4節：今、私たちが属しているお方——キリスト	105
6.7.4 5節：律法は義を促すのではなく、罪を促す	106
6.7.5 6節：律法を越えた新しい礼拝	107
6.8 ローマ人への手紙7章7～14節：完全な律法	108
6.8.1 7節：罪の認識は律法によって来る	109
6.8.2 8節：律法は罪を促す	110
6.8.3 9～11節：律法との出会いは死に至る	111
6.8.4 12節：それでも律法は良いもの	113
6.8.5 13節：もう一度——律法の働き	114
6.9 ローマ人への手紙7章14～25節：律法の下にあるキリスト者の経験	114
6.9.1 14～15節：善い意志と弱い肉	114
6.9.2 16節：律法への同意	115
6.9.3 17～21節：私のうちに住む罪	115
6.9.4 22～23節：二つの律法とその働き	117
6.9.5 24節：絶望	118
6.9.6 25節：ローマ人への手紙7章の教訓	119
7. ローマ人への手紙8章1～11節：ついに自由！	121
7.1 「すでに今」と「まだ」	122
7.2 突破	124
7.3 1節：無罪判決——もはや罪に定める判決はない	124
7.4 2節：いのちの御霊の律法によって解放されて	127
7.5 3節：神はゴルゴタで罪の問題を解決される	128
7.5.1 神が人となられる	128
7.5.2 ゴルゴタ	129
7.6 4節：神の律法は今、やはり満たされる	131
7.6.1 モーセの律法とその有効性	132
7.7 5節：肉に従う者か、御霊に従う者か	134
7.8 6～7節：死といのち、敵意と平和	135
7.9 8～9節：肉のうちにいること、御霊のうちにいること	136
7.10 10～11節：神の御霊と、私たちのからだの救い	138

7.10.1 私たちの救いにおける立場——救いの直説法——「すでに今」	138
7.10.2 生きることと死ぬこと	138
7.10.3 神の御霊とからだ	140
7.10.4 なぜ今すでに死なない者になっていないのか？	140
8. ローマ人への手紙8章12～17節：救いの命令法——勝利のうちに生きる	142
8.1 12節：もはや肉に対する義務はない	143
8.2 13節：いのちか死か	143
8.2.1 約束と警告、そして永遠の救い	144
8.2.2 御霊によってからだの行いを殺す	148
8.2.3 「死んだものと見なす」のか、「殺す」のか？	149
8.2.4 殺す——どうやって？	151
8.3 14節：御霊に導かれる神の子たち	153
8.4 15節：子とする御霊が、私たちのうちで「愛する父よ！」と叫ぶ	155
8.5 16節：私たちは神の子どもです！	156
8.6 17節：私たちはキリストの栄光を受け継ぐ相続人です	157
9. ローマ人への手紙12章：思いが新たにされる！	159
9.1 私たちに対する神の目的	160
9.2 ローマ人への手紙12章1～2節：礼拝——理にかなったこと！	161
9.2.1 あなたがたのからだを！	162
9.2.2 世：友か敵か？	163
9.2.3 新しい考え方による変化	165
9.2.4 メタモルフォーゼ（変貌）	166
9.2.5 なぜ新たにされる必要があるのか？	167
9.2.6 どのようにして新たにされるのか？	168
9.2.7 戦場は思いの世界	169
9.2.8 どうすればこの戦いに勝てるのか？	171
9.2.9 白昼夢と願望	172
9.2.10 神のみこころ——吟味され、良いと認められた！	173
9.3 ローマ人への手紙13章13～14節：キリストを着る——肉のために備え	174
をしない	
9.4 結論	176
10. 古いものと新しいもの——概観	177
11. 肉とは何か？	179
11.1 罪と肉	181
11.2 肉と、信仰を持たない人	182
11.3 肉とキリスト者	182

12. 肉対御霊	186
12.1 何が問題だったのか？	186
12.2 肉の働き	187
12.3 ガラテヤ人への手紙におけるキリスト者	189
12.4 律法と肉——一つの歯車装置の中の二つの歯車	190
12.5 太古からの宇宙的な対立と、今日の個人的な対立	191
12.6 御霊によって生き、御霊によって歩みなさい！	191
12.7 神の働きと私たちの働き——相いれないものか？	193
12.8 自由へと召されて——しかし、それはどんな自由か？	193
12.9 御霊が私たちのために戦ってくださる	194
12.10 戦いのただ中で	195
12.11 ウイルスとワクチン	197
12.12 肉のわざとは何か？	197
12.13 神の御霊の実	199
12.14 肉は十字架につけられるべきもの	201
12.15 キリストとともに十字架につけられた後、人は何者なのか？	202
12.16 日々、十字架を負う	205
12.17 御霊によって生き、歩む：存在と非存在	206
12.18 御霊によって歩む——どうすればよいのか？	207
12.19 つまづいて、また立ち上がる	208
12.20 立ち直す	209
12.21 天におられる私たちの助け主	210
12.22 罪を犯してしまったら？	211
12.23 告白する	213
12.24 霊的なキリスト者と肉的なキリスト者——そういうものはあるのか？	214
12.25 御霊と肉の対立の本質	216
13. 新しい人と古い人：古いものは過ぎ去り、新しいものが生まれた	218
13.1 エペソ人への手紙における新しい人	219
13.2 コロサイ人への手紙における新しい人	220
13.3 エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙における古い人	221
13.4 新しい人の創造の物語	222
13.5 多くの者が一人の新しい人となる	224
13.6 一人ひとりの人格が新しい人となる	226
13.7 新しい人とは何か？	228
13.8 新しい創造	230
13.9 何が新しく造られたのか？	231

13.10 新しい人は新たにされる必要があるのか？	232
13.11 新しい人：衣服のように着る	234
13.12 まとめ——一つのたとえ	236
13.12.1 古い木	236
13.12.2 新しい木	237
13.12.3 まだ生きている古い根	239
13.13 ただ信仰によって	240
13.13.1 怠け者の庭師	241
13.14 新しい人の未来	242
13.14.1 未来のいのちを今すでに生きる	243
13.15 呼びかけ	244
14. 新しいいのちへと新しく生まれる	245
14.1 そもそも「本性」とは何か？	246
14.2 神の本性にあずかる者	248
14.3 永遠のいのちとはキリストのいのち	249
14.4 どのようにして私たちは神のいのちにあずかる者となるのか？	249
14.5 新生——神から生まれる	250
14.5.1 水から生まれる	251
14.5.2 御霊から生まれる	252
14.5.3 エゼキエルの預言：新しい心と新しい霊	253
14.6 死からいのちへと救い移されて：生かされる	254
14.7 生まれることと成長することの奥義	255
14.8 成長——いのちは成長する	257
14.9 耕し育てる	259
14.10 趣味か義務か？	260
14.11 ヨハネにおける救いの直説法	261
14.12 ヨハネにおける救いの命令法	263
14.13 永遠のいのち——質と量	264
14.14 いのちのしるし	264
14.15 神から生まれた者は罪を犯さない	266
14.15.1 救済史の四つの段階：人間と罪	268
14.15.2 もはや罪を犯さない：可能か不可能か？	269
14.16 完全——それは何か？	271
14.16.1 私たちの救いにおける立場の完全さ	271
14.16.2 私たちの生活における完全さ（成熟）：大人になる	272
14.16.3 将来の完成における全人的な完全さ	272

14.17 責任があるのは私たちの行いであって、私たちの存在ではない	273
14.18 新しい本性と古い本性が同時に私たちのうちにある	274
14.19 結論	274
15. 気質と性格	276
15.1 聖書と気質論	277
15.2 性格とその変化	279
16. むすびのことば	282
17. 参考文献	

私たちの子どもたち、フェリックス（Felix）、ラウラ（Laura）、アレックス（Alex）、ペーター（Peter）、アンネマリー（Annemarie）に——彼らがキリストをつかみ、キリストにつかまれるようにと、心から願いつつ。

まえがき

この本のテーマは、若いころからずっと私の心を占めてきました。それはキリスト者であることの心臓部です。救いを完全につかみ、理解してこそ、解放された生き方ができます。キリスト者の成熟は、私たちが十字架をどれだけ理解したかにかかっています。

罪から解放されていることは、理論ではなく、実際の現実です。30年近く前、ウォッチマン・ニー（Watchman Nee）の本『Das normale Christenleben』（「普通のキリスト者の生活」）が、私に突破口を与えてくれました。私は信仰を持っていたのに、挫折していました。罪の力に対抗するものを、何も持っていなかったからです。この本は、多くの人にとってそうであったように、私の目も開いてくれました。私はキリストのうちにずっと前から解放を持っていたのに、それを本当には知らなかったのです。これは、より高い段階の敬虔さや、専門家レベルのキリスト者生活の話ではありません。神が私たちをどう見ておられるのか、そして神が私たちに何を手渡してくださったのか、それを理解することなのです。

このテーマは難しい問題です。特に、それについて何かを書こうとする者にとってはそうです。私が100パーセントに到達したから、これを書けるのでしょうか。決してそうではありません。私たちの多くが教師になるべきではないことは、よくわかっています。教師はより厳しいさばきを受けるからです。私たちはみな、多くの点でつまづくのです。しかし、聖書の教えと、そのたえまない繰り返しがなければ、ほかの人を励ますことも、自分自身が正しく取り組むことも、まったくできません。どの世代も、これらのテーマに自分自身で向き合わなければなりません。この本には、ほかの人がまだ書いていない新しいことは、何も、あるいはほとんど書かれていないでしょう。それでも、この中心的なテーマに新しい命を吹き込み、話し合うきっかけになればと願っています。

私は喜んで助けを借りました。とりわけ、トーマス・イエッテル (Thomas Jettel) に感謝します。校正と思考の刺激をいただき、多くのことがわかりやすくなりました。ニース近郊の宣教師ヨシュア・ケラー (Josua Keller) とブリギッテ・ケラー (Brigitte Keller) にも、建設的な意見交換を感謝します。また、ヘルベルト・ブリーム (Herbert Briem)、ペーター・シュトライトンベルガー (Peter Streitenberger)、ハリー・グラーフ (Harry Graf) にも、批判的に目を通していただいたことを感謝します。これらの兄弟姉妹の名前を挙げたからといって、私たちがすべての問題で同じ意見だというわけではありません。ですから、内容の責任は私自身にあります。

わずかな例外を除いて、私はエルバーフェルト訳聖書〔ドイツ語聖書翻訳〕2003年版 (Edition CSV Hückeswagen) を用いました。例外には、原則として注記してあります。

Hans-Jörg Ronsdorf、ズルツベルク (Sulzberg)、2010年11月

ただ神こそ、わが岩、わが救い、わが高きやぐら。

詩篇62:6

そのとき、あなたがたは安らかに暮らし、救いと知恵と知識に満ちあふれる。

イザヤ33:6 (NeÜ [ドイツ語聖書翻訳])

1. 遊覧飛行

どうぞ乗り込んで、シートベルトを締めてください！これから、素晴らしい遊覧飛行に出かけます。目的地は大きな山脈です。圧倒されるような山塊を、鳥の目で眺めようというのです。私はアルプスのすぐふもとに住んでいて、仕事部屋からは山々が見えます。飛び立って、この素晴らしい被造物を上からじっくり眺めてみたいと、何度思ったことでしょうか。これまでのところは短い遊覧飛行を一度しただけですが、それで、もっと飛ぶたいという気持ちになりました。

今日は、あなたをそのような飛行にお招きしたいと思います。お金のかからない飛行です。私たちの想像の中で行われるのです。どう思われますか。どの山脈のことでしょうか。この山脈は、永遠にして全能の神の大いなる救い、すなわち大いなる救出だと想像してください。この山は、神がイエス・キリストにおいて、その十字架の死と復活と昇天によって成し遂げられたことを表している、と想像してください。何かどうでもよいことではありません。救いの豊かさのことなのです！一度の飛行で全部を一度に見ることはできません。それでも、すでに多くのものを目にすることはできます。そして、飛ぶたびに、また何か新しいものを見ることができるようでしょう。

お約束します。この飛行は退屈なものにはなりません。それは、機体が小さな二人乗りだからではありません。そんな軽い飛行機は、かなり揺さぶられることもあります。けれども、私たちが目にするものはあまりに壮大なので、ほかのことはすべて忘れてしまうでしょう。

私たちのパイロットは、だれよりもよく知っています。最良のルートも、最良の目的地も、いちばん美しい眺めも、ちょうどよい高度も低空も知っています。天候も知っていますし、私たちを無事に家に連れ帰ることもできます。ですから、飛行機が怖いという気持ちは、安心して地上に置いていかまいません。

私たちが目指す山は、エルブルス山です。コーカサス山脈で最も高い山で、標高は5642メートルあります。これはかなりの高さで、機体はこの高度まで上がるのに本当に苦労しなければなりません。

この山の何が特別なのでしょう。もちろん、コーカサスで最も高い山だということが、その特徴です。しかし、これは死火山でもあるのです。大きな火口があり、そこからはるか昔、灼熱の溶岩が噴き出しました。現代の例からもわかるように、火山は人間の手に負えない、とてつもない自然の力です。そのような自然の力は、神がノアの時代に世界を洪水で覆われたときにも噴き出しました。聖書によれば、大いなる淵の源が裂け、天の窓が開かれました（創世記7:11）。想像を絶するほどの大量の水を、地上に注ぐためです。もしかすると、この世界規模の洪水に伴う大規模な地質の変化によって、火山が活動を始めたのかもしれませんが。いずれにせよ、水はそのとき山々の頂を越えるまで上がりました。すべての山が覆われ（創世記7:20）、見えるのは水だけでした。

その時代の人々は、非常に邪悪でした。**もはや後戻りできない地点**を越えてしまい、神から、そして神が被造物のために思い描いておられたことから、遠く離れてしまったのです。あまりに遠く離れたので、神は区切りをつけられました。その悪がどれほどの規模だったのか、私にはわかりません。しかし神はそれを見ておられました（創世記6:5）。そしてイエスは、まさにそのような日々が再び来ると言われます（ルカ17:26）。大洪水は、ノアとその家族を除くすべての人を死なせることになっていました。この裁きを見ると、罪が神にとって何を意味するかがよくわかります。私たちはしばしば、罪をたいした問題だと思いません。罪のよくない、ひどい結果に、いつも直面しているにもかかわらずです。しかし、神はそれをどうお考えになるのでしょうか。神は罪を憎まれます。罪は、神の被造物である人間を、死に至る不治の病のように滅ぼし、神から引き離すからです。罪は人間をすっかり変えてしまい、神の敵にしてしまいます。神は私たちを愛しておられるからこそ、罪を憎まれるのです。神が罪を忌み嫌われるのは、それが神のご性質全体、神の愛と聖さに反するからです。主はイスラエルの民の人々に、彼らの罪深い有様のために、ひそかに涙を流すと言われます（エレミヤ13:17、

14:17)。罪は神の心を深く痛めます。神にとって、どうでもよいことではないのです。神はどの罪もご存じで、心の奥底でそれを感じておられます。罪は人を神から引き離し、人と人とを引き離します。罪とは、神に挑みかかり、神の戒めを無視するものです。罪は神から人へと通じる命綱を断ち切ります。ですから、死以外のところへは導きようがありません。罪は愛想のよい顔をしていることもあります。しかし、それは仮面にすぎません。罪は醜く、どこに現れようと破壊します。罪は広く行き渡っています。人がいるところならどこにでも見つかります。すべての人がかかわっています。認めたくなくても、罪はダニのように、すべての人に取りついています。罪は種のように、生まれたときからすべての人のうちにあります。ある人ではより多く、ある人ではより少なく育っているだけです。

神は罪を憎まれますが、罪人は愛しておられます！ これこそ私たちの救いです！ ところが、罪と人間とは癒着していて、一体となっています。人間にできるどんな方法でも、引き離すことはできません。もし神が罪を滅ぼされたら、その滅びの判決は結局、私たちに下るでしょう！ 神は道を見だし、この問題を解決してくださいました！ この問題に取り組んだのは人間ではありません。人間は自分自身の罪の病を否定しているからです。人間にとって、罪は、神にとっての罪ほどの重さを持っていません。

永遠なる方が宇宙を造られたとき、「あれ！」という全能のことばだけで十分でした。しかし、罪の問題を解決するには、ことばだけでは足りませんでした。むしろそれは、神のすべての愛を代価として求めたのです。神は変わることをしない方です。純粋な光のような方であり、愛そのものであり、聖であり義なる方です。きよく、まったく罪のない方です。罪が問題になるとき、私たちは神のこれらのご性質を思い起こすべきです。しかも、神の次元です！ 私たちの寛容で、しばしば融通のききすぎる考え方が問題なのではありません。イエスが処刑された場所ゴルゴタで、神がどれほど想像を絶するほど真剣に罪を扱われるかを、あなたは見ることができます。神が罪人を愛しながら、罪を限りなく憎んでおられることが、これほどはっきり見える場所はほかにありません。神は私たち人間の身代わりとして、ご自分の御子をいけにえとして献げられます。なぜ血のいけにえが必要だったのですよ

うか。罪は、ちょっとした過ちではなく、私たちの創造主がつまずきを覚え、侮辱と感じられるものだからです。ですから神は、正当に、償いと、私たちが神に与えた損害の埋め合わせを求められます。神が罪人をその罪のゆえに罰せられるということは、いつまでも変わりません。不正には罰が伴うというのは、多くの人の考えでは、宗教が作り出したものにすぎません。とんでもない間違いです！ この事実、たとえば私たちの法制度の土台になっています。ただ、神においては、それをずっと純粹で、ずっと公正なものとして考えなければなりません。神はすべてをご存じで、あらゆる思いを読み取られます。神はどこにでもおられ、人が考え、語り、行うすべてのことの証人そのものです。神の目を逃れるものは何もありません。もしあなたがこの世にただ一人で、一つの罪しか犯していなかったとしても、それでもイエスのいけにえは必要だったでしょう。たった一つの罪でさえ、神には受け入れられないのです。神はあまりに聖く、栄光に満ちておられるので、ただ一つの罪でさえ見過ごすことがおできにならないのです。

神は人間を、失敗した創造の実験のように扱われません。神は人間を見捨てられません。神は罪人を赦し、救おうとしておられます。しかし、そのためには、負債を支払うことのできるだれかが必要です。その勘定を清算できる人はいるのでしょうか。います！ この一人の方が、身代わりのいけにえとなります。このいけにえが、私たちの負債を支払います。「神の小羊」であるイエスが、私たちの身代わりとなられます。一人の人が——比喩的な意味で——この身代わりのいけにえの小羊となられるのです。ゴルゴタで、神の御子は自ら進んで、私たちの罪を負って神のすぐ前に立たれました。私たちの有罪判決と刑罰を引き受けるためです。神は御子の献身を受け入れ、この刑罰の裁きにおいて御子を惜しまれませんでした。私たちは、自分の敵を、彼ら自身が招いた問題から買い戻すために、自分の息子を差し出すでしょうか。私たちなら、息子や娘を罰する代わりに、何としてでも彼らをかばおうとするのではないのでしょうか。神はそうなさいませんでした。そうです。私たちが贖うためには、一つの命令や創造のことばよりも、はるかに多くのことが起こらなければならなかったのです。

ノアの話に戻しましょう。あのとき、裁きの水は最も高い山々の頂を覆いました。神は罪に対して本気で臨まれたのです。それも、きわめて本気で！——そして、ゴルゴタではなおさらです。そこで行われた裁きについて、イエスが負われた重荷について、私たちは少しでもわかっているでしょうか。あなたは今、イエスがどれほどひどく痛めつけられたか、いばらの冠を頭に押しつけられ、十字架に釘づけにされたかを思い浮かべておられるかもしれません。しかし、ちょっと待ってください。それらは、イエスが私たちの罪の代価を支払われた苦しみではありませんでした。人間がイエスにそうしたのです。人間は救いに何の貢献もしていません。彼らのしたことは、人間がどれほど墮落しているかを、もう一度証明したにすぎません。神の裁きと、罪に対するそれに見合った判決の執行は、あの聖金曜日の第六の時、つまり昼の12時ごろになってようやく始まりました。そのとき、太陽が最も高く昇っていたのに、あたりは真っ暗になりました。私たちの負債を清算する時が来たのです。神の怒りの裁きが、全力をもって罪のない小羊に下りました。三時間のあいだ、私たちの主イエスは、罪に対する神の怒りに（私の罪に対する怒りにも）ご自分を引き渡し、すべての人を永遠に地獄に送るものを、ご自分の身に負われました。これこそ、ことばの最も真実で、最も深い意味における闇です。罪の問題をどこしえに解決するために、御父と御子のあいだで何が起こったのか、その証人はだれもいません。

私たちは飛行機の窓から、かつて火を噴く火山だったこの山を見下ろします。赤く燃える溶岩は、硫黄と火で燃える池、永遠の地獄を思い起こさせます。そうです。私たちの救い主は、私たちの代わりに、神が罪に対して感じておられるすべてを、ご自身で耐え忍ばれたのです。それも、三時間に凝縮して！ コーリー・テン・ブーム（Corrie ten Boom）は、これについて次のようなたとえを用いました。森林火災には、火がもう燃やすものを見つけれない場所が必ずある——それは、すでに火が荒れ狂った場所だ、と。ゴルゴタは今や、罪人が安全を見いだす場所です。罪に対する神の裁きの火は、すでにここを通り過ぎたからです。

ゴルゴタでのこの神の裁きについて預言的に語っている詩篇の作者は、大洪水のことを思い浮かべているようです。「あなたの大波、あなたの波¹はみな、私の上を越えて行きました」（詩篇42:7、88:7参照）。ノアの時代の自然の力のとどろき（大量の水、嵐、地震、火山など）は、主イエス・キリストが十字架の上で、さらには三時間の闇の中で耐え忍ばれたことの、かすかなひな型にすぎません——弱さのうちに十字架につけられ、さいなまれた体で、激しい痛みの中で。それは完全に神から見捨てられることでした！ 神は御子を裁かれたのです。天と地のあいだにかけられた神の御子——人々には捨てられ、天からは拒まれたのです！ 御子は私たちのために、最も外側の闇の中へと行かれました。なんとという犠牲でしょう！ どうか時間をとって、この方があなたのために何をしてくださったのか、思い巡らしてください。信じてください。あなたが自分の人生に何らかの変化を経験したいなら、それはイエスの愛に心を打たれることから始まるのです。その愛はあまりに大きく、私たちの知識をはるかに超えています。パウロもそう言っています（エペソ3:19）。パウロはこの愛の広さ、長さ、高さ、深さについて語っています。フランスの兵士たちがスペインで、異端審問の時代の打ち捨てられた地下牢を見つけました。彼らは、まだ鎖で牢の壁につながれたままの骸骨を見つけました。壁には十字架が刻まれていました。そして十字架の四つの端には、エペソ人への手紙3章のことが刻まれていたのです。上には高さ、下には深さ、左には広さ、右には長さ²と。この刻み絵を残した殉教者は、イエスの愛に満たされていました。苦しみに満ちた生涯の最後の、最もつらい日々、最もそうだったのです。彼は十字架の意味を理解していました——すべての知識を超えたキリストの愛です！ そして、この異端審問の殉教者は、この愛のゆえに、それにふさわしい道を歩み、そうして自分の主人に倣う覚悟ができていたのです。

ここまで私たちは、負い目と罪と赦しについて語ってきました。人は自分のしたことのゆえに有罪とされます。しかし、私たちの悪い本質という問題はどうかのでしょうか。私たちが罪人であるという事実を前にして、それでも私たちに赦しが与えられることがありうるのでしょうか。

1. これらの大波と波は、神の怒りを表しています。

十字架の出来事は、なぜ底知れないほど恐ろしいものだったのでしょうか。主イエスは、私がしたことのためだけでなく、私がどういう者であるかのためにも死なれたからです。ちょっと想像してみてください。あなたがある人の大きな負債の責任を引き受けるとします。それは称賛に値することでしょう。では、さらにこう想像してください。あなたがその悪人と取り違えられただけでなく、わざと同一視されるとしたら！ これでさえ、ゴルゴタで起こったことのかすかなたとえにすぎません。聖書は、私たちの存在全体が罪深いと述べています。罪は私たちのうちに住んでいて、私たちのすることすべてに入り込んでいます。人が「大きな」罪人であろうと「小さな」罪人であろうと、それは関係ありません。信じようと信じまいと、人は信仰を持って長くなればなるほど、特に自分自身のうちにそれを認めるようになります。それは、そのときにもまだ赦されていない罪を抱えて生きなければならない、ということではありません。そうではなく、私たちのうちに住む罪を、ますますよく知るようになるのです。信仰生活が長くなればなるほど、罪がどれほど卑劣で忌まわしいものかがわかってきます。そして、あなたが信仰に入ったとき、世のただ中で生きていたか、キリスト教の家庭で生きていたかも、何の違いもありません。

主イエス・キリストは死なれたとき、私たちのうちにある罪の問題も解決されました。キリストがそのために罪とされたのだということを、私たちはよく理解しなければなりません。神はキリストを、まるでキリストが罪の責めを負っているかのように裁かれました。行いだけでなく、私たちと結びついている罪そのものについてもです。悪かったのは実だけではありません。木全体が腐っていて、役に立たなかったのです。こうして、主イエス・キリストは私たちのために裁きの座に立たれました。三時間の闇の後、イエスは叫ばれました。「完了した！」これは、宇宙がかつて聞いた中で最も重要なことばです！ 裁きの判決を完全に引き受けるために、主イエスは死なれます。罪の、私たちの罪の報酬は死です。イエスの死です！

想像してみてください。神がこのイエスの死を、すっかりそのままあなたのものと認め、あなたの口座に入れてくださるのです。あるいは聖書のことばで言えば、私たちの古い人はキリストとともに十字架につけられたのです！

私たちの古い生活（私たちがしたことすべて、そして私たちであるものすべて）は、2000年前、十字架の上でキリストとともに死に渡されました。キリストはそのため死なれました。すべてのために！ 私たちがまだ何かの代価を支払わなければならないものは、もう何一つありません。神の断罪の判決が私たちに下ることは、もうないのです！ 飛行機の窓から外を見て、この雄大な山をよく見てください！ 火山は消えています。同じように、焼き尽くす神の裁きの火は消えたのです。イエスがそれをご自分の身に負われたからです。今、何が見えますか。白い山です！ 一面、雪に覆われています。もし火山がまだ活動していたら、山頂に雪があるはずがありません。しかし、雪が私たちに何を語ろうとしているかは明らかです。今やキリストにあって私たちにとって現実となった清さと非の打ちどころのなさを、これほどはっきり語るものは、ほかにほとんどありません。

ヒソプ²で私の罪を除いてください。そうすれば、私はきよくなります。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなります。

詩篇51:7

「さあ、来たれ。論じ合おう」と主は言われる。「たとえ、あなたがたの罪が緋のようであっても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

イザヤ1:18

神は私たちを洗いきよめてくださいました。イエスの壮大なみわざがもたらしたものを、ここでさらにたくさん数え上げることもできるでしょう。ここでは、ただこの聖書のことばだけを挙げておきます。

しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは、私たちにとって神からの知恵、すなわち義と聖と贖いになりました。

コリント第一1:30

2. ヒソプは葉の茂る植物で、水や血を振りかけるのに用いられました。

私たちが古い生活の中で持っていなかったものすべてを、今はキリストを通して持っています。神が私たちをキリストのうちに移してくださったからです。奇妙に聞こえるかもしれませんが、しかし、これが意味しているのはまさに次のことです。神は私たちをキリストと一つとみなし、キリストと結び合わせてくださったので、キリストがなさったことすべて、そしてキリストが今、高く上げられた人の子として天においてどういう方であるかということすべてが、私たちにも当てはまるのです。神は私たちを、御子がなさったこと、そして御子が今あるところにおいて見ておられるのです！ これこそ、まさに恵みと救いの頂点ではないでしょうか。雪のように白い衣に包まれたこの山の静けさと安らぎは、私たちが今、神との平和を持っていること、そしてキリストにあってすでに天に移されていることを示しています。そうです。私たちはキリストのうちにいるのです！ ですから、私たちに対する断罪の判決はもはや何一つありません——私たちがしたことに対しても、私たちが生まれながらにどういう者であるかに対しても。神は私たちを改良しようとはなさいませんでした。神は新しい始まりをつくってくださいましたのです。しかし、新しく始めるためには、まず古いものを取り除かなければなりません。そして、問題になっているのは物ではなく人間なのですから、こういう問いが生じます。どうすればそれが起こりうるのでしょうか。すでに述べたとおり、私たちの命は死によってしか終わらせることができませんでした。キリストは私たちのために死なれました（そして私たちもキリストとともに死にました）。私たちが文字どおり死んだものではありません。そうではなく、もう一人の方の死が私たちのものと認められたのです。神はご自分の義に基づいて、また私たちに対するご自分の正しい要求と完全に一致して、御子の身代わりの死を（純粹に法的な観点から見て）すっかり私たちに譲り渡してくださいました。それは、私たちが実際に死んだのと同じように有効なのです。十字架の上で、私たちの古い本質は死刑を宣告され、その判決はキリストの上で執行されました。

この雄大な山は、神の義の大きさと同時に、私たちがどれほど小さいかという事実を示しています。神は、ご自分の義をほんのわずかも手放すことなく、私たちを罪から解放するためにすべてをしてくださいました。

あなたの義は神の山々のよう。あなたのさばきは大きいなる淵。

詩篇36:6

ときに私たちは、これがすべて本当に自分個人に当てはまるのだろうか、また少し不安になるかもしれません。私たちは、もしかすると厚かましすぎるのではないのでしょうか。飛行機が右へ左へと揺さぶられることもあります。ぎょっとすることもあるでしょう。しかし、たとえ感情の嵐が私たちを揺さぶっても、この山は変わらず同じです。どんな嵐も、この救いの山を動かすことはできません。この救いの山は恵みの山であり、シオンの山に似ています。

その聖なる山は美しくそびえ、全地の喜び。はるか北の果てにあるシオンの山、大王の都。

詩篇48:1-2（ER〔ドイツ語聖書翻訳〕、ヘブル12:18-20参照）

山の話をしていると、もう一つ思い浮かぶことがあります。いわば、否定的な意味での山です。グランドキャニオンは巨大な峡谷、巨大な谷です。この断崖の前に立って深みを見下ろすと、本当に圧倒されます。これもまた、私たちの姿を表しています。私たちは無に等しい者でした。私たちはちりであり、ちりに帰ります。罪が私たちの人生に入り込んだからです。私たちの心は、悪の深淵のようです。しかし今、私たちは、十字架が立っていた「救いの山」を見上げます。十字架は終わりですが、始まりでもあります。

ですから、だれでもキリストのうちにいるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去りました。見よ、新しいものが生まれました。

コリント第二5:17

パイロットはゆっくりと高度を下げていきます。ですから、今はこの壮大な山塊のもっと低い地域も見えるようになります。山脈があまりに大きいので、一度に全部を見ることは決してできません。高度を下げながら、パイロットは山にもっと近づいていきます。大きな滝が見えてきます。そして、さ

らにいくつかの小さな滝も見えます。なんと力強い光景が目の前に広がっていることでしょう！ 大量の水が、なんと威厳をもって谷へと落ちていくことでしょう！ もっと下のほうで、これらの滝は一つの川に合流します。雪と氷の塊は、何百万立方メートルの水を蓄えています。エルブルス山の山腹には70を超える氷河があり、そこから水が流れ出ています。水は谷へと流れ下り、牧草地や畑や森を潤します。農業はすべて、この水に頼っています。この水がなければ、その地域ではほとんど何も育たないでしょう。もちろん、そこでも雨は降ります。しかし、まさに雪解けの時期に、春の植物の成長に必要な水が谷へと流れ下るのです。

山を流れ落ち、川に集まっていく力強い水の流れは、聖霊を表しています。主イエスご自身がこのたとえを用いられました。主は、渴いている者はだれでもご自分のもとに来て飲みなさい、と言われたとき、人間の深い渇き——意味と安心と愛を求める問いと探求——のことを言っておられたのです。この方のもとに来る人は、人生の渇きをいやされます。それも、永遠にです！ 渇いた心は、この方のもとで安らぐことができます。

主イエスは、生ける（つまり流れる）水について、ご自身がその源である泉について語っておられます。私たちは神のことばを真剣に受け止めてよいのです。それは確かなことです。神の永遠の、聖なる、力ある御霊が、私たちに豊かに与えられています。御霊は私たちのうちに生きておられます。御霊は、いのちと力と導きと慰めの、絶えることなく、尽きることのない泉です。私たちのうちで、いつも湧き出る泉となることがおできになるのは、神ご自身だけです。

私はもう一つ別の山のことを思わずにはられません。イエスが三人の弟子たちと一緒にいた山です。彼らは高く登っていきました。もしかすると、その山の雪線のあたりまで登ったのかもしれませんが。³突然、イエスは彼らの目の前で姿が変わり、太陽のように輝かれました。その衣は、周りの雪よりも白くなりました。彼らには、主イエスが再び地上に来られるときにどのよ

3. 一部の注解者は、標高1800メートル以上の部分が一年のうち数か月間雪に覆われるヘルモン山が、変貌の山だったと推測しています。

うな姿をしておられるのか、前もって見る事が許されたのです。しかし、それは同時に、今、力ある方の右におられる主イエスを、私たちがどのように思い描いてよいかを表すものでもあります。ところで、ヨハネによれば、聖霊はイエスが栄光を受けられてから、つまり神の右にあるこの栄誉の座に着かれてから、はじめて来ることができました。神の御霊は、まさに栄光を受け、冠をかぶせられた神の御子によって遣わされることになっていたのです。御霊が御子の勝利と栄光を証し、それを私たちの心にしっかりと根づかせることができるためです。

御霊は、私たちの人生の間借り人であろうとはなさいません。そうではありません。この御霊が私たちを満たし、私たちのうちでイエスを大きくし、私たちを導き、勝利者として生きる勝利を私たちに与えてくださること、それが神のご意図なのです。これが事実です！ なぜそう見えないことが多いのかという問いについては、このあと必ず取り上げます。

このパノラマを楽しみましょう！ 雄大な山、輝くばかりにまぶしい白の山頂、そして上から谷へと流れ落ちる、湧き立つ水の流れ。成長の躍動は、良い土壤があるところで始まります。

飛行はゆっくりと終わりに近づきます。本当はまだ着陸したくないのですが、燃料が尽きかけています。あと数回、旋回するだけの燃料は残っています。下の緑の上をです。緑は谷へ行くほど濃く、豊かになっていきます。最初は茂みといくつかの緑の斑点だけです。それから何本かの木が見え、気がつくとうっそうとした森の上を飛んでいます。そして早くも、谷間に畑や耕地や農園が見えてきます。

あなたはご存じでしょうか。あなたの心の中でも、神の御霊の水が、霊的な、しかし現実の成長を始めているのです。救いは、それ自体としては完全なものです。しかし、あなたのうちでは、それは同時に一つの始まりでもあるのです。あなたの心の中で、新しい種が芽を出しました。あなたは新しく生まれたのです。あなたは以前と同じ人ではありません。それは目で見ることではできません。まったく外面的には（体重や声の高さなど）、あなたのすべては以前とまったく同じです。それでも、何かとてつもないことが起こっ

たのです。あなたは新しく、しかも神ご自身から生まれたのです。あなたはもう一度、最初からやり直すことができますのです。

この種は、神の永遠のこぼです。神のこぼは、私たちのうちに永遠のいのちを植えつけました。そして、このいのちは成長します。このテーマについては、次の章でさらに掘り下げます。畑や木々や農園の一面の緑を見ると、私たちはこう気づきます。それは、神が植物のいのちの中に置かれた力がどれほど強いかを証しているのです。太陽が照り、土壌が良く、山から水が来れば、成長を止めることはできません。人のうちにある霊的な成長は、それよりも力が弱いと私たちは思うのでしょうか。植物ではなく、「被造物の冠」である人間のことなの입니다。

このわくわくする飛行の後、私たちは着陸します。この山とその周辺の大きさと美しさに、私たちはまだ圧倒されています。私たちは、自分が何者であるかを思い起こします。神の子どもです。罪の負債は、永遠に取り除かれました。私たちが古い人として何者であったか、それは過去のことです。それは十字架によって取り除かれ、神の背後に投げ捨てられました。古い人の代わりに、神は新しい人を据えてくださいました。神はその新しい人を、イエス・キリストのかたちで造られたのです。この新しい人は永遠のいのちを持っています。キリストご自身がそのいのちです——生ける水を内に持ち、新しい人を成長させ、信仰において成熟した強い者としてくださる方です。

パイロットは荒っぽい着陸をし、私たちは再び地上に戻ります。私たちは夢を見ていただけなののでしょうか。それとも、私たちが見たものはすべて本当なののでしょうか。そうです。本当です。神のこぼがそう言っているのです。

もしかすると、この遊覧飛行で、あなたは好奇心をかき立てられたかもしれません。続くページには、私たちがこぼの最も本当の意味で「ざっと飛び越えた」だけのことについて、さらに詳しく書かれています。ここまでは飛んでいただけでしたが、これからは山歩きにお誘いします。それはあなたを美しい場所へと連れて行くでしょう。

2. 着陸——さて、これからどうする？

でこぼこの着陸の後、私たちは現実という地面に戻ってきます。神の救いがこれほど包括的なもので、単に天国への私の切符というだけのものではないのなら、こういう問いが生じます。それはどのように私の生き方を変えることができるのでしょうか。神ご自身が、私たちが自由のうちに生きることを望んでおられます。神は私たちを裁きから守ってくださるだけではありません。罪の奴隷状態から、そして私たちの古い自己中心の生き方の独裁から、私たちを贖い出そうとしておられるのです。救いは理論上の事柄ではありません。神の救いとは十字架のことば——救いの力であり、したがっていのちに至らせる力である福音です。しかも、信じるすべての人にとってです！

2.1 自由か奴隷か——ただし両方ではない

イスラエルの人々は、かつて情け容赦のない奴隷状態にありました。逃げ道もなく、自由への希望もありませんでした。しかし神はその悩みを見て、あわれみ、介入されました。彼らを裁きから守った過越の小羊は、まだ解放ではありませんでした。解放を経験したのは、彼らがエジプトを後にしたときでした。これは私たちに何を語っているのでしょうか。まったく具体的に言えば、こうです。私たちもイエスの血による守りの下にありますが、それだけでなく、新しいいのちへと贖われ、解放されているのです。

比較的最近の歴史の次の出来事は、比喩的な意味で、何が大切なのかをはっきり示しています。アメリカ合衆国憲法修正第13条⁴は、1865年1月31日に批准のために各州に提出され、1865年12月18日に発効しました。それは、合衆国の全領土において奴隷制度を最終的に廃止するものでした。

この条項がすべての州で署名されたとき、この法律はただちに、無条件で有効になりました。では、南部諸州の大勢の奴隷たちが、その日もいつもの仕事をしている様子を想像してみてください。法律上は今や自由になり、主人

4. The Thirteenth Amendment to the Constitution of the United States of America.

のもとを去る権利があったにもかかわらず、多くの人はそうしませんでした。まず、この法律を知らなければなりませんでした。次に、それが本当だと信じなければなりませんでした。そして最後に、その自由を実際に自分のものとして、自由人として生きなければならなかったのです。

私たちもそうです。この「解放法」は、2000年前にゴルゴタで署名されました。この法律は（奴隷制度を廃止する法律と同じように）今日まで有効です。聖書によれば、私たちは罪の力から解放されました。遊覧飛行ですで見たとおり、私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたことによってです。それは、私が何もしないうちに、ゴルゴタで、歴史的に証言されたイエスの死によって、私のために起こりました。これが福音のメッセージです。自由です！ 奴隷たちの中には、長いあいだこの新しい法律について何も知らず、まるでそれが施行されていないかのように生活していた人々もいました。不当な奴隷労働など、まったく受け入れられないと私たちは思いますよね。ところが、どれほど多くのキリスト者が、意識的にせよ無意識にせよ、キリストによる解放などないかのように生きていることでしょう。どれほど多くの人が、いつか天国に行けることだけを喜んでいることでしょう。しかし、ゴルゴタのこの「解放法」は、天国に行ってからではなく、今ここで有効なのです！ 神は罪の力を打ち砕かれました。つまり、私たちはこの解放を、信仰によってまったく自分のものとして主張することができるのです。私たちは、自分が罪に対して死んだこと、つまり私たちの古い人がキリストとともに死んだことを、事実として受け入れるべきです。自分自身を死んだ者と認めなさい——古いものは過ぎ去ったのです！ パウロはそう語り、そこで簿記の用語を用いています。ここで問題なのは事実の論理であって、移り変わる感情の論理ではありません。

2.2 自由の戒め

キリストにある自由を経験するためには、その原則をはっきり理解しなければなりません。第一に大切なのは救いの事実です。私たちは信仰によって、それを自分にとって有効な事柄として、その上に立つのです。前向きな自由の感覚が大切なものではありません。

第二のことは、第一のことから出てきます。私が誘惑にあうとき、罪が戸口で待ち伏せしているとき、罪か神かを選ばなければならないとき、次のことが当てはまります。あなたは罪を犯さなくてよいのです。あなたは自由なのです！ この事実を思い起こしてください。それを思い出させてくださるよう、神に願ってください。私たちは罪を前にして恐れで固まってしまう必要はありません。それどころか、新約聖書は、私たちの生活の中にある罪に積極的に立ち向かうよう求めています。私たちは、これらの罪深いことを徹底的に根絶すべきなのです。神がゴルゴタでなさったのも同じことです。神は御子の上で罪を裁かれたのです。

現代の最大の問題は、もしかすると個人主義かもしれません。私たち自身を中心に立ち、自分の周りをぐるぐる回っています。それは、神とともに生きる生活の助けにはなりません。自分から目を離して、キリストを見上げましょう。それが私たちの勝利です！

- 解放をもたらす神の救いを、歴史的な事実として信頼してください！
- 罪が支配しようとするとき、その力はすでに打ち砕かれていることを、何度でも思い起こしてください！
- 誘惑の中で固まってしまうのではなく、積極的に罪を拒んでください！
- 罪や罪との戦いに集中するのではなく、キリストと聖霊の力に集中してください！

2.3 逃げることと立ち向かうこと

ただし、そうした戦いにおいて、私たちは自分を過信してはなりません。私たちが行動を起こすべき状況もあれば、攻勢に出るべき状況もあります。罪深いことは、裁き、取り除き、片づけなければなりません。しかし、罪への誘惑と、そのすぐ周りのものからは、逃げるべきです。とりわけ、性的な誘惑が問題になるときです。貪欲と偶像礼拝についても同じです。ヨセフは、ちょうどよい時に逃げた模範です。ポティファルの妻は、淫らな行いのためにすべてを整えていました。その妻と床をともにすることから彼を守ることができたのは、逃げることでありませんでした。

2.4 感情

聖書は、おおよそう言っています。自分が罪の奴隷状態に対して死んだことを当てにしないで。それを前提としないで。それを自分のものとして主張しないで！ 解放された者として生きる権利が、あなたがたに与えられているのです！ もしあなたが「私はこの解放を感じません」と言ったら、南部諸州の奴隷は不思議そうにあなたを見つめるでしょう。そして、それを感じる必要などまったくない、署名された法律は法的に有効なのだから、と言うでしょう。この法律にとって、あなたが何を感じるかはいつでもよいことなのです。私は何を感じるかにかかわらず、それはいつでも有効です。ウォッチマン・ニー（Watchman Nee）は、うまいたとえを挙げています。「かつて、細い塀の上を『事実』と『信仰』と『経験』が一列になって歩いていった。『事実』は右にも左にも後ろにも振り向かず、迷うことなく前へ進んで行った。その後ろを行く『信仰』が『事実』に目を向けているあいだは、すべてがうまくいった。ところが『信仰』が『経験』のことを気にかけ始め、後ろを振り返ったとたん、バランスを崩して塀から落ち、気の毒な『経験』も後に続いて転げ落ちてしまった。」⁵

もちろん、キリスト者の生活において感情は大切な役割を果たします。感情は、私たちが人間であることの必要な、すばらしい一部です。喜びは感情（情緒）として経験されます。そして神は、私たちが喜ぶことを望んでおられます。それを命じてさえおられるのです。神から与えられる喜びは、救いの結果です。それは経験でき、感じる事ができ、本物です。しかし、信仰と信頼は感情を含みません。感情は揺れ動くものだからです。信仰にとっては、聖書が約束していることが真実であり、現実なのです。信仰は冷静に——感情があってもなくても——神が約束しておられることを自分のものとして受け取ります。登山家は、断崖の上でぶら下がっているとき、ロープのメーカーの表示を100パーセント信頼しなければなりません。そのとき、彼の感情は何の役割も果たしません。

5. ウォッチマン・ニー、*Das normale Christenleben*、47ページ。

2.5 古い船長と新しい船長のいる船

私たちの人生を一隻の船にたとえてみましょう。新しく生まれる前は、私たち自身が針路と目的地を決めていました。しかし、大きな変化が起きました。船は買い取られ、もはや私たちのものではありません。その結果、新しい船長がいます。それはだれでしょうか。それは今でも私自身です。しかし、神が私に新しいいのちとご自分の御霊を与えてくださいました。私はキリストにあって新しい人になったのです。

古い船長は経験豊富で、手慣れています。以前は、何もかもが彼の言うことを聞いていました。古い船長がどのように船を動かしていたかを表す、たくさんの習慣がありました。しかし今、船の購入は公証人のもとで成立し、所有者の変更は契約によって定められました。新しい船長がどんなに若く、経験が浅くても、彼は正当に新しい船長となったのです。古い船長——これを罪に、私たちの肉に、あるいは古い罪の性質にたとえましょう——は、私たちが完全に贖われる日が来るまで船にとどまります。これは理解しにくい状況です。しかし、これがキリスト者であることの現実なのです。古い船長はまだ船の上にはいますが、船室に引きこもらなければなりません。彼はもう船の操縦に口を出してはならないのです。しかし新しい船長は、古い船長がいるべき場所にとどまるよう気をつけていなければなりません。そして同時に、船の針路に集中しなければなりません。新しい船長は今、舵輪の前に立っています。決定が下される船橋にいます。新しい船主は私のうちにおられるキリストであり、神の御霊を通して働かれます。新約聖書は、この二つ、すなわち肉と御霊が互いに対立し、どちらも同じように人生の支配権を主張すると言っています。肉はその主張を不当に掲げていますが、神の御霊の主張は正当です。私たちは神によって買い取られたからです。

古い船長は習慣から、何度でも新しい船長の仕事に口を出そうとします。できることなら、もう一度船を乗っ取って、新しい船長を船室に追いやりたいのです。本当は自分こそが船室にいるべきなの입니다。こうして、船の上には緊張が残り続けます。新しい船長が——どんな気持ちであろうと——ただ単純に契約を盾に取るなら、その緊張はずっと小さくなります。新しい船長

は、古い船長を何度でも船室に送り返すべきです。そうしないで、古い船長が船の上をうろつくのを許しておくなら、事態は悪い結末を迎えかねません。古い船長が注目され、気かけられ、配慮されればされるほど、彼が再び舵輪の前に立つことが多くなるのです。

2.6 全速前進！

新しい船長の合言葉は、「全速前進！」です。私たちの人生という船の上で、私たちは支配権を引き継ぎました。キリストにあって、私たちは人生において支配すべきであり、また支配することができるのです。ついに自分で自分のことを決められるようになるとは、神に決めていただき、キリストに満たされて生きることを意味します。そして、そこに私たちは自分のエネルギーと集中力と関心と目標を注ぎ込みます。それらは今や新しい所有者のものです。船は新しい針路を進みます。新しい生きがいを持ち、流れに逆らって進みます。嵐もあるでしょう。挫折もあるでしょう。浸水もあるでしょう。しかし、それで私たちが止まることはありません。

新約聖書のすべての手紙は、キリスト者の生活に欠かせない、絶え間ない動きと変化の躍動について語っています。

- 走りなさい
- 殺しなさい
- 成長しなさい
- 追い求めなさい
- 自分をきよめなさい
- 満たされなさい
- 新たにされなさい
- ますます豊かになりなさい
- 脱ぎ捨て、そして着なさい

これらの命令やほかの命令は、何ごともひとりでは起こらないことをはっきり示しています。神は、私たちが自分でなすべきことを、私たちの生活の中に「魔法のように」出現させたりはなさいません（神には何でもおできに

なるのですが）。神の力は私たちに与えられています。そして、神への信頼は、その力が私たちに流れ込む管なのです。行わなければ、何も起こりません！ これは、私たちの聖化についても当てはまる真実なことばです。神は私たちのすべての献身を望んでおられます。私たちの救いは、これらの呼びかけに囲まれています。呼びかけとそれに従うことは、呼吸がいのちに欠かせないのと同じように、救いに欠かせないものなのです。これらの呼びかけは、まさに「救いの論理」にかなったものなのです。

2.7 私たちの父

全力で生きる生活は、毎日うまくいくわけではありません。私たちは、小さなことでも大きなことでも、毎日失敗にかかわっていることを認めるくらいには現実的です。しかし、私たちの人生は天の父の御手の中にあります。父は、私たちの過ちを待ち構えている暴君ではありません。私たちは父の息子であり娘です。父はご自分の御子のいのちという、限りなく高い代価で私たちを買い取ってくださったのです。この恵みの関係から、私たちは生きています。私たちは、情け容赦なく要求する律法の下ではなく、天の父の恵みの下にいます。父は励まし、助けてくださいます。何度でも意欲を与え、奮い立たせてくださいます。父の栄光のために生きるのに必要なものを与えてくださいます。祈りの中で、私たちは父に「アバ」（愛する父よ）と呼びかけます。何かがうまくいかなかったり、私たちの生活に弱さが現れたりしても、父は私たちを責められません。残念ながらまだ犯してしまう罪を、私たちは父に告白します。私たちが犯して告白しない罪はどれも、天の父と御子イエス・キリストとの交わりを損ないます。ですから、私たちはそれを取り除くべきなのです。勇気がなくなり、自分は価値がないと感じるとき、自分は落後者だと思うとき、神のこのことばによって励ましを受けてください。「彼は傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯心を消すこともない」（イザヤ42:3）。

父の腕の中に戻る一步は、いつでも踏み出すことができます。父のもとには、赦しと恵みと回復、そして新しい始まりがあります。たとえ信仰が弱く、献身がほとんど消えかけていても、父のもとでは再び健やかになること

ができます。サムソンはどん底にいました。しかし、彼は立ち直りました。彼の髪は再び伸び始めました。残念ながら視力は戻りませんでした。そこに至るまでには時間がかかりました。しかし、彼の最大の勝利の日がやって来たのです。たとえ、その前に罪によって大きな敗北を経験していたとしても。

2.8 神が望んでおられること

神は、私たちが達成できないことを私たちに求めはなさいません！ 神は私たちの心を望んでおられます。私たちが神のことを思うとき、喜びと、内側から心を動かされることを望んでおられます。神は私たちを幸せにしたいと願っておられます。私たちを搾取したいとも、人生の喜びを奪いたいとも思っておられません。キリスト者のほうが、ときにそういう印象を与えてしまうのです。キリスト者として、私たちはどうすれば幸せになれるのでしょうか。それは神に明け渡された生活の中に見いだされます。ほかのどこにもありません。ジェイ・アダムズ (Jay Adams) のことばを引用します。「多くのキリスト者には、痛いほどの欠けが見られる。忍耐力、粘り強さに欠けているのである。忍耐こそ、秩序ある、神に喜ばれる生活への鍵であろう。スケートも、スキーも、笛を吹くことも、靴ひもを結ぶことも、読むことも、書くことも、車の運転も、十分に長く練習しなければ、だれも身につけることはできない。不器用であっても、失敗しても、求める技能を身につけるまで粘り強く続けることによって、人は学ぶ。学びたいことを何度も何度も行うことによって、人は学ぶのである。聖書は、聖められた生き方についても、まったく同じであると教えている。

聖書が自分自身の努力をこれほど強調していることを、私たちは誤解してはならない。この努力は恵みに根ざしたものであって、『肉のわざ』ではない。聖霊によってのみ、私たちは忍耐を身につけることができる。しかし、御霊の働きは『神秘的』なものではない。聖霊は、ご自分がどのように働かれるかを私たちに告げておられる。聖書は、聖霊が聖書を通して働かれることを証ししているのである。

聖書の命令に、進んで、祈りつつ、粘り強く従うことによって、聖書的な生き方が私たち自身の一部となる。私たちは聖書を読み、その際、読んだことを実行に移せるよう助けてくださいと神に願う。そのために、神は私たちに聖霊を与えてくださった。『恵み』ということばには、多層的な意味がある。その一つの側面は『助け』である。聖霊は、みことばを読み、それから信仰によって、御霊が言われることをあえて行う人々を助けてくださる。御霊は、力を前払いで約束してはおられない。多くの場合、力は、私たちが求められていることを行うことによって（はじめて）与えられるのである。」

6

2.9 あの方は盛んになり、私は衰えなければならない！

これは、主イエスの先駆者であったバプテスマのヨハネの、人生の目標でした。これは、私たちもヨハネから受け継ぎたいプロセスです。それが生涯続くことを承知のうえで！ 次の図は、ヨハネのこの単純な、それでいて難しいことばが何を言っているのかを表しています。マイナスは私たちの古い生活と、自分自身の目標や関心に当てはまります。一方、プラスははっきりと私たちの主に当てはまるのです！

（図：時間軸の上で逆向きに進む二本の曲線。減っていく曲線にはマイナス記号、増えていく曲線にはプラス記号がついている。）

- 古い人を脱ぐ −
- 新しい人を着る +
- ますますキリストに似た者となり、やがて完全に似た者となる
- 信仰の競走路
- 生涯にわたる成長のプロセス
- 新生
- イエスの来臨と復活

2.10 新しいのちを図で表すと

次の図（四角形、円、三角形）は、さまざまな人を表しています。一段目は、その人がどのように生まれるかを示しています。二段目は個人の人生の歩み、三段目は新生を示しています。四段目と五段目は、その人が信仰において成長するか、あるいは肉的に生きるかを表し、六段目は目標、すなわちキリストのもとでの完全さを表しています。

三つの形は、生まれたままのさまざまな人を区別するためのものです。その違いは、生まれや社会的な背景にあるかもしれませんが、その人の独特の個性や、さまざまな気質、生まれつきの才能にあるかもしれません。要するに、ほかの人とは違う、その人個人のことなのです。それが、その人が生まれたときのアイデンティティでした。本人は何もそれに貢献していません。それは、わずかな例外を除いて、その人自身が変えることのできないもの、つまりその人の構造です。それが、一段目の空っぽの形で表されています。

形は空っぽのままではありません。人間は罪人として生まれ、罪を犯します。その人格の構造は、罪によって間違った方向へと形づくられます。罪深い習慣が生まれ、それがまた悪い性格を形づくります。これが、今や形を満たしているもので象徴されています。たとえその人のうちに道徳的に良いものがあっても、その人はやはり、自分のうちに住む罪によって刻印されています。満たされた形は、新生前の人間を示しています。

神は人間を改良されるのではなく、新しいものを造られます。その新しいものは、まったくその人個人の人格に合わせて仕立てられています。アダムのようにすでに人間のあらゆる人格のバリエーションがあったように、最後のアダムである私たちの主イエス・キリストのうちにもそれがあります。キリストは人となりました。ですから、どの人の個性のうちにも生きることがおできになるのです。聖書は、この事実を、私たちのうちに植えつけられる種にたとえています。その種は最初の日から成長して、私たちの本質がキリストの本質へと変えられていくようになるのです。神の種は、人格の形にまったく合っています。ですから、人間の創造に由来する（つまり遺伝による）性質は、新生によって変えられることはありません。「神は、各人のう

ちに、まったく新しいものをはめ込むことがおできになると考えなければならぬ。それは、その人の人格に完全に合うものであり、神はその人格を壊そうなどとは一度も意図されなかったのである。」⁷ 今や、どの人の個性のうちにもキリストの本質が入って来て、こうしてイエスの本質の比類のない表現となるのです。それは、最初の創造にすでにあったのと同じように、新しい創造における多様性と豊かさの表れなのです。

(図：六段からなり、各段に四角形・円・三角形が一つずつ並ぶ)

(一段目：三つの形は灰色で、中は空っぽ)

さまざまな人が、それぞれの個性をもって生まれてくる

(二段目：形の中が、たくさんの小さな黒い形で満たされている)

新生の前、個人の人格は日々の生活の経験で満たされていきます。性格が形成されます。良い性格の特徴とともに、悪い心から出てくる振る舞いも多く、ときにはそれが主として罪に刻印されていることもあります。四角形、円、三角形の中身は、その人が神なしでなったものに相当します。

(三段目：それぞれの形の中央に、同じ形の小さな白い形が現れる)

新生の日に、神のことばという神の種が、その人のうちに植えつけられます。今やキリストご自身が、信じる者の新しい霊的ないのちです。この新しいいのちは、その人の人格に合わせられています。それは、小さな形と大きな形が一致していることで明らかにされています（たとえば小さな四角形と大きな四角形）。新生は、神から与えられ、創造において定められた個人の人格を変えるのではなく、それを新しいキリストのいのちで満たすのです。神の目標は、罪のうちに生まれた人格を新たにし、キリストに似た者へと変えることです。

(四段目：白い形が大きくなり、黒い形は少なくなっている)

新生の日から、神のいのちの種は成長し始めます。絶え間ない成長のプロセスの中で、キリストがその人のうちにますます形づくられていきます。古い

7. カスタンス、アーサー・C (Custance, Arthur C.)、*Man in Adam and in Christ*、171ページ。

中身、古い生き方、古い行動パターンは減っていき、ますます消えていきます。種はさらに成長し続けます。つまり、キリストの本質が、新しく生まれた人をますます貫き、満たし、形づくっていくのです。

（五段目：四角形では白い形が再び小さくなり、黒い部分が増えている。円と三角形では白い形がほとんど全体を満たしている）

このキリスト者の生活は、先へと成長しませんでした。古い生活が再び前面に出てきたのです。

この二人のキリスト者は、信仰において成長しました。彼らは、肉のわがを殺すこと、そして自分の人生の中身であり目標であるキリストに信頼し、キリストに仕えることを心がけたのです。

（六段目：四角形、円、三角形がすっかり白い）

永遠において、信じる者はみな、復活のからだ、すなわち栄光のからだを持ちます。そのからだにおいて、その人はキリストと同じようになります。同時に、その人は永遠に、神が両親を通してその人をならせてくださった、あるいは造ってくださった、個人としての人格であり続けます。罪と罪深い肉は、完成においてはついに過去のもの、歴史となります。

植えつけられた種は成長して、キリストとその本質が人格をますます貫いていくようになるべきです。それが神の目標です。神ご自身が成長を与えてくださいます。しかし、成長の度合いと速さは、私たちによって左右されます。私たちは、古い生き方を脱ぎ捨てるよう求められています。新しい人の生き方が、周りの人々にますます見えるようになるためです。図の中の形はいつも同じままで、変わるのは中身だけです。私たちは、神とその御霊から出たものではなく、古い生活に由来する、ほかのすべての種や植物を徹底的に取り除くよう求められています。神の種が成長できるようにするためです。

五段目が明らかにしているように、残念ながら後戻りすることもあります。そして、種であるキリストが、私たちの人生の中心で、もはや最も重要

な役割を果たさなくなることもあるのです。種は小さくなり、古い自己中心の生き方が再び増えていきます。

あるいは、円と三角形に描かれているように、成長が着実に続くこともあります。そこでは、人格が本当にキリストにとらえられ、満たされているのです。

最後には、ただキリストだけが見えるようになります。天の栄光の完全さのうちにです。私たちは永遠に私たち自身であり、神が造られたとおりの私たちです。しかしそのときには、どんな罪もなく、それでいて主と同じ姿になっているのです。

私の人生の中で、神の種はどれほど大きいでしょうか。それはどこまで成長しているでしょうか。

2.11 全体を一目で

この図⁸は、私たちのキリスト者生活の鍵となる要素を簡単にまとめたものです。これらの要素は、直接に互いに影響し合い、依存し合っています。私たちは、救いを、至福の永遠への切符として予約するだけにはしないと決めました。神から来るいのち、神の愛、神の喜び、神の平和を、今すでに経験したいのです。主イエス・キリストが私たちをご自分のものとするためにすべてを献げられたように、私たちも感謝のうちに、自分の人生を主にお献げしたいのです。

これは解決できない課題ではありません。神は私たちの完全な喜びと満足を望んでおられます。そして、私たちはそれを神のための生活の中でしか経験できません。そのような生活は、キリストを中心とし、人生の中身とし、人生の目標とし、未来としています。キリストはいつの日か宇宙の隅々までを満たされます。そして今すでに、私たちを満たしておられるのです。この満ちあふれるものが私たちの存在全体を貫き、日ごとにますます私たちをキリ

8. ダラス・ウィラード (Dallas Willard) の着想による。The Divine Conspiracy、347ページ。

ストのかたちへと変えていきます。この良い変化に、私たち自身はいちばん気づきにくいものです。しかし、神は私たちのうちで働いておられます。

始まりには聖霊がおられます。聖霊は、すべての行動の力であり基盤です。そこに日々の経験が加わります。日々の経験は私たちを形づくり、善へと挑ませますが、悪へと誘惑もします。それは信仰の闘技場です。そこで私たちの人生のドラマが繰り広げられます。目に見えない人生の主に従い、信頼し、主を愛することによってです。

すべてにおいて、私たちの全面的な献身と、打ち込むことと、本気で取り組む意志が必要です。私たちは、分かつたれない満たされた心でイエスに従わなければなりません。そして、本当のいのちを得るために、自分自身の人生や願いや利益を後回しにする覚悟と規律を持たなければなりません。

（図：三角形と三本の矢印。矢印は上の頂点と下の二つの角から中央の円を指している。上、円の中、左下、右下に文章がある）

恵みと力と助けによる神の働き。それは、私たちのうちに住み、いつも私たちのそばにいてくださる聖霊によるものです。神のことばである聖書は、私たちの人生のための知恵です。神は私たちを無事に最終目標まで導こうとしておられます。しかしまた、私たちの地上の人生について神が個々に定めておられる目標も、私たちとともに達成しようとしておられます。

イエス・キリストの本質といのちは、キリスト者であることの中心であり核心です。イエスが私たちのうちに形づくられるべきなのです。神は私たちを御子のかたちと同じ姿にしてください。このプロセスはキリストの来臨のときに完成しますが、道徳的な面では、すでに地上で始まっているのです！

人生の現実、信仰の競走路。それは、罪深い誘いや惑わしに満ちた日常です。しかしまた、敵からの試みや攻撃、そして天の父の訓練の中でのさまざまな試練もあります。

私たちの信仰と意志、私たちの決断と献身、私たちの努力と規律と忍耐。それは、不器用さにもかかわらず、過ちや挫折や失敗にもかかわらず、天の最

終目標に到達するために、信仰の競走路を走り続け、歩み続けるためのものです。

2.12 山歩き

遊覧飛行が強い印象を残した今、私はいくつかの「霊的な」山歩きにあなたをお誘いします。私の子どもたちはハイキングがどちらかといえば好きではありませんし、私自身も、どちらかといえば自分を奮い立たせなければなりません。けれども、一つ気づいたことがあります。仕事部屋からアルゴイ・アルプスのたくさんの山頂を眺めるとき、そのうちの一つに登って景色を楽しんだことがあるというのは、お金では買えない体験なのです。苦しい登りの後のその瞬間は、買うことができません。自分で動かなければならないのです。飛行機から眺めるのは一つのことですが、自分で山に入っていくのは、また別のことです。

この山歩きは、平らな土地の気楽な散歩ではありません。私がお誘いするのは、わくわくする山歩きです。辛抱強く登っていき、易しい区間も難しい区間もありますが、いつもはっきりと目標を見据えています。それは、私たちがすでに「**ざっと飛び越えた**」救いの事実です。これからは大切な細部を取り上げます。キリストにある私たちの立場についての聖書の教えと、「私たちのうちにおられるキリスト」とは何を意味するのかという事実にかかわる細部です。この山歩きには、それだけの価値があります。私自身、これらの文章を書いたときにはすでにこの山歩きをしていました。それは、圧倒され、揺さぶられ、照らされ、解放され、大いに励まされる発見の連続でした。

私たちの山岳ガイドは聖霊であってほしいと思います。聖霊は、私たちを神の真理全体、聖書の真理へと導き入れると約束してくださいました。聖霊は、解放者イエス・キリストについて証しし、私たちの人生の中でこの方を大きくすることに集中しておられます。

最初の山歩きは最も長く、最も骨の折れるものですが、同時に最も重要なものです。いったんこの山頂を極めれば、次はそれほど難しくなくなります。パウロがローマ人に書き送った手紙は、福音における神の義と、また神の恵

みとを明らかにしています。まずこの手紙に取り組みます。私たちにかかわるこれらの根本的な救いの問いが、これほど掘り下げられているところはほかにありません。それが、ここで私たちが労をいとわず、一節一節、山頂まで登っていかうとする理由でもあります。

2.13 アダムからキリストへ

私たちはローマ人への手紙に、先頭からではなく、この「恵みの列車」の五両目から乗り込みます。それでも、最初の数章に何が書かれているかを簡単に示しておきましょう。序論（1:1-17）に続いて、パウロは1:18～5:11で、全人類のもろもろの罪について語ります。それによって人類は神の前に有罪とされているのです（1:18～3:20）。神の側からは、この逃げ道のない状況に対して、二つの救いの事実が示されます。

- 神が、十字架で流されたイエス・キリストの血によって、何の見返りもなしに私たちに差し出してくださる贖い（3:21-31）
- キリストをいのちへとよみがえらせた、神の復活の力（4:1-25）。

手紙の第二の部分は、5:12から8:39までです。ここでパウロは、私たちの直しようのない罪深さに対して、神が何をしてくださるのかという問いを扱っています。問題は、原理としての罪、人間のうちにある強い力としての罪です。その問いとはこうです。義人はどのようにして信仰によって生きることができるのか（1:17）。

2.14 私たちの救いのために、まず何が起こらなければならなかったのか？

人間がこれほど腐敗しているのなら、人間のうちで何かが起こらなければならないのではないのでしょうか。「それは正しい見方ではないだろう。使徒パウロは、ローマ人への手紙でまったく別の答えを示している。第一に起こらなければならなかったのは、私たちのうちで何かが起こることではなく、私たちの外で、キリストにおいて何かが起こることだったのである。私たちのもろもろの罪のためのキリストのみわざと並んで、私たちはまず、私たちの罪のためのキリストのみわざを考えなければならない。それもまた救いの事

実だからである。その後で、そのときはじめて、それより前ではなく、私たちのうちにおける聖霊のみわぎの番が来る。私たちのためのキリストのみわぎは、私たちのうちにおける聖霊のみわぎとはっきり区別されなければならない。第一のみわぎは、まったく私たちの外で起こったものであり、完了している。もはや何も付け加える必要はない。第二のみわぎは私たちのうちで起こるものであり、まだまだ完成していない。付け加えるべきことがたくさんある。しかし、罪の問題（罪の力、悪の根）の解決も、もろもろの罪の問題の解決とまったく同じように、救いの事実に属していることは、はっきりしていなければならない。さらに言い換えれば、こうである。

- 罪からの解放は、何よりもまず私たちの外で起こる。そして、それは義認の一部である（6:7の『義と認められた』⁹という表現を参照）。これはキリストのみわぎであり、ただ一度で完全に成し遂げられた。
- その後、解放は私たちのうちで形を取っていく。それは聖化の一部であり、聖化は私たちの栄化へと至る（8:30）。これは聖霊のみわぎであり、私たちの地上の生涯を通じて段階的に成し遂げられていく。」¹⁰

9. ER〔ドイツ語聖書翻訳〕の注を参照。

10. H・P・メデマ（H. P. Medema）、*Romeinen 7 enzovoorts*、44ページ。

3. ローマ人への手紙5章12～21節：アダムからキリストへ

ローマの人々は、朗読者が5章11節まで読むのを息をのんで聞いていましたが——彼らはすでに信仰に入り、救いにあずかっていたにもかかわらず——ここでもう一度、ほっと息をつくことができました。それは、まるでたった今起こったかのようです。彼らは神との平和を持ち、この神の裁判において有罪とされず、全地をさばく方によって義と宣告されたのです。違反というテーマと、彼らが今やもはや罪人ではなく義人であるという事実は、11節で本来締めくくられているように見えます。では、罪と神の義についての問いは、すべて最終的に解決されたのでしょうか。明らかにそうではありません。ここからまた本格的に始まるのです。使徒は再び緊張を高めていきます。この手紙の最初の数章でも感じられたような緊張です。

罪はどこから来たのでしょうか。死はどこから来たのでしょうか。なぜすべての人がかかわっているのでしょうか。神の律法はどんな役割を果たしているのでしょうか。そしてもちろん、こういう問いがあります。罪と死と断罪の悪循環から抜け出す道はあるのでしょうか。何人かは、きょんととして顔を見合わせたかもしれません。パウロはたった今、救いの歓声を響かせたばかりではなかったのでしょうか。なぜ今、もう一度罪と死の話を始めるのでしょうか。答えはこうです。このテーマは、まだ完全には扱われていないのです。さらに聞いていくと、今何が問題になっているのかがすぐにはっきりします。もはや、人々が何をしたか、それによって自分が不義な者、罪人であることをどのように示したか、ということではありません。今はむしろ、こういう問いなのです。なぜそうなのか。今のテーマは、**人間とは何であるか**、なぜ人間は罪を犯すのか、もろもろの罪の原因は何か、ということなのです。パウロは、先に悪い実を扱った後、今度は根を掘り起こしているのです。罪人は、自分のもろもろの罪から義と認められる、つまり無罪とされるだけでなく、罪の力からも贖い出されなければなりません。罪人はアダムとのつながりによって、いわばいのちの系図を通して、その罪の力の支配下に

入ったのです。これがその人の問題です。そして、このつながりの中にとらえられていて、自分でそこから抜け出すことはできません。キリストが来られるまで、このつながりから逃れる見込みはありませんでした。

この箇所は、墮落とその結果がもたらした破局を示しています。しかし同時に、二人の主要人物（すなわちアダムとキリスト）の対比と対置によって、神がいのちへの道をどれほど大きく開いてくださったかも明らかにしています。

パウロはこの箇所で、6章、7章、8章の土台を据えています。この箇所は、実際に序論と準備の役割を果たしています。ここで注意深く読む人は、続く章でそれほど苦労しないでしょう。

3.1 12節：すべての始まり

こういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死がすべての人に広がったのと同じように——すべての人が罪を犯したので……

たった一人の人が、罪に扉を開きました。自分の人生の中にだけでなく、世界の中にです。つまり、この世界に生きるものはすべて、同じようにその影響を受けているということです。すべての人が罪を犯したので、すべての人が死ぬのです。この人はそれによって、死と、それに結びついたあらゆる悲惨をも招き入れました。一つの火花のように、最初の、一見ささいな行為が大火災を引き起こし、それは今日、かつてないほど激しく燃え広がっています。

この悲劇の人物は、歴史上のアダム、最初の人間です。それはすぐにわかります。確かにパウロは、不従順への最初の一步がアダムからではなく、エバから出たことを知っていました（テモテ第一2:14）。しかし、アダムは黙って一緒に加わったのです。アダムは妻に従いました。エバが存在する前に、戒めを受けていたのはアダムだったにもかかわらずです。ですから、アダムは起こったことすべてに責任があったのです。

パウロのテーマは、二人の主要人物、すなわちアダムとキリストの対比です。この二人に、それぞれのすべての「子孫」が結びついているのです。

3.1.1 「罪」と「もろもろの罪」

罪はアダム以前から存在していました。サタンは初めから罪を犯しているからです（ヨハネ第一3:8）。サタンは誘惑する者として最初の人間に近づきました。誘惑者、古い蛇は、ここでは名前が挙げられていません。人間は、完全に自分自身の責任において行動したのです。

ここでの「罪」という語は、単に「もろもろの罪」の単数形というわけではありません。ここでは、はるかに多くのことが問題になっています。この箇所と続く箇所から読み取れるように、ここでの罪とは、神に敵対する原理のことであり、神と神の戒めに逆らう力のことです。すべての人に取りついた、いのちを脅かし、死に至る病としての罪のことなのです。使徒ヨハネは「罪とは不法です」（ヨハネ第一3:4）と言っています。ですから罪は、目に見える形であれ見えない形であれ、神の權威を拒むこと（無秩序、アナーキー）を含んでいるのです。

ウォッチマン・ニー（Watchman Nee）は、「もろもろの罪」と「罪」を、次のような状況にたとえて、とてもわかりやすく説明しています。アルコールの問題を根本的に解決しようとするなら、すべての酒を探し出して処分するだけでは足りない。供給源、つまり酒を造っている場所を閉鎖し、破壊しなければならない。このたとえで、酒そのものは「もろもろの罪」を表し、工場は「罪」を表しているのです。

3.1.2 罪と死

罪が死をもたらすことを、アダムとエバは知っていました（創世記2:17）。神ご自身が、善悪の知識の木から禁じられた実を食べることの結果として、死を予告しておられたのです。彼らがこの戒めを破ったその瞬間に、死は始まりました。この死は、創造主がご自分の被造物と結んでおられた、乱されることのない信頼に満ちた関係を、ただちに断ち切ったのです。

死とは、存在が消し去られること、なくなことを意味するものではありません。それは、分離と、以前の状態の変化、あるいは悪化を意味します。新約聖書は霊的な死について語っています。それは人間の心や霊が消し去られることではなく、神と交わることができなくなることです。ここでパウロは、罪の結果としての肉体の死について語っています。

死は、罪の避けることのできない、免れることのできない（後になって現れる）結果です。死はすべての人に広がりました。それを食い止めることはできませんでした。もしある人が罪を犯さず、それによって自分がアダムの本性を持っていないことを証明していたなら、それは可能だったかもしれません。しかし、そのようなことは人間のあいだで一度も起こったことはありません。これまでだれ一人として、罪がないと診断された人はいないのです。すべての人がかかわっており、遅かれ早かれ死を味わうのです。

3.1.3 墮落と原罪

これは、アダムの墮落がすべての人において繰り返されるという意味ではありません。つまり、すべての人がアダムのように罪のない者として、従うか違反を犯すかの選択の前に立たされるということではないのです。もしそうなら、もしかするとだれかが罪を犯さずにすみ、その結果、死ななくてもよいという可能性があることになります。パウロが言おうとしているのは、すべての人がアダムの罪深い本質を受け継いでおり、それによってその人の人生が罪に刻印されているということです。子孫の系譜は一度も途切れたことはありません。それには二つの証拠があります。第一に死であり、第二に、すべての人が罪を犯したという事実です。今日の人間の状況がアダムの状況と違うのは、人間がアダムから受け継いだ罪の本性によって、すでに道徳的に弱められて（いや、腐敗して）おり、その結果として罪を犯すという点です。「原罪」¹¹という神学用語は、この箇所にかかっています。

アダムの違反によって、罪はすべての人の絶えざる道連れとなりました。罪は、神に敵対する原理として、不治の病のように人間の存在全体を冒したの

11. 英語では original sin。

です。罪は人間全体をとらえました——その霊、たましい、心、思い、意志、そして体を。罪の結果としての死は、人間の非物質的な部分——その内なる人——をとらえて、「背きと罪の中に」（エペソ2:1）ある霊的な死をもたらしました。それと同時に、物質的な部分（体）にも害を及ぼしました。体もまた死に支配されています。からだは罪のゆえに死んでいるのです（8:10）。

すべての人の歴史は、その始祖から切り離すことができません。その人の歴史は、自分が罪を犯さなくてもよいことを証明する機会を与えられることによって、新しく書き直されるわけではありません。その人はアダムの子どもであり、あらゆる悲劇的な結果を背負っています。生まれてくる子どもは、だれも罪を学ぶ必要はありません。罪は生まれながらに備わっているのです。そして、罪が全面的に噴き出すのを抑えることができるのは、しつけだけです。

この節を、私たちがアダムのうちで、つまりアダムの違反において、（ともに）罪を犯したかのように理解する人もいます。その場合、私たちは自分がまったく犯していない行為について責任を問われることになるでしょう。ここで言われているのは、アダムがこの行為によって罪を自分の人生の中に招き入れ、その子孫である私たちが、必然的にこの本質を受け継いだということです。それを私たち自身で変えることはできません。

3.1.4 一つの単純な戒め

あれほど壊滅的な結果をもたらした違反は、恐ろしい罪の行為ではありませんでした。殺人でも強盗でもありません。そうではなく、それはごく単純な一つの戒めに違反することだったのです。どんな行為も、特に恐ろしいものになってはじめて罪になるものではありません。どんな行為も（その思いの源から実行に至るまで）、神の権威——ここでは一つの単純な戒めに表されている権威——を拒むなら、いや、ただ忘れるだけでも、罪なのです。

これらの章では、罪はほとんど罪深い行為によって語られることはなく、ほぼいつも、あらゆる罪深い行為の背後に——つまり、もろもろの罪の背後に

——ある原理として語られています。

罪とは、人間が自分の人生を自分の手に握り、神のみこころを、いや、そもそも神が存在することを顧みないようにさせる原理です。それは必ずしも「おぞましい」罪をもたらしわけではありません。神のみこころを尋ねない、道徳的に高潔な人の人生も、殺人者や姦淫を犯す者の人生とまったく同じように、罪に染まっているのです。続く章で問題になっているのは、この罪です。罪の種は、すべての人のうちで芽を出しています。すべての人のうちで同じように育ちきっているわけではないとしてもです。

パウロが目指している大きな問いは、この罪の問題に対して神が何をしてくださったのか、ということです。それには赦しや和解では足りません。神は、私が何であるかを赦すのではなく、私が何をしたかを赦してくださるのです。使徒はすでにこの5章の前半で、私たちが「罪人であった」、つまり今はもはやそうではない、とはっきり述べています。それを実現するために、正確には何が起こったのでしょうか。そして、今なお「アダム・ファミリー」の中にいるすべての人の場合にはそうであるように、信じる者の人生において罪がもはや支配しないことを、神はどのようにして確かなものとしてくださるのでしょうか。

12節は長めの挿入によって中断され、一見、途中で終わっているように見えます。私たちは箇所全体を知っているので、理解しやすくするために、ここで一度、それを自分たちのことばで最後まで続けてみましょう。この12節が挿入文の後で受け継がれている18節にならって、です。

こういうわけで、

ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、

罪によって死が入り、

こうして死がすべての人に広がったのと同じように——

すべての人が罪を犯したので……

……そのように、ひとりの人とその正しい行い（ゴルゴタ）によって

義が世界に入り、
義によって（永遠の）いのちが入り、
こうして、いのちがすべての人に広がったのです。

3.2 13節：律法が与えられる前の罪

……実に、律法が与えられるまでも、罪は世にありました。

しかし罪は、

律法がなければ罪として認められないのです。

ここから挿入文が始まり、それは17節でようやく終わります。パウロは、アダムとのつながりから抜け出す道はないことを強調しています——人類の歴史のどの時代であろうと、律法があろうとなかろうと。

人類の歴史はアダムから始まりました。人間の世界における罪と死の歴史も同じです。トラー、すなわちモーセの律法までには、おそらく約2500年が経過しました。律法は罪をはっきりとらえられるものにし、明るみに出します。しかし、罪はこの律法がまだなかった時代にも、すでに存在していたのです。こうしてパウロは、罪が世界に入り、そこにとどまったのはアダムによるのだという、自分の主張の核心を裏づけています。アダムの子孫はみな、アダムがそうであったものになりました。彼らは罪人であることを示したのです。アダム以来、罪は支配していました。たとえ律法によってその名を呼ばれ、告発されることがなかったとしてもです。それは、この時代のすべての人の死によって裏づけられているだけでなく、この時代の出来事によっても裏づけられています。ノアの時代の大洪水は、おそらくその最もはっきりした例でしょう。さらに、パウロは律法の時代以前のアダムの子孫の、望みのないほど腐敗した状態を、手紙の最初の数章ですでに描いています。そして、もし律法の基準を後から、律法がなかった時代に当てはめてみるなら、良心の証しに加えて、人々がその当時も罪を犯していたという事実が明らかになるでしょう。彼らは罪人だったからです。

3.3 14節：来たるべき方のひな型、アダム

しかし死は、アダムからモーセまでの間も支配しました。

アダムの違反と同じようには

罪を犯さなかった人々さえも、死の支配の下にあったのです。

アダムは来たるべき方のひな型です。

(ホセア6:7参照)

だれも逃れることのできない死の支配は、動かしがたいものであり、それと同じく容赦のない罪の支配を証明しています。これは、具体的な戒めがなくても罪は存在するということの、もう一つのしるしです。それだけではありません。これらのことばは、この時代の人々が罪人であったのは、罪を犯したからではなく（それも真実ではありますが）、アダムの子孫だったからだということを、誤解の余地なく明らかにしています。具体的な違反がなくても人々は死にました。これによって、アダムとのつながりこそが問題なのだという証明がなされているのです。

意識して罪を犯すことのない赤ちゃんも死にます。アダムの子孫だからです。

強調されているのは、私たちの始祖アダムとのつながりは、どの人にとっても（律法があってもなくても）断ち切ることができないということです。私たちの始祖が罪に陥ったので、すべての人が罪人として生まれます。ですから、次の文はとても大切です。私たちは、罪を犯すから罪人なのではありません。むしろ、罪人であり、罪人として生まれたから、罪を犯すのです。

罪は世界に入って来ただけでなく、私たちの心にまで達しました。イエスは、悪い行いは心から、内側から、存在の最も深いところから出てくると言われます（マルコ7:21-23）。それらは、私たちが「罪人となった」という事実から生じるのです（ローマ5:19参照、ルター訳1912年版〔ドイツ語聖書翻訳〕）。

3.3.1 アダムとキリスト

ここでパウロは、アダムと「来たるべき方」との、心を引きつける対比を論じています。来たるべき方とは、明らかにキリストです——未来はこの方のものです。ですから、アダムはキリストを指し示す「**ひな型**」なのです。それは「**対型**」と呼ぶこともできるでしょう。二人の行為が及ぶ範囲と影響の大きさという点では一致していますが、その行為はまったく正反対だからです。最初のアダムは罪と死を表し、**最後のアダム**（コリント第一15:45）はいのちと義を表しています。二人の人物が一致しているのは、どちらも人間の一つの家族のかしら、源、あるいは父と呼ぶことができる点です。二人とも、自分の子孫、あるいは自分の一族の代表者なのです。

3.4 15節：キリストによって、損害は償われて余りある

しかし、恵みの賜物は違反と同じようなものではないでしょうか。

もしひとり

の違反によって多くの人が死んだのなら、

それにもまして、

神の恵みと、

恵みによる賜物は、

そのひとりの人イエス・キリストによって、

多くの人に満ちあふれたのです。

パウロは、アダムというひな型を、キリストとの対照によって説明しています。アダムの違反は、彼を始祖とする多くの人に死をもたらします。しかし、恵みの神はそれで終わりにはなさいませんでした。このアダムの家族を顧みるのは、まさに純粋な恵みです。それは、自分には責任がないのにアダムの違反によって、死と罪に特徴づけられた失われた状態に陥った人々だけにかかわるものではありません。自ら罪のモットーに従って生きている人々にもかかわるのです。

神の恵みは一つの賜物を生み出します。それは、アダムと対置される一人の人です。恵みによる賜物とは一人の人格であり、この方を通して神の恵みがあふれ出るので、あらゆる堤防は決壊し、すべての人が（この惑星のどこにしよう）その恵みに届けられることができるのです。神の御子、最後のアダムという人格における恵みは、最初のアダムによって世界に入ってきたすべてのものより強いのです。死んだのは多くの人でした。そして、生きることになるのも多くの人でありうるのです。神は、ご自分の人類を死に明け渡されませんでした！

3.5 16節：違反がもたらすものと、恵みの賜物がもたらすもの

また、（その）ひとり、

すなわち罪を犯した者によることと、

賜物とは、同じではないでしょうか。

さばきはひとつの（過ち）から断罪へと至りましたが、

恵みの賜物は多くの違反から義へと至るのです（義認、すなわち義と認める判決へと）。

アダムの重大な結果をもたらす決断は、すべての人に断罪をもたらします——これが、アダムが残した遺産です。15節からは神のことが語られており、それゆえ断罪のことも語られています。神は罪人に対して正しい裁きと判決を執行されます。そして、それは断罪しか意味しえません。しかし、人であるイエス・キリストにおける恵みの賜物は、罪人の義認、つまり断罪の反対へと導きます。断罪は、私たちの代わりに身代わりの方に下ったのです。今や告発されているのはアダムの違反だけではありません。アダムの数多くの子孫の多くの違反も同じように問題になっているのです。律法の時代も、今ここに含まれています。

3.6 17節：死の支配はキリストによって終わらされる

もし、ひとり

の違反により、その ひとり によって死が支配するようになったのなら、

なおさらのこと、

恵みのあふれ（ありあまるほどの豊かさ）と

義の賜物を受けている人たちは、

いのちにあって（つまり、いのちの力のうちに）支配するのです。

その ひとり、イエス・キリストによって。

神の恵みは満ちあふれています。それは計り知れないほどの豊かさのうちに現されます。それによって、アダムの子孫は神の義を賜物として受け取ります。最後のアダムであるイエス・キリストによって、彼らは死の支配から奪い取られます。今や、死が彼らを支配するものではありません。そうではなく、次の章が示すように、彼ら自身が、よみがえられた主のいのちの力のうちに支配するのです。イエス・キリストによって、彼らは勝利者となります——今すでに、そしてやがて、イエスと同じ姿になるとき、新しいからだにおいて制限なく。

ここで、13節で始まった挿入が終わります。その中でパウロは、律法がないにもかかわらず罪が存在するという特別なテーマを取り上げてきました。アダムの子孫のしたことの影響を受けなかった例外がやはりありうるのではないか、というあらゆる議論を、パウロは論破しました。すべての人は、必然的にアダムとつながっており、アダムの違反の結果の下にあるのです。

アダムとのつながりがあることは、すべての人にとって事実です。これは、良い行いで際立っている、いわゆる「善人」にも当てはまります——ユダヤ人にも異邦人にもです。その人は、自分でそこから抜け出すことはできません。この事実を認めなければなりません。しかし、続くことばが示すように、望みのないままにいる必要はありません。神は出口を開いてくださったのです。神の恵みによって、その人はアダムの罪のない状態を取り戻すだけではありません。新しい「家長」であるキリストとの新しいつながりによっ

て、アダムがかつて持っていたものよりはるかに多くのものを受け取るのです。

アダムの使命は、被造物を治めることでした。ところが今や、アダムとそのすべての子孫は、罪と死に支配されるようになりました。しかし、義の賜物を受けている人たちは、いのちにあって支配するのです。この支配とは、彼らが神の望まれるとおりに生きることができるということです——自由のうちに、神の栄光のために。「いのちにあって支配する」とは、私たちが今キリストにあって持っているいのちの豊かさの、まさに真髄です。この新しい状況によって、私たちは自分の使命にふさわしい人間、つまり神とともに、神から生きる神の人となることができるのです。彼らはもはや、人間に及ぼすあらゆる影響を伴う死と罪によって支配されることはありません。奴隷状態から解放され、今や、神が定めておられたとおりの者となるのです。これについては、パウロがこの後さらに詳しく論じていきます。

3.7 18節：断罪と、いのちをもたらす義認

こういうわけで、

ちょうどひとつの違反によって

すべての人に対して

断罪がもたらされたように、

同じようにひとつの義によって

すべての人に対して

いのちの義認がもたらされるのです。

ここでもまた、すべての人に及ぶ範囲と影響をもったアダムの悲劇的な行為が、一人の義なる方の一つの行為と対照されています。断罪は、かつて存在し、これから存在するすべての人に対する神の正しい判決です。しかし、それとまったく同じように力強く、**一つの義**、**一つの正しい行い**が立っています。それは、キリストの自発的で従順な、いけにえとしての死を含んでいます。このただ一つの比類のない、一度限りの行いは、まったく同じように、

例外なくすべての人に及ぶのです。それは罪人の義認をもたらします。これはすでに手紙の前半で示されました。今やさらに先へ進みます。今、いのちの義認が視野に入ってくるのです。死より強いいのちが、今ここで登場します。ここで問題なのは、罪責の問題、つまり私が何をしたかを明らかにすべき裁判ではありません。むしろ、私が人間として、義と認められた罪人として、新しいいのちを持っていること、私のうちで何かが変えられたことが問題なのです。人間として私は神の義を受けました。神から来るいのち、よみがえられた方のいのちを持っているからです。私は自分のもろもろの罪から無罪とされ、すなわち義と認められています。しかしまた、私の存在、キリストにある私の新しいあり方も、神の義の証印を帯びているのです。神の断罪、すなわち有罪判決が私に下るのは当然でした。私がしたことのためだけでなく、私が何者であるかのためにもです。しかし今、私はキリストのうちにあり、新しいいのちを持っています。この箇所は、パウロがこの後さらに詳しく説明していくことの土台となっています。

義認は、いのちという賜物をもたらします。義認は永遠のいのちへと導きます。よみがえられたキリストとのつながりの中で、私はまったく新しい立場にいます。その立場は今や、新しいいのちの与え主、新しいかしら、すなわちキリストによって、絶対的に定められています。この状態において、私の存在全体が、神による義認のうちに含まれているのです。

3.8 19節：罪人としての法的な立場と、義人としての救いにおける立場

すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって

多くの人が罪人の立場に置かれたのと同じように、

ひとりの方の従順によって

多くの人が義人の立場に置かれるのです。

罪人の立場とは、嘆かわしい位置です。人は神の判決によってそこに置かれました。私は罪を犯しました。アダムの子孫だからです。私は存在全体において罪人であり、罪人として見なされなければなりません。

人であるイエス・キリストは、アダムとは対照的に、十字架の死に至るまで従順であられました。この方が、私たちにいのちの道を開くことがおできになるのです。この方の従順の実によって、私は義人という確かで揺るぎない立場に就くことができるのです。

これは、二人の主要人物、アダムとキリストの抽象的な対置です。ここで問題なのは、私がキリスト者としてどう生きるかではありません。私は自分が義人の位置にいることを知っています。5章の初めで、私はいわば無罪とされて法廷から出て来ます。さて、人生は続きます。今、私は何者なのでしょう。以前は私が何をしたかが問題でしたが、今は私が何者であるかが問題なのです。

神は私を義人の立場に置き、ご自分で造られたこの立場を真剣に受け止めておられます。神はご自分の判決を守られます。神は真実な方です。

罪人の立場には、すべての人が「自動的に」生まれてきます。義人の立場は、すべての人に開かれています。しかし、それが与えられるのは信じる人たち（「多くの人」であって、残念ながらすべての人ではありません）だけなのです。

3.9 20節：律法はすべての罪を明るみに出す

律法がそばから入って来たのは、

違反が満ちあふれるためでした。

しかし、罪が満ちあふれたところには、

恵みがなおいっそう満ちあふれました……

律法は、何一つ良い方向に変えることができませんでした。律法は人間の状況を良くしませんでした。むしろ悪くしたと言えます。律法によって、罪はなおいっそう満ちあふれたからです。罪は抑えられ、食い止められるどころか、さらにあらわになったのです。

モーセの律法（その核心は十戒）は、罪がどれほど強く支配していたかを明らかにしました。しかし神が律法を通してご自分のみこころを啓示されたの

は、それで最後のことばを語り、満ちあふれる罪の洪水の中で人間を滅びるに任せるためではありませんでした。神は、限りのないご自分の恵みをもってお答えになったのです。ですから、二人の主要人物の比較は、単なる対置ではありません。神のほうが大きいということの証明なのです。力においてだけでなく、恵みにおいても。

律法は、すでに以前から存在していたものを明るみに出しました。人々はアダム以来すでに罪を犯していました。律法によって、今やもろもろの罪がその名で呼ばれるようになります。律法は、人間がどれほど多くの罪を犯しているかをはっきり示しました。この律法によって、何が善で何が悪かについての、神の、変わることもない、買収されることもない基準があるのです。

3.10 21節：死から永遠のいのちへ

……それは、罪が死において支配したように、

（死の力のうちに）、

恵みもまた支配するためです。

義によって永遠のいのちへと、

イエス・キリストによって、

私たちの主によって。

キリストのうちにいる人々にとって、死に至るまでの罪の支配は、今や過去のものであります。彼らにとっては恵みが支配しています。しかし、恵みは神の義を土台としています。それは、何でもただ見過ごしてしまう安価な恵みではありません。そうではなく、すべては正当に行われているのです。神の義は最良の土台です。そこには絶対的な法的安定があります。

このことばは、今や「最後のアダム」（キリスト）において成し遂げられたことを、あまりに凝縮して、あまりに内容豊かに描いているので、ほとんどとらえきれないほどです。

こう言うこともできるでしょう。かつて死が支配したように、今や恵みも支配している——あらゆる障害を乗り越え、抗いがたい力で。罪人が死から逃

れることができないのと同じように、私たちもその結果から逃れることはできません。しかし、この恵みの統治なら、私たちは喜んで受け入れたいものです！

この文脈で初めて永遠のいのちについて語られます。ここで考えられているのは、いのちの復活において将来それを手にすることです。永遠のいのちは、キリストにある終わりのない未来を約束しています。ローマ人への手紙は、神が私たちのために戦ってくださることの証拠です。私たちが滅びることなく、永遠のいのちを持つためにです。

3.11 ローマ人への手紙5章12～21節の概観

古い創造の代表者であり、新しい創造の代表者でありかしら。第二の人であり、最後のアダム。最初の人ム

キリストのひな型	アダム	ムイ エ ス ・ キ リ ス ト
行	い 違	義 (の 行 い)
		反 イエスの完全な贖いのみわざ
結	果 罪	と 死 義 と い の ち
すべての子孫への影	有 罪 判 決 と 断 罪 響	恵 み と 、 い の ち の 義 認
神の前での立場	罪	人 義 人
古い王座の主張と	死 に 至 る 罪 の 支 配	義によって永遠のいのちに至る恵
新しい王座の主張		み の 支 配

4. ローマ人への手紙6章：罪の力から自由に

生まれてくるすべての人は、認めたくても認めたくなくても、「生まれながらに」（エペソ2:3、ローマ11:24）、自分の始祖アダムの系譜に属しています。そのような者として、必然的に罪に感染しています。その証拠ははっきりしています。具体的な戒めを破ったことがなくても、彼らは死ぬのです。しかし、神の恵みは止めることができません。神は「新しい」アダムを世に遣わされました。この方こそ、最初のアダムと人類全体の失敗に対する神の答えです。「最後のアダム」とは、神ご自身の御子イエス・キリストです。この方は、アダムとは対照的に、最も困難な状況の中で生涯にわたって従順であられました。そしてその頂点として、罪のためのいけにえとして、自ら進んでご自身を献げられたのです。この義の行い（5:18）が、アダムの罪によって閉ざされたいのちの木への扉を開きます。このいのちの木とは、今やキリストご自身です。それも、死んでよみがえられた方としてのキリストです。この方のうちに今、新しい人々の世代が生まれます。彼らは神の介入（コリント第一1:30）によって、アダムからキリストのうちへと移されるのです。救いの転換が起こります。陣営の転換です。それはアダムとのつながりを断ち切り、キリストとの新しいつながりをつくり出します。彼らはいわば、アダムという木から切り取られ、今やキリストと一つに結び合わされています（6:5）。彼らは今、「キリスト・イエスにあって」（6:11）いるのです。彼らは最後のアダムのいのちを受け（コリント第一15:45）、新しい家族に属します。その家族のかしら、始まり、源は、人であるイエス・キリストです。この方は第二のアダムではなく、「最後の」アダムです。この新しい創造の中にいつか罪を持ち込むような、新たな悲劇、新たな堕落は、決して起こらないのです。

4.1 陣営の転換：アダムからキリストへ

パウロは、このテーマを今度はどのように展開していくのでしょうか。ローマ人への手紙5章の後半は、続く三つの章のための、いわば下準備です。今

問題になっているのは、一方の系譜から他方の系譜への、この移行がどのように起こるのかということです。死からいのちへのこの転換は、どのようにして成し遂げられるのでしょうか。これらの人々に何が起こるのでしょうか。それは、そのような人々の生活にどんな結果をもたらすのでしょうか。罪はどうなるのでしょうか。信じる者は、回心と新生によって、今や罪のない者になるのでしょうか。これらの問いや、それに似た問いが、6章でのパウロの説明の背後にあるのです。

4.2 1～2節：恵みは罪を犯してよいという許可証なのか？

それでは、どのように言うべきでしょうか。

恵みが満ちあふれるために、

私たちは罪にとどまるべきでしょうか。

決してそんなことはありません！

罪に対して（罪のために）死んだ私たちが、

どうしてなおも罪の中に生きていられるでしょうか。

明らかに、信じる者たち（パウロはここで彼らに語りかけています）も、なお罪にとどまることができます。これによって、信じる者にはもはや罪がないのかという問いには、すでに答えが出ています。キリストのみわざのゆえに、いつも罪とその結果をしのぐ、満ちあふれる恵み——それが、意図的にせよ意図せずにはせよ、誤解されることがあります。すでにキリストのうちにいるのに、まだアダムの家族に属しているかのように、それまでどおり生き続けるのです。それはもちろん、疑いもなく間違った結論であり、矛盾です。パウロはそれにきっぱりと立ち向かいます。それでも、そのような考えはあったようです（おそらく、パウロの福音に反対するユダヤ主義者たちの議論でしょう）。そして残念ながら、今日でもこのモットーに従って生きているキリスト者たちがいます。パウロは、私たちはこの結論とは何のかかわりもないと言います。それには、どうしても動かせない理由があるのです。

4.2.1 私たちは罪とその力に対して死んだのです！

信じる者は、罪に支配される生活を送るべきではありません。その理由は何でしょうか。その人は罪に対して死んだのです。ですから、論理的に言って、罪はもはやその人の生活を支配することができないという結果にならなければなりません。死んだ者は何にも反応しないのです。

注意深く読まなければなりません。死んだのは罪ではなく、**私たちが死んだ**のです。しかし、私は自分がまだぴんぴんと生きていることに気づきます。この死は、どのように説明できるのでしょうか。

その説明は、この節からはまだ読み取ることができません。それは続く節で示されます。ここではまず導入として、この事実そのものが問題になっています。罪に関して言えば、私たちは死んだのです。

もちろん、私たちはすでに、この死がイエス・キリストの死であることを知っています。けれども、パウロがこの考えを一步一步展開していくのについて行きましょう。ここで大切なのは、すでに次の点です。私たちが死んだ死は、私たちの存在を終わらせるものではありません——霊やたましいの存在も、からだの存在も終わらせはしません。それは「特別な」死であり、罪だけにかかわるものです。罪に関して、罪とのつながり、罪との関係において、私たちは死んだのです。問題になっているのはイエスの死です。イエスは、罪に対する神の死刑判決をご自身に負われました。イエスは罪に対して死なれたのです（10節）。ご自分をいけにえとして差し出し、私たちのために罪とされたからです。

4.3 3～4節：キリストとその死につくバプテスマ

それとも、あなたがたは知らないのですか。

キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、

その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。

ですから私たちは、キリストとともに葬られたのです。

死につくバプテスマによって。

それは、

ちょうどキリストが死者の中からよみがえらされたように、

御父の栄光によって、

私たちも新しいいのちに歩むためです。

ローマの人々は、「死んだ」とはどう理解したらよいのかと思ったかもしれません。そこでパウロは、彼らのバプテスマを思い起こさせます。彼らはキリスト・イエスにつくバプテスマを受けていました。この行為によって、彼らは（ローマ5:12-21の筋道をたどり続けるなら）公の告白として、アダムからキリストへの陣営の転換をしたのです。川や湖でバプテスマを受けることによって、彼らはそれを見ていたすべての人に、自分には新しい主人がいることを知らせました。ここでは水のことは語られていませんが、問題になっているのは水のバプテスマです。バプテスマそのものは、「死んだこと」という内的な現実とは何の関係もありません。外的な行為としてのバプテスマは、私の死を引き起こすのではなく、私の新生を引き起こすのでもありません。それはいわば、信仰と新生によって成り立った現実の外側の面なのです。¹² バプテスマは、私がキリストと一つにされたときに、霊的に、したがって現実に私に起こったことを表す絵なのです。

4.3.1 死につくバプテスマ

私たちは、キリスト・イエスの名につくバプテスマを受けただけでなく、その死につくバプテスマも受けたのです。バプテスマは、キリストの死への、あるいはキリストの死に向けての告白です。バプテスマを受ける人がキリス

12. これは聖霊によるバプテスマではありません。聖霊によるバプテスマはキリストによって行われます。キリストこそバプテスマを授ける方であり、信じる者たちに聖霊を与え、それによって彼らを一つのからだである教会に加え、つまりそこに組み入れてくださるのです（コリント第一12:13）。水のバプテスマは人によって行われます。弟子と呼ばれるキリスト者たちがバプテスマを授け、それによってイエスの宣教命令を果たすのです。御霊によるバプテスマはまた、死に向けて行われるものでもなく、むしろいのちのしるしです。水のバプテスマは公の証しであり、外面的な行為です。御霊によるバプテスマは目に見えない内的な出来事であり、聖霊を受けるときにただ一度行われ、新約聖書の意味では、ただ教会への所属にだけかわるものです。

トのほうへ向き直ったのは、まさに、キリストがその人の身代わりとして死なれたという事実のゆえでした。私たちはイエスの完全な生涯を賛嘆しますし、それに比べられるものは何もありません。それでも、私たちを救うのはイエスの死であって、その聖なる生涯ではないのです。

ですから私たちは、水のバプテスマにおいて、イエス・キリストとその死を告白するのです。ちなみに、そのどちらも、この世にとっては愚かなことです。

「バプテスマの向かう先」は、イエス・キリストという人格とその死です。バプテスマの向かう先とは、バプテスマによってどの人格に結びつけられるかを示しています（たとえば、モーセにつくバプテスマを受けた。コリント第一10:2）。人は、バプテスマを受けたときから、自分がバプテスマによって結びつけられた人格に従っていくのです。

バプテスマの象徴ははっきりしています。バプテスマの行為で絵として表されているのは、殺される過程ではありません。バプテスマは「溺死させること」ではないのです。バプテスマとは、ごく単純に、象徴的な埋葬です。いわば水の墓の中への埋葬です。つまり、死んだ者がバプテスマを受ける（水に沈められる）ということです。私たちの古い人は、キリストとともに十字架につけられた（つまり殺された）のです。ですから、私がバプテスマにおいて、キリストの死を神の死刑判決からの私個人の救いとして告白するならば、それは、私が神の死刑判決に値したことを公に認めることを含んでいます。バプテスマによって私は、イエスの身代わりの死において、私に対する死刑判決が執行されたことを告白するのです。私が回心し新しく生まれるまでそうであった古い人は、バプテスマにおいて象徴的に墓へと運ばれ、葬られます。こうして私は、キリストのない私の生活は死にしか値せず、同時に永遠に終わったことを告白するのです。アダムの系譜と系図の中にあったこの生活は、今や終わったのです。

大草原の火事のたとえば、この考えを説明してくれます。そのような大火災から身を守るには、すでに火が荒れ狂った場所へ逃げるしかありません。同

じように、私は告白する者として、バプテスマによって、裁きがすでに行われた場所、すなわち死の中に足を踏み入れるのです。

もう一度、この埋葬が死に向けて行われたことが述べられています。それが何を含んでいるのかを、パウロは信仰の現実を描くときに、すぐに説明します。すでにバプテスマの前に、信仰によって、その人には新しい事態が生じています——まだバプテスマを受けていないときでも、すでにそうなのです。バプテスマは、すでに内的な現実であり、すでに2000年前に起こったことを証しするためのものなのです。

しかし、バプテスマは霊的な事柄を象徴するだけではありません。告白として、バプテスマは外面的に、私がアダムの系譜と決別すること（したがって、私が世から分離すること）を実行するのです。バプテスマを受ける人は、いわばバプテスマの行為によって世から分離します。それは内的な現実を生み出すわけではありません。それは形式的な、外面的な行為にすぎないからです。バプテスマは天国へと救うものではありません。しかし、世からは「救う」のです。バプテスマによって、世からの根本的な外面的分離が成し遂げられます。それは、信仰を持ってバプテスマを受ける人の内的な信仰の現実に対応しています。ペテロが、私たちはバプテスマによって救われると言うとき（使徒2:40、ペテロ第一3:21）、意味しているのはこのことです。

バプテスマが霊的な現実への告白を含んでいることを強調する必要があるのは、教会の間違ったバプテスマ理解があるからです。それはバプテスマを「 sacrament（秘跡）」にし、それによって、バプテスマが救いに必要であるかのような印象を与えています。しかしパウロは、キリスト教界がバプテスマから作り出したこの問題を知りませんでした。パウロにおいては、両方の面（告白という外的な面と、本物の信仰という内的な面）が互いに織り合わされているような印象を受けます。両者は互いに支え合い、さらには互いを前提とし合うものを表しているのです。私たちが当然のこととして強調している、内的な面と外的な面のこのような区別を、パウロはおそらくほとんど理解しなかったでしょう。パウロにとっては、バプテスマを受けていないキリスト者（つまり、新生が与えられているのにバプテスマを受けていな

い神の子ども）もいなければ、バプテスマを受けた非キリスト者もいなかったのです。

もし死への告白がすべてであり、死が最後のことばを語るのだとしたら、だれもバプテスマを受けようとはしないでしょ。バプテスマは「埋葬」ですが、同時に希望のしるしであり、新しいいのちの証拠でもあります。一方でそれは、罪人である私に対する神の死刑判決を認めることですが、他方で、よみがえられた方による新しいいのちへの一步をも記録しているのです。

4.4 4節：新しいいのちへとよみがえらされて

……ちょうどキリストが死者の中からよみがえらされたように、

御父の栄光によって、

私たちも新しいいのちに歩むためです。

バプテスマは、まず死について語り、それからいのちについても語ります。キリストとともに「死んだこと」の後には、キリストの復活においても一つにされることが続きます。キリストとの私たちのつながりは、私たちがキリストのみわざ全体において——その十字架刑、埋葬、復活において、さらにはその昇天と即位においても（エペソ2:1-10）——キリストと一つにされている（ローマ6:5で「結び合わされている」[ER〔ドイツ語聖書翻訳〕参照]) ことに表れています。もっとも、最後のことはここではテーマになっていませんが（エペソ2章を参照）。

御父の栄光（ここにしか出てこない表現です）は、キリストがご自分のためではなく、ほかの人々のために死なれた、死に至るまでのこの従順な献身に応えなければなりません。もちろん、キリストをよみがえらせたのは、御父の栄光ある偉大さと力でもありました。しかし、この訳のほうが正確です。問題は御父の栄光だったのです。この比類のない全き献身を前にして、御父の栄光は、いわば愛する御子をよみがえらせる「必然」の下に置かれていました。救いの歴史において、とりわけ救いそのものにおいて、いつも問題になるのは神の栄光です。それは守られ、損なわれないままでなければなりません。そのときにだけ、永遠の確かな救いがありうるのです。

私たちは神の栄光に達することができません（ローマ3:23）。生まれながらの人間として、私たちはこの神の栄光にふさわしくなることも、それと一致することも、決してできません。しかし、キリストはそうなさいました。キリストは御父のみこころを行い、御父の栄誉を求め、ついには、御父がその実行をゆだねられたみわざを成し遂げることによって、御父の栄光を現されたのです。キリストをよみがえらせたのは御父の栄光でした。死がキリストを支配し（6:9）、比類のない方、御父の愛する御子が墓の中におられたとき、その栄光は黙っていることができなかったからです。

私たちがこのようにキリストと一つにされているなら、キリストの復活にもあずかっているのです。それがここで（文字どおりではないにしても、間接的に）言われています。古い人の古い生活は終わらされます。今や私たちは、キリストの復活の力のうちに新しいいのちを持ち、日々の生活の中でそれにふさわしく行動することができるのです。「新しいいのち」とは、以前の生活とは対照的な、まったく別の生活を意味します。私たちには新しいいのちが与えられたので、以前とは違う生活を送ることができるのです。それは、アダムの家族に属していたときに持っていた生活とは違います。これが、パウロが先に言っていたこと（「いのちにあって支配する」。5:17）なのです。最後のアダムの新しいいのちは、私たちを死と罪の上に引き上げ、私たちを仕えるために解放しました。神に「自分を献げる」（6:13参照）者として神に仕えること、それがいのちにあって支配することなのです。

4.5 5節：キリストの死と復活において、キリストと一つにされて

もし私たちが、キリストの死と同じようになって、キリストと一つにされている（ともに成長して一体となっている）のなら、

キリストの復活（と同じよう）にもなるからです……

神に喜ばれる新しいいのちへの道は、古い生活を終わらせる死を通る以外にありません。これは神ご自身にしかできないことです。それを終わらせるのは私たちではありません。むしろ、これは神の働きであり、ただ神だけのみわざです。死んで葬られた者だけが、新しいいのちへとよみがえることがで

きるのです。これもまた神のみわざであり、キリストを信じる信仰によって私のものと認められるのです。

パウロは、キリストとの私たちのつながりが、私たちの死だけでなく、私たちの復活をも意味していることを確認しています。一方で、古い人の歴史は、神のみこころと、神の聖く正しいご性質にふさわしく終わらされます。つまり、神の聖さの正当な要求が、さばきにおいて満たされるのです。これこそが、そしてこれ以外の何ものでもなく、新しい始まりのための、神にかなった土台なのです。キリストとのつながりは、とても緊密です。まるで私たちがともに成長して一体となったかのようです。ここで言われているのは、私たちを一步一步、より深くキリストと結びつけていく過程ではなく、ただ一度の、完結した出来事です。それは、私が影響を与えることのできる霊的成長の話ではなく、神が保証してくださる「最終行為」の話です。これは、2000年前、ゴルゴタにおけるイエスの歴史的な¹³死において、私の外で、**私のために**（私のうちではなく）起こったのです。

キリストの復活は私たちの復活です。パウロはこの復活を、私たちの将来の復活として理解しているのではありません。¹⁴私たちは霊的な意味で死んだのであって、文字どおりの、つまり肉体的な意味で死んだものではありません。ですから、復活の意味も、私たちが復活されたお方のうちに受けた、霊的な新しいいのちにかかわっています。パウロはこう言います。「キリストの復活（と同じよう）にも（必ず、確かに）なるのです。」¹⁵これは、パウロがコロサイの人々に語っていることと完全に一致します。「バプテスマにおいてキリストとともに葬られ、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力

13. ここで「歴史的」とは、実際に起こり、歴史的に証言されているイエスの十字架の死のことを指しています。

14. 一部の注解者は、この章では、よみがえり、あるいは復活はつねにからだにかかわるものだと考えています。彼らは、古い人は葬られ、もはやよみがえることはない、と正しく強調しています。しかし、バプテスマは私を、死なただけでなく、よみがえられたキリストとも結びつけるのです。このバプテスマは、まったく意図的に水の中で行われます。バプテスマを受ける人が水に沈められた後、再び水から上がってくることは、証しとして次のことをはっきり示しています。その人は、よみがえられたお方の導きの下にある新しいいのちへと踏み出すのです。

15. そもそも、すべての信じる者が肉体の死を通らなければならないわけではありません。ある人々は、死ぬ前に変えられ、引き上げられるからです。この人々もまた、ここで描かれている復活（霊的な意味での、いのちを変える復活）にすでにあずかることになるのです。

ある働きを信じる信仰によって、キリストのうちに、ともによみがえらされたのです」(コロサイ2:12、ER〔ドイツ語聖書翻訳〕)。

新しいいのち(4節)とは、キリストとともによみがえらされていることにほかなりません。私たちは死者の中から生かされた者なのです(すぐ後の13節の表現を参照)。

4.6 6節：古い人はともに十字架につけられた

……私たちはこのことを知っています。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、
罪のからだが減ぼされて(無力にされて)

私たちがもはや罪に(奴隷として)仕えることのないためです。

パウロはこの文で、いよいよ事柄の核心に触れます。これは、章の初めで彼が言ったこと、「私たちは罪に対して死んだのです」の説明です。

私たちの古い人は、十字架の上で、キリストにあって神によってさばかれました。神の正しい死刑判決が執行されたのです。私たちの主であるキリストが、この神のさばきを私たちの身代わりとして引き受けてくださいました。神は十字架の上で、古い人を裁判にかけられたのです。古い人は、単に老衰で死んだわけではありません。古い人の本質と、古い人が行ったことに対する、法的な裁判が問題なのです。この裁判の結果は、妥協のない死刑判決の執行でした。

私たちのキリスト者としての生活にとって肝心な点は、ここで問題になっているのが、私たちが「知っている」こと、あるいは「認識している」ことだという点です。ここでは、私の外で、私の身代わりとして、何かが起こりました。私はこのさばきの場に、私の代表者を持っていました。キリストです。キリストは私の前に立ちほだかってくださり、さばきが私にではなく、ご自分に下るようにされたのです。そこで起こったことは、私が感じたり、実感したりできることはありません。私のためになされたこのイエスのみわざは、私の感情や感覚にかかわりなく、100パーセント有効なのです。

ゴルゴタでの出来事の目的は、人間を支配している罪の力を打ち砕くことにあります。しかも、一人ひとりの信じる者の生活において、です。

4.6.1 古い人

キリスト者の間では、この言葉はさまざまな意味で使われています。たとえば、キリスト者のうちにまだ生きている**古い本性**という意味です。しかし、ローマ人への手紙6章の文脈では、これはアダムに属する人間、あるいは人間の種類のことでしかありえません。古い人（ギリシア語 *palaios anthrospos*）とは、回心する前、新生する前の人間のことです。古い人を「肉」や古い本性、あるいは罪と同一視することはできません。それはアダムの系統に立つ人間、つまりアダムの家族に属し、罪に支配されている人間のことです。そのような者として、その人は滅びています。そして、この罪深い人間は、十字架の上で終わりを迎えたのです。ですから、次のことが大切です。私たちはもはや古い人を身にまもってはいません。しかし、肉、つまり私たちの古い本性は、私たちがこのからだで地上の生活を送っている間は、まだ私たちのうちにあるのです。

「私たちの古い人」という表現は、この事柄を、それにかかわる一人ひとりにとって、とても個人的なものにしています。それは**私の**古い生活です。回心する前、責任ある人間としての私を形づくり、私がそれに従って送ってきた生活なのです。

「古い人」は、ほかに二つの箇所と言及されており、それもパウロによってだけです。これはおそらく、パウロ自身が造った言葉でしょう。それは旧約聖書にも、ギリシア人の思想の世界にもありませんでした。このような形で、この意味で出てくるのは、新約聖書だけです。それらの箇所（エペソ 4:20-24、コロサイ 3:9-10）では、私たちは古い人を（衣服のように）脱ぎ捨てた、と言われています。三つの箇所はどれも、一度だけ起こった、完結した行為を描いています。

それでもこれらの聖句は、私たちが古い人の古い生き方を、実際の生活の中でも捨て去るべきであることを強調しています。古い人をただ一度脱ぎ捨て

たことに、「新しい人」がたえず新たにされることが続きます。この新しい人が、いわば「古い人」をますます押しのけていくのです。

この古い人の存在は、罪に支配されている人間を描いています。その人は、自分の思い、意志、たましい（つまり、その人を形づくっているすべて）を、罪によって形づくられるままにしてきました。それは、あからさまな罪となって現れていたとは限りません。むしろ単に、自分で自分のことを決める、神から切り離された生活として現れていたのです。その生活は、宗教的な装いさえ帯びていたかもしれません。

ローマ人への手紙6章でパウロは、エペソ人への手紙やコロサイ人への手紙とは違って、古い人に代わって現れた「新しい人」について、はっきりとは語っていません。しかし、今私たちを形づくっている「新しいいのち」について語るとき、彼は同じことを言っているのです。

別の言葉で、パウロは同じことをこう言い表しています。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ2:19-20）。ここでは、古い人が、パウロという人格を表す「私」と同一視されています。それは彼の「古い私」であり、回心前の古い生活であり、彼の古い人です。それが今、新しい私によって、すなわちキリストご自身によって置き換えられたのです。

4.6.2 古い人が十字架につけられること

私たちの古い生活には、私たちが行ったことと、私たちがどういう者であったか（そして、神を持たない人間はだれでもどういう者であるか）が含まれていました。それは、死によってしか終わらせることができませんでした。このことは、2000年前、ゴルゴタで、歴史的に証言されているイエスの死において、私たちの身代わりとして、私たちの外で起こりました。イエス・キリストは、そのためにご自分を自ら進んで差し出されたのです。さばきはこれの方に下りました。ウィリアム・ケリー（William Kelly）は、そこで何が起こったのかを的確に描いています。「律法を満たし、約束の相続人であつ

たお方が、冠の代わりにのろいを選び、神の国の代わりに神のさばきを身に負われた。そのとき、あらゆる行為の中で最も驚くべき行為が行われた。神が罪に対して感じ、また表すことのできたすべてのものが、罪を知らないお方の頭上に注ぎ出されたのである。神が悪に対して聖なる憤りのうちに行うことのできたすべてが、一度も悪を行ったことがなく、その口に偽りが見いだされなかったお方の上に下った。神ご自身の御子、神の完全な喜びの対象、神の絶対的で永遠の恵みの対象であったそのお方が、容赦のないさばきに引き渡された。神ご自身が、それまでだれに対してもなさったことがなく、またこれから後、ほかのだれに対しても二度となさらないような仕方で、この方を扱われたのである。」¹⁶

4.6.3 罪のからだ

私の古い人が十字架につけられた結果は、罪のからだが消滅された（あるいは、もっと正確には無力にされた）ということです。「罪のからだ」とは何を意味しているのでしょうか。それは「古い人」という表現の単なる言い換え、あるいはその一側面なののでしょうか。それとも、罪深い「肉」のことを言っているのでしょうか。

罪のからだとは、私たちの肉体のことです。そのからだが、手足とともに、不義の道具として用いられるままになっていた状態を指しています。古い人は、からだを通して自分を表し、現してきました。からだは、その衝動と欲望によって、自分自身を古い生活の中心に据えてきました。からだは罪深い習慣を身につけ、それを押し通し、生活の法則にまで高めてきたのです。パウロはほかの箇所で「人間存在の要素」を挙げ、霊を先に、からだを最後に置いています。この順序が逆転してしまったのです。からだが決定的な要素として第一の位置に就き、その後によりやくだましいが続き、最後に霊が来ます。本来は、その霊こそが人間であることそのものを特徴づけ、方向づけるはずだったのです（テサロニケ第一5:23）。

16. William Kelly, *Die Lehre des NT über den Heiligen Geist*, 191ページ。

もちろん、からだそのものが罪深いではありません。しかし、それは罪に服従させられ、罪のための進んで差し出された足場となっていました。肉体は、罪深い独自の生き方を身につけてしまったのです。それは決して中立的なものではありません。パウロが、自分のからだを打ちたたいて服従させる（コリント第一9:27）と言うとき、古い人の場合はその逆です。からだは、その欲望によって人間を奴隷にするのです。こうして肉体は罪のものとなり、**罪のからだ**になってしまいました。まさにそれが、私たちが今、自分の手足を神に献げるべき理由です（ローマ6:13、19）。それどころか私たちは、からだを生きたいけにえとして献げるよう勧められているのです（ローマ12:1）。

肉体が十字架につけられたものではありません。むしろ、古い人が十字架につけられたのです。それは、からだがかれからはもはや罪の道具ではなくなるためです。このからだは今、（罪を犯さざるをえないという点に関して）無力にされています。もはや自由に動くことのできない、麻痺した人のようにです。こうして、罪が自由に力をふるうことに対して、ゴルゴタで神の終止符が打たれました。罪は、私たちの死ぬべきからだ（罪と死のからだ。7:24、8:10）において、もはや支配してはならないのです（6:12）。この意味で、肉体はもはや罪の道具ではありません。これからは神と義のために用いられるからです。このことは、ローマ人への手紙6章の後半で、罪からの解放の結果として、具体的にさらに説明されます。からだは、罪に関しては用済みになったのです。それがどのようにして起こるのかを、パウロはこの後で描いています。私たちは——死者の中から生かされた者として——今、からだの一つ一つの部分を神に差し出すべきなのです（6:11-13、19）。そして罪に関しては、私たちは自分を罪に対して死んだ者と見なし、その土台の上に立って、からだの行いを殺すべきなのです（8:13）。これについては、後でまた取り上げることになります。

4.7 7節：罪から放免されて

死んだ者は、

罪から放免されている（義と認められている、あるいは解放されている）

からです。

法的に、あるいは裁判上の観点から見ると、私と罪との間にはもはや何のつながりもありません。罪はもはや、負い目として私に負わされることはありません。私は罪のゆえに、もはや訴えられることがないのです。たとえば罪がまだ私のうちにあるとしても、それは「隔離された異物」です。それは、私がキリストと永遠に結ばれている私自身と私の新しい存在とは、何のかわりもありません。キリストの死と、キリストとともに死んだ私たちの死が、私たちにもたらす効果は、それほど徹底的なのです。このことは、バプテスマによって象徴的に宣言されます。私たちは今、「水の墓」の向こう側にいるのです。

この言葉は、たとえ法的な意味だけではないとしても、まず何よりも法的な観点から見なければなりません。この言葉が言っているのは、私たちの聖化のことではありません。聖化については、私たち自身もしばしば矛盾した経験をしますし、肉体的な、あるいは罪深い生活を送っているキリスト者を見ることもあります。ここで問題になっているのは、罪からの義認（放免）です。この無罪判決は、肉体の死を迎えて初めて有効になるものではありません。それはまさに、信じる者の新しい法的な立場を描いているのです。「罪はもはや、その支配を押し通して信じる者を支配する法的な権利を持っていない。信じる者はキリストとともに死んだからである。」¹⁷

ここで、勝利のキリスト者生活をどのように送ることができるのかについて、最終的な説明をまだ求めないことが、絶対に大切です。この節は、私たちがもはや奴隷のように罪に仕えることがない（6節）ことの根拠ではありません。しかしパウロは、アダムにある人間がどういう者であったか、そして私たちをそこからキリストのうちに移すために何が起こらなければならないのか、という教えの終わりにはまだ達していません。勝利のキリスト者

17. John A. Witmer, *The Bible Knowledge Bible Commentary*, Walvoord & Zuck（編）, 463 ページ, Victor Books, 1988年。

生活について彼が語るのは、このテーマを包括的に論じ終えた後の8章においてです。後に彼は、聖霊による生きる力と、私たちのうちで起こることについて語ります。言い換えれば、ここまで来たら、私たちは何としても山歩きを続けなければならないのです。もし勝利の生活について、ここですべてが明らかになっていたら、7章と8章は必要なかったでしょう。

ここで問題になっているのが、2000年前に私の外で作り出された法的な事実であることは、私の実際の生活の中でまだ罪が起こるという事実からも明らかです。法的というのは、私が罪のゆえにもはや訴えられることがなく、罪にはもはや私を支配する権利がない、という意味です。そして、それが私の法的な立場であるなら、それは義人の立場（5:19）です。神が私をその立場に移してくださったのであり、神にとって、それが私の占める唯一の有効な立場なのです。ほかの立場は、もはやありません。私は、ある時には義人で、別の時には罪人である、あるいはその両方を同時に兼ねている、というわけではありません。そのような考えは、それ自体として矛盾していますし、何よりも神の偉大な救いと矛盾しています。

すでに用いたたとえが、わかりやすくするのに役立ちます。1865年12月18日、アメリカ合衆国で奴隷制を廃止する法律が発効しました。それはすべての奴隷にかかわるものでした。法的には、すべての奴隷がこの日から自由になりました。彼らがこの法律の署名に立ち会っていなかったとしてもです。それは彼らが何もしないうちに、別の場所で起こりました。それでも、その法律は完全に有効でした。あとは、彼らがそれを聞き、自分のものとして受け取り、主人のもとを去りさえすればよかったのです。

4.8 8～9節：キリストとともに死といのちを分かち合う

私たちがキリストとともに死んだのなら、

私たちは信じています。

キリストとともに生きることにもなる、と。

私たちは知っています。

キリストは死者の中からよみがえって、

もはや死ぬことはなく、

死はもはやキリストを支配しないのです。

パウロは二度目に、私たちがキリストと結ばれているという事実から結論を引き出します。4節では、イエスがよみがえらされたことの帰結は、私たちが「ともによみがえらされた者」として新しいいのちに歩むことでした。5節でパウロは、イエスの復活が私たちにとって持つ意味を、将来に関してだけでなく、今ここでの私たちの生活に関して確認しています。8節では再び復活が問題になっていますが、今度は将来の、からだの復活です。死から復活させられたお方として、人であるイエス・キリストは、もはや死ぬことがありえません。キリストの復活のいのちは、解消されることのないものです。キリストと結ばれて、私たちも同じいのちを持っています。アダムにあって私たちは死を受け継ぎ、キリストにあっていのちを受け継ぎました。死の領域、あるいは死の国（人々がまだ「アダムのうちに」いる領域）から、私たちはイエスの死と復活によって出て行くことができたのです。

イエスが墓の中におられたとき、死がイエスを支配していました。これはまことに驚くべき言葉です。イエスは十字架の死にまでご自分を低くされ、自ら進んで死を苦しめました。いのちそのものを死に渡さなければならなかったのです。そのとき、死はしばらくの間、イエスに対する勝利者でした。しかし御父の栄光は、この比類のない、完全なお方を新しいいのちへとよみがえらせずにはいられなかったのです。

キリストに当てはまることは、私たちにも当てはまります。死の支配は打ち砕かれています。たとえ、数節後で言われているように、私たちが死ぬべきからだを持っているとしてもです。ですから、死に対する勝利には、私たちの復活も含まれています。そのとき、死んで朽ちてしまったからだは、死の支配からもぎ取られるのです。

4.9 10節：罪に対して死なれたキリスト

なぜなら、キリストが死なれたのは、

ただ一度、罪に対して死なれたのであり、

**キリストが生きておられるのは、
神に対して生きておられるのだからです。**

罪に対して死んだということが私たちにとって何を意味するのかを理解したいなら、キリストが罪に対して死なれたことが、キリストにとって何を意味したのかを理解しなければなりません。キリストは、私たちの古い人に対する断罪の判決を耐え忍ぶことによって、罪のためのいけにえとして死なれたのです。

こうしてキリストは、死によって罪の問題を解決されました。一方では罪の負い目を支払い、しかし同時に罪の力をも打ち砕いて、それを後にされたのです。新しい復活のいのちは、もはや罪と死の力の下にはありません。むしろそれは、神によって、神のために送られ、ただ神だけに献げられたいのちなのです。

罪の問題の解決が、もう一度必要になることはありません。罪のための二度目のいけにえは、もはや必要ないのです。ヘブル人への手紙がはっきりと確認しているとおりです。

「罪の報酬が死であるなら、ご自身には罪がなく、神によって私たちのために罪とされたお方の死は、私たちにとって何という益であろうか。それは、私たちがこの方であって神の義となるためであった。

キリストが十字架の上で、それ以前のすべてにおいてと同じように聖くなかったというのではない。そうではなく、キリストは、ご自分に負わされたすべてのことのために正当に断罪されるよう、ご自身を与えられたのである。キリストは恵みによって、それらすべての責任を引き受けられた。キリストは何ひとつご自分を惜しまれなかった。神もまた何ひとつこの方を惜しまれなかった。神は、私たちの罪と、そのすべての結果とに、神のさばきの下でご自身を一つにされたお方を見捨てられた。それは、私たちが自由の身となって出て行けるためであった。」¹⁸

18. William Kelly, *Notes on the Epistle to the Romans*, 88ページ。

いけにえがただ一度であることと、そこから生まれるはっきりとした立場、つまりすでに行われた陣営の転換は、私たちにも当てはまります。そしてこれは、私たちがいつまでも確信していることができ、また確信しているべき真理です。この真理を認識し、受け入れることが、私たちが神に仕えることを許されている自由を左右するのです。

4.10 11節：罪に対しては死んだ者、神に対しては生きている者と認める

同じように、あなたがたも、

自分は罪に対しては死んだ者であり、

キリスト・イエスにあって神に対して生きている者だと、

認めなさい。

パウロが今述べてきた真理に対して、私たちはどのような態度をとるのでしょうか。私たちはそれを、確かで、私たちにとって有効な事実として受け入れるべきです。「認める」とは、自分をそのような者として「計算する」ことでもあります。これは簿記の用語です。貸借対照表は確定し、締め切られています。その結果、キリストのみわがが100パーセント、私の個人的な口座に計上されるのです。キリストの死は私の死であり、キリストのいのちは私のいのちです。

この節は、よく言われるような、罪との戦いの鍵**ではありません**。罪の誘惑が私に迫ってくるとき、自分は死んでいるのだと、たえず自分に言い聞かせることはできません。自分がまったく死んでいないことは、自分でわかります。そうでなければ、そもそも誘惑に反応することもないはずです。誘惑の中で何をすべきかは、パウロが8章で描いています。

ですから、ここで問題になっているのは、まず、私のためになされた神の救いのみわがを信頼して受け入れることであって、この事実を日々実行に移すことではありません。私はそれを実行に移す必要はありません。それはすでに起こったことだからです。パウロは、誘惑が来たら日々罪に対して死ぬべきだとか、死んだふりをすべきだとか言っているのではありません。むしろ

彼は、私たちが死んだのだということを説明しているのです。それは私の生活に影響を及ぼします。それによって、私の生活に対する罪の力が打ち砕かれているからです。

自分を罪に対して死んだ者と認める人は、自分の古い生活が十字架の上で終わられ、それによって自分の生活における罪の支配が打ち砕かれたことを、信仰によって受け入れます。この救いの土台の上に立って、私は同じように信仰によって、今や新しいいのちを持っているという救いの事実を自分のものとしします。その新しいいのちによって、私は解放されて、神のために生きることができるのです。ウォッチマン・ニーは的確にこう言っています。「知ること——認めること——自分を献げること。これが神の秩序に従った順序である。」¹⁹

4.11 12節：からだに対する罪の支配は打ち砕かれる

ですから、あなたがたの死ぬべきからだを

罪に支配させて、

からだの欲望に従ってはいけません。

これは十字架で起こったことの帰結です。これがゴルゴタの目的です。罪の独裁は、ほとんど気づかないほどの巧みな操作によるものであれ、最も残忍な力の行使によるものであれ、打ち砕かれているのです。イエスのみわざには、私の生活における罪の実際の力を打ち砕く力があります。私たちはこのみわざに依り頼みます。それこそが、自分を罪に対して死んだ者と認めるということなのです！

私たちの死ぬべきからだは、（人間の非物質的な部分、つまり内なる人と同じように）罪の結果に服しています。からだは、罪がそれによって手足を得る道具です。罪そのものは、まだ私のうちに（つまり私の肉のうちに。7:18 参照）あります。しかし、罪にはもはや私を支配する権利がありません

19. Watchman Nee, *Das normale Christenleben*, 58ページ。

（6:6b、14）。からだは罪の影響を深く受けているため、もろもろの罪によって、たえず満足を求める欲望や快樂によって、誘惑されるのです。

パウロは、いつでも、どの信じる者にとっても有効な、救いの法的な側面を強調しています。しかし、これは理論的な、抽象的な事柄にとどまるものではありません。救いの法的な側面は、私の日々の生活がもはや罪に支配されないための土台となるのです。

4.12 13節：今こそ自分を神に献げる

また、あなたがたの手足を不義の道具として

罪に差し出してはいけません。

むしろ、死者の中から生かされた者として、

自分自身を神に献げ、

また、あなたがたの手足を義の道具として神に献げなさい。

今、私たちは何かをするよう求められています。ここまでは、神のみわざを受け入れ、それに依り頼む（6:11）ことのほかには、何の勧め也没有ませんでした。そこから今、実行が続きます。からだの手足を差し出すとは、自分を用いていただけるようにすることです。私の手と足、私の目と耳、そして私の口（つまり、すべての感覚と能力を備えた私の人間存在全体）は、今や本来の目的にかなうものとならなければなりません。「私たちがすでにそうである者になること」²⁰——それは矛盾ではなく、勝利の生活の奥義であり、またその緊張関係でもあります。私たちは死者の中から生かされた者です。キリスト・イエスにあって、復活されたお方のいのちを持っているからです。この勝利者のいのちは神に献げられており、もはや不義に献げられてはいません。

4.13 14節：律法の下ではなく、恵みの下に

というのは、罪があなたがたを支配することはないからです。

20. F・ゴデ（F. Godet）。

あなたがたは律法の下ではなく、

恵みの下にあるのです。

罪がもはや私たちを支配していないことは、事実です。この状態は過去のもので、私たちは前を見つめ、いのちへと踏み出します。そのいのちは、奇妙に聞こえるかもしれませんが、神の律法によって方向づけられるわけではありません。律法は、パウロが説明していたように、罪があふれるようになるための手段でした。しかし今、私たちの生活は神の恵みによって方向づけられています。律法は正当に要求しますが、従う力は与えません。私たちが立っている恵みは、神のために生きるのに必要なものを私たちに与えてくれます。それはまったく別の生活の雰囲気です。神の恵みはあふれるほど与え、律法は要求します。律法と親しくなろうとするキリスト者は、ローマ人への手紙7章に描かれていること、つまり無力さと挫折を経験するでしょう。私たちは救われるために神の恵みを必要としました。それと同じように、生きるためにも神の恵みを必要としているのです。神の恵みに守られ、受け入れられ、その力のうちに、私たちは生きています。恵みの下にあることは、8章で取り上げられる「キリストのうちに」あるという事実と同じ意味なのです。

「もはや律法の下ではなく恵みの下にあるのなら、私はついに、したいことをし、したくないことをしないでいられる——キリストが望まれるとおりに！」²¹

パウロはここで律法について短く触れているだけですが、このたった一つの文の中で、それについて決定的なことをすべて語っており、7章でそれをさらに展開しています。もしかすると、この章を聞いたり読んだりした人々は、罪の支配を打ち砕くことのできるふさわしい手段として、すぐに律法のことを考えたのかもしれませんが。

21. ハンス＝ヨアヒム・エックシュタイン（Hans-Joachim Eckstein）。

4.14 まとめ

アダムからキリストへの陣営の転換は、十字架によって行われます。私の過去、つまり私の古い人は、神が望まれるとおりに断罪され、さばかれます。イエス・キリストは、それを私の身代わりとして引き受けてくださいました。今や、キリストのうちに私の新しいのちが始まります。罪が私の生活に対して主張していた権利は、十字架の上で消滅し、私に対する罪の力はそこで打ち砕かれたのです。

この本文がここまで扱ってきたのは、第一に、私たちが今どの程度まで聖い生活、罪のない生活を送っているか、ということではありません。信じる者は、からだのうちにある間は、なお自分のうちにとどまる罪を持っています。キリスト者の生活は、残念ながら、パウロがここで書いていることとはまったく矛盾して、罪深い肉によって形づくられてしまうことがあります。ここで（ローマ6:1-14で）問題になっているのは、そのことではありません！パウロが説明しているのは、アダムからキリストへ、罪から義へ、死からいのちへの、徹底的で根本的な転換なのです。

このことを忘れてしまったキリスト者、あるいは自分の力で自分を罪に対して死んだ者と見なそうとしたり、罪に対して死んでいこうとしたりしているキリスト者は、この本文を、その絶対的な意味のまま、文字どおり自分のものとして受け取るべきです。

罪を愛するキリスト者に対しては、彼らの現実の、立場にかなった位置づけを描くことによって、彼らが大きな矛盾の中に生きていることをはっきり示そうとしています。罪に対して死んだのに罪の中に生きるというのは、逆説なのです。

私たちが——キリストとともに——死んだ死は、私たちが消し去られることを意味してはいません。聖書的な意味で、死（霊的な死も肉体の死も）とは、本来一緒にあるべきものが切り離されることを意味します。古い人の死によって、罪は私から切り離され、つながりは断ち切られました。こうして罪の力が打ち砕かれているのです。

4.15 ゴルゴタの十字架と罪

それは私たちのために起こったのです！

ローマ1章～5章11節：償い **ローマ5章12節～8章13節：解放**
もろもろの罪の問題 の 問 題

罪深い行いと、負い目の問題 **もろもろの罪の源としての罪**

私たちは、十字架で流されたイエス・キリストの血によって、
もろもろの罪の赦しを得ています

私たちはキリストとともに十字架につけられました。私たちの古い人は死に渡されました。

キリストは、罪のために、そして私たち
キリストは私たちのもろもろの古い人を生まれながらに形づくって
罪のために死なれました。私たちの罪深い本性のために死なれま
し た。

4.16 ローマ人への手紙6章15～23節：恵みの下に生きる、解放された者たち

この章の後半でパウロは、（前半で神の救いのみわざについて述べたことから結論を引き出して）人は一人の主人にしか仕えることができず、同時に二人の主人に仕えることはできない、ということを強調しています。

4.17 救いの直説法と救いの命令法

複雑そうに聞こえますが、実際には役に立つ言い方です。問題は、一枚のメダルの両面です。「直説法」と「命令法」は、文法から来た二つの用語です。神学者たちはこれを「救い」という言葉と結びつけて用い、「救いの二つの面、あるいは二つの側面」とは何かを端的に言い表します。救いの直説法は、キリストが私たちのために成し遂げてくださったこと、つまり客観的な救いの現実を示しています。この側面には、侵すことのできない救い、神がどの信じる者にも実際に与えてくださった、有効な救いが含まれています。

救いからは、変えられた新しい生活が生まれてきます。救いは、新しさの中での生活と振る舞いへと私たちを義務づけます。これが救いの命令法、つまり聖い生活への神の呼びかけです。救いにおいて受けた恵みは、私たちが不敬虔とこの世の欲を捨て、正しく、敬虔に生活するように教えています（テトス2:12参照）。神の救いが伴う道徳的な義務をも受け取ることなしに、救いを得ることはありません。救いの命令法を真剣に受け止めない人は、自分が救いを自分のものだとして主張してよいのかどうか、吟味しなければなりません。

直説法は実際に起こった出来事を表し、したがって救いの現実を描いています。救いの命令法は、聖い生活への命令であり、励ましです。どちらも救いの構成要素です。ローマ人への手紙6章でも、この二つの側面がよく見て取れます。1節から10節は救いの直説法を描き、11節からは救いの命令法が扱われています。

救いの命令法は、救いを自分の力で獲得するようにと私たちに求めているのではなく、受けた救いから生きるようにと求めています。救いの命令法が試される場合は、恵みの支配の下にあります。そこには赦しがあり、惜しみない回復があります。救いは、強い者をふるい分け、やり遂げられない者をふるい落とすために与えられているものではありません。すべての救いの命令法は、私たちが本当に信仰によって神に従うことを目的としているのであって、信仰が挫折するということを意味しているではありません。私たちの救いは確かで、失われることのないものですが、それにふさわしく生きようとするための勧めや警告は、この事実と矛盾しません。それらはむしろ、私たちを「軌道に乗せておく」ためのものです——いのちに至る、信仰の狭い道の上に。

一覧²²

救いの事実——救いの直説法

賜物：キリストによって与えられ

22. ペーター・H・ウールマン（Peter H. Uhlmann）、ハイメンハウゼン（Heimenhausen）、スイス、による。許可を得て掲載。

たもの

救いを自分のものとする——救いの命令法

課題：キリストのために

私たちがすでにキリストにあってそう ……私たちはキリストにあってのみ
で あ る 者 に …… な る こ と が で き る 。

私たちは罪に対して死んだ。ローマ 自分を罪に差し出してはいけない！

6:2 □ — ♫ 6:13

私たちはキリストとともに死んだ。コ あなたがたの地上の手足を殺しなさい。

口 サ イ 3:3 い！コロサイ 3:5、ローマ 8:13

私たちは義と認められた……ローマ……そして正しく生きるべきであ

5:1 る。テモテ第一 6:11

私たちはもはや肉のうちにはいない。もはや肉に従って生きてはいけな

□ ー マ 8:9 い ! □ ー マ 8:12

私たちはキリストのいけにえによつて聖さを追い求めなさい。聖さがなければ

て、ただ一度で永遠に聖なるものとされば、だれも主を見ることができな

れ た ! へ ブ ル 10:10 い ! へ ブ ル 12:14

私たちは召された。エペソ4:1、ロー 召しにふさわしく歩みなさい！エペ

マ 8:28 ソ 4:1

……だから私たちはすべてを自分の
すべてが私たちに与えられている……
もの と す べ き で あ る 。

私たちは新しい人、すなわちキリスト
を着た。コロサイ 3:10、11、エペソ
主イエス・キリストを着なさい！ロ
ー マ 13:14

私たちは完全な赦しを持っている。エ 私たちは互いに赦し合う義務があ
 ペ ソ 1:7 る ! エ ペ ソ 4:32

神はご自分の愛を私たちに与えてくだ 愛のうちに歩みなさい！エペソ
さ っ た 。 ローマ 5:5 5:1 、 2

私たちは神との平和と、神の平安を 平和を追い求めなさい！ ペテロ第一
持っている。ローマ5:1、ピリピ4:7 3:11

私たちはキリストにある自由を持つ だから自由のうちにとどまり、愛を
持っている。ローマ8:2、ガラテヤ5:1 もって互いに仕え合いなさい！ ガラ
テヤ 5:13

神は私たちに勝利を与えてくださ 神たちは戦うときに、勝利を自分の
る。コリント第一 15:57 ものとする。テモテ第二2:5ほか

私たちは主にあって光である。エペ 光の子どもとして歩みなさい。ある
ソ 5:8a いは、あなたがたの光を輝かせなさい！ エペソ 5:8b、マタイ 5:16

私たちは新しい救いの秩序を体験し ……そして新しい創造を待ち望んで
て い る …… い る 。

キリストは私たちのいのちである。私たちはキリストが現れることを待
コロサイ 3:4、ガラテヤ 2:20 ち望んでいる。コロサイ 3:4

私たちはキリストにあって贖われて ……そして私たちのからだが贖われ
い る …… エペソ 1:7 ることを待ち望んでいる。ローマ
8:23

私たちは神によって、神の子ども、 ……そしてそれが目に見えるように
神の子たちとして養子にされていなることを待っている。ローマ
る ……ローマ8:15、ヨハネ第一3:2 8:23、ヨハネ第一 3:2

新しい人は、それを造られたお方、私たちは（自分の生活の中で）主と
キリストのかたちに従って造られて 同じかたちに変えられていく。コリ
い る。エペソ 4:24 ソ 第二 3:18

私たちは永遠のいのちを持ってい ……それでもなお、永遠のいのちを
る …… ヨハネ 3:36 獲得しなさい！ テモテ第一6:12

私たちは教会として一つのからだで だから御霊による一致を保ちなさ
あ る。エペソ 4:4 い。エペソ 4:3

私たちはすでにキリストにあって満たさ ……しかし、まだ完成されてはい
れ て い る …… コ ロ サ イ 2:10 な い 。 ピ リ ピ 3:12
神がすべてを行われる——100パーセンすべてを自分のものとしなさい
ト ! ——100 パ ー セ ン ト !

「恐れおののいて自分の救いを達成するよう努めなさい。神はみこころのま
まに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるので
す。」ピリピ2:12

す で に 今 ま だ

存在——信仰における立場 **成ること**——信仰の実践

神 の 主 権 と 恵 み キリスト者の責任と行い

**私たちはすでに完全に救われています——しかし、まだ完成されてはいませ
ん!**

両方の側面は、この使命へと流れ込みます。**あなたがすでにそうである者にな
りなさい!**

「どの電池にも、マイナス極とプラス極がある。この対立こそが、電圧が生
じるための前提条件である。そのときにだけ電流が流れ、明かりがともる。
それとまったく同じように、私たちが救いの事実と救いを自分のものとする
ことという二つの『極』を意識し、救いを自分の生活の中で実行に移すとき
にだけ、私たちは生き生きとした（そして成長する）キリスト者となる。こ
の緊張関係が、新しいいのちの活力を私たちに与えてくれるのである。」²³

4.18 15節：恵みの目的

では、どうなのでしょう。私たちは罪を犯してよいのでしょうか。

私たちが律法の下ではなく、

恵みの下にあるのだから。

決してそんなことはありません。

23. ペーター・ウールマン（Peter Uhlmann）、ハイメンハウゼン、スイス、からの引用。許可を得て掲載。

またしても、パウロが教えたことから、だれかが間違った結論を引き出すかもしれません。キリスト者の生活は今や恵みの下にあり、もはや律法の下にはない。それでは、この自由を利用して、好き勝手に生きてもよいということでしょうか。絶対にそうではありません。それもまた、ばかげた結論でしょう。そう考える人は、次のことを見落としているのです。

4.19 16節：罪の奴隷か、義の奴隷か

あなたがたは知らないのですか。

あなたがたが自分自身を奴隷として差し出して服従すれば、

その服従する相手の奴隷となるのです。

すなわち、罪の奴隷となって死に至り、

あるいは従順の奴隷となって義に至ります。

恵みと律法からの自由を、罪を犯してよいという権利だと受け取る人は、それによって自分を罪に引き渡し、罪を再び自分の支配者にしてしまうことを忘れていきます。両方の主人に、もめごとなしに栄誉を帰することのできる黄金の中道はありません。依存関係は二つしかないのです。罪に方向づけられた生活か、それとも神への従順のうちを歩む生活か、です。

4.20 17節：心から従う——もはや罪の奴隷ではない

しかし、神に感謝します。

あなたがたは罪の奴隷でしたが、

伝えられた教えの規範に

心から服従し、

その規範にゆだねられたのです！

パウロはローマの人々を試しているのでも、彼らの救いを疑っているのでもありません。彼らが今だれの奴隷なのかを問うのではなく、罪に形づくられた彼らの奴隷状態は過去のものと、疑いの余地なく断言しているのです。

彼は喜び、神に感謝しています。ローマ人への手紙5章8節で、彼はすでに、私たちがかつて罪人であった、つまり今はもはやそうではない、と言っていました。そのことを、彼はここでもう一度確認しています。たとえ残念ながら今でも罪を犯すことがあるとしても、私たちはもはや罪の奴隷状態の中にはいないのです。

この「移籍」は神のみわざでした。神は私たちを死の領域から移し、いのちを与えてくださいました。いのちの領域は、これらの章の中で、「教えの規範」によって印象深く描かれています。キリストにある救いについての神のこの教えを知ることは、きわめて大切です。教えは土台です。新しいいのちの法則を、まずその土台の上で理解しなければならず、そうして初めて、それにふさわしく生きることもできるのです。教えは私たちの経験から生まれるのではなく、進むべき道を示すものです。教えに照らして、私たちは自分の経験を測り、吟味します。聖書の教えが私たちを正すのであって、その逆ではありません。

「教えの規範（Bild der Lehre：教えのかたち）」という言葉は、この教えが、抽象的な条文でいっぱいの法典のようなものではないことを示しています。それは「生きるための知恵」であり、それによって私たちの生活を変えようとしているのです。ですから使徒はこう言い表しています。私たちは「教えの規範に……ゆだねられた」のです——つまり、その教えが私たちに何かをもたらすためにです。

専門家が専門家のために語る、学問的な教えや理論はたくさんあります。神の教えは、神のどの子どもにも当てはまります——神の愛がその人をどんな背景から連れ出したとしても、です。この教えは生活に密着しており、生きるために欠かせないものです。これらの章は確かにいつも理解しやすいわけではありませんが、神学者の専有領域を扱っているのではなく、私たちのキリスト者としての存在にかかわる根本的な問いを扱っています。私たちがそれを理解したかどうかにかかわらず、多くのことがかかっています。これらの問いに自分自身で答えを出していないなら、何年もむだにしてしまうことがありますのです。

神は私たちが教えの規範にゆだねてくださいました。しかし同時に、福音に対する私たちの従順が、神が働かれるための前提でした。その従順は「心から」なされました。それは心の奥底からなされた、従順の一步でした。うわべだけの従順ではなく、本物の、変わることのない人生の決断でした。神は私たちの心を求めておられます。従順が、心からの確信と喜びからなされることを望んでおられるのです。それ以外のものはすべて、神にとっては価値がなく、外面的な形式と偽善しか含んでいません。

4.21 18節：義の奴隷

罪から解放されて、

あなたがたは義の奴隷となりました。

アダムからキリストへのこの「神による移籍」が、私たちを罪から解放しました。そのことは、パウロが6章の前半で説明しました。

解放とは、たとえば悪性の腫瘍を摘出するような、罪の「摘出」を意味するものではありません。このたとえを用いて、パウロの言葉を次のように説明することができます。腫瘍はレーザーで治療されました。罪は十字架でさばかれ、肉において処罰された（8:3）からです。しかし同時に、罪のからだも無力にされました。つまり、この腫瘍には、広がっていくことのできるからだ（作用する場）が、もはやないのです。腫瘍はまだそこにありますが、私はもはや病人とは呼ばれません。腫瘍の増殖は食い止められています。言い換えれば、私が死ぬべきからだのうちにいる間は、罪はまだ私のうちに（私の肉のうちに、私の肉肉的な本性のうちに）あります。それでも、そのために私が本質的に罪人であるわけではもはやなく、キリストにある聖徒なのです。

私たちは罪の支配から解放されています。私たちはもはや罪の奴隷ではありません。それどころか、私たちは今や神の義の奴隷となったのです。

4.22 19節：神の義と聖さに自分を差し出す

私は人間的な言い方をしています。

あなたがたの肉の弱さのためです。

あなたがたは以前、自分の手足を

汚れと不法の奴隷として

差し出して、

不法に進みました。

同じように、今はその手足を義の奴隷として

差し出して、

聖さに進みなさい。

パウロの教えはとても「人間的」なので、彼を誤解することはほとんどありえません。彼は、読者たちの肉の弱さに配慮しています。この言葉は、靈的に弱い状態を指しています。手紙の受取人たちは、パウロがこの教えのためにふだんなら選んだであろう言い方を理解することができませんでした。彼らの靈的な状態は不十分で、パウロが後で書いているように、成長と刷新を必要としていました。このことは、私たちにとっても益になるのではないのでしょうか。

続いて呼びかけ、つまり救いの命令法が来ます。「新しいいのち」が本当に発揮されるように、義に奴隷として自分を差し出しなさい、という呼びかけです。

「聖さ」あるいは「聖化」という目標は、私たちを聖徒、つまり神のために取り分けられた者とした、私たちの根本的な立場の転換を指しています。他方で、義と認められ、聖なるものとされた者たちには、神の義と聖さに一貫して方向を合わせて生きるという、救いに伴う義務があるのです。

4.23 20～22節：実を結ばない生き方から永遠のいのちへ

あなたがたが罪の奴隷であったとき、

あなたがたは義については自由にふるまっていました。

ではそのころ、あなたがたはどんな実を得ましたか。

今では恥ずかしく思っているものです。

それらの行き着くところは死です。

しかし今は、罪から解放されて

神の奴隷となり、

聖さに至る実を得ています。

その行き着くところは永遠のいのちです。

パウロがここで描いているのは、まさに白黒の絵です。手紙の受取人たちは、新生する前、つまり立場が転換する前には、神の義とは何のかかわりもなく、罪の奴隷だったからです。以前は両方が混ざり合っていたわけではありません——キリスト者となった今、彼らにとって両方が混ざり合っているわけではないのと同じようにです。主イエスはこのことについて、人は二人の主人に仕えることはできず、ただ一人の主人にしか仕えられない、と言われました。

さて、手紙の受取人たちは振り返るべきでした。罪は、彼らの生活の中で単なる抽象的な同伴者だったものではありません。罪はその代償を要求し、彼らが今恥ずかしく思っている行いや事柄へと導いたのです。そのような生活は死に至ります。そこには、次の節で描かれている道のほかに、選択肢はありません。

罪とその力からの解放と、今や奴隷として神に仕えるという本当の自由とは、新しいアイデンティティ、新しい立場を含んでいます。それは今、もはや恥じる必要のないものを生み出し、その人々の生活において、聖さに至る実をもたらします。新しいいのちは神のために実を結び、永遠のいのちを目標としています。このいのちは、神のために実を結ぶことによって獲得するものではありません。むしろそれは、次の節が示しているように、神の救いの確かな構成要素なのです。

ここで永遠のいのちとは、キリストにあって復活した者たちのいのち、私たちが将来到達するいのちのことです。神のための人生の終わりにあるのは、

句点ではなく、コロンです。神との妨げられることのない交わりの中での、想像もつかないほど栄光に満ちたいのちが、私たちを待っているのです。永遠のいのちとは、朽ちないことを意味します。新約聖書から、特に使徒ヨハネから、私たちはまた、このいのちが「長さ」や「量」だけでなく、何よりもこの神のいのちの「質」を含んでいることを学びます。

神のための人生の目標は、永遠のいのちです。私たちはそれに狙いを定めています。そして私たちは、来たるべき神の栄光にあずかる望みを喜んでいるのです。

4.24 23節：永遠の断罪ではなく、永遠のいのち

罪の報酬は死です。

しかし神の恵みの賜物は、

私たちの主キリスト・イエスにある

永遠のいのちです。

この言葉は、ローマ人への手紙6章の内容だけでなく、福音全体をも、一つの文に凝縮しています。最初の人間は、罪を「ぜいたくにも買い込んで」しました。その代金を支払わなければなりません。あるいは逆に言えば、良い働きではなく悪い働きに対して、報酬が支払われるのです。しかし、この「取引」は取り消すことができません。死は、返品することも、交換し直すこともできないのです。

報酬あるいは給料とは、働いて得たものです。しかし、神の答えはそれとは違います。神からは恵みの賜物、受けるに値しない贈り物が来るのです。死に対する神の答えは、いのちです。しかしそれは、イエスがよみがえらせたラザロの場合のように、単に死が取り消されることではありません。ラザロは、よみがえらされた後、いつかまた死んだからです。これに対して神の賜物は、まったく新しいいのちです。それはキリスト・イエスにあって得られるものだからです。キリストのいのちは、復活したお方のいのちです。それ

は、死の影響の及ぶ範囲を越えた、そこからはるかに離れて手の届かない、復活のいのちなのです。

このいのちは永遠です。それは神ご自身のいのちだからです。このいのちが私たちのいのちとなることができたのは、このいのちが、人となられた「御子のうちに」あるからです（ヨハネ第一5:11-13）。

神に油注がれた方、キリスト・イエスは、私たちから遠く離れてはおられません。この方は私たちの個人的な主であり、私たちと親しい関係にあられます。この方は今、私たちの主人であり、私たちの神なのです。

5. ローマ人への手紙における律法

「律法」という言葉は、ローマ人への手紙に72回出てきます。新約聖書全体では、パウロはこの言葉を119回用いています。それぞれの文脈からわかるように、それがいつもモーセの律法を指しているわけではありません。モーセの律法は、ローマ人への手紙の大きなテーマの一つです。次の一覧は、さまざまな意味をよりよく理解する助けになるでしょう。

用語	意味	聖書箇所
		2:12、13、 14、17、18、 20、23、25 3:19、20、 21、31 4:13、14、 15、16 5:13、20 6:14、15 7:1、4、5、 6、7、8、9、 10、11、12、 13、14、21、 22、25 9:4、31； 8:3、4、7 10:4、5； 13:8、10
律法（冠詞の有無にかかわらず）、律法の下に、神のみこそ、真理の具現、律法の定め、戒め、神の律法、義の律法	一般に、それはつねにモーセの律法です。ローマ人への手紙では、律法の道徳的な部分が意味されており、いけにえの規定、つまり祭儀律法はほとんど、あるいはまったく意味されていません。律法のこの部分は、ユダヤ人だけに与えられていました。	
「書かれたもの」（ほかの訳では「古い文		

字 におい

て、つまり

2:27、

書 かれた書かれた律法、二枚の石の板、またモーセの五書 29

〔律法〕に

7:6

おいて」)

信仰の律法 行いや行いによる義とは対照的な、信仰と信頼の原理

3:27、
28

**自分自身が
律法；**

心に

記された律

法の行い；

良 心

神の永遠のご性質と要求（愛。13:10）に対応する、
律法の道徳的な部分。この律法は、モーセの戒めを知
らなくても、一部の異邦人が知っていました。異邦人 2:14、
が生まれつき愛の律法に従うときはいつでも、その人 15
はそれを行っているのですが、しかし繰り返しそれに
背いて罪を犯してもいます。

夫の律法

夫にかかわる律法（つまり、妻を夫に結びつけるモー
セの律法）

7:2、3

**私の心の律
法**

神に仕えようとする新しいのちの働きと原理。神の
律法が新しいのちに根づいているので、神に仕える 7:23
ことは新しいのちの自然法則なのです。

**罪と死の律
法**

罪が法則的に人間を支配し、罪が逃れ道なく死に至ら 7:23
せるという、解くことのできない原理 8:2

**いのちの御
霊の律法**

死に打ち勝たれたお方、つまり復活されたお方である
キリストのうちに、いのちの聖霊の律法（原理、力の
法則）が働いています。それは罪と死の律法よりも強
いのちの御霊の律法です。 8:2
たとえ：重力という自然法則は、別の法則、つまり空
気力学の法則によってしか打ち負かすことができません
。

6. ローマ人への手紙7章：律法から自由に

5章と6章のテーマの展開には、高まりが感じられます。その高まりは7章6節まで続きます。ところが7章の後半で、私たちは、思考の流れにまったく合わないように見える暗い状況に出くわします。

7章は挿入部分²⁴であり、そこでパウロは、律法に対する私たちの関係、律法の働き、そしてその目的を扱っています。モーセの律法、つまりトーラーについて、パウロはすでにローマ人への手紙6章14～15節で二度触れていましたが、それは驚くべき帰結を伴うものでした。律法は、キリスト者の生活にとって（その人がユダヤ人であれ異邦人であれ）もはや基準ではない、というのです。キリスト者は恵みの下にあり、もはや律法の下にはありません。たった一つの文で、パウロは広い射程を持つ根本的な事実を確認しています。異邦人にとっては、もしかするとこれは納得できることだったかもしれませんが。しかし、ユダヤ人にとってはどうでしょうか。それはユダヤ人にとって挑発であり、それどころか神への冒瀆さえありました。そのような反応を予期して、パウロはここで疑問符を残さないようにしたいと考え、それゆえ一つの章をまるごと——長い挿入文として——このテーマに充てているのです。²⁵

もしローマ人への手紙6章23節のすぐ後に8章1節が続き、7章がなかったとしたら、私たち（異邦人から出たキリスト者）は、おそらく何も物足りなさを感じなかったでしょう。それでも、このテーマの全体的な文脈の中で、ローマ人への手紙7章の教えは欠かすことができません。ローマ人への手紙5章から8章までの大きな筋道は、次のようにまとめることができます。

24. 私は7章全体を、8章1節までの一つの挿入文と考えています。1～6節は、テーマの上では6章に属しているのではなく、この挿入文の導入となっているからです。

25. ちなみに、パウロはユダヤ人への配慮から、9～11章でも同じことをしています。彼は一方で、なぜ福音がユダヤ人だけでなく、すべての人に向けられているのかを説明しています。しかし同時に、契約の民へのすべての約束が将来成就することを強調しているのです。

アダムからキリストへ。実を結ばない生活から、神に実を結び、もはや罪に服従していない生活へ。神はどのようにしてそれを行われたのか。そして私は今日、どのようにして、

実際に「新しいいのち」のうちに歩むことができるのか。ここで、すでに6章で言われていたように、そのためには本当に律法が必要ないのか、という問いが浮かんできます。何しろ律法は、どのように生きるべきかを示すために、神ご自身によって与えられたものなのですから。

6.1 ローマ人への手紙7章の意味と位置づけ

ローマ人への手紙のこの章は、さまざまに理解され、議論的となってきました。差し迫った問いは、この章が人間のどのような状態を描いているのか、ということです。最もよく知られている説明は次のとおりです。

- キリスト者の通常の状態
- 異常で、望まれない例外的な状態
- 新しく生まれていない人間の状態
- 聖霊を持っていない、新しく生まれた人間の状態

この解釈は、実際、私たちのキリスト者生活にとって根本的なテーマにかかわっています。多くのことがかかっているからです。福音は本当に、そして永続的に人を変えることができるのでしょうか。それとも、私たちは自分をごまかしているだけなのでしょうか。7章から、善を行おうとしても、たいていは試みだけで終わるだろう、という結論を引き出すこともできるかもしれません。罪に対する勝利は天国に行ってから初めてある、と主張する現実主義者が正しいのでしょうか。では、ローマ人への手紙7章はどのように理解しなければならないのでしょうか。

6.2 御霊と肉の戦い？

7章で描かれているのは、ガラテヤ人への手紙5章16～25節で描かれているような、肉と御霊が互いに逆らい合い、格闘し合う、キリスト者のたえまない葛藤ではありません。ガラテヤ人への手紙で問題になっているのは、聖霊の力による勝利であり、それはローマ人への手紙7章のどこにも見当たりませ

ん。ここに描かれている経験には、挫折しか見えません。その人は罪の力の下でうめいています。自分だけを見つめ、力をもっぱら自分自身のうちに求めています。勝利は、本来ローマ人への手紙6章ですでに描かれていました。しかし、7章が描いているような姿をしている勝利とは、いったいどんな勝利でしょうか。ローマ人への手紙7章は、通常のカリスト者生活を描いているのではなく、律法を生活の規則とし、自分の力でそれを守ろうとしているカリスト者の、哀れな状態を描いているのです。その人は、6章14～15節が言っていること、つまり、私たちはもはや律法の下にはいない、ということを感じていません。ですから、自分にはそれができないという苦い経験をします。それが彼を絶望の淵にまで追いやります（「私は本当にみじめな人間です」、24節）。

6.3 義人であると同時に罪人？

マルティン・ルター（Martin Luther）は、私たちは「義人であると同時に罪人」²⁶である、と言いました。ルターによれば、まさにローマ人への手紙7章で、罪人であることが表に出ているのだということです。しかし私たちはすでに5章で、私たちがもはや「罪人」ではなく、罪人であった、ということを見ました（5:8、5:19）。それが神のことばの言っていることです。ローマ人への手紙7章は、私たちが立場の上でまだ罪人である、とは言っていない。むしろこの章は、神の律法が、神の栄光のための生活の基準ではない、ということを表しているのです。私たちがまだ罪を犯すとしても、それは私たちがまだ罪人であるということではありません。私たちが罪を犯すとき、私たちはそれを聖徒として——それでも聖徒であり続ける者として——行っているのです。

26. ルターの命題：義人であると同時に罪人（*simul justus et peccator*）。「見よ、私が先に述べたとおりである。『聖徒たちは、義人であると同時に罪人である。彼らが義人であるのは、カリストを信じているからであり、カリストの義が彼らを覆い、彼らのものと認められている。しかし彼らが罪人であるのは、律法を満たしておらず、罪深い欲望から自由ではないからである。彼らはむしろ、医者の手当てを受けている病人のようなものである』。本当に、また真に病んでいるが、始まりとして、また望みにおいては健やかである病人、いや、もっと正確に言えば、健やかにされている病人、つまり健やかになりつつある病人なのである。」 *Römerbriefvorlesung* 1515/16（ローマ書講義1515/16年）。

キリストにある、また御霊による新しいいのちは、モーセの律法によっても、ほかのどんな律法によっても方向づけられるものではありません。律法がかかわっているのは古い人であって、新しい人ではありません。しかし、律法を生活の基準として受け入れるなら、遅かれ早かれ、ここに描かれているような状況に陥ることになります。ちなみにこのことは、経験の上で一度ローマ人への手紙7章を抜け出し、8章へと移った人々にも当てはまります。律法主義的になり、律法をキリスト者の規範とするときには、いつでも「逆戻り」が起ころうのです。その意味で、この章は、律法からの本来の解放を知っていながら、それでも自分の力で律法を守ろうとするキリスト者の経験をも描いているのです。

通常のキリスト者生活は、ローマ人への手紙8章に描かれています。ローマ人への手紙7章は、神が望んでおられるキリスト者の日常を描いているものではありません。もしこれが、神にご自分の御子の死という犠牲を払わせた、神の偉大な救いの結果だとしたら、それは苦い失望でしょう。

6.4 新しく生まれているのか、いないのか？

7章14節以降の現在形（7章7～11節の過去形とは対照的に）は、ここで問題になっている人間とその経験が、キリスト者のものであることをはっきり示しています。

5章12節から6章の終わりまで（あるいは7章6節まで）、二つの大きな筋道が描かれています。パウロはそれを中断し、8章で再び続けます。その間（つまり7章）には、律法を知っている者にだけ当てはまる例外的な状況が見られます。ここでの人物は神に仕えたいと願っています。これは、信仰を持たない人について必ずしも言えることではありません。信仰を持たない人も宗教的であったり、神を求めたりすることはありますが、結局は自分自身の意志を行うでしょう。また、宗教的な人が、自分は徹頭徹尾悪い者だと必ず認めるとは限りません。しかし、ローマ人への手紙7章の人物は、この自己認識に到達しています。私たちは完全に堕落しているが、神とその律法は絶対的に完全である、という認識は、神の御霊の照らしによってしか来る

ことができません。ですから、ここで（7:14以下）問題になっているのは、新しく生まれた人間だと考えることができます。

この人の無力さは、その人が聖霊を（まだ）持っていないことにも起因していると考えられています。確かにパウロは、6節で一度だけ触れた（「御霊の新しさによって」）後、8章になって初めて聖霊について詳しく論じています。しかし、7章7～25節で御霊が言及されていないのは、パウロが（8章への準備として）まず、律法との関係と、肉の無力さを示そうとしているからです。この人のうちに御霊がおられても、それは助けになりません。御霊はまさに、私たちが律法を守るのを助けるために来られたのではないからです。

もしローマ人への手紙7章で問題になっているのが、まだ新しく生まれていない人だとしたら、この章の教訓は、結局のところ、すでに述べられた教えの繰り返しになってしまうでしょう。不義な者が——宗教的であろうとなかろうと——神を喜ばせることなど決してできない、ということは、すでにこの手紙の最初の数章に詳しく書かれているからです。パウロが問題にしているのは、それ以上のことです。彼がここで描いているのは、肉の本質と、（新しく生まれた者においても）神を喜ばせることのできない肉の無力さです。示されるべきなのは、まさに贖われた人間で、なおも引き続き律法の道によって神を喜ばせたいと願っている者が、7章14～25節のこのジレンマを経験する、ということです——しかも、自分の力で律法を守ろうとしている間ずっと、です。

6.5 ローマ人への手紙7章：必ず通るべき経験なのか？

ローマ人への手紙7章は、どのキリスト者にとっても、実際の聖化における通常の、また必要な経験である、という見方もあります。人は回心して、神との平和を得たことを感謝した後、しばらくするとローマ人への手紙7章の経験をするようになる、ということです。罪の力を感じ、それに立ち向かうことができない。この絶望は、ローマ人への手紙8章の意味、つまりキリストがすべてを成し遂げてくださったということを理解したその瞬間に、ようやく終わる。そのとき初めて、勝利のための力は自分自身のうちにあるのでは

なく、神がなさったこと、そして聖霊によってなされていることのうちにあるのだと認識するようになる、というのです。

しかし、このような歩みを、信仰生活のための一種の既定の課程と見なすことはできません。この章は、まず律法を知っている者に当てはまります。そしてそれは、通常はユダヤ人でした。ここで語りかけられているのは、まずユダヤ人（つまりユダヤ人キリスト者）です。異邦人は、モーセの律法の下にはいなかったのです。

さらに、ローマ人への手紙6章（律法の下ではなく恵みの下に）と7章1～6節（「律法に対して死んだ」）の教えを完全に受け入れ、実行に移しているキリスト者が、ローマ人への手紙7章の惨めな状態に陥らなければならない必然性はありません。その際、勝利のキリスト者生活が描かれているのは8章になってからだ、ということを、私はもう一度強調しておきます。ですから、もし律法を知らない人が7章にもなじみがないとしたら、その人はおそらく、そこに描かれている問題も知らないでしょう。したがって、5章から8章までの章から、キリスト者生活における通常の過程や進歩を導き出す必然性はないのです。

しかし、この7章をそう簡単に素通りすることはできません。多くのキリスト者の経験は、しばしばまさにそこに描かれている状況に一致しているからです。この章が律法を知っている者に当てはまるのだとすれば、今日の私たちは、ユダヤ人だけでなく、すべてのキリスト者が律法を知っている、と言わなければなりません。しかも多くの人が、律法を自分の生活の規則にしているのです。古いアダムの本性に関しても、キリストにある救いにおける立場に関しても、ユダヤ人と異邦人の間に根本的な違いはありません。ですから、ここに描かれている経験を今日の私たちがするとき、それはユダヤ人キリスト者の経験でもありうるし、異邦人キリスト者の経験でもありうるのです。多くのキリスト者が「ローマ7章の経験」をしてきました。多くの人が今なおその中にいます。それが通常のキリスト者生活だと考えているからです。しかし、「ローマ8章の経験」をした人も大勢います。使徒は、ローマ人への手紙8章を通常のキリスト者生活と見なしています。キリスト者が御霊

によって生き、肉に従って歩まないことこそ、普通のことであるべきです（ガラテヤ5:16-26、コリント第一3:1-3参照）。それこそが神の望んでおられる生活であり、そのために神はすべてを備えてくださったのです。

それでは、なぜ私たちの多くが、つらい「ローマ7章の経験」をしたのでしょうか。それは、回心した後で、罪がどれほど強い力であるかに気づいたからです。そこで私たちはそれに立ち向かおうとしましたが、間違った武器を使い、間違った方向を見ていました。私たちが用いたのは、自分自身の力でした。キリストが私たちのためにすべてを成し遂げてくださり、同時にその御霊によって、勝利者となるためのあらゆる力を与えてくださっていることに、私たちは気づいていなかったのです。その意味で、私たちはこの章があることを、とても感謝することができます。それによって、私たちのキリスト者生活のこの困難な時期を（もしそれがあったとすれば）、神のことばによって説明し、位置づけることもできるからです。そうすれば、この苦しみの中に生きているほかの人々に、出口を示すことができるのです。

6.6 ローマ人への手紙7章の「人」とはだれか？

ここに描かれている人物がいったいだれなのかについて、多くの推測がなされてきました。それは本当に、「私」という一人称で語っている使徒パウロ自身の個人的な経験なのでしょう。それを支持する点もあれば、それに反する点もあるでしょう。この問いは興味深いものですが、ここではこれ以上追究しません。

私は、パウロが、多くのキリスト者が知り、経験してきたことについて、一つの例として語っているのだと考えています。それはとても重要なことなので、パウロはそのために自ら「私」という役を引き受けているのです。それはまったく珍しいことではありません（ガラテヤ2:18、コリント第一10:30も参照）。²⁷

27. これについて、ギリシア語文法を参照しているM・アーヘルガー（M. Arhelger）の言葉を引用します。「一般的に当てはまることを、一人の人物の例によって、いわば目の前にあるものとして生き生きと示すために、日常語は一人称単数と二人称単数を選ぶ。」（F. Blass, A. Debrunner, F. Rehkopf: *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, Göttingen 1979, 231ページ、§ 281について）

6.7 ローマ人への手紙7章1～6節：律法に対して死んだ

最初の六つの節は、律法に対するキリスト者の関係を、原則的な仕方の説明しています。6章で罪について述べられたのと同じように、ここでもまず法的側面が描かれます。私たちが実際に死んだのではなく、キリストが私たちの代わりに死なれたのです。この死は、まるで私たちが実際に死んだかのように私たちのものと認められます。ここでは、その結果として、私たちが律法に対して死んだということになるのです。

6.7.1 1節：律法が適用されるのは生きている者だけ

それとも、兄弟たち、あなたがたは知らないのですか（私は律法を知っている人たちに話しているのです）。律法が人を支配するのは、その人が生きている間だけです。

ここでパウロは、実際、人間的な言い方で語っており、大切な霊的真理を説明するのに役立つ、ごく単純な論理を持ち出しているという印象を受けます。律法は、あるいはどんな法律も、生きている人間、つまり従順か不従順かという形で律法に応答することのできる人間にだけ向けられています。死んだ人は、どんな法律とも、もはやまったくかわりがないのです。

6.7.2 2～3節：律法から逃れる唯一の道

結婚している女の人は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫の律法から解かれます。ですから、夫が生きている間に別の男の人のものとなれば、姦淫の女と呼ばれます。しかし、夫が死ねば律法から自由になるので、別の男の人のものとなっても、姦淫の女にはなりません。

一つの例が、この法的な状況をさらに深め、もう一つの側面を付け加えます。もしだれかが律法から逃れようとしたら（それは死によってしか起こりえないのですが）、その人は比喩的な意味で姦淫を犯すことになるでしょう。死による以外に、律法の手から逃れる可能性はありません。それが婚姻

の律法の例です。この婚姻の律法は、夫と妻を、神が初めから意図しておられたとおり、生涯にわたって切り離せないものとして正当に結び合わせました。婚姻の律法は、一方の配偶者が死んだとき、ここでは夫が死んだときに、その夫婦にはもはや適用されなくなります。しかし、正当な夫がまだ生きているのに妻が別の男と一緒にいるなら、彼女は姦淫を犯すことになります。律法の下にいる人の状況も、まったく同じです。死による以外に、解放たれることも解放されることもありません。そうやって初めて、新しい結婚関係が可能になるのです。死以外の方法で律法から逃れようとするなら、その人はなおさら違反者となり、比喩的な意味で姦淫を犯すことになるのです。

このたとえでは、夫は律法を表し、妻は、パウロがここで語りかけているキリスト者たちを表しています。では、私たちはどのようにして律法から解放されることができるのでしょうか。

6.7.3 4節：今、私たちが属しているお方——キリスト

ですから、私の兄弟たちよ。あなたがたもキリストのからだを通して、律法に対して殺されたのです。それは、あなたがたがほかの方、すなわち死者の中からよみがえった方のものとなり、こうして私たちが神のために実を結ぶようになるためです。

律法からの解放は死によってしかないのですから、同じことが私たちにも当てはまります。今パウロは、すでに6章で罪に関して描いたイエス・キリストの死を、このようにして律法との関係に当てはめているのです。²⁸

このたとえの登場人物は入れ替わり、次のようになります。信じる者は妻にたとえられています。夫は律法を表しています。夫が死ぬやいなや、律法は無効になります。

しかし、死んだのは律法ではなく（罪でもありません。6章参照）、私たちが死んだのです。けれども、その死を引き受けたのは別のお方でした。この

28. ガラテヤ人への手紙6章14節には、私たちがキリストとともに死んだことの三つ目の帰結が見られます。私たちは世に対して死んだのです。

たとえにとどまるなら、新しい夫はキリストです。キリストは私たちの身代わりとして死なれたのです。

「殺された」という言葉は、私たちにキリストの処刑を思い起こさせます。パウロが、自分は律法によって律法に対して死んだ、と言うとき（ガラテヤ2:19-20）、彼が意味しているのはそのことです。律法に違反した者は死ななければなりません。パウロはかつて律法に違反していました。しかしパウロは死んだのです——律法違反のこの法的な帰結を身に負われたキリストのうちにあって。しかし、この「ともに死んだ」ということの中に、同時に、律法の作用する領域から逃れる出口もあったのです。

イエス・キリストの死は、私たちの代わりに罪とされたお方の死でした。キリストのからだへの言及は、十字架での処刑と神のさばきの恐ろしさのすべてを、私たちに思い起こさせます。それは身の毛もよだつような死であり、その死において私たちの古い人もともに十字架につけられたのです。

ここでも、転換が語られています。律法とのつながりは解消され、新しいつながりが造り出されます。それはここで、結婚の契約にさえたといわれています。私たちは復活されたお方と結ばれています。私たちは今、死んでよみがえった一人の人に属しているのです。結婚する女性は夫の名前と身分を受けます。私たちも同じです。私たちは今、このつながりによって「キリストのうちに」いるからです。

6.7.4 5節：律法は義を促すのではなく、罪を促す

私たちが肉にあったときは、律法によって引き起こされたもろもろの罪の欲情が私たちの手足のうちに働いて、死のために実を結びました。

パウロは、回心前の私たちの過去に関して、新しい概念を持ち込みます。私たちは「肉にあった」のです（8:8-9参照）。これは私たちの肉体のことではなく、一つの状態のことです。私たちはアダムの系統にいたのです。ですから、肉は罪とかわりがあるに違いありません。「肉にあって」「もろもろの罪の欲情が働いた」のです。この肉とは、罪とその欲情に浸透された人間

存在を描いています。ここで問題になっているのは、私たちのうちにある肉ではなく、**肉のうちに**あることです。アダムの子孫としてのこの状態は、その生活領域をただ罪深い肉のうちにだけ持っており、罪以外の何も行うことができません。ですから主イエスは、新しく生まれる必要について語られたとき、こう言われました。「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です」（ヨハネ3:6）。ここでは新生がテーマになっているわけではありませんが、原則としては同じことが問題になっています。神のための実は、肉から生まれることはできません。ですから、新しく生まれることが必要なのです。

律法は罪を「あふれさせ」ました（5:20）。律法は罪を指摘しただけでなく、罪を挑発したのです。このことは、キリスト者が自分を律法の下に置くときに何が起こるのかを、はっきりと明らかにしています。それはこの章の先の部分で見ることになります。そこではまさにこの経験が描かれているのです。

6.7.5 6節：律法を越えた新しい礼拝

しかし今は、私たちは自分を縛っていたものに対して死んだので、律法から解かれ（引き離され）、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。

律法は、だれも放免したり、無罪としたりしませんでした。律法はいつも、その（正しい）有罪判決を下してきたのです。しかし、私たち（つまり私たちの古い人）が死んだので、いわば「新しい結婚関係」に入る道が開かれました。それは、もはや決して死によって終わることのない関係なのです。

「文字」（直訳では**書かれたもの**）とは、従順を要求しながら、それを行うのに必要な力を与えない律法のことです。しかし今、私たちは律法から「引き離され」ています。私たちは向こう側へと移されたのです。私たちは今キリスト・イエスのうちにあり、キリストのうちにいのちを持ち、私たちのうちに聖霊を持っています。この御霊の働き、力、語りかけについては、パウ

ロが後で書くことになります。6節は、この章で御霊が言及される唯一の箇所です。8章とはまったく違います。

6章で新しいいのちが問題になっているように、ここでは御霊の新しさが問題になっています（別の訳では「新しいもの、〔すなわち〕御霊」）。古いものは過ぎ去り、新しいものが生まれました。私たちは新しいいのちを持ち、神の御霊を持っているのです。

6.8 ローマ人への手紙7章7～14節：完全な律法

律法に対するキリスト者の関係がはっきりと明らかにされた（律法に対して死に、ほかのお方、すなわちキリストのものとなった）後ですから、本来ならそのまま8章1節に進んでもよかったはずです。ところが、次に何が来るのでしょうか。律法の弁明が続くのです。それはユダヤ人キリスト者に向けられています。律法に対する信じる者の関係を理解していない（7:1-6参照）人や、それでも律法の助けによって目標に到達しようと試みることができる人、と考えている人のだれにでも向けられています。その人は律法にかかわっていきます——致命的な結果を伴って。これから、その人の経験が描かれるのです。

パウロが今用いたばかりの結婚のたとえをこのキリスト者に当てはめるなら、こう言うことができるでしょう。その人は、いわば姦淫を犯しているのです。その人は、いわば新しい夫、つまりキリストと結ばれているが、律法との結びつきに入り込んでいるのです（ガラテヤ2:18）。

律法は、キリスト者にとって生活の規則ではありません（あるいは、生活の場ではありません。陸が魚にとって生活の場ではないのと同じです）。そのことは、キリスト者が——そうでないはずはないのですが——キリスト者として当然のことながら、神の律法の道徳的な戒めを満たしている（8:4）場合にも当てはまります。しかし、モーセの律法を満たすことが、キリスト者の人生の課題なのではありません。キリスト者はモーセの支配の下にはいないのです。今問題なのは、キリストご自身を生活の中身とし、生活の規則とすること、キリストと結ばれていること、そしてキリストの御霊の力を持っていることです。新しいいのちと「御霊の新しさ」は、律法の特徴であった

禁止事項から成り立っているわけではありません。キリストご自身が私たちの心のうちに形をとり、御霊の実によって目に見えるようになるのです。キリスト者であるとは、戒めを守るのではなく、内側から変えられていくこと——キリストに似た者へと——を含んでいます。問題は戒めではなく、一人のお方です。そのお方こそが目標なのです。

しかし、私たちは今、決して律法を持たない無法な者になったわけではありません。私たちはイエス・キリストに仕えています。私たちは奴隷として、あるいは主人に属するしもべとして、この方に仕えているのです——私たちの主であり主人であり、私たちがその正当な所有物であるお方に。私たちはこの方の戒めに従います。それらは「キリストの律法」（ガラテヤ6:2。コリント第一9:21参照）を内容としています。私たちは、法にかなった仕方でキリストに服しているのです。

この章では、律法が（まさにその多くが禁止事項であるために）キリストにあって義と認められた者たちに向けられたものではない、ということが明らかになります。ですからパウロは、律法は正しい人のために定められているのではなく、不法な者たちのために定められている（テモテ第一1:9）、と言っています。それは彼らの罪を明らかにし、彼らをキリストへと導くためなのです。

6.8.1 7節：罪の認識は律法によって来る

それでは、どのように言うべきでしょうか。律法は罪なのでしょう。決してそんなことはありません。しかし、律法によらなければ、私は罪を知ることにはなかったでしょう。実際、律法が「欲してはならない」と言わなかったら、私は欲望についても何も知らなかったでしょう。²⁹

この問いは、まさに自然に浮かんできます！もし律法が、主イエスの十字架の死によってしか解放されない事柄であるなら、律法には何か問題があるに

29. 出エジプト記20:17。申命記5:21参照。

違いありません。ここでもまた、パウロからはっきりとした否定が返ってきます。何かがおかしいとすれば、その原因は人間の側にあるのです。

私たちはもはや律法の下にはいないことをすでに学びました。そして同時に、この律法には何の問題もないのだとすれば、パウロは今、この律法がどういふものなのかを説明しようとしているのです。

律法は、罪とは何かを明らかにしました。律法に基づいて、何が罪、つまり違反であるのかを、正確に言うことができました。人間はそれによって、罪とは何かを知るはずでした。この場合はユダヤ人ですが、結局のところ、この律法に触れたすべての人が意味されています。

パウロは十戒の最後の戒めを例として取り上げ、自分の考えを先に進めます。何かを欲しがってはならないという禁令に背くことは、もしかすると最も広まっている罪かもしれません——どの聞き手も読み手も、自分の生活から知っている、隠れた罪です。私たちは、他人のものを何も欲しがってはならないのです。それはまず私の心の中だけで起こる罪であって、必ずしもそれに対応する行いとなって実現するわけではありません。この章で問題になっているのは、あからさまな行為の罪ではないのです。罪の力は、まず内面で強く感じられるのであって、行いによってだけ認識されるものではありません。

この節を、次のような意味でも実行しましょう。すなわち、失われた人々に罪の認識を生じさせるために、律法、つまり神の基準を宣べ伝えることです。この認識がなければ、彼らは救い主の必要性を理解しないでしょう。

6.8.2 8節：律法は罪を促す

しかし罪は、戒めによって機会をとらえ、私のうちにあらゆる欲望を引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。

戒めが人間に出会うと、本来意図された反応であるはずの従順が、すぐに続くわけではありません。そうではなく、罪は反抗的な力として正体を現すのです。罪は神の戒めを機会として、まさに律法が禁じていることを行いま

す。罪が、眠っている犬のように目を覚まされる、というだけではありません。罪の最も重要な性質は、神の戒めに逆らうことにあるのです。

欲望は、ただ一つのものだけに向けられるものではありません。それは欲しが
る価値のあるあらゆるものを狙います。その点で欲望は多面的であり、すべ
てを自分に引き寄せようとする強力な磁石のようなものです。

5章ではすでに、律法がなくても（そして律法とはかかわりなく）罪があっ
たことが、はっきりと示されていました。ただ、罪はそのようなものとし
て、つまり神に敵対する原理としては、明らかになっていなかったのです。

罪は律法がなければ「死んだもの」です。律法がなければ、罪のゆえにだれ
かを訴えることはできません。

では、律法がなければ罪が死んでいたのなら、なぜ神は律法を与えられたの
でしょうか。律法がなければ、罪は永遠に死んだままだったのではないでし
ょうか。律法が入って来たのは、罪をあふれさせるためでした（5:20参
照）。アダム以来すべての人間を冒している罪という病気は、いわば律法に
よって癒やすことはできず、ただそれが病気であると特定されただけでし
た。ガラテヤの人々にパウロは、律法は「キリストへと導く養育係」（ガラ
テヤ3:24、ER〔ドイツ語聖書翻訳〕）であった、と言っています。つまり律
法は、イエスのいけにえが必要であることを示したのです（ガラテヤ3:23-
26）。この意味で、私たちも伝道の中で律法を用いなければなりません。

6.8.3 9～11節：律法との出会いは死に至る

私はかつて律法なしに生きていました。しかし戒めが来たとき、罪が
生き返り、私は死にました。そして、いのちに導くはずの戒めが、私
にとって死に導くものであることがわかりました。罪は戒めによって
機会をとらえ、私を欺き、戒めによって私を殺したのです。

パウロは、一つの例として（つまり、必ずしも自分自身が経験したこととし
てではなく。パリサイ人であった彼は、おそらく一度も「律法なしに」生き

たことはなかったでしょうから）、律法が与えられた出来事を再現しています。「……しかし戒めが来たとき」。

人間は、律法がなければ罪を意識しません。罪を特定することができないからです。律法が与えられると、もろもろの罪がますます明らかになります。その意味で「罪が生き返った」のです。それに加えて、全体としてさらに多くの罪が犯されるようになります。罪は律法によって挑発され、本質的に律法に逆らって行動するからです。

つまり、罪が生き返るのに、信じる者のほうはそれをまったく望んでいない（その人は律法に従いたいと願っているのですから）という状況があるのです。そのとき、その人は自分が死んでいくかのように感じます。その人は、「これを行いなさい。そうすれば生きる」という趣旨のことばを知っています。しかし勝ち目のないまま、その人は律法の判決を自分に受け入れ、「死ぬ」のです。この死は、罪と律法から解放するイエス・キリストの死ではありません（またキリストとともに死ぬことでもありません）。それは、律法に対する無力さと弱さのすべてを凝縮した死なのです。

無力さのほかに、律法による死が意味されていることもありえます。パウロが、自分は律法によって（律法に対して）死んだ、と言っているとおります。罪は殺します。神の戒めは、私がどれほど反抗的に反応するかを示すだけでなく、私の反抗の結果が死であること——避けることのできない死であること——をも示します。その意味で、罪は殺すのです。

罪は、律法を利用した敵です。罪はどのように欺いたのでしょうか。罪はキリスト者を欺いて、今やキリスト者として満たすことができるはずの生活の規則として、律法に心を集中させるよう誘惑したのでしょうか。この章のいくつかの言葉は、私たちに楽園での状況を思い起こさせます。そこにもまた、欺く者、初めからの偽り者がいたのです。

律法が殺したのではありません。罪が殺したのです。この段落で問題になっているのは、神の律法の正しさを弁明することです。律法はいのちのために与えられました。しかし人間は、自分の敗北を認めなければなりません。人

間は、それによって神の前に正しい者とされるほどに、律法を守ることではできないのです。

聖書の中で、律法はこの「否定的な」光の中にだけ現れているわけではありません。旧約聖書でたびたび見られるように（詩篇19篇や119篇を思い浮かべるだけで十分です）、律法はイスラエルへの特別な賜物を含んでいました。律法は大きな祝福でした。ローマ人への手紙7章では、罪を認識させるという律法の特別な働きが強調されており、それが人間の失敗と無力さを浮き彫りにしています。それが「否定的な」光という意味です。律法は良いものですが、助けにはなりません。人間が良くないからです。

ここで投げかけられている問いは、旧約聖書にはほとんど見られません。キリスト者に律法を課すことは、ユダヤ主義者たちの誘惑でした。彼らはパウロの後を追って旅をし、パウロが建てた教会を混乱させたのです。

恵みの福音が広まったときに初めて、古いものと新しいもの、モーセの律法と福音の恵みとの間のこの対立が始まりました。そのことが特に、律法に精通していることで知られたパウロに、ローマ人、コリント人、ガラテヤ人、コロサイ人への手紙の中で、救いの道としての、またキリスト者の生活の規則としてのモーセの律法に「反対して」、これほどはっきりと立場を表明させたのです。

6.8.4 12節：それでも律法は良いもの

ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖なるものであり、正しく、良いものです。

問題は律法ではなく、人間のうちにある罪です。律法は、律法を与えた方である神ご自身が持つておられるすべての属性を備えています。

このまとめは、私たちが律法に対して死に、これからは恵みの下にいることの原因がどこにあるのかを明らかにしています。それは律法の質ではなく、律法を守ることのできない人間の無能力なのです。

6.8.5 13節：もう一度——律法の働き

それでは、良いものが私にとって死となったのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ罪が、³⁰ 罪として現れるために、良いものによって私に死をもたらししたのです。それは、罪が戒めによって、この上もなく罪深いものとなるためでした。

それでもなお、問いが生じます。神の律法、つまり神のみこころが、どうして私の死を意味しうるのでしょうか。——答えはこうです。死をもたらすのは律法ではありません。そうではなく、罪が死をもたらすのです。罪は、良い戒めによって抑えつけられ、覆い隠されるのではなく、暴き出されるのです。

罪がさらに罪深くなることがありますのでしょうか。——罪を、すでにそうである以上に悪いものにすることはできません。しかしここで問題になっているのは、私たちが罪をどのように受け止め、判断するかという問いです。罪を軽く見ることはできますし、自分の良心を麻痺させることもできます。しかし、神の聖なる律法は、罪についての正しい受け止め方と判断を、私に取り戻させてくれます。律法の目的は、神がご覧になるとおりに罪を見させ、それによって私を救い主のもとへと追いやることなのです。

6.9 ローマ人への手紙7章14～25節：律法の下にあるキリスト者の経験

6.9.1 14～15節：善い意志と弱い肉

私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし私は肉
的な者であり、売られて罪の下にある者です。私は、自分のしているこ

30. この節の文言は、この箇所でも多くのドイツ語聖書翻訳（エルバーフェルト訳〔ドイツ語聖書翻訳〕やERも含む）では完全な文になっていませんが、次のように理解すべきです。「それでは、良いものが私にとって死となったのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、それは罪だったのです……」（たとえばシュラハター訳〔Schlachter〕、Schl 2000、メンゲ訳〔Menge〕を参照）。

とがわかりません（認めません）。自分がしたいと思うことはせず、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです。

今、スポットライトは律法から人間へと移ります。律法は靈的なものです。それは神から来ています。しかし人間は肉的です。人間の本質、あるいは本性は罪深いのです。その人は、自分が罪の下に売られていることを知っています。暗い井戸の中のヨセフのように、ひとり取り残されているのです。その人は、自分では説明のつかない矛盾にとらわれています。なぜすべてが自分の望むのとは違う方向に進むのか、わからないのです。何しろ、その人は神と神の律法を選び取ったはずでした。それなのに、なぜ今こうなのか。

（神に仕えたいと願う者として）自分の望むことを行うことができず、その反対のことを行うよう強いられているのです。まさにこのことが、その人が「売られて」その下にいる罪の力と独裁を示しています。

6.9.2 16節：律法への同意

自分がしたくないことを行っているなら、私は律法が正しい（すばらしい）ものであることに同意していることになります。

この状況の中で、人は律法がすばらしく、靈的で、良いものであることに同意しなければならなくさえます。自分自身についての人間の認識は、一步一步深まっています。その人は律法の正しさを認め、それによって、律法を与えたお方の正しさを認めます。今やその人は、悪の根源の所在を突き止めることができるようになります。その人はそれを、どこかほかの場所ではなく、自分自身のうちに見いだすことになるのです。

6.9.3 17～21節：私のうちに住む罪

ですから、今それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪なのです。私は、自分のうち、すなわち自分の肉のうちに、善が住んでいないことを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、正しいことを実行することがないからです（それを認めないからです）。私は、したいと願う善を行わないで、した

くない悪を行っています。私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。そういうわけで、正しいことを行いたいと願っているその私に、悪が存在しているという原理を、私は見いだすのです。

悪の根源の所在が突き止められました。人間のうちに住んでいる罪です。5章12節でパウロは、アダムによって罪が世に入ったことを描いています。ここでは罪が、その日以来人間のうちに住みついている原理として描かれています。罪は、私の周りの世界にある抽象的な原理、つまり（たとえば修道院に入ること）逃れることのできる原理ではありません。罪は、人間のうちに、その心のうちに、住む権利を手に入れたのです。悪を行っているのは罪そのものです。ここローマ人への手紙7章に描かれている人間は、その源を突き止めました。しかしその人は、自分の罪の責任を、まるで自分には関係がないかのように押しつけているのではありません。責任があるのは罪ではなく、人間自身が自分の行いと怠りに責任を負っているのです。その人のうちには罪が住んでおり、それゆえ、その人の肉のうちには「善」（ER）が何も見いだされません。この自己認識は、律法によってもたらされたのです。

善とは、律法に従うことです。ここで原則として語られているのは神の律法、つまりモーセの律法のことです。私が自分に法律のように課すどんな規則も、律法と同じ働きを持っています（7章8～9節の冠詞のない「律法」という言い方を参照）。この章で問題になっているのは、神を喜ばせるために、良い正しい規則を自分に課している、新しく生まれた人間です。しかし間違いは、その人が自分の力でこれらの規則（神の律法）を満たそうとし、そうしながら、その関連を理解しないまま、自分のうちにある罪を挑発してしまうことにあります。「ねばならない」³¹という原理の下に自分を置く人は、自分自身と自分の規則を見つめていて、キリストと御霊の力に目を向けていないのです。

31. H. P. Medema, *Der Brief an die Römer*, 111ページ。

6.9.4 22～23節：二つの律法とその働き

私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいます、私のからだの中には異なる律法があって、それが私の心の律法に対して戦いを挑み、私を、からだの中にある罪の律法のうちにとりこにしているのがわかるのです。

「自己診断」は、もはや内住する罪の認識だけでは終わりません。その罪は、ただそこにあるだけでなく、法則的に自分を押し通すのです。というのは、悪に源があるのと同じように、その人が神から来るものを喜んでいることにも、理由がなければならぬからです。その原因は、「内なる人」の存在にあります。内なる人は罪と向き合っており、同じく「内なる人」について語っている比較箇所（エペソ3:16、コリント第二4:16）と一致して、信じる者の新しいいのちを体現しています。内なる人は、外なる人、つまりからだと対照をなしているだけではありません。「内なる人」とは、単にたましいや霊のことではありません。それなら、生まれてくるどの人間も持っているからです。内なる人は、まず人間像から（人間学的に）理解されるべきものではありません。つまり、人間の内面的な側面を描くものとして理解されるべきではないのです。³²内なる人は、むしろ救いの観点から（救済論的に）理解されるべきものです。救いは、まだ私たちのからだをとらえてはいません。私たちにはまず霊的ないのちが与えられたのであって、それは外にはまだ見えていません。からだの完成は、復活あるいは変貌のときに初めて起こります。ここで、その人のうちに、神を求める何か新しいものが始まったのです。その人は新しく生まれているのです。

内なる人には「心」（ギリシア語 *nous*、つまり思考の働き）があります。それは聖霊によって新たにされた思考です。この思考にとっては、神が望まれることを望むのが自然の法則です。しかし罪は、ここでは人間のうちにある勝利した敵として、より強いのです。罪もまた、一つの「自然法則」を持ち

32. Jürg Buchegger, *Der neue Mensch in Christus und seine tägliche Erneuerung*, 199ページ, 所収: *Ein Mensch – was ist das?*, Wuppertal, 2004年。

込みました。罪は罪を犯します。それが罪の律法（その法則性）なのです。このことを、挫折した人間は次の節が言うように感じています。

6.9.5 24節：絶望

私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

人間の自己診断は終わりに近づき、この苦しみに満ちた叫びに至ります。その人は、単に自分のからだから離れたいと願っているではありません。まるで古代ギリシア人の解決策が罪の問題への答えであるかのよう、です。その解決策とは、からだをあらゆる悪の原因と見なし、霊のうちに自由を見いだすことでした。「死のからだ」とは、罪の作用の下にある人間の肉体のことです。その罪は、人間存在全体の中に、それを占領しながら広がっていくのです。

死のからだは、6章の罪のからだと同じように、実際に人間の肉体のことです。それは罪のゆえに死に定められています（ローマ8:10-13）。ギリシア的な解決策との違いは、キリスト者がからだを（それが死に定められているにもかかわらず）肯定し、主に差し出す、という点にあります。キリスト者にそれができるのは、今やキリストご自身が聖霊によってこのからだに住んでおられるからです。最終的な解決は、からだの復活にあります（からだから抜け出すことにではありません）。しかしそれまでの間、人は御霊によって、からだの悪い行いを殺すことが許されているのです（ローマ8:12-13）。

ここにあるこの叫びによって、その人は救いだけでなく、何よりも救い主を切に求めています！律法の文字は、力を与えることなく、感情を交えずに要求しました。救い主、私たちの主イエス・キリストこそが、恵みと愛のうちに、一人ひとりのためにご自分のいのちを与え、力を与えてくださるお方なのです（ピリピ4:13、コリント第二12:9ほか）。

6.9.6 25節：ローマ人への手紙7章の教訓

私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。こうして、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。

初めて、救い主がその名をもって呼ばれます。これは、信じる者が自分で自分を閉じ込めてしまった強大な牢獄の扉を開ける鍵です。この状況から救い出してくださる方がいるとすれば、それは私たちの主イエス・キリストです。このことは、自分の主について語っている信じる者を指し示しています。今やついに、方向と目標が正くなりました。聖書のほかのどの章よりも、ローマ人への手紙7章には「私」、「私」、そしてまた「私」という言葉が出てきます。そこに問題があるのです。パウロは、「私」や「自分」へと向かう道、そして律法へと向かう道に対して、強く印象づけるように警告するために、この例を意図的にこのように選んだのかもしれません。私たちが自分自身の内なる戦いに焦点を合わせている限り、キリストを見ることも、御霊の道を歩むこともできないのです。絶望したキリスト者は今や、以前のように錨を自分自身の舟の中に投げ込むのではなく、イエス・キリストのうちに錨を下ろすのです。³³

突然の感謝は、惨めな状態の中での転換点です。感謝とは、私が何かを成し遂げるのではなく、別のお方が私のために何かをしてくださる、ということの意味します。8章は、その感謝が何に向けられているのかを示しています。すなわち、キリストにある神の救いのみわざです。それは私の負い目の問題を解決しただけでなく、私の「罪の問題」をも解決しました。私が生まれながらにそうであるものは、取り除かれ、終わらされたのです。律法の山であるシナイ山への苦しい登りは終わりました。ゴルゴタと、そこで救いといのちのために与えられた恵みこそが、今の目標なのです！

7章の結びは、信じる者のうちにある二つの本性を対比しています(7:25)。しかし、ここで言われているのは、(ガラテヤ人への手紙5章に描

33. William MacDonald, *Kommentar zum NT*, 第1巻, 641ページ。

かれているような）肉と御霊の間のたえまない日々の戦いではなく、信じる者のうちには二つの法則性がある、という画期的な認識です。私のうちには二つの原理があります。一方では——肉によって——私は罪に仕えています。この原理の出どころは、今やはっきりと特定されました。それは、私の肉のうちに住んでいる罪です。他方では——新たにされた思考によって——私は神の律法に仕えています。この出どころもまた理解できます。それは内なる人——神から与えられた新しいいのち——なのです。

肉とは、「古い私」、神を持たないもの、この世的なもの、今の時代——そう、罪がもたらしたすべてのもの——の原動力です。思考は、内なる人が神の律法を行おうとするための手段です。7章25節でパウロはこのジレンマをまとめています。新たにされた思考によって、彼は神の律法を喜んでいます。が、肉によって、罪の法則性に仕えているのです。一方に、あるいは他方に仕えるのは、人格、つまり「私」であり、しかもその決断に対して全面的な責任を負っています。ですから、私が行うすべてのことのために用いる、二つの能力、あるいは二つの容量³⁴について語ることができます。二つの能力のうち、どちらか一方がいつも働いています。中立的なものは何もありません。どの行為も（つまり、私が考え、行うすべてのことが）、これらの能力のどちらかによって方向づけられているのです。では、御霊の能力は、私の生活の中でどのようにして突破口を開くのでしょうか。

パウロがどう答え、どんな道を示すのか、楽しみです。しかし、その答えを先取りして、一つの文でこう言い表すことができます。律法にできなかったことを、キリストが今や私たちのために成し遂げてくださり（歴史的な事実として）、そして御霊が今日、それを私たちのうちで「満たして」くださる（現実の経験として）のです。³⁵

34. Charles C. Ryrie, *Ausgewogen statt abgehoben*, Dillenburg 1994, 43ページ。英語の「capacity」には「能力」という意味もあります。

35. Gordon Fee, *Der Geist Gottes und die Gemeinde*, Metzingen, 2005年, 188ページ。

7. ローマ人への手紙8章1～11節：ついに自由！

最初の五つの章における論証の連鎖は、一方では神の義、他方では人間（ユダヤ人であれ異邦人であれ）の負い目と罪を扱い、キリストの血による救いへと至りました（3:23-25）。神はご自分の御子を、宥めのささげ物として与えられました。イエスの血が神の正しい要求を満たすのです。しかし神は、イエスが私たちのためにご自分をいけにえとして献げられた後、私たちが義と認められるために、イエスを死者の中からよみがえらせられました。今や、聖く正しい裁き主である神は、イエス・キリストを信じ、そしてイエスを死者の中からよみがえらせた神を信じる者を、義と宣告されるのです。5章1節でパウロはこうまとめています。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、神との平和を持っています！

ここまで読むと、手紙の頂点に達したので、さらなる頂点はほとんどありえない、と考えるかもしれません。ところが、ここでパウロは、より深いところにある問題を取り上げます。5章12節からは、もはや負い目と償いではなく、人間の道徳的な本質が問題になっています。問題は、力としての罪、そしてすべての人間と切り離しがたく一体化している原理としての罪です。人が行ったことは赦されることができます。しかし、その人が（道徳的に見て）どういう者であるかは、赦すことができません。そうすれば、罪を正当化することになってしまうからです。

5章でパウロは、罪の起源と働きを説明し、6章では罪からの解放を説明しています。7章でパウロは、律法とキリスト者との関係を取り上げました。その後半で彼は、神の子どもであると考えてよい一人の人間の経験を描きました。このキリスト者は、律法を自分の生活の規則とすることによって、良い動機から神を喜ばせようとしています。しかしその人は、決定的なことを見落としていました。キリスト者は、罪に対して死んだのと同じように、律法に対しても死んだのです。その人は、シナイ山の律法が、業績の原理が支配

する一つの「体系」全体を表していることを理解していませんでした。しかし律法は、まさに肉の弱さと無能力を証明するために与えられたのです。律法は、人間が罪人であり、神の介入を必要としていることを明らかにしました。律法によって罪は生き返り（7:9）、律法によって罪はこの上もなく罪深いものとなりました（7:13）。信じる者がこの古い文字にかかわるなら、その人は絶望に終わるでしょう。その人のうちにある罪は、その人の新たにされた意志よりも強いからです。

「私は本当にみじめな人間です！」という言葉は、罪には打ち勝てないという意識から出てきます。ローマ人への手紙7章で、キリスト者は自分自身しか見ていません。自分がキリストにあって義と認められ、洗われ、聖なるものとされていることが見えていないのです。その人は、キリストにある自分の新しいアイデンティティに気づいていませんでした。自分の新しいアイデンティティを実感する人は（8章に描かれているように）、もはや「私は本当にみじめな人間です！」と言う必要はありません。それでもなお、その人がつまずいたり罪を犯したりして、したがってその人のうちに「肉のわざ」（ガラテヤ5:19）があるときにはいつでも、その人はそれを神の前で正直に断罪し、告白すべきです。どの本当の罪の告白も、悲しみと悔い改めを伴います。それは霊的成長の一部であり、その前提なのです。

ローマ人への手紙8章は、いのちへの扉を私たちに大きく開け放ちます。キリストにある無罪判決と、栄光への途上にある神の子たち、神の子どもとしての、御霊にある自由です。私たちはまだ到着していません。私たちはまだ死のからだのうちにあり、滅びに服している被造世界のうちにいるのです。

7.1 「すでに今」と「まだ」

私たちは、望みのうちに救われたのです（ローマ8:24-25、ER〔ドイツ語聖書翻訳〕）。私たちを罪人から義人に変えた私たちの義認は確かですが、それはただ信仰によってのみ得られます。私たちが信仰によって所有しているものが、「すでに今」です。しかし、私たちがまだ完全さに到達していないことは明らかです。最も美しいものはこれから来るのであり、それを私たちは「まだ」と呼んでいます。

キリストの新しい時代：永遠のいのち、御霊の働き、恵み、自由、復活、刷新、平和、義、完成

キリストの第一の来臨 とそのみわざが「すでに今」を成就する：義認、御霊の賜物

信仰と望みのうちにある地上の生活——すでに今・まだ

今の時代

キリストの第二の来臨 が「まだ」を成就する：

- 来たるべき栄光 8:18
- 子とされること、私たちのからだの贖い 8:23
- 神の子どもたちの栄光の自由 8:21
- 解放される被造物 8:21

アダムの時代：罪、死、肉、律法、奴隷状態、はかなさ、滅び、虚無

この図は、この一見した対立と、これら二つの点の間に存在する緊張関係を、わかりやすく示そうとするものです。円は重なり合う部分であり、ここではアダムの時代がまだ終わっていないのに、キリストの時代がすでに始まっています。この時代には、神の民にすでに将来のいのちが与えられていますが、同時に、完成はまだ先のことなのです。

信仰と望みと、信仰における忍耐のこの時代には、救いの命令法が伴っています。その励まし、勧め、強い注意は私たちに向けられており、私たちが信仰のマラソン全体を走り抜けることができるように、最後まで耐え抜く動機を与えようとしています。神の恵みは、その御霊によって、私たちが目標に到達するようにしてください。これが8章のテーマです。パウロにおいて、また新約聖書全体において、**すでに今——まだ**ということにバランスよく注意を払うとき、私たちの望みは生き生きとしてきます。6～8章は、この指導的な考え方の際立った例です。

救いの直説法は、**すでに今**、つまり私たちがすでに受けたものに対応しています。救いの命令法は、**まだ**ないもの、しかし私たちが到達するもの、つまり永遠のいのちの栄光と解放された被造世界に目を向けさせます。神の救い

は、人間の行動、決断、忍耐を排除しません。私たちは、すでにそうである者になるべきなのです。警告と約束、勧めと保証は並び立っていて、決して互いを排除し合うことはありません。

7.2 突破

8章は、おそらくこの手紙の中で「最も高い」山頂であり、聖書全体の中でも最も高い山頂の一つです。罪からの解放が完全に明らかにされた後、パウロは、解放された者たちの道が、神の目標（完成）に到達するために、どこへ、そしてどのような人生の状況を通して導かれていくのかを示します。

「この章は私たちを、キリスト教の最も内側の円へ、その心臓部へと導く。それは至福の特別な状態を扱っている。最も純粹で、悟りへと至った喜びであり、世はそれに少しでも比べられるものを、何ひとつ提供することができないのである。」³⁶

7.3 1節：無罪判決——もはや罪に定める判決はない

こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは（罪に定める判決は）決してありません。³⁷

これは聖書の中で最も偉大で、最も内容豊かな文の一つです。このことは、あらゆる恐れを追い払います。それは、さばきに向かっている失われた世界の中での、歓喜の叫びです。自分の罪を認識して絶望に苦しめられている人々にとって、この良い知らせは存在そのものにかかわる効果を持っています。解放、平和、確信、そして安全です。キリストにあるこの場所、あるいはこの立場は、どんな核シェルターよりも安全です。キリストにあって、私たちに何かが降りかかることはありません。それはまずキリストに当た

36. C. J. Ellicott / W. Sanday (編), *A Bible Commentary for Bible Students*, 233ページ。

37. 次のような訳を支持する写本があります。こういうわけで、今や、キリスト・イエスのうちに（ある）者には、まったく罪の判決はない。（彼らは）肉に従ってではなく、御霊に従って歩む者たちである。キリストのうちにある者たちは、その立場を、御霊に従って歩んでいることに負っているではありません。むしろ、キリストのうちにあることの論理的な帰結が、御霊に従って歩むことなのです。しばしば、立場と状態が不当にも互いに大きく引き離されています——パウロなら理解できなかったであろう事態です。この訳は、救いの直説法と救いの命令法の一体性にまったく合致しています。ですから問題は、行いによる救いではなく、救いの当然の結果としての生活の変化なのです。

るはずだからです。そしてキリストは、どんなものにも立ち向かうことがおできになります。ここで言われているのは、もしキリストがそれを引き受けてくださらなかつたら当然私たちに下っていたはずの、神の断罪の判決です。そして私たちはキリストのうちにあり、いつまでもとどまるのですから、この安心をもって日々の生活を歩んでいきます。法的な問題はすべて解決済みです。私たちは義人として立てられただけでなく、キリストと切り離せないほどに結ばれてさえいます。キリストのうちにあるとは、神が私たちを見下ろされると、私たちではなくキリストをご覧になる、ということにほかなりません。

この根本的な言葉は、さばきの日における将来の判決と、永遠の断罪が、キリストのうちにある私たちにとっては、未来から過去へと移されたことを保証しています。私たちに對する判決は、すでに下されたのです。

この断罪は、神がただ私たちに恵み深いからという理由で、撤回されたり無効にされたりしたものではありません。神のご性質は変わりません。神はご自分の栄光、聖さ、義を、決して放棄したり否定したりはなさいません。それでは、なぜキリストのうちにある者たちには断罪がないのでしょうか。——それは、私たちに對する断罪の判決、つまり私たちの古い人に対する断罪の判決が、キリストにおいて執行されたからです（6:6、8:3）。それは私たちにではなく、キリストに下ったのです。断罪から守られているのは、イエスがその生涯において完全であり、律法を満たされたからではありません。そうではなく、断罪の判決は言い渡されるだけでなく、執行されなければなりませんでした。それが十字架とイエスの死において起こったのです。私たちの救いは、キリストの聖い生涯ではなく、キリストの死なのです。

いつの日か、すべての人間が永遠なるお方の御前に出なければなりません。それは御怒りの日、神の正しいさばきが現れる日です（ローマ2:5）。その日に、人々の隠れた事柄がさばかれます（ローマ2:16）。私たちはみな神のさばきの座の前に立たされ、各自が自分について申し開きをすることになります（ローマ14:10）。その瞬間がいつ来るとしても、私たちはキリストのうちにいます。私たちはすでに今、義人とされているので、その瞬間を恐れ

る必要はありません。私たちには、待ち受けている裁判はありません。さばきはすでに行われたのです。神の怒り（ローマ1:18）は私たちに下りません。私たちはキリストの血によって義と認められ、怒りから救われるのです（ローマ5:9）。

今、私たちは信仰によって、キリストにある自分の救いにおける立場をつかんでいます。しかしその日には、それが明らかになり、体験され、目に見える現実となります。神の御座のそばでの、完全な無罪判決と、子どもとして受け入れられることです！そのとき、私たちは信仰から見ることへと至るのです。

神は私たちをキリストのうちに移してくださいました（コリント第一1:30）。これは神のさばきからの絶対的な守りであり、同時に、復活されたお方のうちにある、まったく新しいのちの始まりでもあります。パウロが特に扱っているこのテーマのために、彼は「キリストのうちにある」³⁸という言い回しを用いています。これはキリスト教信仰の心臓部であり、今神の御座に着いておられるキリストとの、最も緊密な結びつきです。それ以下ではないものを、今や信じる者の神の前での権利上の（法的な）立場は含んでいます。そしてそれは、その人が今導き入れられた新しい生活の雰囲気についても、まったく同じように当てはまります。これは、その人の立場と、その人の生活の義認と原動力の両方を描いています。「キリストのうちにある」とは、「キリストのうちに生きる」ということです。A・T・ピアソン（A. T. Pierson）は、「キリストのうちに」という言葉を、宮殿へと通じる大きな門の頑丈な錠前を開けることのできる、小さな鍵にたとえました。キリストのうちにあって、私たちは神の御座にまで導かれたのです。そこで私たちは、愛する方、神の御子のうちにあって受け入れられているのです。

新しい立場（「キリストのうちに」）に入ろうとすると、問題になるのは感情でも、自分の努力でもありません。キリスト者は、この立場に到達しようと骨折る必要はありません。それは、ウォッチマン・ニーがたとえたよう

38. 新約聖書には、この言葉と、キリストとの私たちの結びつきを特徴づける類似の表現が、190回以上出てきます。

に、すでに部屋の中にいる人が、それでもなお何度もその部屋に入ろうとしているようなものでしょう。

7.4 2節：いのちの御霊の律法によって解放されて

なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法から私を解放したからです。

信じる者は、キリスト・イエスのうちに、その「新しい住まい」のうちに、何を見いだすのでしょうか。キリストのうちにあるとき、その人は今何にあずかっているのでしょうか。そこでその人は、キリストが復活において持つておられるいのちの力のすべてにあずかる者となるのです。

二つの律法——あるいは法則性——が対比されています。一方の力は死に至らせるように働き、もう一方の力はいのちに至らせるように働きます。キリストと結ばれている者は、罪と死に打ち勝つことができます。一方の律法がもう一方の律法を打ち破ったのです。それがより強いからです。問題は二つの律法が並存していることではなく、キリストにある勝利です。それはまったく实际的に、キリスト者の経験となるべきものです。パウロはそれをこの後でも説明しています。しかし、そもそもそのようないのちの御霊の律法を自分のものとして主張できるためには、まず勝利が勝ち取られていなければなりません。この戦いを戦うべきなのはキリスト者ではありません。別の方が、キリスト者のためにこの勝利を勝ち取ってくださったのです。キリストです。

罪と死の律法は、重力の法則にたとえられてきました。この法則は、鳥によって、空気力学の法則によって打ち負かされます。鳥は地面に落ちることなく、行きたいところへ飛んでいきます。飛ぶことは、鳥が生まれつき持っている能力であり、そのために歯を食いしばって努力するわけではありません。そうしながら重力の法則を打ち破っていることを、鳥は意識していません。鳥は、そのために造られたことを行っているのです。同じように、このいのちの御霊の律法がキリスト者を解放しました。そしてそれは、キリスト者のうちでたえず働き続けています。この自由を与え、生き生きと保ってく

ださるのは聖霊です。キリスト者はこの律法の働きを確信していてよいのです。そしてそれは——鳥の場合と同じように——キリスト者にとって普通のことであるべきです。

8章は主に聖霊を扱っていますが、7章は人間自身の「私」を扱っています。聖霊、キリストの御霊は、いのちの御霊です。アダムとそのすべての子孫のうちには、罪と死の律法が働いていました。キリストのうちには今、比べものにならないほど大きな力をもって、御霊と、復活されたお方のいのちが働いているのです。

7.5 3節：神はゴルゴタで罪の問題を解決される

律法が肉によって弱くなったために、律法にはできなかったことを、神はしてくださいました。ご自分の御子を、罪深い肉と同じような姿（同じ姿）で、罪のために遣わし、肉において罪を処罰されたのです……

律法は、罪の問題を解決することも、律法を守り、それに従って生きるためのいのちと力を与えることもできませんでした。律法は、人間を道徳的に改善することも、新しくすることもできなかったのです。肉（アダムの子孫の、生まれつきの、それゆえ罪深く、この世的な原動力）は無力で、無能でした。しかし神は、恵み深く、あわれみ深い方なので、すべてを動かされました。私たちにできなかったことを、神がしてくださったのです。なんと解放的なことばでしょうか。それはこの文脈で、特に、なお自分で何かをしようとし、「しなければならない」「ねばならない」という強制の下に自分を置いている人々に向けられているのです！

7.5.1 神が人となられる

神がそれをなさいました。これは、人間ができること、あるいはしようとするもののすべてに対する、最終的な終わりです。神は偉大なこと、想像もできないことをなさいます。ご自分のひとり子を遣わされたのです。御使いを遣わしたのでも、人間を遣わしたのでもありません。神は、限りない愛と永

遠の交わりのうちに結ばれているご自分の御子を与えられたのです。子なる神が人となりました。この方は「罪深い肉」の中に生まれたのではなく、罪深い肉と「同じ姿」で遣わされたのです。この方は人と同じようになれましたが、罪はありませんでした。罪はありませんでしたが、罪の**ために**遣わされたのです。この方の神的な使命は、罪のためのいけにえとなることでした。「罪のために」という表現は、旧約聖書ではしばしば罪のきよめのささげ物について用いられています。まさにそのいけにえに、この方はなるはずでした。それまでのすべてのいけにえは、罪を思い出させるものでしかありえなかったからです！自分が罪のためのこのただ一度のいけにえとなることを、この方は罪のない生涯のどの瞬間にも意識しておられました。

ことばは肉となりましたが、罪はありませんでした。罪はすべての人間のうちにあり、その本質は「肉のうちにある罪」と呼ばれます。イエスについて言えるのは、罪なしに肉のうちに（人間存在のうちに）おられた、ということだけです。それが、ほかの人々のために罪のためのいけにえとなることができるための、譲ることのできない、必要不可欠な前提でした。

「罪深い肉と同じ姿」という表現は、一方では、子なる神が本当に人となられたことを強調しています（ここで「同じ姿」とは「似ている」以上のことを意味しています。そうでなければ、この方の真の人間性に疑いを差しはさむ余地が生じてしまうからです）。他方でこの表現は、この方の人間性が、すべての人間の場合のように罪にとらえられてはいなかったことを含んでいます。

7.5.2 ゴルゴタ

想像を絶することが起こりました。神は「肉のうちにある罪」を断罪し（処罰し）、そのためにご自分の御子を罪のきよめのささげ物とされたのです。こうして神は、この方において、罪に対する断罪の判決を執行されました。キリストは私たちの罪深い本質をご自分の身に負い（私たちがそうであったものに、ご自分を自らなさり）、私たちの代わりに、神の聖なるさばきにご自分をさらされたのです。神はご自分の御子を惜しまれませんでした

(8:32)！6章6節でパウロは同じことを言っています。私たちはともに十字架につけられたのです。7章4節で彼はこのことを別の言葉で表しています（「キリストのからだを通して殺された」）。十字架の上で、罪に対する裁判が行われ、死刑判決が執行されました。救い主は、断罪と、罪の報酬としての死の両方を、私たちの身代わりとして引き受けてくださったのです！

神は、この方がご自分の愛する永遠の御子であるにもかかわらず、十字架の上で、この方を最大の罪人として扱われました——人類のすべての罪がその上に置かれた者として、です。神の怒りは、聖く正しく、罪を憎んでおられたお方の上に、容赦なく下りました。この方は私たちのために罪と（そして罪のきよめのささげ物と）されたのです（コリント第二5:21）。この出来事は、人類の歴史の中で最も暗い時間を含んでいます。その日の正午12時から午後3時まで覆っていた、類を見ない全地を覆う暗闇は、この奥義を証ししています。そこで起こったことを、だれも目撃することはできませんでした。神はご自分の御子を打たれます。この方は肉体的には力尽きておられましたが、意識ははっきりとしたまま、聖なる神と向き合っておられるのです。それから、この方はご自分のいのちを死に渡されます。救い主は、かつて語られた中で最も重要なことばを、宇宙に向かって叫ばれます。「完了した。」

こうして私たちは、キリスト・イエスのうちにある者たちには、もはや断罪がありえないことを理解します。この方がそれを身に負われたのです。この方は、私たちが生まれながらにそうであったもの（「アダムのうちに」ある私たちの立場のあらゆる特徴）を、まるでご自分にその責任があるかのようにご自分の身に負うことによって、神の絶対的な聖さと義にご自分を引き渡されました。私が受けて当然であったものをすべて、この方は私から取り去ってくださいました。それは神によるいけにえであり、今キリストのうちにあるすべての者に有効です。それが、私たちの失敗、私たちの罪、そして神に仕えることのできない私たちの無能力に対する、神の答えです。神は、私たちのもろもろの罪からの、そして罪からの私たちの義認を、絶対的に正しい、それゆえ反論の余地のない土台の上に据えられました。神の要求は満たされたのです。新しいものを造り出すためには、古いものをさばくことが必

要でした。罪は、イエスの肉において（肉となったことばにおいて）、神ご自身の基準に従い、神の義と聖さと栄光とに一致して、処罰されなければなりませんでした。それによって神はあらゆる点で栄光を受け、神の要求は完全に満たされました。そのことの証拠が、イエスの復活と即位です。神は、ご自分の御子の贖いのみわざにおいて、完全な安息に入られたのです。

しかし、この救いのみわざの目的が何であるかに注目しましょう。

7.6 4節：神の律法は今、やはり満たされる

……それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の正しい要求が満たされるためなのです。

成し遂げられたイエスのいけにえの死による救いは、今や私たちの実際の生活、つまり歩みへと流れ込んでいきます。救いの目的は、（7章とは対照的に）今やキリスト者によって、やはり律法が満たされることです。この節こそ、ローマ人への手紙7章への答えです！7章を学んだ後には、神の律法は、ただ罪を暴き出すという働きを決して越えることがないのだろうか、という問いが残っていたはずです。神の律法は正しく、絶対的に良いものなので、もしだれも——もちろんイエスを別にして——それを満たすことができないとしたら、それは神の敗北に等しいことになってしまうでしょう。そして、まさにそのとおりなのです。今や、キリストのうちにある者たちが律法を満たします。律法の要求は今、彼らのうちで満たされるのです。しかも神の御霊によってです。

ここで問題になっているのは、モーセの律法のすべての戒めではありません。ローマ人への手紙7章の人間の問題は、祭儀律法ではなく、モーセの律法の道徳的な部分でした。その人は、自分の状況のジレンマを、十戒の最後の戒め（道徳的な性格の戒め）に結びつけています。「欲してはならない！」（7:7、出エジプト20:17。申命記5:21参照）。道徳的な戒めにおいて、罪が明らかになるのです（ヤコブ2:8-11も参照）。欲すること、あるいは不当な欲望の快楽（それが何に向けられたものであれ）は、私たちが毎日出会うものであり、私たちの心の中で始まるものです。

この戒めは今、聖霊の力によって、信じる者によって満たされます。その人は、こうして欲望に抵抗し、それに打ち勝つことができます。それどころか、その人は次のことに気づくでしょう。意識して御霊の道を歩むとき、欲望はその人にとってますます魅力を失っていくのです。その人は、不正なもの、他人に属するもの——（地上の基準で）より大きく、より美しく、より良いもの——を、もはや所有したいとは思わなくなります。

パウロの「新しい」倫理、つまり「御霊の新しさ」（7:6）は、古い規則や新しい規則、あるいは律法から成り立っているものではありません。むしろ私たちは、御霊の力によって、将来のいのちを今日すでに生きているのです——神のご性質そのものを表すいのち、私たちがキリスト・イエスにおいて知ることになったいのちです。このいのちの基準は、モーセの律法ではなく、キリストの律法（ガラテヤ6:2）、キリストのうちにある真理（エペソ4:20-22）であり、それは新約聖書全体の中で私たちに出会います。もちろん、キリストの律法とモーセの律法が互いに矛盾することは決してありえません。両者は同じ起源と同じ著者を持っているからです。モーセの律法の核心は愛であり、それはまさにキリストの律法の中心でもあります。しかし後者の律法において、愛ははるかに先まで進みます。キリストご自身とその愛が基準なのです。

7.6.1 モーセの律法とその有効性

私たちは、「神の永遠の道德律」³⁹と、その有効性が時間的に限られているモーセの律法とを区別しなければなりません。神の永遠の道德律とは、神の前で何が正しく、何が正しくないかについての絶対的な規範です。それは、人間に対する神の聖く変わることはないご性質の表現です。神の道德律は、いつの時代にも存在していました。それは神の永遠のご性質の要求だからです。人は、モーセの律法の下にいらなくても、神の絶対的な道德律と一致して生きることができるのです。

39. Ernst G. Maier, *Die biblische Lehre von den Heilszeiten*, Hünfeld, 2007年, 80ページ以下。「神の永遠の道德律」という言葉は、ほかの神学用語（三位一体、古い本性と新しい本性など）と同じように聖書には出てきませんが、聖書の真理を簡潔に言い表すのに役立ちます。

まさにこの新しい状況を、パウロはここで説明しています。キリスト者は、救いへの道に関しても、生活の基準に関しても、モーセの律法から解放されています。しかし、だからといって決して「律法を持たない無法な者」ではありません。キリスト者は今、法にかなった仕方でもキリストに服しています（コリント第一9:21）。そこでは、少なくとも、モーセの律法の道徳的な部分に含まれているような規則が有効なのです。⁴⁰いのちの御霊の律法（8:2）としての「キリストの律法」（ガラテヤ6:2）と、（新しい）愛の戒め（ヨハネ13:34、15:12ほか）は、確かにモーセの律法に結びついており、どこにおいてもそれと矛盾してはいませんが、それよりもはるかに先まで進んでいます。今や信じる者たちは、神とキリストに倣う者となったのです。こう言われています。愛のうちに歩みなさい。死に至るまでご自分を与えられたキリストの愛のうちに（エペソ5:2）！それは律法以上のものです。モーセの律法はここで、いわば後に取り残され、神の御子の啓示とその贖いのみわぎの光の中で、新しい基準にもはやついて行くことができません。これは関係の表現であり、子とされることであり、一人ひとりへの導きであり、新しい創造なのです（ガラテヤ6:15-16）。

神の永遠の道徳的原則の啓示と適用は、救いの歴史のさまざまな時代において変化します。モーセの律法はその有効性を失いましたが、モーセの律法の中に表されている神の永遠の道徳的原則は存続しています。私たちはそれを、キリストの律法の中に再び見いだすからです。パウロはローマ人への手紙13章8～10節でその一例を挙げています。新しいいのちの戒めは、私たちが互いに愛し合うべきことにあります。それによって私たちはモーセの律法をも満たします。愛は律法の総和だからです（ガラテヤ5:14-15、テモテ第一1:5-11、マタイ22:34-40）。この総和、つまり愛は、キリストの律法にも対応しています。

40. 新約聖書における十戒：安息日の戒めを除いて、ほかの九つの（道徳的な）戒めはすべて、新約聖書の中で繰り返されているだけでなく、さらに厳しくされ、あるいは禁止から積極的な命令へと変えられています！第一戒：コリント第一8:4-6、第二戒：コリント第一10:7、14、第三戒：コロサイ3:8、第五戒：エペソ6:2、第六戒：マタイ5:22、ヨハネ第一3:16、第七戒：マタイ5:28、エペソ5:25、第八戒：エペソ4:28、ヨハネ第一3:17、第九戒：エペソ4:25、第十戒：エペソ5:5、テモテ第一6:10ほか。

キリストは一方ではモーセの律法の終わりであり、しかしまたその目標であり成就でもあります（ローマ10:4）。キリストは、モーセの律法を完全に守られた唯一のお方です。しかしそれを越えて、人であるイエス・キリストにおいて、神の永遠の道德律が完全に明らかにされています。永遠のこことば（ヨハネ1:1-3）としてのキリストは、その人格において、神のみこころと律法の完全な表現です。「キリストの律法」は、神の永遠の道德律の完全な啓示を含んでおり、そのようなものとして旧約聖書の律法をはるかにしのいでいます。ですから、キリスト者の基準は今やもはやモーセの律法の文字ではなく、一人のお方なのです。キリストご自身が、御霊によって私たちの心に書き記されているのです。

言い換えれば、新しい契約の事実が効力を発するのです。律法は心のうちに（つまり、人間の意志と決断の中心に）植えつけられます。それは、その人々が内側から、聖霊の力によって、この律法に従って生きることができるためです。この律法は、ほかでもないキリストご自身によって体现されています（ヘブル8:10、10:16、コリント第二3:6、18、エレミヤ31:31-34、32:40、エゼキエル36:24-27）。

7.7 5節：肉に従う者か、御霊に従う者か

肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。

パウロは、ローマ人への手紙5章12節で引き始めた二本の線を、この後も引き続けることをやめません。この文脈で彼が書いているのは、キリスト者が霊的に生きているか肉的に生きているか、ということではありません。彼にとって問題なのは、依然として根本的な区別です。「肉に従う者である」とは、依然としてアダムの家族に属していることを意味します。しかし「御霊に従う者」は、「キリストのうちに」います。しかし、どちらの立場も抽象的な事柄ではありません。生活も、考えも、行いも——御霊か肉かのどちらかによって——形づくられるのです。肉は信仰を持たない人を形づくり、御霊は信じる者を形づくります。

肉とは、人間の罪深い本質です——内住する罪によって、その人が存在全体と生き方においてなってしまったもののことです。信仰を持たない人は「肉」です（ヨハネ3:6）。その人は肉から、肉に従って生き、自分自身とこの世的なものに向かっています。たとえそうしたいと思っても、それ以外の生き方はできません。その人は自分の肉によって方向づけられているのです。その人の意志、思考、行動は、この世的なもの、目に見えるもの、世俗的なものの原動力によって特徴づけられています。

これに対してキリスト者は、「御霊に従う者」です。それは、御霊がその人に救いを与え、その人がそこから自分の新しい起源を引き出している、ということの意味します。御霊によって生まれた者は霊なのです（ヨハネ3:6）。そこから、新しい人生の方向、新しい関心、そして永遠のもの、天的なものへのまなざしが生まれてくるのです。

7.8 6～7節：死といのち、敵意と平和

肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。なぜなら、肉の思いは神に対して敵意を抱いているからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。

これ以上ははっきりとした違いはありません。肉の思い（心構え）は、死、つまりはかなさと滅びを、そのうちに宿しています。まだ肉のうちにいる人は、それに気づきません。その人は、自分で決めて生きることができると考えていますが、罪に操られています。その人は、この生き方が（肉体の、また永遠の）死に至ることに気づいていません。その人は、死を恐れてはいいても、死を普通のことと見なし、肉と死のこの関連を認識していないのです。

しかし神の御霊は、いのちと平安をもたらします。このいのちは生物学的ないのちではなく、霊的な、あるいは永遠のいのちです。神との平和は、この新しいいのちの土台です。平和は、すべての人間の切なる願いを含んでいますが、それはただ聖霊の力によってのみ得られます。御霊にある生活は、この平安によって特徴づけられています。それは、信じる者を、信頼して神の御手の中に安らわせる平安です。パウロはその教えの手紙の中で、この霊的

ないのちと平安が、私たちの人間存在の中でどのように現れるのかを説明しています。ここではまだ、抽象的に見える根本的な対比にとどまっています。

罪深い肉の本質は、受け身のものではありません。そうとは気づかれなくても、それは神に対する敵意のうちにあります。肉は律法を拒みます。神の権威は、肉にとって敵です。神を生活から締め出すこと、それが肉の本質なのです。肉には、神の律法を守る能力も意志もありません。このことはキリスト者にも当てはまります。キリスト者の肉、あるいは古い肉の本性は、新しい救いにおける立場にあってもなおその人のうちにあり、（それに自由が与えられれば）まったく同じように振る舞い、やはり律法を守ることができません。**私たちのうちにある肉もまた、神に対する敵意なのです。しかし、次の節が示しているように、私たちは「肉のうちに」いるものではありません。**

7.9 8～9節：肉のうちにいること、御霊のうちにいること

肉のうちにいる者は神を喜ばせることができません。しかし、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいるのです。もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるならばです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。

「肉のうちにいる」という言葉が指しているのは、人がアダムの子孫として生まれつきそうであるもののことです。その人の生活は、その人が何者であり、何をするかのすべてにおいて、それによって刻印され、決定されています。水が魚の生きる場であるように、それがその人の生きる場なのです。パウロは言います。肉のうちにいては、決して神を喜ばせることはできない——律法の助けを借りたとしても、できない。このことは、疑いの余地なくはっきりしていなければなりません。

キリスト者は、もはや「アダムのうちに」ではなく、「キリストのうちに」います。そのことが、ここでは、キリスト者が「御霊のうちに」いるという

事実と同じものとされています。神の御霊がすべての信仰者のうちに住んでおられるので、信仰者は、この御霊がその人を自分のものとして所有された時から、「御霊のうちに」もいるのです。私たちが御霊のうちにいるなら、私たちがキリストという人格のうちにいるのと同じように、聖霊という人格のうちにいるのです。この神的な人格である神の御霊は、キリストと同じように、私たちのうちに住んでおられます。そこから、私たちの状態が今や「御霊のうちに」と表現されることになります。私たちは「キリストのうちに」おり、「聖霊のうちに」いるのです。言い換えれば、私たちは神のうちにいるのです（コロサイ3:3、テサロニケ第一1:1、テサロニケ第二1:2、ヨハネ第一4:15-16、ユダ1）。これが私たちの新しい「わが家」であり、いのちと恵みと平和と義に満ちた、私たちの新しい生活の空気なのです。「御霊のうちにいる」とは、これから先、神の御霊が私たちのうちにその実を結ばせ、私たちの思い、あるいは思い求めることを導いてくださる、ということです。この御霊は、私たちがその中へと移されたイエス・キリストと別のしかたで、あるいはこの方から独立して働かれるわけではありません。ですから同じ御霊が「キリストの御霊」とも呼ばれるのです。キリストは、この新しいいのちの中心であり目標です。そして神の御霊は、私たちの生活の中でキリストを大きくすることに、何よりも重きを置いておられるのです。

信仰者の生活の中でキリストが表されず、その人がキリストを愛していないなら、その結論は、その人がキリストに属していない、ということではありえません。これは自己吟味への呼びかけです。だれも偽りの安心に浸ることのないためです。

キリストの御霊は、ここでは、その人がだれの所有物であるかを示す証印のようなものです。聖霊による証印はここでは言及されていませんが（エペソ1:13参照）、所有の表示（すなわち、「キリストのもの」という代名詞が、キリストに属するという意味で用いられているという事実）が、この側面をほのめかしています。

7.10 10～11節：神の御霊と、私たちのからだの救い

キリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、御霊が義のゆえにいのちとなっています。イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊のゆえに、あなたがたの死ぬべきからだも生かして下さいます（あるいは、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊によって）。

7.10.1 私たちの救いにおける立場——救いの直説法——「すでに今」

- 私たちはキリスト・イエスのうちにいます。
- 私たちは御霊のうちにいます。
- 私たちは御霊に従っています。
- 聖霊が私たちのうちにおられます。
- 私たちはキリストの御霊を持っています。
- キリストが私たちのうちにおられます。

キリストと御霊とのあいだには、目を見張るような一致があります。二つの異なる人格ですが、一つの目標を持っておられます。父・子・聖霊の三位一体（Drei-ein-heit：三つにして一つ）である神性においては、それ以外ではありえません。三位一体の神は私たちの救いのために働かれました。そして今、私たちの聖化においても働いておられるのです！

7.10.2 生きることと死ぬこと

死は、5章から8章までの中で繰り返し話題になります。前面に出ているのは肉体の死ですが、それは永遠の死（神の断罪の判決の結果）と切り離すことはできません。私たちのからだは、まだ罪のこの結果の下にあります。パウロはここで、明らかに内側の面——あなたがたのうちに住まれるキリスト——を、外側の面、すなわちからだから区別しています。からだは死んでい

ます（死に定められ、死につつあります）——罪のゆえにです。しかし、これは内側の面には当てはまりません。内側の面は、いのちの御霊の手の中にあるからです。神の救いは、まず人間の内側の面に作用します。この内側の面は、くわしく描写されてはおらず（たとえば「たましい」や「霊」といった言葉を使って）、ただ人称代名詞「あなたがた」で表されているだけです。ここで言われている御霊は、この文脈では人間の霊ではなく、神の御霊です。この御霊が、いのちの御霊の律法によって、いのちをもたらしたのです（8:2）。

罪が死の原因であるように、信仰者の場合には、神の義がいのちの原因です。義は新しいいのちの土台です。イエス・キリストのただ一つの義の行為が、いのちの義認をもたらしました（5:18）。私たちは義人という立場に置かれたのです（5:19）。

私たちはまだからだの中にいます。このからだは、その実質において、信仰を持たない人の体と何も変わりません。キリストが私たちのうちにおられることは、地上の生活においては、からだには影響を及ぼしません。からだはそれによってすでに死なないものになるわけではありません。けれども、そうであるのは一時的なことにすぎません。キリストにある復活の力が、からだをもとらえるからです。神の救いの目標は、一つの完全なまとまりとしての人間全体です。それは「たましいの救い」だけの問題ではなく、むしろ本来の創造の回復の問題なのです。

それでもまだ、言い足りないでしょう。救いは、神のかたちに造られたアダムの最初の状態を回復するだけでなく、私たちを御子のかたちへと変えてくださるからです（8:29）。私たちがこの方、イエスに似た者となる日が来るのです（ヨハネ第一3:2）。その日には、私たちはもはや「土で造られた者」のかたち（アダムのかたち）ではなく、天に属する方、すなわちキリストのかたちを持つようになります（コリント第一15:49）。復活は、神がご自身の栄光のため、また私たちの救いのために、罪の結果の**すべて**に打ち勝たれたことを、はっきり示すことになるのです。

7.10.3 神の御霊とからだ

私たちのうちに住んでおられる神の御霊こそ、私たちがいつの日かよみがえらされる理由です。この御霊は私たちのからだに住み、私たちのからだを引き受けてくださいました。私たちのからだは聖霊の宮となり、からだは御霊のものなのです（コリント第一6:19）！ 御霊は、私たちが将来死者の中から復活することの保証です。将来よみがえらされる理由は、私たちが地上のからだで生きている今、御霊が私たちのうちに住んでおられる、ということにあります。御霊は再びこの宮に住もうとしておられます。肉体の死が訪れた後、御霊はしばらくのあいだ、この宮を手放さなければならなかったからです。主イエスは、御霊がいつまでも私たちとともにいると言っておられます（ヨハネ14:16）。御霊は私たちの復活のからだにも住まわれるのです。御霊が私たちのからだとこのように結びついていることを見るのは大切です。私たちはしばしば、この御霊を私たちの人間的な霊とだけ結びつけて考えるからです。

聖霊は、一方では私たちのからだがよみがえらされる理由ですが、同じように、私たちのからだをよみがえらせる神の道具ともなられるのです。

7.10.4 なぜ今すでに死なない者になっていないのか？

神は、救いとともに、今すでに私たちのからだに不死を与えることもおできになったのではないのでしょうか。なぜからだは（キリストがその前に再臨されないかぎり）ときには病気になり、死を通らなければならないのでしょうか。その答えは、次のようなものだと思います。神は世界に対して一つのご計画を持っておられます。その目標は新しい創造です。それはすでに私たちのうちに始まっています。私たち（信仰者）は今すでに新しい創造の一部であり、いわば「先取り」、初穂なのです。新しい時代は、私たちのうちですすでに始まっています。「すでに今」、そして同時に「まだ」——完成へ向かう途上にある私たちの暫定的な状態は、このように特徴づけることができます。

もし私たちが今すでに死なない者になっていたら、と想像してみてください。そうなれば、だれもが、ただ同じように死なない者になりたいという理由だけで、喜んでキリスト者になるでしょう。しかし神が福音を送られるのは、人々が悔い改めて信じるためです。この問いは、この手紙の中で直接には立てられていません。それでもパウロは、苦難と患難について、また私たちのからだの贖いについて、この章の中でさらに取り上げています。私たちは「すでに今——まだ」の緊張の中に生きています。その緊張とは、からだはまだ病気と死に服しているのに、私たちはすでに救いの祝福を余すところなく受けている、ということです。その祝福は永遠の前味わいなのです。この節の見出しで立てた問いには、ローマ人への手紙8章24節が答えています。私たちは望みに向かって救われたのです（ER〔ドイツ語聖書翻訳〕の文言を参照）。しかし、目に見える望み（たとえば死なないからだという形で）は、望みではありません。

8. ローマ人への手紙8章12～17節：救いの命令法——勝利のうちに生きる

神の救いは、私たちの名がいのちの書に記されることで終わるのではなく、日々の生活の中へとじかに働きかけます。そこで救いは目に見えるものとなるのです。新しいいのちには、新しい「雇用関係」（一つの奴隷状態から別の奴隷状態へ）が含まれるだけでなく、何よりも「愛の関係」が含まれています。私たちは神の養子とされ、こうして神の子どもとなったのです。そのような者として、私たちは今、墮落した被造世界と敵対する世の中を通して旅をしています。それは、私たちのからだが変わえられる日まで続きます。それは、イエスが来られる時に、（キリストにあって眠った人々の）復活によって、あるいは直接に（その時まで生きている人々が変わえられることによって）起こります。その時ついに、私たちが子とされることは完全なものとなり（8:23）、来たるべき栄光に到達するのです（8:18）。

パウロは、ローマの人々の救いを疑ってはいません。彼は彼らを兄弟と呼びかけています。神の御霊が、彼らは神の子どもであると保証しておられる兄弟たちです。私たちは永遠に神の子どもです。私たちが今はまだ信仰によってだけ（そしてまだ目に見えない形で）とらえていることを、将来が明らかにしようとしており、また明らかにすることになるからです。パウロが今（彼のすべての手紙においてそうであるように）「もし」と「そうすれば」について語り、その際、救いに関して条件文⁴¹を用いているとしても、それは彼らを不安にさせるために言っているのではありません。彼はそれによって、疑いを表しているのでも、確信を表しているのでもありません。むしろ彼は、自分自身に批判的な問いを向けるよう彼らに促しているのです。私はどうなのか。私は御霊を持っているのか。私は正しい道を歩んでいるのか。彼は、彼らがこれらの問いに「はい」と答えることを暗黙のうちに前提としています。それらは警告です。救いの確かさがあるにもかかわらず、私たち

41. 「条件を表す文」と同じ意味。

がすでにそうである者になるよう、私たちを促す警告なのです。私たちは、神からいただきたいのちを生きるべきです。これらの警告は、私たちが目標に到達するために役立ちます。それらは私たちの目を「まだ」に向けさせます——前へ、神ご自身の栄光へと。そこが私たちのわが家となるのです。

8.1 12節：もはや肉に対する義務はない

ですから、兄弟たち、私たちは負債のある者ですが、肉に従って生きるように肉に負っているではありません。

キリスト・イエスのうちにあるすべての人にとって、これから先もはや肉に従って生きないことは、果たすべき義務です。肉、すなわち罪深い本質を、パウロは御霊と対比させながら十分にはっきりと描いてきました。肉の所有権の主張は過去のもので、私たちは自由にされたのです。肉は、私たちの人間存在の一部として取り除かれたのではなく、無力にされたのです。肉はもはや私たちの生活を決定してはなりません。ですから、この肉に対して何らかの形でまだ義務を負っているということは、ありえません。それに対して肉のほうは、まるで私たちが肉の負債者であり、つまり肉に義務を負っているかのようにふるまいます。回心の前には実際にそうだったようにです。兄弟たちへのこの指摘が必要なのは、私たちが誘惑を受けやすいまだからです。私たちは、からだの中にある最後の日まで肉の誘惑に対して攻撃されやすい者たちを、身をもって表しているのです。

では、私たちは御霊に対して負債のある者なんでしょうか。私たちはきっと、パウロがこの文をそのように結ぶだろうと予想したことでしょう。ところが彼はその代わりに、肉に従う生活がどのように終わるか、そして御霊の力による生活がどのようなものかを描いているのです。

8.2 13節：いのちか死か

もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます（死ななければなりません）。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きます。

パウロの言葉には飾りがありません。警告ははっきりしています。兄弟たち、あなたがたが肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。肉の本質、すなわち神への敵意は、信仰者においても変わらないままです。「肉に従って生きる」とは、肉のうちにいる人々を表す言葉です（8:5-8）。これは、自己欺瞞から守るための警告です。ある人が肉に従って生きているなら、その人は肉のうちにいる——つまり永遠の滅びに至る広い道の上にいる——可能性があります。しかし、この警告はここで（本物の）兄弟たちに向けられているのです！ パウロは彼らの救いを確信しており、それを疑ってはいないにもかかわらず、この警告を語ります。肉に従って生きてはいけない、それは死をもたらすからだ！ しかも彼は、この文脈では永遠の死のことを言っているのです。

8.2.1 約束と警告、そして永遠の救い

兄弟たちへのこの警告からは、救いを失うことがありうると推論できそうです。パウロはこの警告で、その可能性を考慮に入れているのでしょうか。私はそうは思いません。交通標識は、ありうる結果について警告するのであって、起こりそうな結果について警告するものではありません。道路を走るとき、私たちは自分の安全に影響する決断をします。交通標識は、カーブや横風や動物の飛び出しについて警告します。それは私を不安にさせるためにあるものではありません。私が十分にうまく運転できないから事故を起こすかもしれない、と私を怖がらせるためのものではないのです。むしろ、さまざまな現実の危険について警告しているのです。それは、警告を無視したら何が起こりうるかを、私に思い描かせます。一方で神の約束を持ちながら、同時に警告も聞くことは、矛盾ではありません。私たちは、その約束を自分のものとする努力を怠ってはならないからです。パウロの生涯から、役に立つたとえの一つ挙げましょう。ローマへの旅の途中で、船はひどい海難に遭い、皆が生きる望みを失います。この状況の中で、パウロは御使いから受けた約束を、おおよそこのように伝えます。「皆が救われる！」何日かたつと陸地が見えてきます。そして何人かの水夫たちが、小舟で逃げて自分だけ助かろうとします。パウロは兵士たちに、そうさせないよう警告します。水夫たち

がいなければ、皆が死んでしまうからです（使徒27章）。パウロは、神の約束がもしかすると実現しないかもしれない、と警告したのでしょうか。それとも、神の約束に従わなければ何が起こるかを見通して、理性に訴えたのでしょうか。この話における確かな約束と切実な警告の関係は、聖書の約束（それは、私たちが最後に救われることを保証します）と、聖書の警告と勧め（それは、私たちがイエス・キリストを信じる信仰のうちに、目標まで耐え忍ぶことを求めます）の関係とまったく同じです。

「神は、ありうる結果について警告されるのであって、起こりそうな結果について警告されるのではない。私たちの場合もそうである。聖書は、神がイエス・キリストのうちにあるすべての人をしっかりと確かに保っておられることを告げている（8:29-39）。同時に聖書は、イエス・キリストへの従順のうちに耐え忍ぶよう、私たちに勧めてもいる。そうでなければ私たちは永遠に滅びるからである（8:12-13）。これは望みのない矛盾だろうか。神の警告に従い、それを信じることができるためには、神の約束を疑わなければならないのだろうか。そうではない！ 神は、警告と勧めを用いることによって、私たちをキリストのうちにしっかりと確かに保っておられる。それらの警告と勧めは、福音の最初の呼びかけと同じように、可能性や条件の枠組みの中で言い表されているのである。神はご自分の約束に決して矛盾されない……⁴² 神は私たちの理性に語りかけられる。不従順を目の前にして、私たちが神を信じ、神に従うためである。だから神は、終わりまで私たちを守ると保証してくださることによって、そしてまた私たちに」はっきりと指摘してくださることによって、私たちの信仰を強めてくださるのです。「イエス・キリストに堅く忠実であり続けるように」と。⁴³

祝福と約束——条件と結びついたもの

42. 引用文の著者はここで、神の約束と警告を決して互いに対立させてはならないことを明らかにしようとしている。

43. トーマス・シュライナー（Thomas Schreiner）、*Mit Ausharren laufen – Gibt es Heilsgewissheit ohne Heiligung?*、エーアリングハウゼン（Oerlinghausen）、2009年、219ページ。

ローマ8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。……
……しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きます。

ローマ8:14 神の御霊に導かれる人はみな、……
……神の子どもたちです。

ローマ8:17 ……私たちがキリストと苦難とともにしているなら、……
……それは、私たちがキリストとともに栄光をも受けるためです。

コリント第一15:1-2 兄弟たち、私があなたがたに宣べ伝えた福音を、あなたがたに知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。その福音によって救われもします。……
……もし、私があなたがたに宣べ伝えたことばをしっかりと保っているならばです。そうでなければ、あなたがたが信じたことはむだになってしまいます。

ガラテヤ6:9 善を行うことに疲れてはいけません。時が来れば刈り取ることになるからです。……あきらめなければ。
す。……

コロサイ1:21-23 あなたがたを……今は、神が御子の肉のからだにおいて、その死によってご自分と和解させていただきました。あなたに土台を据え、堅く立ち続けたがたを聖なる者、傷のない者、責められるところのない者として御前に立たせるためです。……
……ただし、あなたがたが仰に土台を据え、堅く立ち続け、福音の望みから外れることがなければです。

テモテ第二2:5 また、競技をする人も、……
……規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。

テモテ第二2:12-13 耐え忍んでいるなら、……

……キリストとともに王となる。
キリストを否むなら、……キリストもまた、私たちが否まれる。
私たちが真実でなくても、——キリストは常に真実である。ご自分を
否むことができないからである。

ヘブル3:6 ……しかしキリスト

は、御子として神の家を治めら ……もし確信と、望みにある誇りとを、終
れます。私たちがその家でわりまで堅く保ち続けるならばです。

す 。 ……

ペテロ第二1:10 ですから、兄弟

たち、ますます励んで、自分た ……これらのことを行っていれば、決して
ちの召しと選びを確かなものにつまづくことはありません。

しなさい 。 ……

黙示録 2:7 勝利を得る者に ……わたしはいのちの木から食べることを
は 、 ……許す。それは神のパラダイスにある。

黙示録 2:11 勝利を得る者 ……決して第二の死によって害を受けるこ
は 、 ……と は な い 。

……このように白い衣を着せられる。また

黙示録 3:5 勝利を得る者
わたしは、その者の名をいのちの書から決
して消しはしない。わたしはその名を、わ
たしの父の御前と御使いたちの前で言い表
す 。

耐え忍ぶことと勝利を得ることという条件と結びついた警告と約束は、私たち
を不安と恐れに陥れるためのものではありません。むしろそれらは、救い
の直説法と救いの命令法と同じように、一枚の同じメダルの両面なのです。

これらの条件を骨抜きにはなりません。またそれによって、私たちが救
いを再び失うかもしれないと脅かされているのではありません。祝福と条件
は一つの緊張を生み出します。その緊張の中で、私たちはまさに力を失ったり
怠惰になったりするのではなく、目を覚まし、目標を見据えて、信仰にお
いて前進していくべきなのです。

8.2.2 御霊によってからだの行いを殺す

私たちは妥協することなく、肉が広がっていくあらゆる可能性を断たなければなりません。御霊にある生活、あるいは肉に対する勝利は、神が望まれた普通のキリスト者生活を形づくるものです。肉、すなわち罪深い本性は、信仰者のうちにまだ存在しており、絶えず影響力を得ようとしています。その影響の及ぶ領域と活動の場は、すべての感覚と機能と能力を備えた体です。もちろん、からだそのものが悪く、殺されなければならないというわけではありません。からだはむしろ肉の活動の場であり、肉の、すなわち罪の道具なのです。

この肉は、今も変わらず死に値するだけのものであり、すでにゴルゴタでさばれました(8:3)。ここでパウロが命じているのは、肉そのものを殺すことではなく、肉の行い(衝動、行為、生きているしるし)を殺すことです。私の肉のどんな衝動に対しても、私は態度を決めなければなりません。私は決断し、自分の立ち位置をはっきりさせなければならないのです。そのために、神がお認めになった「殺しのライセンス」があります。罪深い傾向が私の思いの中に忍び込み、広がろうとするとき、肉が私を罪深い感情や行いへと動かそうとするとき、私はしっかり目を覚まして反応し、その際いつも同じやり方をはっきり示さなければなりません。ここで求められているのは受け身の姿勢ではなく、注意深さ、あるいはただちに反応することです。

「殺す」とは、肉から出るものを何ひとつ容認しないということです。それはたとえば肉的な誘惑の前から、ただちに逃げることを意味する場合もあります。

しかし、この戦いは私自身の戦いではなく、強い助け主、すなわち御霊の力による戦いです。厳密に言えば、ここで問題になっているのは戦いではなく、「処刑」です。私たちが狙いを定めているのは、肉全体(罪深い本性、アダムの本質としての)ではなく、その行いです。それらは絶えず脅威とありますが、「殺さ」なければならないのは、それらが現れたときだけです。肉はいつも存在しますが、肉の行いはいつも存在するわけではありません。

「処刑」という言葉によって、この対決が子どもの遊びや、勝利が保証された華々しい自動的なものであるかのように、美化しようとしているではありません。私たちの日常は決して計画どおりには進まず、ほとんど予測できず、いつも新しい挑戦に直面しています。同じように、私たちの肉の悪だくみや策略は、いつも、肉が巧みに、また不意について攻撃してくることを物語っています。私たちの肉の友は、この世、悪い時代の流れです。この同盟は、私たちにとって事を簡単にはしてくれません。私たちのうちにある肉は、最初の一撃でおとなしくなって引き下がるようなことはありません。私たちが最も予期していないとき、最もそれを必要としていないときに、肉はまた現れるのです。

肉はしつこく、老いて弱ることも、疲れることもありません。肉の特性に関しては、私たちはどんな幻想も抱いてはならないのです。

ですから、それは私たちが絶えず肉をねじ伏せる戦いではありません。この戦いは、すでにゴルゴタで行われたのです。この勝利のうちに、そして御霊の力によって、私たちはからだの行いを殺すことができます。私たちは、（今述べたような徹底した態度を同じように貫くなら）やがて肉のこの誘惑と試みを、もはや絶え間ない葛藤としては経験しなくなる、と期待してよいのです。私たちのうちにおける神の働きによって、悪を避け、悪に場所を与えず、善、すなわち神のみこころを、自分自身のもののようにおのずと選ぶことが、一つの考え方となり、習慣となっていくでしょう。

8.2.3 「死んだものと見なす」のか、「殺す」のか？

ローマ人への手紙6章11節で、パウロはすでに、私たちは罪に対しては死んだ者、しかしキリスト・イエスにあって神に対しては生きている者と見なすべきだ、と言っていました。ところが8章13節では、彼は殺すことについて語っています。一見すると、二つの命令は互いに矛盾しているように見えます。最初の命令はより受け身の性質のもので、二番目の命令はより能動的な性質のものです。

ローマ人への手紙6章11節によって、私たちの生活における罪に対する勝利について、すべてが言い尽くされたわけではありません。罪と肉との対決は、自分を罪に対して死んだ者と見なすことだけで勝てるものではありません。誘惑は死人を攻撃することはできないのだからと、「死んだふり」をして誘惑から逃れようとするなら、それは確かに広く行き渡った見方ですが、解決にはなりません。肉はまだ私のうちに生きています。私は肉を死んだと宣言することはできますが、それが死んでいないことに気づくでしょう。それは私を骨の折れる葛藤に陥らせます。その葛藤とは、絶えず自分を死んだ者と見なそうとすることによって、自分自身と罪への誘惑とに強く集中してしまう、ということです。それはローマ人への手紙が罪と肉の問題に与える答えでは**ありません**。罪に対して死んだ者と見なすとは、どういう意味でしょうか。それは、キリストの贖いのみわざを受け入れることです。そのみわざにおいて、私の古い生活、私の古い人は、キリストとともに十字架につけられ（殺され）たのです。自分を「罪に対して死んだ者」と見なすことは、罪による誘惑の中で私がどうふるまうべきかということと関連しているではありません。ローマ人への手紙6章で問題になっているのは、神が私のためにただ一度で永遠に成し遂げてくださったことを、信仰によって受け入れることなのです。それは2000年前、私の外側で起こりました。そこで神は古い生活を断罪し、キリストの死において終わらせられたのです。この救いのみわざを、私は信仰によって100パーセント自分のものとしします。今や私はキリストにあって新しいいのちを生きています。そのように私たちは自分を見なすべきであり、信仰者として今すぐからそれを前提とすべきなのです。後半の部分（「しかしキリスト・イエスにあって神に対しては生きている者」）は、キリスト者が行うことを表しています。キリスト者は、8章で描かれているように、御霊の力によって生きるのです。ここ8章に来て初めて、パウロは、罪深い肉、その行いと所業に対して私がまったく实际的に何をすべきかを説明します。そこで求められているのは受け身の姿勢（自分を何かと見なすこと）ではなく、徹底した行動です。それは考えうるかぎり最も徹底したこと、すなわち殺すことなのです。

8.2.4 殺す——どうやって？

「殺す」とは、どのようなことでしょうか。それは、肉が私たちの新しいいのちの中でもはや何の機会も得ないようにすることです。神はこの肉に宣戦布告されました。そして私たちはこの模範に従うべきです。しかも妥協することなくです。殺すとは、まず、ある行いを肉のわざとしてはっきり見分けなければならない、ということです。何が肉から出ているのかが、私にははっきりわかっていなければなりません。聖霊が私を助けてくださいます。聖霊が聖なる御霊と呼ばれているのは、理由のないことではないからです。私たちのすることはすべて——例外なく——御霊によって決定されているか、肉によって決定されているかのどちらかであることを、繰り返し心に留めましょう。特に危険なのは、主のための活動の中にある肉です。肉には宗教的な「素質」もあり、とても敬虔になることができます。肉はどんな偽装でも心得ています！ ですから、繰り返し自分に問いかけることが役に立ちます。私の行いはどこから出ているのか、と。

肉は支配しようとし、自分の行いが実行され、繰り返されるように押し通そうとします。それに対して私たちは今、まったくはっきりと「いいえ」と言います。私たちは肉を知っています。肉は神への敵意です。私たちは御霊の導きによって、妥協することなく「やめよ！」と言います。それ以外の選択肢はありません。肉が私たちの行動を決定するか、御霊が決定するかのどちらかです。私たちは、肉がその行いを続けることを許しません。ですから「殺す」とは、肉的な行いを断罪することです。実際の行為に至る前に、私はそれを実行しようとするあらゆる意図をはっきりと拒むのです。「殺す」には、さまざまな形があります。

- 解約する
- 背を向ける
- やめる
- 告白する
- 取り除く

- 決断する
- 逃げる
- 手を引く
- 黙る
- 断罪する
- 立ち去る
- 目をそらす
- 意志をもって望む
- 打ち壊す
- 証しする

——ほかにもたくさんあります——

旧約聖書は、敵に対してどれほど徹底して立ち向かわなければならないかを示す、ふさわしいひな型を提供しています。モアブ人の王エグロンは、太った、自己中心的な男でした——罪深い肉の典型です。イスラエルの救助者エフデは、大胆な、しかし神に守られた行動によって、この王を自分の剣で打ち倒します（士師記3:12-30）。⁴⁴

私たちがからだの行いを殺さなければ、それが私たちを支配するでしょう。

「蛇があなたを殺す前に、蛇を殺せ。」⁴⁵

肉から出るすべてのものに対する、徹底した、容赦のない戦略を、パウロはコロサイの人々に宛てても、同じようにはっきりと描いています。

「ですから、地上にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲（強欲）を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」

少し先で、彼はこの列挙を続けています。「……怒り、憤り、悪意、ののしり、恥ずべきことば……」（コロサイ3:5-11）。

44. J・T・モーソン（J. T. Mawson）、Überwinden … aber wie?、シュヴェルム（Schwelm）、1980年、28-44ページ。

45. ジャン・ギブソン（Jean Gibson）の言葉。

主イエスご自身も同じ戦略を勧めておられ、それをさらに強烈に言い表しておられます。「情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです」（マタイ5:28）。**「もし右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです」**（マタイ5:29、マルコ9:43-48参照）。

肉との葛藤において、私たちがからだの行いを殺し、根絶することができるのは、ただゴルゴタの光のもとで、そして聖霊の力によってだけだということを、はっきりわきまえておくべきです。それはひとりでの進むものではなく、そこでは私たちの日々の決断が求められています。肉に対する正しい姿勢を保ち続けることができるのは、私たちが繰り返し（毎週の記念の食事、すなわちパン裂きにおいて実際にしているように）十字架を思い起こすときだけなのです。

8.3 14節：御霊に導かれる神の子たち

神の御霊に導かれる人はみな、神の子たちです。

御霊の導きは、まず、たった今13節で描かれたような形で現れます。それは、一方では肉に対する勝利であり、他方では、パウロがガラテヤ人への手紙5章で描いているような「御霊の実」を結ぶという事実です。

神の御霊に導かれることこそ、神の子たちの**最大の**しるしです。子たちの特徴は、自分の父の意志と目標を理解し、それを行うことにあります。その点で、神のひとり子イエスは完全な模範でした。イエスは父のわざを行われました。その際、父のみこころはイエスにとって食物のようなものでした。そこには御霊が大きくかかわっておられました（イザヤ11:2、マタイ4:1、マルコ1:12、ルカ4:1、14、18、ヘブル9:14など）。信仰者のうちでも同じことが起こります。信仰者のうちには、御霊がただ住んでおられるだけでなく、導きも引き受けてくださるのです。

ここでパウロは、私たちが特別な課題をこなしたり、重大な決断を下したりしなければならないような、特別な生活状況を描いているのではありません。この手紙のこれらの章で何度も確認してきたように、彼が問題にしてい

るのは根本的なことです——原則、つまり互いにはっきりと異なる二つの路線です。

信仰を持たない人は肉に導かれ、信仰者は御霊に導かれます。しかし、これもまた、信仰者を苦もなく罪のない状態へと導くロボットの自動運転のようなものではありません。新たにされた心と思ひから、御霊によって導かれることこそ、キリスト者の普通の生き方なのです。けれどもキリスト者は、肉に従い、肉に導かれてしまう危険にいつもさらされています。ですから、これらの節は、この御霊の力によって能動的に、また意識的に生き、御霊の臨在と力と助けを意識しているようにという、明確な呼びかけなのです。それはイエスの御霊、子とする御霊です。言い換えれば、御霊に導かれる人々は、神の子たちが生きるべきように生きもするのです。

「神の御霊は私たちの生活のあらゆる面に近づくことができる。したがって、受け身の住人ではなく、神の聖徒たちを導くために、能動的な力を発揮されるのである。」⁴⁶ 神の御霊による導きと指導は、信仰者の人格を締め出すものではありません。信仰者が、まるで遠隔操作されているかのように、あるいは操られているかのようにふるまったり、そう感じたりするのではないのです。御霊は、神が望まれることを行う力を与えてくださいます。私は人格として、自分のすることに対していつも責任を負っており、ですからいつも決断を下すのは私自身です。キリスト者の意志が絶えず新たにされていくこと（ローマ12:2、コロサイ3:10）を、神に感謝します。それは、キリスト者が神のみこころを見分け、行うことができるためです。こうした考えと行動を、御霊が支えてくださいます。それはたいてい、本人が気づいたり意識したりすることなく起こります。さらに、私たちの生活における特別な課題のために、特別な御霊の働きがあることもあります——特別な状況を通して、御霊が私たちに語りかけることを通して、信仰の兄弟姉妹を通してです。それについては、新約聖書はむしろまれにしか語っていません。

御霊の導きは神秘主義（内なる声や印象に絶えず耳を傾けること）ではありませんし、私たちがどんな状況においても新しい啓示や指示に頼らなければ

46. フレッド・スタラン（Fred Stallan）、*Was die Bibel lehrt*, Römerbrief, 230ページ。

ならないような「状況倫理」を含むものでもありません。御霊の導きは、私たちの人格とその新たにされた思いを強め、神のみこころを見分け、正しいこと、またより良いことを行えるようにしてくれます。御霊による導きは、何よりも聖書の指示と戒めの枠内で働きます。ローマ人への手紙8章のこの文脈で問題になっているのは、肉と罪に対する勝利です。

それでもなお、御霊は力を与えてくださるだけでなく、栄光へ向かう道における私たちの「斥候」、私たちの道案内でもあります。私たちの問題は、御霊が目に見えないことです。ですから私たちは、御霊の臨在と働き（まさにその導き）に信頼すべきなのです。

8.4 15節：子とする御霊が、私たちのうちで「愛する父よ！」と叫ぶ

あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と呼びます。

新しい父と子の関係は、奴隷の関係ではありません。これは7章の経験を思い起こさせます。律法の下では、人は奴隷の状態にあります。主人に対する恐れも、失敗することへの恐れも、今や過去のものです。子とする御霊は、私たちが父との交わりの中で生きることを可能にしてください。その交わりは、祈りと礼拝によって特徴づけられています。ここにある叫び（「アバ、父」）は、おそらく考える最も短い形の祈り、あるいは礼拝を含んでいるからです。この「アバ」という言葉は、新約聖書に三回しか出てきません。ゲツセマネの園で（マルコ14:36）、神の御子イエスは、極度の苦しみの中で、このように御父に呼びかけておられます。それは父に対して用いられる親しい呼びかけで、「愛する父よ」、あるいは単に「パパ」にたとえられます。パウロはガラテヤ人への手紙（4:6）でも、同じような言い回しを用いています。全能の神をこのような愛称で呼ぶことは、もしかすると驚くべきことかもしれません。しかしそれは、この子としての関係、子どもとしての関係がどれほど心のこもったものであるかを、はっきり示しているのです。

神への奉仕は、今やもはや、恐れと強制、また命令と禁止を厳格に守ることが問題となる事柄ではありません。それはむしろ、不安や恐れによって決定されない関係の中で営まれ、その関係から湧き出るいのちを含んでいます。その関係は、神の愛と、御父によって完全に受け入れられていることと、御霊の臨在とに満たされています。御霊は実際に私たちのうちにおられます。黙って見ている傍観者としてではなく、働く助け手としてです。私たちは神の子たちであり、受け入れられており、御霊によって導かれ、指導されています。これは事実です！ 一つのつまずき、一つの罪が、この関係を壊すことはありません。私たちは子たちであり、子どもであり続けるのです。「日常生活で信仰を生き抜くようにと力強く呼びかけた後、パウロは今、私たちの心を安らがせようとしている。あなたがたがどうかは知らないが、私にはこの励ましが必要だ。なぜなら、宇宙の超越的な神こそが、夜の静けさの中で、あるいは私が泥の中に倒れてしまったとき、私の手を取り、ご自分を『パパ』と呼ぶよう招いてくださるお方だからである。」⁴⁷

8.5 16節：私たちは神の子どもです！

御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証しして下さいます。

神の御霊は、私たちが実際に神との子どもとしての関係に入れられたことを、私たちの霊とともに証しして下さいます。ここで言われているのは、私たちの霊に何かを呼びかける声のことではありません。むしろ問題になっているのは、私たちがすでに神のことばによって得ている確信、すなわち救いの確かさを強め、堅くするもののことです。

父との確かな関係が毎日私たちの思いの中にあることは、神のみこころです。私が愛に満ちた父によって、キリストにあって無条件に受け入れられていると知っていることは、私の生活のあらゆる領域にとって決定的に重要です。父は私を愛しておられます。そして私は父にとってとても価値ある者なので、父はご自分の御子を私のためのいけにえとしてお与えになったので

47. フランシス・シェーファー（Francis Schaeffer）、*Allein durch Christus*、216ページ。

す。もちろん父は私を訓練もなさいます。それは父の愛の証拠です（ヘブル12:5）。子どもとなる権利（ヨハネ1:12）には、もちろん義務も伴います。私たちが今何者であるかを、決して忘れないようにしましょう！ そのために、聖霊が毎日私たちを助けてくださいます。

8.6 17節：私たちはキリストの栄光を受け継ぐ相続人です

子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと苦難をもにしているのですから、キリストとともに栄光をも受けるために、**神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。**

私たちが感じ、経験することを許されているのは、神との関係の喜びだけではありません。私たちは「法的な意味で」も子どもです。つまり、私たちは同時に相続人でもあるのです。神は、私たちが子どもであることと、ご自身が父であることを、完全に真剣に受け止めておられます。神のものであり、神がご自分の御子にお与えになるものは、私たちの受け継ぐ分でもあるのです。

苦難は、栄光の日に相続財産を受け取るための条件ではありません。キリストのための苦難は、たいていのキリスト者にとって、いつもついて回る同伴者です。それは私たちにとって、何か見知らぬものであってはなりません。イエスは、義のために負われた苦難のこの道を、私たちに先立って歩まれたからです。ドイツとすべての西側諸国では、これまでのところ、私たちはこうした苦難を免れてきました。ほかの国々にいる信仰の兄弟姉妹たちとはまったく対照的です。もし私たちにもまだ苦難の時が訪れるなら、次のことが当てはまります。すべての点で、その死においてさえキリストと同じようになりたいと願った人が書いたこのことばを、思い起こしましょう。苦難を通して栄光へ——これが教会の歴史において、忠実な信仰者たちがたいてい歩んできた道でした。

私たちは「すでに今」神の子どもであり、ですから相続人です。私たちは相続財産を「まだ」受け継いではいません。救いの直説法は、私たちが子どもであることを表しています。救いの命令法には苦難が属しています。苦難は

相続財産を受け取るための前提ではありませんが、多くの場合、イエスに従う歩みの避けられない一部なのです。これもまた、最終的な失敗を指し示す警告ではありません。むしろ私たちは、イエスに忠実に立ち続ける告白者となるよう促されているのです。

9. ローマ人への手紙12章：思いが新たにされる！

ローマ人への手紙は、福音と神の義の壮大な大聖堂と呼ぶことができるでしょう。福音は神の救いをもたらします。無罪判決、義認、解放、キリストと一つにされること、そして、あらゆる困難と苦難と敵意を通り抜けて終わりまで守られることです！

神に仕えるためには、人間は罪の負い目と力から解放されなければなりませんでした。しかしまた、新しいいのちのための力も受けなければなりませんでした。パウロはこのことを、8章で印象深く描きました。私たちの周りの世界も、私たちの体も、まだ変わっていません。しかし、それはもう時間の問題にすぎません。私たちのからだを変えろという神の約束は、すでに決まっていることであり、神はそれを、ご自分だけがご存じの時に果たされるのです。その時まで、神は私たちの味方です。神が私たちの味方であるなら、だれがあえて私たちに敵対できるでしょうか。

それからパウロは、9章から11章で、同じく神の義にかかわるほかの問いを取り上げます。12章で、彼は、私たちがそのために解放された神への奉仕に戻ってきます。そこで問題になるのは、再び私たちの個人的な生活です。私たちが新しさのうちに、そして御霊によって送ることのできる生活です。今や、救いにおいて啓示された神の義が、日常生活の中でも目に見えるものとならなければなりません。パウロは5章から8章では、比較的抽象的に、また原則的に語ってきました。彼は土台を据え、教えを説明しました。今や彼は、その新しさが生活の細部においてどのようなものになるかを示します。彼はそれを、勧め、命令、呼びかけ——新約聖書の戒め——によって行います。これらはモーセの律法に取って代わったものではありません。これらのことばはまず、そもそも新しいいのちがどのようなものかを私たちに示すために役立ちます。それらは神の愛の道しるべです。私たちがこれらの戒めに従って生きるのは、義人になるためではなく、義人だからです！ これらの戒めは、神がどのようなお方であり、イエス・キリストがどのようなお方で

あるかを表すものです。新約聖書の千を超える戒めは、結局のところ、イエスにある真理を描いているのです。私たちのうちにあるイエスのいのちは、新約聖書の戒めに描かれているまさにその特徴を備えています。今や、私たちがそのように生きることができるよう、キリストが私たちのうちにおられ、御霊が私たちのうちにおられます。私たちは、キリストが歩まれたように歩む義務があるのです（ヨハネ第一2:6、8）。

9.1 私たちに対する神の目的

私たち一人ひとりに対する神の目的は、私たちをご自分の御子と同じ姿にすることです。ほかのすべての目的は、この目的の下に置かれています。いつの日か、それは完全に実現します。私たちが目標に到達したとき、私たちはこのかたち、キリストと同じ姿の中で凝り固まってしまうではありません。記念碑になってしまうのではないのです。いいえ、私たちは活動する人間となります——永遠にです。私たちは神の御子のように考え、行動し、話し、愛するようになります。その際、私たちはいつまでも、すでに今、生まれたときから神によって造られた人格としてそうであった、その同じ者であり続けます。けれどもその時には、私たちは自分の使命に到達しており、永遠にその中に生きるのです。私たちは、ずっとそうあるべきであった者となります。それが私たちの最大の幸福です。神の喜びは、それを私たちに贈ることにあります。それによって御子があがめられるのです。今すでに、私たちは、ずっとそうありたいと願っていた者であることができます。キリストが私たちのうちにおられるなら、自己決定とは、キリストが私たちを通して生きておられるという事実を含むものなのです！

イエスのかたちへと造り変えられること、あるいはそれに見合う形でイエスに似た者とされることは、新しく生まれた者としてのいのちの第零日に始まりました。それはキリスト者の人生のプログラムです。それは永遠への備えなのです。ですから、この人生と、私たちがそれを何にするか——あるいはむしろ、キリストがそれを何にすることがおできになるか——ということは、とても大切なのです。

9.2 ローマ人への手紙12章1～2節：礼拝——理にかなったこと！

ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる、生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい、理にかなった奉仕（礼拝）です。

この世（この時代の流れ）と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、何が神のみこころか、すなわち何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。

これは6章に直接立ち返るものです。私たちは自分のからだを義の道具として献げる（神が用いることのできるようにする）べきです。今やパウロはさらに一歩進んで、ローマの人々に（いや、すべてのキリスト者に）、自分のからだをいけにえのように、完全に神への奉仕に差し出すよう促しています。このささげ物は、旧約聖書の動物のいけにえとは対照的に、生きています。ですから、それは一度だけではなく絶えず献げられるのです。私たちは永遠のいのちの新しさのうちに歩むからです。私たちのささげ物は聖なるものです。私たちはすでに神によって聖とされた者だからです。ですから、それは神に喜ばれるささげ物なのです。全身全霊を献げるという生き方は、受けた救いから出てくる論理的な帰結です。ですからパウロも、神のあわれみによってこの献身へと呼びかけているのです。私たちは、律法によってではなく、神のあわれみによって、自分の存在を神に差し出すよう促されています。そのあわれみは、具体的には次のことに表れました。私たちが負い目として抱えていたすべてのもの、そして私たちが何者であるかのすべて（すなわち、罪の下に売られた者であること）を、神はキリストの上に置かれたのです。神はご自分の御子を惜しまれませんでした！ 神のあわれみは私たちの救いを生み出しただけでなく、いつも変わらず臨んでいます。神は私たちの父であり、私たちは神の子どもだからです。

パウロがここで、兄弟としての、愛に満ちた**勧め**を語っていることを見落としてはなりません。どのキリスト者にとっても（信仰の道を歩み始めたばかりであれ、すでに長く歩んでいるのであれ）、全身全霊を献げるといふこの求めは、繰り返し挑戦的で、いつも今の問題です。私たちは繰り返しそれに「はい」と言うべきなのです。正直なキリスト者ならだれでも、自分の人生の献身が残念ながら揺れ動くものだと気づくでしょう。献身は、私たちの考えにかかわる一つのプロセスです。そこで、私たちが献身する用意があるかどうか、そしてそれをどこまで推し進めるかが決まるのです。毎日それを思い起こすことは、助けになることです。

9.2.1 あなたがたのからだを！

からだを生きたささげ物として献げる人は、異教徒たちが異教の神々に対して期待されていたような「極端な英雄的行為」⁴⁸によって際立つのではなく、普通の、目立たない、絶えず神に向けられた生活を送ることによって際立つのです。神とともに歩むそのような生活に、高みと深み、勝利と敗北、つまずきと立ち上がりがあることは、言うまでもありません。けれども、そこにはすばらしく励ましに満ちた経験と実りがあります。私たちが自分の人生を神にゆだね、こうして永遠の、しかし目に見えない神の手に引かれて歩むなら、私たちの人生はわくわくするものとなるでしょう。

しかし、なぜパウロは献げられるべき「からだ」について語っているのでしょうか。私たちの考え（2節にあるように）も、それに含まれるのではないのでしょうか。もちろん、問題は私たちの存在全体、私たちの生活全体を献げることです。けれども、それはまさに私たちの体を通して表現されるのです。体は、私たちが生きている世界との接点です。そしてこの体は、私たちが救われる前には「罪のからだ」（ローマ6:6）でした。それは、罪が手と足を得るための道具だったのです。体は罪深い習慣を身につけ、罪深い勝手な生活を送り、服従を要求してきました。私たちの生活のどれほど多くの領域が、どれほどしばしば、私たちの体によって決定され、影響されているか

48. フレッド・スタラン（Fred Stallan）、*Was die Bibel lehrt, Römerbrief*、ディレンブルク（Dillenburg）、2001年、358ページ。

を、一度点検してみましょう。いくつかの例を挙げるだけで、私たちが献身において体の役割を軽く見てしまいやすいことがわかるでしょう。それは習慣の問題であり、また、どのように、どれだけ、いつ、何を食べ、飲むかという問題であり、睡眠の習慣、そしてテレビやインターネットとの付き合い方の問題です。これらの側面はすべて私たちの体に影響を与え、身にしみついた行動様式として固まっています。問題は「罪の一覧表」ではなく、私たちのからだの役割と、しばしば過小評価されているその影響を、正しい光のもとで見ることです。ここでからだが献げられるとは、からだの要求が手放され、その代わりにからだを神に差し出すことができるようになる、ということです。

まず私たちは「からだの行いを殺す」（ローマ8:13）べきです。このことばもからだの役割を強調していますが、それは実際「敵対的な」役割です。からだは、私たちが殺すべきことを行おうとするからです。それらは、パウロの別のことばを使えば、肉のわざ（ガラテヤ5:19）、あるいは地上にあるからだの部分（コロサイ3:5）です。罪深い習慣が聖霊の力によって制御されるようになると、このからだをますます神に差し出す道が開かれます。「罪のからだ」は十字架につけられたものではありません。もしそうなら、私たちは死んでいることになるからです。むしろ、それはゴルゴタで無力にされたのです。かつて罪のからだであったものは、今や「義のからだ」なのです！パウロは自分のからだを打ちたたいて服従させています（コリント第一9:27）。彼は形勢を逆転させ、今やからだのほうが彼に従わなければならないのです。からだが自分の罪深い欲望や、度を越した安楽を押し通すことがあってはなりません。からだは神のものとなり、義の道具とならなければならないのです。

9.2.2 世：友か敵か？

私たちは、自分のからだをもってこの世の中に生きています。社会（それこそパウロが**世**という言葉で意味しているものです）は、からだをおおむね最も大切なものと宣言してきました。いくつかの産業部門が、からだが必要とするもの、あるいは必要とするはずのものすべてを提供しています。ウェル

ネス、フィットネス、スポーツ、健康、美容、長寿、おいしい食べ物と飲み物、医療、美容整形。こうしたものは、神の支配の下に置かれているかぎり、原則として何も反対すべきものではありません。問題は、私たちがからだにどのような役割を与えるかです。からだはしもべなのでしょうか、それとも主人なのでしょうか。

私たちが全身全霊を献げるのを妨げかねない具体的な危険が、私たちの生きている世の中に潜んでいます。それは、私たちを取り巻き、私たちがその中で動いている人間の世界です（もっとも、イエスが言われるように、私たちはイエスご自身と同じく、この世のものではありませんが）。人々は神なしに自分たちの生活を築いてきました。社会、経済と商業、産業、文化、宗教、音楽、哲学、余暇、娯楽、食生活、教育、家庭生活、倫理——生活を形づくるすべてのものが、神を忘れることに感染し、それによって刻印されています。人間は神を同じ舟に乗せたくないのです（ローマ1:28）。

私たちの肉にとって、世は魅力的で心を引くものです。私たちはもともと世から来たのであり、私たちの肉はそこをわが家としていたのですから。今や私たちは、世のように（つまり世の人々のように）生きないよう気をつけなければなりません。世の生き方は、生きたいけにえとして全身全霊を献げることとは、はっきりと対立しています！ 世の人々は自分のために生き、自分の人生に対する神のみこころを尋ねようとはしないのです！

世（ギリシア語 *aion*）は「時代の流れ」とも訳されます。世の時は過ぎ去っていきます。この世の時代は、今まさに終わりを迎えようとしています。私たちは「終わりの日々」に生きているのです。さらに、世は間違った方向へと進んでいます——しかも、ますます速度を上げながら。それは神から遠く離れる方向、神から離れる方向へと向かっているのであって、神へと向かっているではありません。全体として見れば、時代の流れは、滅びへと下っていく「広い道」（マタイ7:13-14）のようなものです。時代の流れは川に似ています。その中では死んだ魚が流れに乗って漂っています。生きた魚は反

対の方向に泳ぎます。そしてそれこそ、世のかたち（型⁴⁹）を身に着けないということなのです。世は「時代精神」とも訳されます。人間の精神の方向、あるいは精神の姿勢こそが、世を世たらしめているものです。さらに聖書は、サタン自身がこの世の神であり、この時代の流れの君であることを、繰り返しはっきりと語っています。

世とその（時代）精神は悪いものです。神のことばは、そのことに何の疑いも残していません（ガラテヤ1:4）。そして、（順応した生活のほうが楽だからといって）「世の友」になろうとする者は、自分を神の敵としているのです（ヤコブ4:4）。確かに、世俗性がどこまで及びうるかには段階があります。それが生活全体をとらえている必要はありません。もしかすると、世俗的に形づくられているのは、生活のあれこれの領域、大きな領域、あるいはほんの小さな領域だけかもしれません。ですから、どこに世の考え方や生き方が忍び込んでいるかを、自分で吟味すべきです。私のお金はどうでしょうか。私の財産、職業上の目標、結婚生活での態度、お気に入りの習慣、交友関係はどうでしょうか。

世と同じかたちにならないこと、世に順応しないことは、外面的なことから始まるのではなく、まず考えから始まります。行いの前には考えがあります。ちょうど、世への順応に考えが先立つのと同じです。

9.2.3 新しい考え方による変化

神は私たちを変えようとしておられます。神は、私たちがすでにそうである者になることを望んでおられるのです！ キリストが、ますます私たちのうちに形づくられていかなければなりません。キリストは盛んになり、私たち自身は衰えなければなりません。世のように生きること（その考え方においても、その外見においても）は、神が成し遂げようとしておられることのまさに正反対です。どのようにしてそれは起こるのでしょうか。すでに5章から8章で説明されたことに基づいて、今、段階的な変化、すなわち霊的な成

49. ギリシア語 *schematizein*。すなわち、ある型に従って自分を形づくること、あるいは、あらかじめ与えられた形に従って形づくられるままになること。

長と聖化のプロセスが起こるのです。信仰に入っただけの人は、まだ古くて慣れ親しんだ考え方の型を持っています。それはキーを一つ押せば消えてしまうようなものではありません。それは、新たにされるプロセスを通して、神によって形づくられた考え方と取り替えられていくのです。

パウロは何度も、絶え間なく新たにされるプロセスについて語っています。そこで言われているのは、単なる思考の働き以上のものです。

- コリント第二4:16：苦難と栄光の緊張の中で、内なる人が日々新たにされること
- エペソ4:23：あなたがたの考えにおいて、絶えず新たにされなさい。
- コロサイ3:10：新しい人は絶えず新たにされていく。

変貌は、私たちの考えから始まります。思い（ギリシア語 **nous**）には、思いの世界、理性、思考、理解、思考の中枢が含まれます。「思い」という言葉の背後には、単なる思考、理屈以上のものがあります。聖書においては同じように思考と意志（ときには感情）を表す心は、思いという言葉から切り離すことができません。思いは、考えること、意志すること、行動することの司令塔です。この司令塔の中で、分類し、評価し、発見する思考と、決断のプロセスが進行します。行動は、思考と決断の結果です。「思いとは……認識のプロセスが起こり、そこから考えが生まれてくる場所である。それは文字どおりの意味で、私たちの行動にとって、したがって実践的な倫理全体にとって『決定的な』場所なのである。」⁵⁰

9.2.4 メタモルフォーゼ（変貌）

これが、ギリシア語本文で「変えられる」ことを表している言葉です。思いが新たにされることが、変貌をもたらします。メタモルフォーゼという概念は、私たちのテーマの枠の中で役に立ちます。私たちはこの言葉を動物の世界から知っています。チョウが最も驚くべき変態のプロセスの一つを通過することを、私たちは知っています。はい回る幼虫（いつも見た目が美しいと

50. ユルク・ブーフエッガー（Jürg Buchegger）、*Ein Mensch, was ist das?*、ヴッパータール（Wuppertal）、2004年、211ページ。

はかぎりません）から、さなぎの段階を経て、空を飛ぶチョウが生まれます。これは時間のかかる、しかし止めることのできない、プログラムされたプロセスです。私たちもこのような根本的な変貌を通過すべきであり、また通過することができるというのは、驚くべきことです。それは、神が望まれるような変化はいつでも可能だ、ということを示しています。そこから除外されるものは何もありません。醜い幼虫がすばらしく美しいチョウになりうることを考えれば、「あれやこれやは今こうなのだし、これからこのままだ」という言い訳は通用しません。昆虫は昆虫のままであり、同じ生き物のままです。けれども、それはすっかり変えられるのです。これは、人間を本当に、また根底から（心において、また考えにおいて）変えることのできる福音の力に似ていないでしょうか。

同じ「メタモルフォーゼ」という言葉は、イエスが変貌の山で弟子たちの前で姿が変わり、神の栄光の輝きを帯びられたときにも用いられています。別の文脈では、同じ言葉が私たちについて用いられています。「私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」（コリント第二3:18）。私たちの「メタモルフォーゼ」は、キリストという模範を目標としています。神のこの目的は、いくら強調しても、いくら繰り返しても足りません。それは夢物語でも、到達できない目標でもなく、神が私たちを失望させようとして用いる新たな幻想でもありません。それは神のご計画であり、みこころであって、神はそれを大いに喜んでおられ、その喜びを私たちに伝えようとしておられます。ですから、それは必ず成功するのです。私たちが望み、イエス・キリストを仰ぎ見る（この方と、この方のことばと、この方の御国に心を向ける）なら、この方を目標とするなら、この方が本当に私たちの人生を満たしておられるなら、造り変えのプロセスは正しくプログラムされているのです。

9.2.5 なぜ新たにされる必要があるのか？

生まれたときから、生まれつき、私たちは、神ではなく自分自身を中心とする考えと思いを抱えています。人が悔い改めに至ると、神はその人のうちに

新しいものを造り出し、みことばの種がその人の心の中で芽を出します。今やキリストがその人のいのちです。このいのちは、赤ちゃんの場合と同じように、成長していかなければなりません。この成長は内なる人にかかわるものであり、そこには思いも含まれています。新たにされるこのプロセスは、生涯にわたって続きます。成長は、キリストにある新しい存在という土台の上で起こります。キリストにあって、私たちは一瞬のうちに神の前に義とされ、聖とされています。それが私たちの立場の表現にとどまるのではなく、私たちの日々の生活に浸透していかなければなりません。そのためには、絶えず新たにされることが必要です。それは神ご自身によって起こり、私たちが置かれている状況、私たちが生活している環境、そして私たち自身の性質（性格、気質、賜物、弱さ、生活状況など）を完全に考慮し、これらの条件に合わせられたものなのです。

9.2.6 どのようにして新たにされるのか？

それは神ご自身によって起こります。変えられることは、私たちが自分の身に起こるのを受け入れるべき命令です。新たにすることは神のみわざです。私たちはそれを引き起こすことはできません。私たちの務めは、自分の存在全体を神にゆだね、世と同じかたちにならないことです。それが、この新たにされるプロセスに対する私たちの貢献です。私たちが世にあまりにも心を奪われ、世的な考え方を、考え、意志し、行動する私たちの司令塔の中に入り込ませ、順応してしまうなら、私たちもまた変えられ、（ゆっくりと、しかし確実に）世と同じかたちを示すようになります。それはまず内側で起こり、それから避けられない結果として、外側でも起こります。このプロセスは、しばしば忍び寄るように、ほとんど気づかれずに進んでいきます。世の毒は霊的ないのちをゆっくりと殺していくので、そのプロセスにほとんど気づかないのです。

それに対して、「神の世界」の中で、神の御国の中で、神との交わりの中で生きる生活があります。そこで私は、自分の考えを神ご自身によって満たし、整え、方向づけていただくのです。この場合も、私自身は、新たにされるプロセスに必ずしも気づくわけではありません。

何によって新たにされるのでしょうか。それについては、ここでは語られていません。それは神の主権的な働きです。神は、直接読まれるか、説教の中で聞かれる、神のこばを用いられます。神は、静まること、祈りと礼拝、新たにされることと正されることを意識的に受け入れることを用いられます。神は、信仰者の交わりを用いられます。神は、人生のあらゆる状況、あらゆる経験を用いられます。すべてが父による訓練、教育、指導なのです。ですから私は、この新しくされることを推し進め、支えることもできますが、同じように妨げることもできます。私は、イエスにより似た者になることができるのと同じように、世より同じかたちになることを選ぶこともできるのです。私たちがこの決断の前に立つのは一度だけではなく、結局のところ毎日なのです。

9.2.7 戦場は思いの世界

「我思う、ゆえに我あり！」私たちの考えは、私たちの人生の暗号、あるいはコードです。それに影響を与えること、さらにはそれを操ることは、神の敵の最大の目標です。司令センターを支配する者は、すべてを手中に収めるのです。これもまた、必ずしも生活のすべての領域にかかわるわけではありませんが、私たちのふるまいに広範な影響を与えうるのです。悪魔は、大きな一歩によって、あるいは長い期間をかけて多くの小さな歩みによって、私たちの思いの世界に要塞を築くところまで持っていくことができます（コリント第二10:3-5）。

「私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞（とりで）をも打ち倒す力があるものです。私たちは様々な理屈と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち倒し、また、すべてのはかりごとを取り押さえて、キリストに服従させます。」

「破壊されなければならない最初の攻撃目標は、私たちの頭の中にある『要塞』である。ここで用いられているギリシア語の本来の意味は『とりで』である。とりでとは、絶え間ない繰り返しによって、あるいは心に傷を残すよ

うな出来事によって、私たちの脳に焼きつけられた否定的な思考パターンのことである。」⁵¹

思考パターンや習慣的な行動様式、反応は、とりわけ外からの影響によって生じます。「こうした環境からの影響は、それぞれ短いものではあったが、長く尾を引くものであった。たとえば、特定の出来事、場所、出会い、そして個人的な体験がそれに含まれる。さらに私たちは、読んだ本、見た映画、好んで聴く音楽によっても形づくられてきた……。私たちは、これらのものをどう処理し、それらが引き起こした葛藤をどう解決するかについて、一つの方法を身につけてきた。それは神のみこころにかなっているかもしれないし、かなっていないかもしれない。あなたの人生における長く尾を引く影響は、あなたの周囲との長期的な関係から来る。たとえば、家族、友人や知人、隣人、教師、職場の同僚の影響などである。

霊的に新しく生まれたとき、確かにあなたのもろもろの罪はすべて洗い流された。しかし、周囲への順応から生じた、これまでのあなたの思考パターンや行動パターンは、あなたの肉に根を下ろしたまま残ったのである。人は実際に新しく生まれていながら、それでもなお、これまでの『無神論的な』生活スタイルを保ち続けることができる（同じことは、キリスト教的な環境の中で育った人々にも当てはまる。著者注）。だからパウロは、心を新たにすることによって自分を変えるようにと、私たちに切に勧めているのである（ローマ12:2）。」⁵²

身についたもの、学んだものは**すべて**、私たちが許すなら、神ご自身が私たちの考えと生活の中で行おうとしておられる、新たにするみわざによって変えられることができます。私たちの考えの（部分的に）肉的なプログラムを変えるのを助けてくれる、神からの武器があるのです。

51. ニール・T・アンダーソン (Neil T. Anderson) 、*Neues Leben – neue Identität*、1994年、ラーゲ (Lage) 、153ページ。

52. ニール・T・アンダーソン (Neil T. Anderson) 、前掲書、155ページ。

9.2.8 どうすればこの戦いに勝てるのか？

まず私たちに必要なのは、先に述べた基本的な姿勢、すなわち神に対しては献身し、世に対しては拒むという姿勢です。聖書はさらに、次のような手がかかりを与えています。

- （定期的な）聖書通読によって、神のことばで満たしていただく
- キリストの平和に支配していただく（コロサイ3:15）
- キリストのことばを私たちのうちに豊かに住まわせる（コロサイ3:16）。

とりでや理屈は、たいていサタンの偽りです。偽りの正体を暴くために、私たちは光と義の武器を用います。ある考えや思考パターンが浮かび上がり、とりでがその出撃門を開くとき、切実な呼びかけが目指しているのは、その考えをただちにキリストへの服従のもとに捕らえることです。キリストはより強いお方です。キリストは勝利者なのです。

偽りのとりでの例：

- 不安と妄想
- 将来への不安と失敗への恐れ
- 劣等感と自己評価の問題
- 平安のなさといらだち
- 思いの中の誘惑
- 強迫観念
- 人間、物、事物、財産、所有物、人間的な安心材料、そして快樂への依存。

これらの偽りをすべて、私たちは暴き、キリストの権威のもとに捕らえなければなりません。多くの場合、その答えは、私たちがキリストのうちに守られており、永遠に神の愛する子どもであり、神の配慮を知っている、ということにあります。罪には、もはや私たちを抑えつけ、苦しめる権利はありません。キリストが私たちを自由にしてくださったのです。

9.2.9 白昼夢と願望

人間の思考能力は見事なものです。思いの中では、一セントも払わずに旅に出ることができます。現実の生活ではかなわなかった願いをかなえる、もう一つの世界を築き上げることもできます。スターになることも、宝くじに当たることも、完璧な家庭を持つことも、別の妻や別の夫を持つこともできます。これらすべて、そしてもっと多くのことが、思いの中では実現可能です。しかし気をつけましょう！ こうした考えは時間を奪うだけでなく、存在しない世界を私たちに見せかけます。これらの夢や願いは、習慣として固まってしまうと、私たちの考えと決断に影響を与えるようになります。こうした夢の中心にいるのは私たち自身なのです！ 夢の世界の中でしか起こらない行動を思い描くのは危険です。現実とのつながりを失ってしまうからです。

「人間の心はさまよう心であり、さまよう心は不幸な心である。」⁵³ アメリカの研究者たちが、ある研究で驚くべき結果に行き着きました。それによれば、人は時間の半分は心ここにあらずの状態にあるということです。思いにふけり、あれこれと思い悩み、あるいは単に夢を見ているのです。問題は、思いがあちこちにさまようことが、どうやら人を不幸にするらしい、ということです。この確認がいつも当てはまるわけではないとしても、私たちのたましいの敵がこのような方法で害を及ぼしようということについて、考えさせられます。

それに対して私たちは何ををするのでしょうか。私たちの思いの世界の重力と、それ自体の勢いに立ち向かうのに役立つ、いくつかのヒントを挙げます。

- まったく一般的に、いつでも当てはまること。今していること、つまりこの瞬間に集中しましょう。自分の課題と務めをきちんと果たすためです！

自分のしたいことをする自由があるときには――

53. 作者不詳。

- 心に浮かぶすべてのことのために祈りましょう！　すべてを祈りにしましょう！
- 聖書や、霊的に価値のある本を読みましょう！
- 聖書のことばを暗記しましょう。手に聖書がなくても神のことばについて思い巡らすことができるようにです！　もしかすると、私たちはいつか聖書のない時代を経験するかもしれません！
- 今日、主イエスのためにどんな奉仕ができるかを考えましょう！
- 主イエスについて、また福音書の中で思い出すことのできる出来事について、思い巡らしましょう！
- 立ち上がって、何か能動的なことをしましょう！　体を動かし、何かに取りかかりましょう！
- 会話の機会を求めましょう！　だれかに電話をかけて、その人が元気かどうか尋ねましょう！

9.2.10 神のみこころ——吟味され、良いと認められた！

……そうすれば、何が神のみこころか、すなわち何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。

神のみこころは、世の時代の流れと対照をなしています。この時代の流れ（世の人々）にとっては、神が何を望んでおられるかは、ほとんどどうでもよいことです。しかしそれは、火遊びです——文字どおりの意味においてです。ヨハネはこう言っています（ヨハネ第一2:15-17）。

「世も、世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」

世には賞味期限が定められています。そして注意深く見る人には、その期限がほとんど切れていることがわかります。人間が自分のために築いた世界

は、滅びに定められています。その世界のどこにも、その世界の中のどこにも、期限の延長を正当化するようなものは何もありません。死のにおいがその世界にまわりついています。そして、どうやら今日、その腐敗のにおいにもはや気づかないキリスト者たちがいるようです。

神ご自身だけが良く、完全なお方です。そのことは神のみこころにも当てはまり、そのみこころはさらに、神に喜ばれるものでもあります。これは、傷がなく、非の打ちどころのないものでなければならなかった旧約聖書のいけにえを思い起こさせます。そのようなものだけが献げられることを許されたのです。同じように、あらゆる生活の場面で神のみこころを見分けることによって、からだにある私たちの存在全体（そこには内なる人も含まれます）が、神に献げられなければなりません。私たちの思いが絶えず新たにされることによって、神のみこころを見分けることが可能になります。チェックリストや良い助言も役に立つかもしれませんが。けれども神は、私たちの考えの中に、神のみこころを見分けるための前提条件をも造り出したいと願っておられるのです。

9.3 ローマ人への手紙13章13～14節：キリストを着る——肉のために備えをしない

昼らしく、品位をもって歩もうではありませんか。遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみ（嫉妬）の生活ではなく、主イエス・キリストを着なさい。欲望を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。

ローマ人への手紙の学びを終える前に、この箇所をもう一度見ておきましょう。8章以降で「肉」に言及しているのは、この箇所だけだからです。

私たちに対する神の目的は、私たちの最後の日まで変わることがありません。神は私たちを、ご自分の御子のかたちへと変えようとしておられるのです。それはイエスの生涯を写し取るものではありません。私たちが大工になるべきだというのではないのです。むしろ問題は、私たちの生活の中で、それぞれの個性に応じて、イエスの本質をますます身に着けていくことです。そこには、イエスの愛、イエスの真理、イエスの義——つまりところ、イエ

スのうちに認めることのできる道徳的な本質の特徴のすべてが含まれます。イエスはすでに私たちに新しいいのちを与えてくださいました。今や私たちは、そのいのちに伸びていく余地を与え、私たちの生活の中で主を大きくし、自分自身は引き下がらなければならないのです。

このことばは、主イエス・キリストを衣服のように着よう、私たちに促しています。これは実に力強い隠喩であり、それ以上の言い換えはされていません。神を恐れない世の夜の中では、罪があらゆる形で行われ、人々は公の場でさえそれをはばかりません。それに対して立っているのが、すべてを決定する神のみこころです。私たちに見られるべきなのは、その欲望に負けることによって表れる肉ではなく、イエス・キリストなのです。

ここでも、欲望が実際に満たされ、誘惑に屈してしまうまでに、思いの中で多くのことが起こり、許されうるということが指摘されています。肉の世話をしたり、肉を手入れしたりしてはなりません。シュラッター訳〔ドイツ語聖書翻訳〕は、誤解の余地なくこう訳しています。「欲望をかき立てるほどに、肉の手入れをしてはならない」(Schl 2000)。私たちは肉の考えと行いを殺すべきなのです！ 必要なのは、パウロがローマ人への手紙8章でくわしく描いた、妥協のない姿勢です。「心地よい、葛藤のない生活を望む気持ちだが、私たちを誘って、自分の肉をいたわるために、大切な決断や帰結を避けさせることがある。しかし、それによって私たちは避けがたく肉の手入れをすることになり、肉は妨げられることなく実を結ぶことができるようになる。肉が大切に手入れされるなら、肉は私たちの生活の中にその独裁を打ち立てるだろう。一貫性のなさによって肉がいたわられ、その欲求が満たされるなら、肉はますます飢え、ますます激しくなるだろう。肉の手入れは、（今日しばしば主張されているように）自己受容や人格の成長に役立つのではなく、神の考えに反する欲望をかき立てるのである。」⁵⁴

54. ヴァルター・ニツェ (Walter Nitsche)、Versagen und innere Zerrissenheit、76ページ。

9.4 結論

からだといのちを神の祭壇に献げる者は、自分のいのち、自分の自我のいのちを失います。しかし、主イエスは趣旨としてどう言っておられるでしょうか。「自分の自我のいのちを失う者は、それを得るのです」（ルカ9:24、17:33参照）。ジム・エリ奥特（Jim Elliot）はこう書きました。「保つことのできないものを手放して、失うことのできないものを得る者は、愚か者ではない。」⁵⁵

私たちがその気になるなら、神は私たちの考えを造り変え続けてくださいます。そうすれば私たちは、**神のみ**ころを行う者として、まるで**自分の**意志を行っているかのように感じるころまで至るでしょう。それが自由の律法です（ヤコブ1:25、2:12）。神が望まれることを、自発的に、心から望むことです。これこそ、生きるに値する唯一の生き方です。しかし、神のみころを行う者は永遠に生き続けるのです！

55. 原文の文言は次のとおり。「He is no fool who gives what he cannot keep to gain what he cannot lose.」

10. 古いものと新しいもの——概観

古いもの

新しいもの

聖書箇所

古いものは過ぎ去った新しいものが生まれたコリント第二 5:17

アダムのうちにキリストのうちにローマ5:12～8:11など

罪 人義 人ローマ 5:19

ローマ6:6、エペソ

古い 人新しい 人4:20-24、コロサイ

3:9-11

罪のからだ 私たちのからだと手足をローマ6:6、12-23、
神に献げる8:13、12:1-2

肉のうちに御霊のうちにローマ 8:8-9

罪と死の律法いのちの御霊の律法ローマ 8:2

肉（私たちのうちにある） 聖霊（私たちのうちにおられる）やローマ8:1-11、ガラテ
5章

罪——それに支配され、罪に対して死んだ：いのちの新しさ、「死者の中
その下に売られている から生かされた者」ローマ6章（およびロ
ーマ 8章）

霊的な死 新しい霊的ないのち、生かされたコリント第一15:45、
ヨハネ第一3:14、エペ
ソ 2:5 など

肉（何の益ももたらさない。その人は神の律法を満新しく生まれる
たすことができない）ヨハネ 3章、6:63
ローマ 8:7

最後に：死 目標に至って：永遠のいのちローマ 6:21-23

死　　ぬ　　こ　　と　　新たにされる　ローマ6:21、エペ
こ　　と　　ソ　　4:22-24

地上のもの——地上にあるからだの部 天 上 の も の コロサイ3:1-11、
分：淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、——召し、目 コリント 第一
貪欲、怒り、憤り、悪意など標 15:48-49

自分自身で満ちている：キリストが私た 私たちのうち
 ちのうちにおられないかぎり、私たちの におられるキ
 うちには何の 良い もの も ない。リ ス ト
 コロサイ 3:11、ガ
 ラテヤ 2:19-20 な
 ど
 ローマ 7:18

11. 肉とは何か？

肉は、キリスト者のあいだでしばしば「古い本性」と呼ばれます。それは、私たちが新生において受けた「新しい本性」と対比されるものです。ほかの言い換えとしては、**アダムの本性**、**罪の本性**、**肉の本性**、**人間的な**あるいは**自分を主とする**、**罪深い**、**古い**、または**地上の本質**などがあります。これらの言葉は役に立ちますが、新約聖書はそれをいつも「肉」と呼んでいます。

「肉」とは、罪によって人間に刻み込まれた性質のことであり、それは人間の身体的、心理的な存在の中に根を下ろしています。⁵⁶

肉という言葉は、さまざまな意味で出てきます。たいていの場合、問題になっているのは人間です。言葉の意味は、それぞれの文脈の中で明らかにされなければなりません。その際、問題になりうるのは、人間の肉の道徳的な側面、あるいは被造物としての物質的な側面、あるいははかない（イザヤ40:6-8）、無力な（エレミヤ17:5、7）、または弱い側面であり、また夫婦の結びつき（創世記2:24、コリント第一6:16）、家族の血縁関係（ローマ1:3、9:3）、あるいは人類全体（ローマ3:20）です。パウロはこの言葉を全部で78回（そのうち63回はローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙で）、墮落した罪深い人間の本質を表すものとして用いています。

つまりパウロは、「肉」という言葉を道徳的な意味で用いているのです。この意味では、ペテロ（ペテロ第一2:11、ペテロ第二2:10、18）やヨハネ（ヨハネ第一2:16）もこの言葉を用いています。ヤコブは欲望について語ります（ヤコブ4:1-3）。

「御霊」と対比される「肉」という概念は、「陣営の転換」というテーマにとって中心的な意味を持っています。キリスト者の生活における葛藤が問題になるとき、その核心となる言明は、パウロの次の確認です。

56. ローランド・アントホルツァー（Roland Antholzer）、Gemeindeorientierte Initiative für biblische Beratung e.V.（GIBB）。

「肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。この二つは互いに対立しています」（ガラテヤ5:17）。

キリスト者の生活の中で対立しているのは、どの人のうちにも多かれ少なかれ存在するような二つの勢力ではありません。どの人のうちにも多かれ少なかれ起こっている、悪と善とのせめぎ合いが問題なのではないのです。ここで問題になっているのは、別の次元です。御霊とは聖霊、神ご自身であり、信仰に入った人の、肉に支配されていた生活の中に住まわれたお方です。肉とは、キリスト者のうちに、新生の後もおアダムにある古い生活から残っている、人間存在の構成要素なのです。

日常生活では、肉という言葉は、肉屋や食事のことが話題になるときに使われます。また解剖学でも、人間の組織が話題になるときに使われます。どちらも、聖書におけるこの言葉の用法に対応しています。しばしば、まったく単純に人間のからだの意味されています（たとえばローマ2:28）。しかし、この言葉の意味は単なる物質性を越えています。肉（地上の存在としての人間）は、ただ弱く、もろく、はかないというだけではありません。むしろ肉は、罪によって、神のご性質に対立する特徴を帯びてしまったのです。パウロがローマ人への手紙7章と8章、またほかの箇所でも用いている肉の意味は、人間の物質的な側面ではなく、その道徳的、倫理的な観点を表しています。ですから肉とは、人間存在のもろさと、人間の本性が墮落していることを意味するのです。「肉とは、罪によってそうってしまった人間の本性である。」⁵⁷

道徳的、倫理的な側面は、人間がどのような存在であるかを表します。その人の動機は何か、目標は何か、神に対してどうふるまうのか、隣人に対してどうふるまうのか。問題は、神のご本質とご性質に照らして測られた、道徳的な意味でのその人の本質、あり方、本性です。肉（つまり人間の本質と生き方の方向）は、宗教的でありうるとしても、まことの神に向いてはいません。主イエスはニコデモに、新しい誕生が必要であることをはっきり示され

57. ウィリアム・バークレー（William Barclay）、*Fleisch oder Geist*、アウクスブルク（Augsburg）、1968年、19ページ。

ました。肉から生まれた者は肉だからです（ヨハネ3:5-8）。肉は神との関係においては何の益にもならないので（ヨハネ6:63）、何か新しいものを造り出すためには、神から、御霊から生まれることが必要なのです。

11.1 罪と肉

罪とは、神に逆らい、神が唯一の権威であることを拒む原理です。この原理は、まだ造られた人間という意味での「肉」、肉と血から成る被造物がいなかったときから、すでに存在していました。おそらく最高の被造の霊的存在であった悪魔は、自分の自由を濫用することによって、この原理に従いました。最初の人間アダムは、一つの単純な戒めに違反することによって、罪に戸を開きました。それによって罪は人間の中に、しかもその最も深い本質と存在の中に（その心の中に）入り込んだのです。それ以来、罪はすべての人のうちに住んでいます（ローマ7:17）。人は罪人なのです。アダムは自分の本質を、そのすべての子孫に受け渡しました。こうして私たちは、生まれながらにして罪人となったのです。

肉とは人間のこと、すなわち、内に住む罪によって決定されているその本質、その個人的な人格のことです。パウロはこのことを、次のように言うて的確に言い表しています。「私は……肉的な者であり、売られて罪の支配下にある者です」（ローマ7:14）。ここでは罪が主人であり、奴隷監督であって、肉（つまり人間）がその奴隷です。罪と肉は互いに密接に織り合わされており、ほとんど互いに置き換えられるほどです。

肉は、（罪と同じように）神への反逆の原理であるだけでなく、キリストを持たないすべての人を、その個別性において指してもいます。肉とは、人格と性格の特性の組み合わせです。肉は道徳的な意味で罪の道具です。私の肉、つまり私の体は、罪に隷属させられています。もろもろの罪は、からだによって（つまり手と足と舌によって）犯されます。ですから、からだはただの中立的な道具ではなく、罪深い習慣と欲望と快楽によって刻印されているのです。

11.2 肉と、信仰を持たない人

「肉」には、どの箇所においても、何か肯定的なものを認めることはできません。神の目から見れば、肉は改善の余地のないものです。新約聖書で初めてくわしく展開される肉のこの意味を、最初に示唆しているのは、洪水の少し前に人間について語られた神の言葉です。「神が地をご覧になると、見よ、それは墮落していた。すべての肉なるものが、地上で自分の道を墮落させていたからである」（創世記6:12。3節も参照）。

信仰を持たない人は「肉に従う者」であり、「肉のうちにある」者です（ローマ8:5-8）。その人の存在全体は、神の聖さと義に照らせば、「肉」以外の何ものでもありません。つまり、自分自身の考えと欲望（不当な願い）と衝動によって決定されている、罪深い存在以外の何ものでもないのです。信仰を持たない人が「肉的」と呼ばれることはありません。この言葉は、内に住む御霊によって本来は靈的に生きるべきなのに、古い本質に従っているキリスト者についてだけ用いられているのです（コリント第一3:1）。

キリストから遠く離れた人は、目の前にあるもの（つまり目に見えるもの）を見ます。諸国の民（「生活の……思い煩い」⁵⁸に絡め取られている人々）は、地上のもの、あるいはこの世に関係するものを追い求め、そのためにすべてを費やします。しかも、神がすべてのものの与え主であることに気づかないのです（マタイ6:32）。この意味で、肉はこの世を志向し、目に見えるものに向けられています。肉は目に見えるもの——確かに見えるもの——にしがみつきます。これもまた、一見したところ、それとは気づかれない肉の特徴です。私たちはしばしば、自分の生活についての不安に満ちた思い煩いを、真剣に受け止めた責任感だと好意的に考えてしまうからです。

11.3 肉とキリスト者

キリスト者は、もはや「肉のうちに」はいません。キリスト者は「キリストのうちに」おり、「御霊のうちに」います。けれども肉は、まだ私たちのうちに存在しています。ただし、もはや私たちの考えと行いを決定してよい立

58. ルカ8:14参照。

場にはありません。肉は聖霊の、したがってキリスト者の、不倶戴天の敵であり続けます。それどころか、もし私たちが、神が私たちのためにしてくださったことを受け入れず、肉の行いに対する死刑判決を自分で適用しないなら（ローマ8:13）、肉は今なおキリスト者の生活を決定し、特徴づける可能性を持っているのです。神はイエスにおいて、罪と肉を断罪し、十字架につけられました。私たちはそれを信仰によって受け入れました。そして、そのようなものとして、私たちは自分のうちにある肉を見なしているのです。それにもかかわらず、肉はまだ私たちのうちにあり、その性質において変わってはいません。肉の欲に対して徹底した態度で臨むようにという（すなわち、肉に何の場所も与えないようにという）数多くの強い指摘は、この肉がまだ私たちのうちにあることを前提としているのです。

イエスはニコデモに、肉が役に立たず、無能であることをはっきりと告げられました。「イエスは再び問題の核心に触れ、肉を霊的なものにすることがまったく不可能であることを示される。肉から生まれた者は肉であり、決してそれ以外の何ものにもならない。それはよく教育された肉かもしれない。洗練された肉、豊かな人生経験を持つ肉、道徳的に善い肉、いや、宗教的な肉でさえあるかもしれない。それでも、それは肉のままである。」⁵⁹

「肉は罪深いままである！ 地上の状態にある私たちが、今なお神の律法に逆らうことを好み、喜んで罪の道具として身を差し出す『肉』を持っているということを、私たちはまったく意識して心得ているだろうか。私たちはそれに備えているだろうか。」⁶⁰

けれども、肉がただ存在していることや、その生きているしるしを、それだけでもう罪と呼んではなりません。罪が起こるのは、私たちが肉に屈し、肉の衝動とわざを殺さずに、なすがままにさせるときです。私たちは、肉に従って生きることなしに、時とともに、自分の肉のまったく変わることはない悪しき性質をますます認識するようになるでしょう。肉は獣のようなもの、たくさんの触手を持つタコのようなものです。私たちの生活に霊的な理解が

59. ルース・パクソン（Ruth Paxson）、*Life on the Highest Plane*、190ページ。

60. ヴァルター・ニツェ（Walter Nitsche）、*Versagen und innere Zerrissenheit*、11ページ。

加わるほど、自分自身の肉の完全な墮落がいつそうはっきりと意識されるようになります。この自己認識は、キリストが私たちのために死んでくださった恵みと愛についての認識と並行して、深まっていくべきです。自分の肉の悪と腐敗に失望している人は、肉からは何も期待できず、肉が改善の余地のないものであることを、まだ理解していないのです。

神は、肉を私たちから取り去らないことに決められました。信仰者のうちに肉が存在し、攻撃的であることは、どうやら霊的な成長にとって必要なようです。

- それは私たちの内なる弱さを明らかにします。⁶¹
- それは私たちのプライドと傲慢を殺します。
- それは私たちを繰り返しへりくだらせます。
- それは私たちを、絶えず神に助けを呼び求めるよう駆り立てます。
- それは人間の努力のむなしさを私たちに示します。
- それは私たちに、ただ主だけに信頼することを教えます。
- それは私たちを、罪から救ってくださった救い主を愛するように導きます。
- それは私たちを、絶えず悔い改める生活へと導きます。
- それは私たちを、罪の侵入に対して目を覚ましているようにさせます。
- それは天へのあこがれを強めます。
- それは私たちを、神の恵みのあらゆる可能性を用いるよう駆り立てます。
- それは私たちを励まして、聖なる（あるいは良い、霊的な）習慣を身につけさせます。
- それは私たちを、兄弟姉妹たちの助けを求めるよう駆り立てます。

肉は私たちを、毎日解決を探し求めるようにさせます。しかも、それについて神がみことばの中で語っておられることの光に照らしてです。私たちは突然の奇跡を待つべきではありません。神は、私たちの肉にかかわる問題を、ただ「魔法のように」消し去ってしまわれるのではありません。私たちは行

61. <http://www.keepbelieving.com/sermon/2001-08-26-Full-Speed-Ahead-One-Step-at-a-Time-How-You-Can-Walk-in-the-Spirit-Every-Day/>

動すべきであり、また行動することができるからです。神は、勝利の生活のために必要なものを私たちに与えてくださったのです。

このことを、特に次の章で掘り下げていきましょう。その際、一度ならず繰り返しが出てくるでしょう。これはその後の章についても同じです。すべての章は、結局のところ一つのテーマを、ただしさまざまな視点から扱っています。けれども、それは一つのテーマ——アダムからキリストへの陣営の転換——なので、一つの視点を掘り下げる際に、私たちはすでに取り組んできたさまざまな事柄に、改めて取り組むことになるでしょう。一つの視点は、ほかの視点や側面に立ち返ります。一つの側面を、ほかの側面から切り離して説明することはできないのです。

12. 肉対御霊

肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。
この二つは互いに対立しています。

ガラテヤ5:17

ガラテヤの人々は、福音が何をもたらしたかを印象深く経験していました。彼らは義と認められ、御霊を受けました。そして御霊は、しるしと奇跡によって、神ご自身がこのすばらしい福音の知らせの源であることを確証されたのです。ところが、何が起こったのでしょうか。律法の教師として活動していたユダヤ主義者たちがパウロの後を追ひ、新しく設立された諸教会にモーセの律法を導入しようとしてしました。彼らは律法を、救いといのちにとって必要なものとして示しました。そして特にユダヤ人キリスト者たちは、それに好意的に反応したことでしょう。これが、ガラテヤ人への手紙が書かれた理由です。その中でパウロは、これに対して激しく立ち向かっています。律法が福音に混ぜ合わされるなら、福音の土台が揺るがされるのです。律法と福音において、二つの相いれない世界が衝突するのです。

12.1 何が問題だったのか？

律法を再び導入したことで、ガラテヤの人々は律法の時代へ、したがって肉的な生活へと逆戻りしてしまいました。彼らは、律法は救いのために、また生活の基準として必要だと主張して、律法に逃げ場を求めたのです。おそらく彼らは、パウロに対してもこの意見を主張したことでしょう。しかし使徒は、彼らがこの道では救われないことを彼らにはっきり示します。さらに（そしてこれが私たちの主要なテーマにかかわることですが）、彼らは律法を守ることができないことが明らかになりました。彼らは互いに、いわば相手の目をえぐり出し、むさぼり食う猛獣のようにふるまっていました。パウロは少し皮肉を込めて、互いに食い尽くし合わないよう気をつけなさい、と言っています。こうして彼は、彼らの律法への愛と、律法に忠実であるとい

う思い込みが、逆効果であったという事実をさらし者に行っているのです。そこからは何も良いものが生まれませんでした。ガラテヤの人々は、律法の時代、したがって肉の時代が過ぎ去ったことを忘れていました。古い体制は廃止されていたのです。今や御霊と自由の時代が始まっていたのです。

肉（古い、墮落したアダムの本性）は、律法と、その命令と禁止を必要とします。けれども肉は無力であり、無力であり続けます。失敗したのは律法ではなく、人間なのです。パウロはそれに対して何を対置しているのでしょうか。神の御霊です。この手紙は、トラーに代わるものとしての神の御霊を擁護する、印象深い弁論です！ キリストが遣わされた神の御霊は、すべてにおいて十分なのです！ この御霊によって私たちは生き、歩むのだ、とパウロは言います。キリストは中心であり、私たちの義認の土台です。御霊は、そのお方によって私たちが生き、キリストのご性質を身に着けるお方です。けれども、目標は無法状態ではありません。キリストの律法が今、神の御霊によって、私たちの日常の中で現実のものとなるのです。

12.2 肉の働き

野獣へのほめかしは、私たちの肉がどのようなものであるかを、ある程度示しています。肉は、いつも獲物と支配をねらっている大型のネコ科の猛獣に似ています。サーカスでは、そのような大型のネコ科の動物が猛獣使いによって飼いなされます。しかし、それがうまくいくのは、自信に満ちた態度と、絶えず目を離さずに制御し続けることによってだけです。この姿勢は、私たちにとっても手本です。それについては、後でもっとくわしく述べます。

ガラテヤの人々が御霊の代わりに律法を愛したので、肉のわがが現れ出てきました。彼らの交わりは、肉的な（つまり罪深い）ふるまいによって決定されていました。御霊と肉の対立において、パウロが問題にしているのは、**私たちのうちで**起こることではなく、**互いのあいだで**起こることです。この対立において問題になっているのは、内側に向けられた注意や自己観察——私のうちで起こっていること——ではなく、ほかの人々が身をもって感じるふるまいです。すなわち、虚栄心とねたみか、それとも互いの重荷を負い合う

用意か、です（5:26～6:2）。前者の源は肉です。御霊は、イエス・キリストによって実現されたように、他者のために善を望まれます。ですから、御霊は私たちのうちで御霊の実を通して形をとるべきです。御霊の実とは、御霊のご性質の表れにほかなりません。死に定められたアダムを物語る肉の死んだわざは、信仰者の交わりから追放されなければなりません。それは御霊の働きによってのみ可能です。神の実は、自分の努力によって育つのではなく、ただひとり成長を与えてくださる神によってもたらされるのです。

御霊と肉は、終わりのない対立の中にあります。それは、一方では罪深い本性によって、他方では神の御霊によって代表される、二つの大きな原理の問題です。私たちはみな個人的にかかわっています。私たちのうちにはまだ肉が住んでいるからです。そして聖なる神は、ご自分の聖霊を送り込むことによって、それに立ち向かわれます。驚くべきことです！ それほど大きな力が必要なのでしょう——神ご自身が私たちのところに降りて来て、この戦いを引き受けてくださるのです。

ガラテヤ人への手紙における御霊と肉の対立は、何よりもまず、私たちの胸の中で二つの心が鼓動している、ということをねらいとしているものではありません。それは、私たちの内側での絶え間ない葛藤（ローマ人への手紙7章で描かれているのと似たもの）を教えているのではないのです。むしろ問題はまず、神の家族が互いにどうふるまうかです。私がひとりでいるときに経験することではなく、私たちが互いに交わりを持つとき、私たちがどうであるかが問題なのです。もちろん、私たちのうちでの葛藤も問題になります。私たち自身のうちには肉があり、同時に神の御霊が私たちのうちに住んでおられるからです。肉の衝動は、私たちがひとりでいるときにも、やはりそこにあるのです。

全体のテーマの枠の中で、ガラテヤ人への手紙にこのように手短に入門した後で、私たちはまず、この手紙から、キリスト者として私たちが何者になったのかを集めてみましょう。御霊と肉の対立を、パウロは手紙の終わりになって初めて扱っています。

12.3 ガラテヤ人への手紙におけるキリスト者

- イエスは私たちのもろもろの罪のために、ご自身を献げられた（1:4）。
- 今の悪の世（あるいは今の時代の流れ）から救い出された（1:4）
- キリスト・イエスにある自由（2:4、5:1）
- キリストを信じる信仰によって義と認められた（2:16-17）
- 律法に対して死んだ（2:19）
- 神に対して生きる（2:19）
- キリストとともに十字架につけられた（2:19）
- キリストが信仰者のうちに生きておられる（2:20）
- キリストに愛されている（2:20）
- 御霊を受けた（3:2、5）
- 信仰によって祝福された者（3:9）
- 律法ののろいから贖い出された（3:13）
- 聖霊の約束を受けた（3:14）
- 律法によるのではなく、信仰によるいのち（3:21-22）
- 信仰による神の子たち（3:26）
- 私たちはキリストを着た（3:27）。
- 私たちはキリストのうちにある（3:28、5:6）。
- 私たちはキリストのもの（キリストの所有）である（3:29、5:24）。
- 子とされるために贖い出された（4:5-6）
- 御子の御霊が私たちの心の中におられる（4:6）。
- 神は私たちの愛する父である（4:6）。
- 神による相続人（4:7）
- キリストが私たちのうちに形づくられる（4:19）。
- 御霊によって（御霊から）生まれた（4:29）
- 神に召された（5:8、13）
- 私たちは御霊によって歩む（5:16、25）。
- 御霊が私たちを導かれる（5:18）。
- 私たちは御霊によって生きる（5:25）。

- 神の国の相続人（5:21）
- 永遠のいのち（復活において）（6:8）
- 信仰の家族（6:10）
- 世に対して十字架につけられた（6:14）
- 新しい創造（6:15）。

これは、神の救いのみわざの、とてつもない総計です。これが救いの直説法——地上で「すでに今」信仰によって私たちのものとなっているもの——です。この救いの目録をくわしく意識した後で、私たちはこの視点から、肉とその欲望にどう向き合うべきか、そして御霊の実がどのようにして成長しうるのかについて取り組んでいきましょう。

12.4 律法と肉——一つの歯車装置の中の二つの歯車

パウロがガラテヤの人々に宛てたこの手紙の中で、肉の欲と欲望というテーマにこれほど具体的に踏み込んでいるのは、どうしてでしょうか。彼は、律法が彼らの聖なる生活の助けにはならなかったことを示しています。それどころか、律法はガラテヤの人々の古い生活を再び引き出してしまいました。律法は、その禁止と命令によって、罪と肉の欲を挑発するのです（ローマ人への手紙7章も参照）。パウロはすぐにその証拠を示します。ガラテヤの人々は、隣人を愛することを求める律法を守っていませんでした。この（モーセの律法の戒めであるだけでなく、キリスト者の戒めでもある）戒めでさえ、彼らには難しかったのです。彼らは互いに、親切とはほど遠い接し方をしていたからです（ガラテヤ5:15）。律法に忠実であるという主張と現実とは、大きくかけ離れていました。肉と律法は一体です。律法は、生まれながらの、新しく生まれていない人間に向けられているからです。信仰に入った人においては断ち切られるこの結びつきを、ガラテヤの人々は再び結び直してしまいました。彼らはこうして、古い人を再び生き返らせていたのではないのでしょうか。けれどもパウロは彼らに、御霊にあるいのちの新しさがどのようなものかを示しているのです。

12.5 太古からの宇宙的な対立と、今日の個人的な対立

人類の歴史の初めに、墮落が起きました。その結果、女の子孫と、蛇すなわち悪魔の子孫とのあいだに敵意が置かれました（創世記3:15）。キリストは女の子孫であり、痛みを伴いながらも、蛇の頭を踏み砕かれます。この敵意、つまるところ光と闇の対決は、宇宙的で、どこにでも存在する性質のものですが、すべてのキリスト者のうちにも到来したのです。新しいいのちと、キリスト者の心に御霊が住まわれたことによって、今そこには二つの対極が存在しています。それらは決して互いに歩み寄ることができず、その方向を一つにすることも決してできません。二つの本質のあいだの戦争です。二人の将軍、すなわち御霊と肉が、互いに向かい合い、戦っているのです。「キリスト者は、肉と御霊の対決の、舞台であると同時に対象であり、戦場であると同時に戦利品である。」⁶² 敵対する両者は休戦を知りません。決してです。私たちがいるところには、どこにでも肉がいます。私たちは肉を携えて歩き回っているのです。しかし、神の力強い御霊もまた私たちのうちにおられます。御霊は、この対立において私たちを助けるために、いつも私たちのそばに立っておられます。もっと正確に言えば、御霊はこの戦いを率いようとしておられるのです。けれどもパウロは、絶え間ない戦いを強調しているのではなく、御霊による日々の生活を強調しています。キリスト者は、御霊が勝利を収められることを確信してよいのです。例外、つまりつまずきは、この原則を裏づけるものなのです！

12.6 御霊によって生き、御霊によって歩みなさい！

御霊によって（御霊を通して）歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。この二つは互いに対立しているので、あなたがたは願っていることができなくなります。

ガラテヤ5:16-17

62. H・シュリーア（H. Schlier）、Galater, 181ページ。E・マウアーホーファー（E. Mauerhofer）、*Der Kampf zwischen Fleisch und Geist bei Paulus* における引用。

ガラテヤの人々は、律法に従って生きる代わりに、神の御霊によって歩むべきでした。肉とその働きに場所を与えないためです。そうして初めて、手紙の受取人たちが互いに愛をもって接するようになることができたのです。

肉は、生き生きと活動しているものです。**欲**と**欲望**は強い力であり、肉の生きているしるしです。肉の欲には、自己中心的な目標を満たし、追い求めることにかかわる、あらゆる不当な欲望が含まれます。それは多くの事柄でありえます——私たちがもしかすると思ひもしなかったような事柄でもです。キリスト者は、まったく同じ事柄を、御霊によって行うこともできれば、肉によって行うこともできます。その人がその事柄を御霊において（あるいは霊的な思いで）行うのか、肉において（あるいは肉的な思いで）行うのかを決めるのは、その源と動機と目標です。私の古い生活の、権力を奪われた古い所有者は、肉、あるいは罪によって体现されています。古い所有者は、もはや何の権限も権利も持っていないとしても、まだそこにいます。私たちがまだ主のもとにおらず、地上の体の中で生きているかぎり、彼はまだ私たちと一緒に旅をしているのです。**肉**は生物学的な体と同じものではありません。むしろ肉は体を利用するのです。ちょうど、たましいと霊も体を道具として用いるのと同じです。肉のわざには、手や足で行う行為だけでなく、思いや感覚や感情の領域に属する精神的な事柄（高慢、わがまま、軽蔑、恩知らず、憎しみ、汚れた考え、思いの中での姦淫、誤った、あるいは度を越した野心、オカルト、その他多く）も含まれるのです。

肉は御霊に反抗し、自分の古い権利を主張しようとします。肉はかつて、すべてを決定する独占的な地位を持っていました。そして私たちの考えと行いの中に、罪深い習慣をプログラムしてきたのです。しかし今や、御霊が所有権と指導権を引き継がれ、肉とその習慣に対して陣を構えておられます。この古いプログラムは、私が救われた日（私の個人的な救いの転換点と回心の日）に消し去られるものではありません。むしろそれは、御霊によって、それがあるべき場所へと運ばれるのです。すなわち、死へとです。

キリスト者のうちには、私の肉と聖霊とのあいだで起こる対立があります。ペテロは、私たちは**たましいに戦いを挑む**肉の欲を避けるべきだ、と言うと

きに、そのことについて語っています（ペテロ第一2:11）。ヤコブが言うように、欲望は、養われ満たされることを求めて、私たちのからだの中で戦っているのです（ヤコブ4:1。1:13-15も参照）。

12.7 神の働きと私たちの働き——相いれないものか？

新約聖書では、私たちはしばしば行動するよう促されます。しかし同時に、それにふさわしいことをもたらしてくださるのは神なのです。ここでも同じです。ここにある言明（「御霊によって歩みなさい」）は、ですから救いの命令法です。それは「能動・受動形」なのです。歩むのは私たちです（能動）。しかし私たちはそれを、御霊の力によって行うべきなのです（受動）。

肉と御霊は互いに対立しています。**あなたがたが願っていることができなくなるためです**。パウロはこれによって何を言おうとしているのでしょうか。この対立には三者が参加しているのでしょうか。明らかにそうです。肉があり、神の御霊があり、そして一方の側に立つことを決断する責任ある人格としての私があります。「……あなたがたが願っていることができなくなるために」という短い文には、少なくとも三つの側面があります。

1. 私たちは自由へと召されました（5:13）。それは、私たちの肉が望むことを行わないためです。
2. 戦いは私たちによってではなく、御霊によって行われます。
3. 私たち（私たちの自我）は、当事者としてこの対立のただ中に立っています。

12.8 自由へと召されて——しかし、それはどんな自由か？

御霊と肉の対立の標語（5:1）——つまりこの手紙のメッセージ——には、自由が含まれています。けれどもパウロは同じ息で、モーセの律法からのこの自由を、肉のための許可証として用いることがないよう警告しています。モーセの律法の外では、新しい律法、すなわちキリストの律法（6:2）が有効だからです！ 新しい律法とは御霊の律法です。キリストはそれによって私たちの生活を形づくり、その働きは御霊の実のうちに見てとることができま

す。「自由は律法の内側で生まれるのであって、外側で生まれるのではない。機関車が最も大きな自由を持つのはいつだろうか。でこぼこ道をよろめきながら進むときだろうか。もちろんそうではない！ レールの中に『押し込められる』ままになるとき、機関車はなめらかに、すんなりと走る。そのように造られているからである。機関車は、なめらかに速く走ることができるためには、レールの『秩序』と『規律』を必要とするのである。」⁶³ このレールによる導きを、パウロは神の御霊による「導き」と「歩み」と呼んでいます。その結果、御霊の多様な実が成長し、同時に肉のわざはますます消えていきます。それが、モーセの律法に代わる神の選択肢です。もっとも、私たちが神の御霊によって「互いに愛し合う」なら、私たちは同時にモーセの律法をも成就しているのですが（5:14。ローマ8:3も参照）。

ここで問題になっているのは、律法の領域を去ることです。それは、私たちにおいてすでにゴルゴタで起こりました。私たちは律法に対して死んだのです（ガラテヤ2:19、ローマ7:6）。それが起こったなら、私たちは、どんな律法も通用しない無人地帯に立っているではありません。私たちは神のものです——そこは**神**の国土なのです。この国土は争奪的となっています。目標にまだ到達していないからです。御霊と肉の対立は、新しいいのちに踏み入るすべての人を待ち受けています。私たちが御霊に導かれるなら、私たちは律法の下にはいません。二つの生き方（律法と御霊）は互いに排除し合うのです。

12.9 御霊が私たちのために戦ってください

実際、この対立において、私たちは一種の観客の役割を担っているかのように見えます。御霊と肉が私たちのうちで戦っているので、私たちはもう自分の望むことをまったく行えないのです。両者がそれぞれ望むことを行うからです！ 肉は肉のわざを生み出し、御霊は御霊の実を生み出します。アルブレヒト訳〔ドイツ語聖書翻訳〕はこう訳しています。「肉はその欲望をもって御霊に敵対して立ち向かい、

63. ジェイ・E・アダムズ（Jay E. Adams）、Grundlagen biblischer Lebensberatung、256ページ。

同じように御霊も肉に敵対する。両者は互いに戦いのうちにあり、あなたがたが自分の意志に従って行動することを許さない。」この教訓は、この対決においては、どれほど善意からであっても、私たちは「自分の望むことを行わない」ということです。肉に対する戦いは、御霊によって行われます。けれども、その戦いは、まるで私たちには関係がないかのように、私たちの脇を通り過ぎていくではありません。私たちは休暇を取って、御霊に戦わせておくことはできないのです。ここで言われているのは、肉に対する戦いは私たち自身の経験の一部であるが、自分の努力によっては負けてしまう、ということです。私たちが戦いを神にゆだねないかぎり、私たちには力がありません。私たちには確かに意志はありますが、手段がないのです。対立は私のたましい、あるいは私の心の中で繰り返し広がられます。しかしそこでは、新しい司令官である御霊が指揮権を引き継いでおられるのです。

12.10 戦いのただ中で

本文を、新ジュネーブ訳 (Neue Genfer Übersetzung, NGÜ) [ドイツ語聖書翻訳] の言葉でもう一度繰り返してみましょう。

「私はこれによって何を言おうとしているのでしょうか。神の御霊にあなたがたのふるまいを決定していただきなさい。そうすれば、あなたがたはもはや、自分自身の本性の欲望に屈することはありません。人間の本性はその欲望をもって神の御霊に逆らい、神の御霊はその望みをもって人間の本性に逆らうからです。両者は互いに争っており、どちらの側も、相手の側があなたがたに迫っていることをあなたがたが行うのを、妨げようとしているのです。」

この肉と御霊の対立から逃れることのできる、中立的な自我はありません。私たちの自我は、その行動の原動力を、肉から得るか、御霊から得るかのどちらかです。私たちは決して受け身の傍観者ではなく、対立の焦点に立っています。私たちは、自分が決断し、考え、行うすべてのことに責任を負っているのです。私が直接の対決の中に、誘惑と試みの中に立っているなら、私ははっきりと決断し、態度を決めなければなりません。「聖霊はあなたのうちに住まれ、そこでご自身の人格において父なる神と子なる神の両方を代

表しておられるにもかかわらず……決してあなた自身の意志の主権を侵されることはない。聖霊は、あなた自身の責任による決断から、あなたを解き放たれることはない。……それでも聖霊があなたの心のあらゆる領域で支配を行われるとすれば、聖霊がそのようにしてあなたのふるまいを決定されるとすれば、それはただ、あなた自身の自由な選択と喜んでの同意に基づいてのみ起こるのである。しかし、この拒否権こそが、人間としてのあなたを動物の世界の上に引き上げ、神があなたを定められた道徳的な存在としてあなたを形づくっているものなのである。それこそが——そしてそれだけが——あなたが神を愛し返し、そうして神の愛に応えることを可能にするものでもある。あなたの人生のあらゆる瞬間における、神に対するこの喜びに満ちた『はい』は、神の全能のことばによって宇宙の無限へと投げ出された、何百万もの世界の刺激的な（興味深い）驚異のすべてにもまさって、創造主の心を大きな喜びで満たすのである。それらはみな、神を愛する能力を持っていない。自由な選択の能力を持っていないからである。したがって、あなた自身であること、人間であることの特権は、あなたが神を知り、選び、愛することを許されているという点にある。それこそが、あなたのまったく個人的な特権なのである。」⁶⁴

御霊がおられることは、勝利が保証された組み込み式の自動装置ではありません。私たちの人生のモットーは、こうあるべきです。イエスとともに生き、イエスの近くにとどまり、イエスのことばを私たちのうちに豊かに住まわせること。そうすれば私たちは、御霊を選び、肉に背を向ける決断をするようになるのです。

神の働きと私たちの責任は、決して互いに排除し合うものではありません。私たちが神の行動についてだけ語るなら、受け身の姿勢に流されてしまうかもしれません。私たちがいつも自分の義務と責任ばかりを見ているなら、私たちはキリストではなく、自分が打ち負かそうとしている罪に目を向けることになります。この視点では、私たちは自分の力で戦い、こわばってしまう危険にさらされるでしょう。御霊は、新しい生活の規則と、それに従って生

64. W・イアン・トーマス (W. Ian Thomas) 、*Tote können nicht sterben*、115ページ。

きる力の両方を含んでおられます。御霊の導きは単なる道案内ではありません。御霊は私たちの旅の同伴者であり、私たちの先に立って進まれるのです。

12.11 ウイルスとワクチン

ここでもう一つ、私の意志と肉と御霊の役割を具体的に示すたとえを挙げましょう。私の体の中で眠っている病原体を、私たちの肉にたとえてみましょう。健康的な生活を送っていれば、病気になることはめったにありません。不健康な食事をし、十分に暖かい服装をしなければ、風邪をひくことがあります。そこで私が薬を飲むなら（この決断は私がしなければなりません）、薬は私の体の中で風邪との戦いを始めます。この戦いは確かに私の体の中で行われますが、私が自分で戦い抜くものではありません。けれども私は、薬を飲むという意識的な決断によって、この戦いを始めることができます。さらに私は、十分な休養と良い栄養と新鮮な空気によって、薬の効果を高めることができますのです。

12.12 肉のわざとは何か？

パウロは、肉とそのわざによって何を意味しているのかについて、何の疑いも残しません。これらのわざについての彼の一覧は、まるでここに挙げられたもの以外にはもう罪がないかのような、網羅的なものではありません。一覧の結びの言葉「そういった類のもの」によって、神のことばはすべての読者に、そのリストを続ける可能性を与えているだけでなく、自分自身の肉のわざを見分けるようにという命令を、間接的に与えているのです。

肉のわざは、その影響においても、その評価においても、さまざまです。淫らな行いが最初に挙げられているのは、理由のないことではありません。けれども、「小さな罪」であれ「大きな罪」であれ、それらはみな同じ悪い源から出てきます。ここに挙げられたどの事柄についても（行いの面でも、思いの面でも）、私たちの肉はそれをする能力を持っています。その意味で、肉は一つの種のようなものです。その中には、いつの日か現れ出ることができるように、ありとあらゆる罪が隠されているのです。パウロが、御霊の場

合のように肉の**実**とは言っていないのは、ガラテヤの人々が頼ろうとしていた律法の行いと関係があるように思われます。言い換えれば、私たちは肉のわざを自分の力で行うことはできますが、御霊の実を自分で結ぶことはできないのです。そのためには聖霊が必要です。さて、肉のわざは明らかです（5:19-21）。

- **淫らな行い**（ギリシア語 **porneia**）——不品行、結婚の外でのあらゆる性的な行為
- **汚れ**——倒錯したこと、不潔なこと。結婚の内であれ外であれ、性的な領域における抑制のない、あるいは恥知らずなふるまい。生活のあらゆる領域を毒する、人格全体の腐敗
- **好色**——節度のなさ、放縦、感覚を麻痺させること
- **偶像礼拝**——神と神のみこころを、その人の生活の第一の場所から押しのけるものすべてを崇めること（偶像崇拜も、今日の観念的な偶像礼拝も同じように）。自己中心
- **魔術**（ギリシア語 **pharmakeia**）——呪術、妖術、オカルト、心霊術、麻薬
- **敵意**——人々から背を向けること、反目、憎しみ、ほかの人々に対する不機嫌
- **争い**——不和、口論、争いを好む心
- **嫉妬**——ねたみ、自己中心的な、またそのほか自分の利益ばかりを考えるふるまい、疑いをかけること
- **憤り**——激怒、怒りの爆発、周囲に対する歯止めのない攻撃、自分の意見への激しい固執
- **党派心**——言い争い、陰謀
- **分裂**——ばらばらになること、仲たがい、いさかい
- **分派**⁶⁵——異端、分裂、セクト。秩序を乱すグループ形成
- **ねたみ**——他人に何ひとつ認めようとしない習慣
- **殺人**——憎しみ、殺人（思いの中だけでなく、実際に）

65. エルバーフェルト訳2003年版〔ドイツ語聖書翻訳〕（Elb 2003）の脚注の文言による。この聖書翻訳の本文では、ここは「Sekten」（セクト）となっている。

- **泥酔**——過度の飲酒、酩酊状態
- **遊興**——飲み騒ぎや食べ騒ぎ、暴飲暴食、放蕩
- **そういった類のもの。**

これらのことを行う人々、そのようなことが当たり前になっている人々、その中にとどまり続け、罪を告白して捨てることをしない人々には、神の国における将来はありません（5:21）。

12.13 神の御霊の実

御父と御子が喜ばれ、またそれによって祝福を受ける人々にとっても同じように喜びとなる、すばらしい実は、神の御霊によって信仰者のうちに生み出されます。実が成長することを、私が引き起こすことはできません。成長させてくださるのは神だからです⁶⁶（コリント第一3:6）。私自身がすべきことは、良い成長が可能になるような「枠組みの条件」を整えることです。私は良い土を用意しようと努めることができます。肉という雑草を防ぎ、取り除くことができます。そして神のことばによる十分な「水やり」に気を配ることができます。けれども、そうしたことをすべてにおいて、私たちは「奇跡的なこと」を見落としてはなりません。憎しみに満ちた罪人であった人々が、その心に神の愛が注がれ、そして今度は自分自身が、神が愛されるように愛する被造物となること——それは、どんなしるしや奇跡にもまさる、神の超自然的なみわざなのです。しかし、御霊の実は次のとおりです（5:22-23）。

1. **愛**——神の、自己犠牲をいとわない愛。ここでは特に神の教会の内での愛であり、感情ではなく意志による決断です。神と人に対するこの愛がなければ、キリスト者の生活においても、すべては無価値です（コリント第一13章）。私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったからです。
2. **喜び**——御霊によって歩む神の民に属する者たちが、その集まりにおいても分かち合う喜び。神が私たちや他の人々のうちでなさったこと、今なさ

66. マタイ6:28も参照。「野の百合がどうして育つか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません」（強調は著者による）。

っていること、そして約束に従ってこれからなさることについての本物の喜び。キリストにあるいのちの喜び

3. **平安**——単に争いがないことではなく、和解、心のこもった交わり、結びつき、全きこと
4. **寛容**——他の人々と接する際の忍耐と寛大さ。隣人や状況を耐え忍ぶ、変わらない姿勢。受け身の、しかし粘り強い面から見た愛
5. **親切**——好意的で、いつも助けを惜しまず、理解のある態度、穏やかな人柄、気前のよさ。愛の能動的な面
6. **善意**——心からの善良さ。親切に似ています。相手に、正しく良いものを与えること
7. **誠実（信仰）**——神への信頼。信頼に足ること、正直さ、忠実さという徳。いつも自分のことばに立ち、約束に忠実な神にならうこと
8. **柔和**——穏やかさ、力、優しさ（ぴったり合うドイツ語の言葉はありません）。自己中心や過度の要求の反対。自分自身に関してへりくだった思いを持つこと
9. **自制**——自分を治めること、自己規律と自己管理、心の落ち着き。

実、あるいはもろもろの実は、多様で幅広いものです。この「リスト」も、前のリストと同じように網羅的なものではなく、代表的なものです。ウィリアム・バークレー（William Barclay）は、この列举の中に、正確な定義を見つけることも、互いの境界線を見つけることも難しい、と言っています。

⁶⁷ これらすべての倫理的な特質と徳について、人間がそれを自分の生活の中で多少なりとも絶えず経験することは、ほとんど不可能であることがわかります。それはまさに神の実なのです。

パウロは、一貫したテーマを再び取り上げることによって、このリストを締めくくっています。「**このようなものに反対する律法はありません**」（23節）。言い換えれば、御霊の臨在のおかげで、これらの徳が私たちのあいだで目に見えるものとなっているなら、律法は意味を持たないのです。御霊に

67. ウィリアム・バークレー（William Barclay）、*Fleisch oder Geist?*、アウクスブルク（Augsburg）、1968年。

よって互いに愛し合う人々に、もはやトーラーが「殺してはならない」と命じる必要はありません。

12.14 肉は十字架につけられるべきもの

キリスト者は、肉に対して最もはっきりした立場をとりました。キリスト者は自ら肉を十字架に釘づけにしたのです。私たちはそう信じ、それに従って行動します。私たちの肉は、十字架の上での死以外の何ものにも値しません。パウロもまさにそう言っています。

「キリストのものである人たちは、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。」

ガラテヤ5:24

キリストに属する者は、このことをただ一度で永遠に行ったのです。私たちがキリストを信じたとき、私たちは自分の古い生活を断罪し、それと縁を切りました。私たちは、自分の神を恐れない生活と、その神を恐れない生活の原動力であったもの、すなわち肉に対する神の死刑判決を認めたのです。なぜ十字架につけられたのでしょうか。キリストが、私たちの古い人に対する死刑判決を、十字架の上で私たちの身代わりとして引き受けてくださったからです。

肉は、情欲と欲望を、いのちの霊薬として自分のうちに抱えています。キリストへと向かう信仰の一步によって、私たちはそれと縁を切りました。それは私たちに一つの義務を課します。自分で十字架につけ、殺したものは、死の中にとどまり、もはや私たちの生活の中に見えてはならないはずだからです。ところが、十字架につけられたにもかかわらず、殺されたにもかかわらず、肉はそのわざとともにまだそこにいます。肉はまだ私たちのうちで、改善の余地のないままなのです。これは、私たちは自分を罪に対して死んだ者と見なすべきだという、ローマの人々へのことば（ローマ6:11）に対応しています。神は、罪の独裁から逃れることができるように、私たちのために何かをしてくださいました。このことばにおいても同じです。イエス・キリストの十字架は、肉の終わり、古い人の終わり、古い自我の終わりです。十字

架がなければ、そしてこのことを知らなければ、御霊によって歩むことはできないのです。

私たちが自分の肉を毎日十字架につけるべきだ、と言われているわけではありません。それはしばしば善意から言われます。けれども真理は、肉は一度十字架につけられた——キリストとともに——ということを、私たちが前提とすべきだ、ということなのです。それが、神ご自身が与えてくださった最善の前提条件をもって、新しいいのちへと出発することです。今、十字架の出来事の後で、いのちの新しさのうちにあって、私たちがかかわっているのは、肉の個々の**わざ**です。肉は物陰から「ゲリラ戦」を仕掛けてきます。これらの攻撃を、私たちは聖霊の力によって「殺す」べきなのです（ローマ8:13、コロサイ3:5）。殺すとは、それをよみがえらせないことです。私は、私の古い人のためのキリストの死と、そのために死ぬことがキリストにとってどれほどの代価であったかを、思い起こします。それによって私は、繰り返し新たに、肉についての神の見方と判断に至ります。そしてそれが、肉に対して徹底して立ち向かう助けとなるのです。

12.15 キリストとともに十字架につけられた後、人は何者なのか？

私たちが、自ら肉を十字架につけた者として描かれているとすれば、それはメダルの**一つ**の面にすぎません。もう一つの面を、パウロは手紙の初めのほうで描いています。

……私はキリストとともに十字架につけられました。しかし私は生きています。もはや私ではなく、⁶⁸ キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自身を与えてくださった神の御子に対する信仰（神の御子を信じる信仰）によって生きているのです。

ガラテヤ2:19-20

68. 「しかし私は生きています。もはや私ではなく」は、この箇所のElb 2003の脚注の文言を再現したものである。

これはおそらく、キリスト者であるとはどういうことかを、最も的確に描いたものでしょう。私たちの古い生活、あるいは、羅針盤の針がいつも自分自身を指していた私たちの自己決定の状態は、キリストとともに十字架につけられたのです。それが、古い生活から本当に解放されるための唯一の道でした——そして何よりも、それが神の義と聖さの前で法的に有効な形で行われるための道でした。だれも、自分のいのちを失いたいとは思わず、自分の自己決定を手放したいとは思いません。その後に来るものを前にして、失うことを恐れるからです。肉は私たちをそのように「プログラム」してきました。そしてこの「ソフトウェア」は、まだ私たちのうちで動いているのです。私たちは、自分が何者であり、何を持っているかに、どれほどしばしばしがみつくことでしょう！ 神が古いものの代わりに何を置いてくださるのかを、私たちはあまりにもわずかししか認識していません。けれども、このことばは誤解の余地のないものです。「まったく根本的に言えば、私は死んだ、私は生きている！ということである。キリストの死において死に、キリストのいのちにおいて生きている。これはあまりにも強く言い表されているので、私たちの理解力にとっては、簡単にはつかめない。私たちは考える。そんなことがありうるだろうか。人間は自分自身のままではないか。あなたは、今のあなたという人格のままではないか、と。ある人々はここで、人間を霊とたましいとからだの三つの部分に分けることによって、その解決を求めてきた。霊が生きていることができるために、からだとたましいが死ななければならない、というのである。しかし私たちは、パウロのことばを西洋的な見方から見るのではなく、それが意図されたとおりに受け取り、それが目指しているとおりに理解しようと努めなければならない。福音において今や神の義が啓示されているので、アダムにあるいのちは終わったのである。福音を受け入れるすべての人にとって、キリストのいのちが始まるのである。」

69

実際、私たちの生活にとって中心的なこの聖書のことばを、私たちはできるだけ単純に理解すべきでしょう。「あなたはいつまでもあなた自身であり、ほかのだれでもない。朝起きる人間は、前の晩に床に就いたのとまったく同

69. H・P・メデマ (H. P. Medema)、Romeinen 7 enzovoorts、80ページ。

じ人間である。だからあなたは、次の事実を受け入れなければならない。あなた自身こそ、残りの生涯とともに過ごしていかなければならない人間なのだ、と。しかし第二に、それは神のみこころなのである！ 神は決して、あなたがあなた自身以外のだれかであることを望まれたのではない。しかし神は、あなたが今や本当に、神があなたを定められたとおりの人間であることを望んでおられる……。

私の自我（私のうちで罪を犯すのと同じ自我）は、キリストとともに十字架につけられている。『私は生きている（キリストが私から造り出してくださいのと同じ自我として）。しかし、もはや私ではなく、キリストが私のうちに生きておられる』（ガラテヤ2:20）……。あなたが信仰によって、キリストとともに十字架の上に自分の場所を占めるとき、あなたは自分自身の人格を何ひとつ失わない。それどころか、あなたの人格は変貌を経験する。あなたはただ、別の指導の下に入るのである。そうして、あなたについてこう言われるようになる。『だれでもキリストのうちにいるなら、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである』（コリント第二5:17）。』⁷⁰

古い人と古い自我の代わりに、今や別のお方が、しかもそのいのちの豊かさとともに、入って来られます。それは勝利者のいのち、復活のいのち、神のいのちです。今や私のいのち、私の人格、あるいは私の心の中に入って来られ、そこに永遠にとどまられるのは、ほかならぬ主イエス・キリストご自身なのです。それこそがキリスト者であるということです！ キリスト教のしるしは、空の十字架、空の墓、王座におられるキリスト、そして私のうちににおられるキリストです！ 外から私に課される生活の変化ではありません。いいえ、それは私のうちに生き、神に喜ばれることを成し遂げてくださるキリストなのです。それは、新たにされた心から出てくる新しいいのちです。働いておられるのはキリストご自身であり、キリストこそ、私の新しいいのちのための尽きることのない力の源なのです。キリストは、「霊的な事柄」（聖書を読むこと、祈ること、伝道することなど）の源であるだけでなく、

70. W・イアン・トーマス（W. Ian Thomas）、*Tote können nicht sterben*、106ページ以下。

私の生活全体の源、私の仕事の源でもあり、私の人生のあらゆる一秒一秒の源なのです。私は、ただそうであるかのようにふるまっているわけではありません——キリストが私のうちに生きておられるのは現実なのです。このいのちは、神の御子への信頼によって特徴づけられています。御子こそ、私のための、またすべての人一人ひとりのためのご自分のいけにえによって、すべてを初めて可能にくださったお方なのです。

12.16 日々、十字架を負う

イエスはゴルゴタで十字架につけられる前から、すでに十字架について語っておられました。ご自分の十字架だけでなく、ご自分に従う一人ひとりの十字架についてです。ルカの福音書9章23節（ルカ14:27、マタイ10:38、16:24、マルコ8:34も参照）にはこうあります。

「（イエスは）皆に言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。』」

主イエスはここで、（しばしば痛みを伴う）自己否定について語っておられます。イエスに従う人は、自分自身、自分のエゴ、自分の目標に従うのではなく、自分の主人であり師であるお方に従うのです。私の自我は死に渡されており、もはや何の意味も持ちません。この十字架を意識して負い、それを処刑の場所まで引きずって行くことは、弟子の日々の務めです。もちろん、これはたとえです。問題になっているのは、主がこの強烈な例によって明らかにしておられる一つの原則です。自分のいのちを（すなわち、自己否定と自己放棄の十字架の上で）失う者は、本当のいのち、豊かないのちを見いだすのです（マタイ10:39）。さて、イエスのこのことばは、ガラテヤの人々が肉を十字架につけたことについてパウロが語ったことと、正確に一致しているわけではありません。それはたとえば、パウロの場合には肉の悪い事柄が問題になっているからです。しかしイエスは、必ずしも悪いとはかぎらない事柄、いやむしろその反対の事柄をも視野に入れておられます。それ自体は良いものでありながら、よくよく調べてみると、私たちが徹底してイエスに従うことを妨げている事柄は、たくさんあるのです。

私の（個人的な）十字架は、抽象的なものではありません。それは私個人、私の特性、私の状況に向けられたものです。それは、私の場合に肉がまだ見えている領域なのです。私の姉妹や兄弟の十字架は、おそらく違ったものでしょう。このようにして自分を捨てることは、とてつもなく大きな代価を伴います。十字架を負うことは、最もみじめな見せ物でもあります。十字架を負う人は、人々からの榮譽を期待することはできないのです。

12.17 御霊によって生き、歩む：存在と非存在

私たちが御霊によって生きているのなら、御霊によって歩もうではありませんか。

ガラテヤ5:25

十字架は、神の徹底さをもって古いものを終わらせました。肉が腐敗していたので、私たちは御霊によっても新しく生まれました。私たちは生かされ、霊的な死からいのちへと移ったのです。このいのちはキリストのうちにある新しい存在であり、これこそが新しい人です。聖霊はここで、この新しいいのちの源であり力であると呼ばれています。では、「生きる」と「歩む」という二つの言葉は、互いにどのような関係にあるのでしょうか。何が両者を区別しているのでしょうか。「生きる」とは新しい人の鼓動です。つまり、新しい人が存在しているという事実です。新しい人は、贖い主また復活された方としてキリストご自身が造られた、新しい創造を体現しています。私たちはキリストの傑作なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生まれました。

しかし、新しく生まれた人は彫像ではなく、イエス・キリストを手本として造られた、新しい生きた人です。新しい人は、その手本に従って歩みます。その手本とは、新しい創造の初めであり創始者であるキリストです。「歩む」とは、ただ存在する（生きる）ことだけでなく、行動することでもあります。いのちは、動くこと、生き生きとしていることを求めます。歩みとは、一步、また一步と足を進めることです。神からのいのちは、いつも実を結びます。それは御霊の実です。自動車は、走るために燃料を必要とします。タ

ンクが空なら、押さなければなりません。電気モーターは電気を必要とします。そうでなければ、だれの役にも立ちません。キリスト者は、御霊の実を結ぶために聖霊を必要としています。「御霊の導きとは、御霊が力強い指導者として、賢い教師として、忍耐深いコーチとして、私たちのうちに、また私たちとともにとどまってくださることを意味します。この『導き』は、一度限りのセンセーショナルな出来事ではなく、絶えず前進していく過程なのです。」⁷¹ もう一度言います。御霊がただそこにおられるだけでは足りないのと同じように、生きていてだけでは足りません。私たちは御霊を自分のものと呼ぶだけでなく、私たちを所有し、指導し、導こうとされる御霊の要求に、自分の身をゆだねなければなりません。御霊を消すのではなく、この火を、繰り返し、また互いに、かき立てなければならないのです。

12.18 御霊によって歩む——どうすればよいのか？

もしかすると、私たちは気づいたかもしれません。パウロは、私たちが御霊によって歩むべきだとは言っていますが、それをどのように行うべきかを具体的には述べていないのです。この手紙全体が「御霊のための弁論」のようなものです。ですから、律法は決定的に除外されます。「神が私たちのために備えてくださった真の解放とは何かをまだ理解していない魂にとって、最も自然な（そして手近な）解決策は、律法でやってみることです。しかしそれは解決策ではなく、まさに正反対のもののなのです。」⁷² 律法の助けを借りることは、御霊による歩みが意味するものの、まさに正反対です。パウロは、御霊による生活を、現実の、実感できる経験として当然の前提にしているようです。パウロの本文そのものが、御霊の導きの特徴を示しています。

- 律法を（あるいは何らかの律法を）生活の規則にしないこと
- その人は御霊によって歩むことを望んでいます。御霊によって歩む人は、そうするようにという呼びかけに向き合い、私たちの生活の主権を御霊に明け渡すという、意識的な、そして繰り返し求められる決断に向き合います。

71. H・P・メデマ (H. P. Medema)、Romeinen 7 enzovoorts、138ページ。

72. F・W・グラント (F. W. Grant)、Numerical Bible、第6巻、313ページ。

- 私たちの肉は悪いもので、何の役にも立たず、キリストとともに十字架につけられなければならなかったことを、信仰によって受け入れること
- ほかに人に対して御霊の実を結ぶように心がけること
- 肉のわがを許さないように心がけること
- 私は認め、信じます。キリストとその御霊が私のうちに生きておられるのです。
- 自分の力で、自分自身に集中した努力によって歩むのではなく、神に依り頼み、御霊の導きを神に求め、期待すること
- 私のうちにある肉との戦いにではなく、キリストと、キリストにかかわるすべてのことに集中すること

12.19 つまづいて、また立ち上がる

兄弟たち、もしだれかが不意に過ちに陥ったとしても、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でそのような人を正しなさい。そのとき、あなた自身も誘惑されないように、自分自身に気をつけなさい。

ガラテヤ6:1

「御霊が来られたということは、『神の感染』が発生した……ということであって、神の完全さが到来したということではありません。私たちの生活は今、かつて律法の靈感をもたらした方の導きの下にあります。しかしもちろん、それは、神の民の中の人々が『過ちに不意を突かれる』ことはありえない、という意味ではありません。」⁷³ 私たちが絶えず、もっぱら勝利のうちに生きていると考えるのは、現実的ではありません。御霊と肉の対立は、戦いというたとえを用いています。そして戦いには敗北もつきものです。キリストのうちにあって、私たちは「すでに今」勝利者ですが、「まだ」目標に到達してはいません。最終的な勝利は確かですが、前線では、ときにあちこちの陣地が敵に突破されることがあります。それが、パウロがここで「人」と呼び、過ちを犯したその人に起こったことです。

73. ゴードン・フィー (Gordon Fee)、Der Geist Gottes und die Gemeinde、メッツィンゲン (Metzingen)、2005年、192ページ。

霊的な思いを持つ人々は、柔和な心でそのような人を正すべきです。信仰者たちの生き生きとした、信頼に満ちた、活発な交わり、主にある助け合いと友情は、御霊と肉の対立において重要な働きを担っています——互いに励まし合うことにおいても、立ち直ること、また立ち直らせることにおいても。その際、霊的な思いを持つ人々は、自分たちも同じ誘惑に負けないように用心しなければなりません。たとえ霊的な姿勢を持っていたとしても、肉はそのあらゆる欲望、情欲、誘惑とともに、彼らのうちにもあって、絶えず危険となっているからです。

パウロがここで問題にしているのは、特定の過ちではありません。大小さまざまな、数えきれないあらゆる過ちに対して、立ち直らせるための同じ神の緊急計画が当てはまります。過ちとは違反であり、踏み外しであり、信仰の競走路でのつまずきです。過ちには、罪、肉のわざ、誘惑に屈することが含まれます。

うぬぼれることなく、恵みの下に立ち、恵みの下に生きる者として、私たちはこう言ってよいのです。そのような敗北は、普通のキリスト者の生活においては通常のことではない、と。しかし私たちは、それが日々の経験に合致していることを、へりくだって認めなければなりません。ヨハネは、もし私たちが罪はないと言うなら、自分自身を欺いている、と言っています。私たちは、自分の生活の中にある罪をきわめて真剣に受け止めなければなりません。

12.20 立ち直る

過ちを犯した後は、正しい道に戻らなければなりません。過ちはいつも霊的な損害をもたらします。その大きさは、過ちの種類と影響の大きさによって決まります。ここで問題になっているのは一つの原則です。つまり、過ちを犯した後に、何事もなかったかのようにそのまま続けてはならない、ということです。私たちの側の行動が求められています。何事も起こらなかったかのように、罪を無関心に見過ごしてはなりません。

立ち直るとは、こういうことです。キリストと御霊が、できるだけ早く私を導いてくださり、私は自分の罪を隠すのではなく、それを告白し、明るみに

出すようになるのです。私は（光の子どもとして）自分が犯した罪を認め、悔い（つまり、それについて心を痛め）、告白し（つまり、認めて言い表し）、そして神の赦しを自覚すべきです。

12.21 天におられる私たちの助け主

私たちが罪を犯したときには、何かが起こらなければなりません。天における私たちの弁護者であるキリストは、この場合、私たちのための助け主として働いてくださいます。

私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら——私たちには、御父の前でとりなしてくださる弁護者、義なるイエス・キリストがおられます。

ヨハネ第一2:1

私たちの助け主また弁護者は、義なる方として、ご自分のいけにえによって、罪の問題を一度限り、永遠に解決してくださいました。しかし今、私たちの生活の中に罪が生じるとき、この方は過ちの後に、私たちの心と良心に働きかけてくださいます。助け主が心を配っておられるのは**私たち**であって、ご自分がその御座に着いておられる御父ではありません。御父が私たちに対して怒らないように、御父をなだめる必要はないのです。罪は御父の問題ではなく、私たちの問題です。イエス・キリストは、私たちが自分の罪を認め、悔い改め（つまり、それを悔い）、それを告白するように導こうとしておられます。同時に、この方は私たちに御父の愛を確かなものとしてくださいます。それは、私たちが無条件に受け入れられていることを知るためです。罪は、御父との永遠のいのちのつながりを断ち切りはしないのです。

新約聖書は、神の子どもたちが罪を犯したときに、赦しを求めるようにとは命じていません。彼らのすべての罪は、将来の罪も含めて、永遠に赦されているのです（エペソ1:7、4:32、コロサイ1:14、2:13、3:13、ヘブル10:18、ヨハネ第一2:12）。ちなみに、これは旧約聖書との大きな違いです。旧約聖書では、たとえばダビデのような信仰者たちも赦しを求めています。十字架の

後、それはもはや必要ありません。それでも、私たちは罪を告白し、それを悔います。私たちの天の父が聖であるように、私たちも聖であるべきだからです。この意味で、私たちは神のことばの水によるきよめを必要としています。みことばが私たちに罪を示し、それから私たちはそれを告白し、もちろん捨て去らなければなりません。「**もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。**」(ヨハネ第一1:9)。完全な赦しは、回心の日に、イエスの血によって私たちに与えられました。しかし私たちはまだ罪を犯すことがありますので、信仰者として、神のことばの水によるきよめを必要としているのです。

12.22 罪を犯してしまったら？

私たちは、本当はもっとうまくできるのだと証明しなければならないのでしょうか。苦行によって自分の罪責を償わなければならないのでしょうか。それとも、すべての罪はすでに赦されているのだから、過ちはたいした意味を持たないのでしょうか。

私たちは自分の罪を認め、告白し、捨て去るべきです。これを避けて通る道はありません。これは必須です。私たち信仰者が罪を犯したときにはいつでも——そして私たちはみな、たびたび、多くの点でつまづくのですが(ヤコブ3:2)——その罪を告白すべきです。「告白する」には「明るみに出す」という意味があります。告白するとは、何かを実際にそうであるとおりに呼ぶことです。直訳すると「同じことを言う」という意味です。つまり、神がそれについて言われるのと同じことを言うのです。私たちは罪を罪と呼ぶべきです。この点で、何かを言い訳したり、取りつくろったりしてはなりません。

信仰者の罪の告白は、私たちを地獄に送る罪の負債を帳消しにするものではありません。私たちの罪の負債は、イエスの血によって永遠に消し去られました。信仰者のうちにある罪は、意識して経験される父と子の関係、すなわち神との交わりを損ないます。御父と御子との実際的な、経験できる交わりは損なわれ、肉的な生活によって乱され、傷つけられます。しかし、父の子

どもは、たとえ二人がもう口をきかなくなり、子どもが不従順であったとしても、子どもであることに変わりはありません。しかし、本物の、生き生きとした、同時に愛に満ちた交わりを持つためには、あらゆる妨げを取り除かなければなりません。そして私たちの天の父と子どもとの関係においては、その妨げは私たちの側にしか見いだされないのです。私たちは立ち返り、繰り返し、愛に満ちた天の父の腕の中に飛び込まなければなりません。

罪を告白するのは簡単なことではないのでしょうか。いいえ、いつもそうとは限りません。それにはさまざまな理由があります。最もよくある理由は、私たちが初めのうちは、その罪が罪ではなかったかのように反応することが多い、ということです。私たちの心は、肉の力によってあまりにも高ぶり、それが罪ではないことを証明しようとして、考えられるあらゆる言い訳を見つけ出すことがあります。罪を認めるに至るまでに、私たちがしばしばどれほど長い時間を要するかは、驚くべきことです。

もう一つの理由は、私たちが何度も繰り返し犯す罪の場合、もはやそれを告白する勇気が持てない、ということです。あまりにも恥ずかしいので、まずは本当はもっとうまくできることを証明したいと思うのです。しかし、そこで私たちの神観が問われることになります。そのとき私たちは、神について誤った考えを抱いています。その考えによれば、神が私たちを受け入れてくださるかどうかは、私たちの業績しだいだ、ということになってしまいます。それに対して、私たちは永遠に受け入れられているのです。御父は、ご自分の御子を愛しておられるように、いつでも私たちを愛しておられます。私たちに対するこの愛は、私たちの罪によって少なくなることも、私たちの忠実さによって大きくなることもありません！

立ち直らせること、霊的な回復と癒やしが、具体的にどのように進み、どのように経験されるか、またそれにどれほどの時間がかかるかは、いつも、どのような罪が犯されたのか、それにどのような前歴があったのか、そしてそれが不意に起こったのか、すでに習慣になっていたのか、ということにも関わっています。大切なのは、罪を告白した後、たとえ特定の罪の結果を負

わなければならないとしても、御父と御子に対する私たちの関係が再び曇りなく、妨げのないものになることです。

12.23 告白する

興味深いことに、新約聖書では、信仰者である私たちが自分の生活の中に見いだされる罪にどう対処すべきかというテーマについて、あまり語られていません。互いに対して犯した罪は、互いに告白し合い（ヤコブ5:16）、互いに赦し合うべきです（エペソ4:32、コロサイ3:13）。

コリントでは、教会が罪を負っていました。不品行の中に生きていた一人の男を、教会戒規の下に置かなかったからです。この文脈で、立ち直らせることとは、悲しみ、心の痛み、悔い改め、そして罪を認めて告白することを意味していました（コリント第二2:5-11、7:9-11）。

- 罪を告白するとは、その罪を名指しで言い表すことです。一日の終わりに、すべての罪を「覆う」ために、ひとまとめの告白をするものではありません。ある子どもが父親のところにきて、「今日ぼくがした悪いことを全部、お父さんに告白します」と言う場面を想像してみてください。父親は何と言うでしょうか。——私たちの天の父は、私たちが何を告白しているのかを具体的に知りたいと願っておられます。
- 私たちは、一日の終わりまで待つ必要はまったくありません。罪を犯したらすぐに、私はその罪を告白します。罪を一日の終わりまで私たちと天の父との間に立たせたままにしたり、単に忘れてしまったりしたくはないはずです！
- ある聖書講演会で、ある人が、私たちが無意識のうちに犯した罪も御父との交わりを損なうのか、と質問しました。答えは「はい」でした。しかし、この答えは間違っています！私たちは、自分で可能だと思っているよりもはるかに多く、無意識のうちに罪深いことをしているのだと認めなければなりません。それは通常のことでなく、意図したことでもありませんが、それでも起こるのです。ときには、何かが罪であるかどうかについての認識が欠けていることもあります。ですから私たちは、キリスト者として犯すすべての罪を告白することは決してできないでしょう。たとえ

それが私たちの心からの願いであってもです。御父との交わりが損なわれるのは、私たちが自覚している罪を告白しない場合なのです。

パウロはここで、「魂の配慮」（牧会）、すなわち牧者の奉仕を強調しています。その務めは、霊的な思いを持つ人々にゆだねられています（そして罪を犯した人々は、それを受け入れるべきです）。これは、ここではこれ以上立ち入らないテーマです。立ち直らせることは、どの過ちにおいても必要です。大きな過ちの場合と小さな過ちの場合とでは、その姿は違って来るでしょう。悪い考えは、私たちを信仰の軌道から投げ出してしまうような過ちではありません。それでも、私たちはそれを告白しなければなりません。

12.24 霊的なキリスト者と肉的なキリスト者——そういうものはあるのか？

霊的なキリスト者は、過ちに不意に陥ってつまづいた人、あるいは誘惑の中で倒れた人が、再び（霊的な）「足」で立てるように助けることを求められています。まず、「御霊の人」とはだれでしょうか（ガラテヤ6:1参照）。それは、聖霊が内に住んでおられ、御霊によっていのちを持ち、そのゆえに神の子どもである人なら、だれでもそうだ、というわけではありません。むしろ、御霊によって歩み、御霊に導かれてもいる人のことです。御霊の人とは、教会の役職者のことではなく、御霊によって形づくられている人のことです。その人にとってはキリストがいのちであり、そこには御霊の実がはっきりと見て取れます。御霊の人は、過ちのない人ではなく、御霊と肉の対立において御霊の側に立っている人です。

つまづいたキリスト者は、信仰の家族である霊的な仲間から助けを受けるべきですが、その人は、霊的な兄弟姉妹とは異なる「肉の人」とは呼ばれていません。一度の過ちによって、自動的に肉的なキリスト者になるわけではないのです。「過ち」や「違反」は、私の生涯全体を特徴づけるものではありません。（そうなるのは、私の思いの世界がすでに長いこと誘惑に屈していて、その結果、実際につまづいてしまった場合でしょう。）

ガラテヤの人々は、信仰に入ったとき、御霊によって始めました。しかし彼らは律法に服そうとしたので、パウロは彼らに警告します。そのようにし

て、自分たちの罪深く腐敗した肉の力によって成熟し、完全になろうと試みることのないように、と。律法の枠組みの中では、神の御霊ではなく、肉が活発にされるのです（ガラテヤ3:3）。実際、ガラテヤの人々に起こった結果は、互いに猛獣のようにふるまうことでした。聖霊の働きは、残念ながらあまり見られませんでした。

パウロはコリントの人々を、肉の人と呼んでいます（コリント第一3:1-3）。彼らはすでに何年も前に信仰に入っていました、霊的な成熟はほとんど見られませんでした。コリントの状況は、私たちもよく知っています。争いと分裂を特徴とするこうしたふるまいの総体が、彼らを肉적인キリスト者にしていたのです。

肉적인キリスト者は、多かれ少なかれ自分の肉（感覚的なもの、この世のもの、自分の考え、思いつき、力）に導かれています。その人は、肉の行いやわざと本気で戦おうとはしません。その戦いは、罪の告白（ヨハネ第一1:9）と新たな献身（ローマ6:13、12:1-2）によって、また私たちを変えてくださる聖霊の力ある働きによってのみ行われるのです。

しかし、すでに何十年も信仰を持っていながら、なお明らかな自己中心に特徴づけられているキリスト者は、自分が肉적인であることを示しています。その人は、コリントの教会の多くの人々がそうであったように、新しく生まれています。しかし、新生を経験し、聖霊を持っても、長い期間、あるいは生涯にわたって、肉の思いを抱き続けることがありうるのです。それは、さばきのときに明らかになります。そのとき、肉のわざはすべて燃え尽き、その人自身は「火の中をくぐるようにして」、いわばぎりぎりのところで救われるのです（コリント第一3:15）。

この問いにおいては、霊的な成長が大きな役割を果たしています。霊的であるとは、信仰において成熟し、大人であることを意味します。「靈性⁷⁴」の一つの前提は、時間です。コリント人への手紙第一2章15節で**霊の人**と呼ばれているものになるには、時間がかかるのです。からだの発達に時間がかかるよ

74. ここでの「靈性」は、「現代的な宗教性」という意味で理解してはなりません。むしろ単に、「靈的な成熟」、「靈的な思い」、あるいは「靈的なあり方」のことです。引用であるため、本文中の該当する言葉は変更していません。

うに、霊的な成長にも時間が必要です。新しく生まれたとたんに霊的になる人は、だれもいません。霊の人になるまでには時間がかかるのです。」⁷⁵

12.25 御霊と肉の対立の本質

御霊と肉の対立という一本の赤い糸を、最後までたどってみましょう。御霊と肉は、私たちの生活において、日常において、また互いの関係において、敵対し合っています。これは、私たちが目標に到達するまで続きます。これはほこりをかぶった理論ではなく、すべてのキリスト者の生活経験です。御霊と肉は、その実によって紛れもなく見分けることができます。両者は、私たちの生活の主導権をめぐって戦っています。私たち自身は、いつでもこの対立のただ中に立っています。私たちがすること、しないことのすべてが、この二つの源泉のどちらかによって養われているのです。言い換えれば、私たちのからだや思いのあらゆる動きは、その原動力とエネルギーを、二つの源泉のどちらかから得ているのです。最終的には、私たちが決めるのです。私たちは「はい」か「いいえ」かを言うのです！「この戦いにおいて当人たちが担う特別な役割は、受け身でも中立でもありません。彼らは、この戦いの行方を決める決断を下さなければならないのです。御霊によって歩むことには真剣な決断が伴います。しかしそれは、何かを成し遂げるために、途方もない抵抗に打ち勝とうとして意志を強く奮い立たせるような決断ではありません。むしろキリスト者は、御霊と神の働きに自分をゆだね、ただその導きに従うよう招かれているのです。」⁷⁶

新しい生き方の構想とは、神の御霊が私たちのうちで、神に喜ばれることを成し遂げてくださる、ということです。その基準となるのは、もはやモーセの律法ではなく、キリスト、あるいはキリストの律法です。私たちは今や、自分自身をではなく、キリストを喜ばせるために自由なのです。御霊によって、その力のうちに歩むとは、将来に向かって種を蒔き、いつの日か永遠のいのちを刈り取ることを意味します（ガラテヤ6:8）。

75. アーノルド・G・フルクテンバウム（Arnold G. Fruchtenbaum）、*Gesetz und Gesetzlichkeit*、ヒュンフェルト（Hünfeld）、2010年、109ページ。

76. チャールズ・B・カウザー（Charles B. Cousar）、*Galatians*、138ページ。

「キリストの勝利を自分に当てはめ、それを汲み尽くすには、ただ一度の信仰の行為以上のものがが必要です。信仰の姿勢そのものが必要なのです。それは、神を絶えず当てにすることです。日ごとに、時間ごとに、瞬間ごとに。そして、今この瞬間に神を当てにすることは、次の瞬間には足りないのです。『御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。』」⁷⁷

肉は下へと引っ張ります。今ここで満足と充足を求めるように引っ張るのです。肉は絶えず罪へと傾いています。御霊は上へと、キリストへと引き上げます。上へと引き上げていただくではありませんか！グライダーは自分で離陸することはできません。ただ舵を取り、風を利用することができるだけです。グライダーは上へと引き上げてもらわなければならないのです。ですから、上にあるもの、キリストがおられるところにあるものを思おうではありませんか！

77. W・イアン・トーマス (W. Ian Thomas) 、*Tote können nicht sterben*、111ページ。

13. 新しい人と古い人：古いものは過ぎ去り、新しいものが生まれた

パウロが**新しい人**について語っているのは、三回だけです。一回はコロサイ人への手紙で、二回はエペソ人への手紙です。**新しい人**とは、神がキリストを通して成し遂げられたことの縮図です。神の救いのみわざは、栄光を受けた人の子を手本として**一人**の新しい人を造り、同時に**多くの**新しい人々を造るのです！

この人々は、新しい行動規範に自分を合わせることによって、ただ違った者になろうとしているものではありません。そうではなく、彼らは実際に新しい創造なのです。神が最初の人を造られたのと同じように、新しい人の創造も現実なのです！この根本的な変化、古いものから新しいものへのこの交換は、内側から起こります。それは心の変化であり、そこからまったく新しいもの、すなわち神ご自身のいのちが生じてくるのです。

新しい人は、贖われた罪人が今キリストのうちにあってなったものを体現しています。この言葉を用いているパウロの二つの手紙は、**キリストのうちに**ある私たちの新しい救いにおける立場の、さまざまな側面を描いています。こうした受けるに値しない数多くの救いの側面の総体を、**新しい人**と呼ぶことができるでしょう。**新しい人**という言葉が出てくる本文は、次のとおりです。

「……こうしてキリストは、平和をつくり、二つのものをご自分において一人の新しい人に造り上げるためでした。」

エペソ2:15

「……あなたがたは、以前の生活について言えば、欺きの欲望によって腐敗していく古い人を脱ぎ捨て、あなたがたの心（あるいは、思考力）の霊において（あるいは、霊によって）新しくされ、真理に基づく義と聖において神にかたどって造られた新しい人を着たのです。」

エペソ4:22-24

「互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは古い人をその行いとともに脱ぎ捨て、新しい（人）を着たのです。新しい人は、それを造られた方のかたちにしがって新しくされ続け、真の知識に至ります。そこには、ギリシア人もユダヤ人もなく、割礼のある者もない者もなく、未開の人も、スキタイ人⁷⁸も、奴隷も自由人もありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」

コロサイ3:9-11

これらのみことばを詳しく調べる前に、ガラテヤ人への手紙ですでにしたように、この二つの手紙についても、数多くの救いの側面を集めてみましょう。

13.1 エペソ人への手紙における新しい人

- 聖なる者（1:1、4）
- 祝福された者（1:3）
- 選ばれた者（1:4）
- 傷のない者（1:4）
- 神の子とされていること（1:5）
- 恵みを受けた者（1:6）
- 証印を押された者（1:13）
- 生かされた者（2:5）
- 天上に、つまり天の世界に、ともに座らせられた者（2:6）
- 救われた者（2:8）
- 私たちは、キリスト・イエスにあって造られた**神の作品**（神の造られたもの、神の被造物）です（2:10）。
- 私たちは、遠く離れていた者として、近い者とされました（2:13）。
- 私たちは**一人の新しい人**に造られました（ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つにされたのです）（2:15）。

78. 黒海沿岸の騎馬遊牧民族に属する人のこと。

- 神と和解させられた者（2:16）
- 御父に近づくことのできる者（2:18）
- 同じ国の民（2:19）
- 神の家族（2:19）
- とともに相続する者（3:6）
- とともに一つのからだに連なる者（3:6）
- 約束にとともにあずかる者（3:6）
- 神の御霊によって**内なる人**を強められた者（3:16）
- キリストがその人の心のうちに住んでおられます（3:17）。
- 神の満ちあふれる豊かさにまで満たされた者（3:19）
- 光の子ども（5:8）。

13.2 コロサイ人への手紙における新しい人

- 聖なる者（1:2、22）
- 光の中にある相続分にあずかる資格を与えられた者（1:12）
- 暗やみの力から救い出された者（1:13）
- 愛する御子のご支配の中に移された者（1:13）
- 御子のうちにあって贖いを持っている者（1:14）
- もろもろの罪の赦し（1:14）
- 和解させられた者（1:22）
- 傷のない者（1:22）
- 非難されるところのない者（1:22）
- **私たちのうちにおられるキリスト**、栄光の望み（1:27）
- **キリストにあって成熟した（完全な）者**（1:28）
- **キリストにあって満たされた者——満ち満ちた状態にされた者**（2:10）
- キリストにあって（霊的に）割礼を受けた者（2:11）
- キリストにあってともによみがえらされた者（2:13、3:1）
- キリストとともに死んだ者（2:20、3:3）
- **キリストは私たちのいのちです**（3:4）。
- 神に選ばれた者（3:12）。

この印象深い「救いの目録」は、キリストにある新しい人とは何であるかを、明るく照らし出しています。

13.3 エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙における古い人

古い人とはだれであり、何であるかを説明しようとするなら、これらの手紙はそれについても手がかりを与えてくれます。

エペソ人への手紙

- 背きと罪の中に死んでいた者（エペソ2:1、5:6参照）
- 空中の權威を持つ支配者によって操られ、動かされていた者（2:2）
- 不従順の子ら（2:2）
- 肉の欲によって支配されていた者（2:3）
- 生まれながら御怒りを受けるべき子ら（2:3）
- キリストから離れていた者（2:12）
- イスラエルの民から除外されていた者（2:12）
- 約束の契約については他国人であった者（2:12）
- 望みのない者（2:12）
- この世にあって神もない者（2:12）
- むなしい心で歩んでいる者（4:17）
- 知性において暗くなっている者（4:18）
- 神のいのちから遠く離れている者（4:18）
- 心が頑なになっている者（4:18）
- 健全な感覚を失った者（4:19）
- キリストと神との御国を受け継ぐことのない者（5:5）
- （道徳的に）まったくの闇（5:8）。

コロサイ人への手紙

- 暗やみの力の下にある者（1:13）
- （神から、また神が望まれる人間らしさから）離れている者（1:21）
- 心において神に敵対している者（1:21）
- 和解させられていない者（1:22）

- 不従順の子ら（3:6）。

これで、古い人と新しい人の違いがはっきりと定められました。古い人とは、全面的な救いの転換が起こり、神が贖いのみわざにおけるご自分の創造の行為によって新しい人を造られる前の、古い生き方のことです。ところで、新しい人は、古い生活とは対照的な、単なる新しい生き方や、新しい、あるいはより良いふるまい方を体現しているのではありません。イエスと何のかかわりもないのに、強い自己訓練によって自分の生活をより良く変えることのできる人々もいます。彼らは、「新しい人」である多くのキリスト者よりも、道徳的にすぐれた生き方さえしています。しかし、肉のうちにある人は、道徳的に良いふるまいはできても、肉のうちにあるかぎり、人を喜ばせることはできても、神を喜ばせることはできません。ここで私たちが扱っているのは、単なるふるまいではなく、別の次元の変化です。また、人間の改良が問題なのでもありません。問題なのは本当の新しい創造、すなわち人のうちに新しいいのちが造り出されることです。この新しいもの、すなわち新しいいのちとは、具体的には一人の人格、キリストです（ヨハネ第一5:11-12、コロサイ3:4、11）。古い人については、残念ながら、神の目から見て、もはや何一つ役に立つものはありませんでした。

13.4 新しい人の創造の物語

新しい人は、神のご性質という基準に従って、つまり義と聖と真理のうちに造られています。実際に生まれたのは、単なる新しい行動様式ではなく、一人の新しい人なのです。この二つは切り離すことができません。新しい人は、新しい道徳的、倫理的なふるまいも持っています。それは、その人が道徳的、倫理的な面でも新しくされたときに初めて可能になります。それはその人の心、良心、感情、霊、思い、魂にかかわります。これらはみな道徳と倫理にかかわり、それを決定づけるものです。

これらのみことばを読むと、最初の人の創造の物語が思い浮かびます。そこには少なくとも一つの並行関係があるからです。アダムは、神のかたちに、神の似姿に従って造られました（創世記1:26-28）。「神である主は、大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きた

魂となった」(創世記2:7)。この創造の過程によって、人は動物とは異なり、霊とたましいとからだから成る被造物となりました。この三つの側面を挙げるのは、人間論の問題を提起するためではありません。ただ、人が神のかたちを担う者として、霊をも持っていることを示すためです。そのような者として、人は神と交わり、神を信じ、神に祈ることができるのです。

キリストにある新しい人もまた、その人を造られた方のうちに、それに対応するもの、あるいはその手本を見いだします。だれが新しい人を造ったのでしょうか。神が造られたのです。新しいものを造ることができるのは、神だけです。しかし、太古の歴史とは違う点もあります。人の新しい創造は、人の全面的な罪深さと道徳的な腐敗によって必要となりました。ですから新しい人は今、それとはまったく反対のもの、すなわち義と聖と真理によって特徴づけられています。それは、地上で人として生きられたイエスの生涯にも見られたものです。これは私たちの日々の生活にとって特別な意味を持っています。この惑星の上では、古い人々と新しい人々がまだともに生きているからです。

つまり、神はアダムの鼻にいのちの息を吹き込まれました。それによって、土から造られたからだ、生きた存在、一つの人格となったのです。この出来事には、神の御霊もかかわっていました。ですから、アダムを人格とし、霊を持つ存在としたのは、神の息だったのです。さて、人の新しい創造においては、アダムの創造になぞらえて言えば、キリストのいのちがいわば私たちのうちに吹き込まれるのです(ヨハネ20:22も参照)。私たちのうちで、このいのちは私たちの人格、私たちの「私」と結びつきます。ですから、私たちについて、私たちは新しい人である、とすることができるのです。

新しい人は、一人ひとりの個人のためのいわば代表のようなものです。言い換えれば、新しい人とは、キリストにある新しいHans-Jörgであり、新しいクリスティーネ(Christine)なのです。この新しい人にとって決定的なのは、私たちのうちに生きておられ、私たちがそのうちに生きているキリストです。この方こそが本当に新しいものなのです。キリストのいのちが私たちのうちで脈打っています！キリストの姿は、内に住まわれるキリストによっ

てのみ形づくられます！ほかの何ものも（律法も、規則も、決意も、努力も、教育も）、私たちのうちに生きておられるこのキリストに取って代わることはできません。

イエスのうちには、ここに挙げた三つの本質的な特徴（義、聖、真理）が完全に存在していました。イエスは十字架において、そもそも新しい人の創造を初めて可能にしてくださいました。古い人のあらゆる結果、その勘定のすべてを、十字架の上で引き受けてくださったからです（ローマ6:6）。これによって初めて、まったく新しいものへの道が開かれたのです。今やキリストご自身が、新しい人がそれにかたどって造られたかたちです。キリストは原型であり、同時に写しでもあります。写しであるというのは、今キリストご自身が私のうちに住み、この新しいいのちであるという意味においてです。「私たちは、土で造られた者のかたちを持っていたように、天に属する方のかたちも持つことになるのです」（コリント第一15:49）。これは、私たちをイエスのかたちへと変えることが神のご計画であると証ししている多くのみことばの中の、一つにすぎません（たとえば、ローマ8:29、コリント第二3:18、ヨハネ第一3:2）。天に属する方のかたちには、最終的にはからだも含まれます。しかし、イエスのかたちへと造り変えられる過程は、新しい人が創造された（あるいは生まれた）日に、始まったばかりなのです。そして、そこへ至る道はキリストご自身を通っています。私たちのうちにおられるキリストこそが新しいいのちであり、この意味で「新しい人」なのです。

13.5 多くの者が一人の新しい人となる

新しい人という言葉は、エペソ人への手紙では2章15節に初めて出てきます。「……こうしてキリストは、平和をつくり、二つのものをご自分において一人の新しい人に造り上げるためでした。」ここで問題になっているのは、ユダヤ人と異邦人が一人の新しい人へと結び合わされることです。ここでは、キリストご自身が新しい人の創造者です。ここでは、神の神殿であり、御霊による神の住まいである世界中の教会が中心に置かれています。そのため、新しい人としてのあり方の根本的な特徴として、一致と共同性を強調する側面が前面に出てきます。ここで問題になっているのは、今やすべて

のキリスト者に共通しているものです。そしてこの意味でも、この新しい共同体は、最終的にはキリストご自身なのです。コリント人への手紙第一12章12節に「……キリストもそれと同じです」とあるとおりです。キリストはからだであり、同時にかしらでもあるのです。

新しい人は、いつも単数形で語られています。この意味で、問題になっているのは新しい人間共同体でもあります。キリストはそのかしらであり、初めです（コロサイ1:17-18）。この共同体は、墮落したアダムをかしらとする人間共同体と対照をなしています（ローマ5:12-21）。キリストの完全なご性質、つまり新しい人のご性質を、その生き方において映し出すためには、すべての信仰者が必要なのです。

「救いという神の創造のみわざにおける個人への焦点は、エペソ人への手紙2章10節に表されています。そこでパウロは、一人ひとりの人について『キリスト・イエスにあって造られた』と言っています。より共同体的な視点への転換は、2章11～22節で起こります。アダムとキリストのひな型論は、この段落の背後にもあります。しかしエペソ人への手紙2章15節の焦点は、神の前での個人の立場や、『アダムのうちにあること』と対比される『キリストのうちにあること』よりも、むしろ『キリストのうちに』ある人々にとって、人と人との次元で成り立っている新しい関係のほうに置かれています。ユダヤ人と異邦人は和解させられ、キリストのうちでともに『新しい人』を形づくっています。『新しい人』とは一つの新しい社会であり、そこではすべての人が自由に、また等しく神に近づくことができ、天上に（つまり天の領域に）移されているのです（2:5-6）。『新しい人』についての神の設計によれば、その肢体の間には分裂も敵意もなく、ただ平和だけがあるのです（2:16）。」⁷⁹

新しい人は、私たちの民族的な出自とも、社会的、宗教的な背景とも、またかつてそれに結びついていたあらゆる利点と不利な点、あらゆる結果とも、もはや何の関係ありません。そうした関係やつながりは、すべて終わりま

79. グレグ・ヘリック（Greg Herrick）、*Old Man and New Man in Paul*、1999年、5ページ。

した。新しい関係やつながりが生まれたのです——神の家の中に、教会の中に、キリストのからだの中に。私たちは、いわばこの新しい人のうちに、新しい「わが家」を見いだしたのです。

さて、私たちは新しい人の個人的な側面、つまり私たちが——一人ひとり個人的に——何者になったのかということにも関心を向けます。

13.6 一人ひとりの人格が新しい人となる

新しい人の「原型」、その手本は、人としてのキリスト・イエスです。この方があらゆるものの尺度です。それでもこの方は、一人ひとりの人の人格を形づくっている個人的な特徴をすべて平らにならし、画一化し、消し去ってしまうような、規格化された人間ではありません。いま述べた、共同性と一致を強調する側面からは、もしかするとそのような印象を受けるかもしれませんが。しかし、新しい人は多くの新しい被造物から成っているのです（コリント第二5:17参照）。神の造られた世界が多様性と個性にあふれていることは、神の全能のあかしであり、同時に神の知恵と技のあかしでもあります。どの葉も、ほかの葉とまったく同じではなく、雪の結晶でさえ、その結晶構造において、ほかの結晶と同じものはないと言われます。人間についても同じです。外見においても、人格においても、ほかのどれかと100パーセント同じ人はいません。

同じように、一人ひとりの人の個人的な人格は、新しく生まれるときにも保たれます。人が信仰に入っても、外面的には（そのふるまいにおいては）初めのうちほとんど何も変わりません。しかしその人の内側では、途方もないことが始まっています。神のことばの種、いわば神のDNAが植えつけられ、それによってその人は新しく生まれるのです（ペテロ第一1:3、23）。

同じ人が、今や取り替えられたいのちを持っています。「**もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです**」（ガラテヤ2:20）。ここで、もはや生きていない古い「私」は、古い人と同じものと見なすことができます。しかし今もなお「私」は存在しています。そうでなければ、その人格はもは

や存在しないことになるでしょう。この「私」が今や新しい人であり、新しい「私」であり、今私のうちに（私の内側に）生きておられるキリストのうちにある私なのです。ですから「**私は**生きている。そしてキリストが**私**のうちに生きておられる」とは、新しい人を表しています。その人は以前と同じ人格でありながら、今やキリストご自身によって決定づけられ、キリストご自身によって満たされているのです。

「新しいいのちが、どうしても必要でした。**私**が何者であるかということに関しては、あらゆる努力、努力しなければならないというあらゆる必要は、終わりを迎えました。私は自分の『私』に敬虔さを与えることはできません。『キリストにある人』（コリント第二12:2)においては、肉と罪はもはや存在しません（私がキリストにあってそうである新しい創造においては）。さらに言えば——最も本当の意味で——『私』（古い人という意味で理解された『私』）は、もはや存在しないのです。『私はキリストとともに十字架につけられ、死にました。それにもかかわらず私は生きています。しかし、私ではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。』あるいは、より正確に言えば、『私は生きている。しかし、もはや私ではない。』この『私、しかしもはや私ではない』ということこそ、キリスト教信仰を実践に移すことの奥義であり、力なのです。**私は生きています**。なぜなら、言うまでもなく、その人格（その個人、つまり一人ひとりの人間）は同じままだからです。これは、プラトンの神秘主義でも、存在の大海に溶け込む汎神論的な没入でもありません。私の心を満たす喜びも、**私の**いのちを照らす光も、**私の**ものです。それは完全に**私の**ものなのです。そうではなく、私はこれから、本当にそう呼ぶことのできる、真の永遠のいのちを生きるのです。使徒が言うように、私は初めて『まことのいのち』を持つのです（テモテ第一6:19）。

キリストの平安、キリストの喜び、キリストのいのち、キリストの御霊が、今や**私の**ものです。キリストの志、キリストの目標、キリストの関心が、今や**私の**ものです。御父の愛が、今や**私の**ものです。キリストの今の時の拒絶も、キリストの将来の栄光も、同じように**私の**ものです。そしてこれらすべては、愛の力のうちにあるのです。その愛によって、キリストはご自分の勘

定とご自分の支払いにおいて、私を完全に自由にしてくださったのです。」

80

新しい人（つまり、私のうちにおられるキリスト）は、私たちの救い主が個人的にご自分を犠牲としてささげられたことの結果であり、その苦しみの実です。この新しい創造は、永遠にイエスの愛によって刻印されているのです！

13.7 新しい人とは何か？

コロサイ人への手紙3章11節には、新しい人とは何であるかについての具体的な説明があります。

キリストがすべてであり、すべてのうちにおられる（のです）。

第一に、キリストは新しい人の手本です——その創造においても、その生き方においても。キリストは新しい人の生きる場であり、その望みです。しかしキリストはまた、私たちのうちにもおられます。それが新しい人です。そしてそれは、コロサイ人への手紙のメッセージでもあります。あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望み（1:27）。キリストは私たちのいのちです（3:4）。

さて、キリストご自身を新しい人と呼ぶなら、創造について語ることはできません。キリストは造られたのではなく、永遠の方です。キリストは神だからです。何かほかのものが造られなければなりませんでした。それは以前には存在しなかったからです。人は、キリストのいのちとそのご性質へのあずかりを受けることによって、新しい創造となるのです。キリストのいのちが、私の最も内なる部分に植えつけられます。神がアダムの鼻にいのちの息を吹き込まれたように、キリストのいのちが、いわば私の個人的な人格の中へと沈め入れられるのです。こうして私たちは「満ち満ちた状態にされた」（コロサイ2:10、ER〔ドイツ語聖書翻訳〕）、つまり完成されたのです。キリストのいのちは今、私たちが生まれたままの存在全体を、満たし、あふれさせているのです。「All of HIM in all of me」——「私のすべてのうちに、

80. F・W・グラント（F. W. Grant）、*Deliverance: What is it?*

キリストのすべてを」⁸¹。こうして私は、言うまでもなく新しいキリストになるのではなく、むしろ新しい人、新しいHans-Jörgになるのです。「新しい」と言えるのは、その人のいのちが今やキリストによって満たされているからです。この新しいいのちが、その人の内なる存在全体（内なる人、心、思い、良心、たましい）をとらえているのです。それはまず第一に感情のことではなく、神が実行し、成し遂げてくださった救いの事実なのです！

「古い人、それはアダムでした。あるいはより良く言えば、アダムと結ばれた私たちでした。新しい人、それはキリストです。あるいはより正確に言えば、キリストと結ばれた私たち自身です。」⁸²

アーサー・C・カスタンス（Arthur C. Custance）⁸³は、この新しい創造の過程を、信仰者のうちにおけるキリストの受肉として描いています。永遠の御子が人となられたときに肉と血をとられたように、今度はキリスト・イエスが、まことの人として、霊的な（超自然的な）意味で私たちのうちに生まれます。それは、これから成長し、私たちの生活の中で形をとっていくためです（ガラテヤ4:19も参照）。こうして、一人ひとりの人は新生において「自分自身のクリスマス」を経験するのです。そして最終的には、ただこの点においてのみ、イエスが人となられたことは、その人にとって意味を持つのです。

「キリスト・イエスにある信仰者は、それまで一度も持ったことのない財産の所有者となります——神のご性質にあずかる者となるのです。造られたのではない神の永遠のいのちが、その人の人間的な人格の最も内なる部分に植えつけられ、その人の本質と存在の全体が、新しいいのちの神的なエネルギーによって脈打つようになります。新しい誕生とは、知性と感情と意志を包み込む新しい本性が与えられることです。その本性は、人のうちにまったく新しいいのちを生み出し、まったく新しい領域で生きることができるように

81. W・イアン・トーマス（W. Ian Thomas）、*The Indwelling Life of Christ*。

82. C・K・バレット（C. K. Barrett）、H・P・メデマ（H. P. Medema）、*Romeinen 7 enzovoorts*、79ページに引用。

83. アーサー・C・カスタンス（Arthur C. Custance）、*Man in Adam and in Christ*、273ページ。

するのです。」⁸⁴

13.8 新しい創造

ここでもう一度、はっきりと意識しておきましょう。実際に、そして実質的に（霊的に）、何か新しいものが生まれ、今や信仰者のうちに存在しているのです。「新しい人」という言葉と並んで、ほかにも関連する呼び方があります。

「私たちは**神の作品**（傑作、造られたもの）であって、キリスト・イエスにあって造られたのです」（エペソ2:10）。これはどちらかと言えば個人的な側面です。それは、神が最初の創造にご自分の愛と知恵と神の力を注ぎ込まれたのとまったく同じように、新しい創造についてもそれが当てはまることを示しています。新しい創造では、神の愛がいつそうははっきりと表れています。必要だったのは神の力ではなく、神の限りない愛だったからです。御子の死（蒔かれた一粒の麦、新しいいのちの種によって象徴されています）が、新しい実を生み出すのです。

「ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は**新しい創造**です。古いものは過ぎ去りました。見よ、**新しいもの**が生じたのです」（あるいは「すべてが新しくなった」[エルバーフェルト訳〔ドイツ語聖書翻訳〕]、コリント第二5:17）。実際、古いものは過ぎ去りました。たとえ今日もなお、私たちのうちに古い本性があるとしてもです。十字架は古い人の終わりです。神にとって、私たちは今すでに「キリストのうちに」あって完全です。神は、古いものをもはやご覧にならないのです。

「キリスト・イエスにあっては、割礼を受けているかいないかは何の意味もなく、大切なのは**新しい創造**です。この基準に従って歩む人々すべての上に……」（ガラテヤ6:15-16、シュラッター訳2000年版〔ドイツ語聖書翻訳〕）。新しい創造は、古い創造やモーセの律法を基準としない、別の生き方をもたらします。むしろこの創造は、私たちを内側から整え、私たちがどのように生きるべきかを示してくれます。私たちは、主キリストを受け入れ

84. ルース・パクソン（Ruth Paxson）、*Life on the Highest Plane*、192ページ。

たのですから、そのように、キリストにあって歩むべきなのです（コロサイ2:6参照）。

キリストは、すべての造られたもの（新しい創造をも含む）より先に生まれた方であり（コロサイ1:15）、死者の中から最初に生まれた方として、その初めであり創始者です（コロサイ1:18、黙示録3:14）。したがって、新しい創造ははっきりとキリストにさかのぼります。それは、死が打ち負かされたことの結果だからです。新しい創造は、キリストの朽ちることのないいのちの力によって、死の向こう側で始まります（ヘブル7:16）。ですから、キリストにある新しい人もまた、死の向こう側にあって、滅びることがなく、失われることがなく、朽ちることのない、永遠のものなのです。

13.9 何が新しく造られたのか？

これらの節では、正確に何が新しく造られたのかは述べられていません。人のうちに「並行するもう一人の人」が造られ、その結果、一人の人のうちに今や二つの人格が存在する、というわけではありません。一人ひとりの人の救いの転換において、古い人の歴史、あるいはその存在全体は、ゴルゴタの十字架で終わらされました。古い人と新しい人が、並んで存在し続けているわけではありません。**新しい人が古い人にとって代わったのです。**新しい人とは、私たちが今キリストのうちにあって——個人としても、またともに——なったものの縮図なのです。

新しい創造は、さしあたり人の内面に限られています（しかしそれは生き方の中に表れてきます）。ですから「内なる人」ということが語られているのです（エペソ3:16、ローマ7:22、コリント第二4:16、ペテロ第一3:4参照）。それは新しいいのちと新しい人に対応しています。からだが新しい創造にあずかるのは、将来の変貌、あるいは復活のときになってからです。最終的には、何ものもこの新しい創造から除外されることはありません。私たちは復活において、神が望まれる人間らしさのあらゆる側面において、完全に、そして余すところなく完全な者となるからです。そのとき私たちは、からだにおいても、たましいにおいても、霊においても、主イエスと同じようになり

ます。ただしそのときには、地に属する者としてではなく、主と同じように天に属する者としてです。

まとめると、こう言うことができます。私たちは——人格に関して言えば——一方では同じ者のままであり、しかし同時にまったく新しくされたのです。神は、私たちを人格として、ありのままの姿で持とうとされます（つまり、神の被造物として生まれたとおりの者として、また自分自身のアイデンティティを持つ者として）。しかし神は私たちを、ただ「キリストのうちに」あってのみ、つまりキリストのうちに移された者としてのみ受け入れてくださいます。そして神は、ご自身で私たちをキリストのうちに移すことによって、それを備えてくださいました（コリント第一1:30）。それによって神は、私たちをイエスの救いのみわざ全体の中にも「植え移して」くださったのです。キリストの死、埋葬、復活、昇天、栄化は、私たちにとっても有効です。私たちはキリストとともに天上に移されているからです（エペソ2:6）。

13.10 新しい人は新たにされる必要があるのか？

二つの手紙（エペソ人への手紙とコロサイ人への手紙）はどちらも、新しい人が絶えず新たにされることを強調しています。では、新しい人が古びて力を失ったり、それどころか死んだりする危険があるのでしょうか。

これについて、原則的なことを一つ述べておきます。何ものも、どんな被造物も、それ自体で、それ自体から存在しているわけではありません。造られて生きているものはすべて（新しい創造も）、創造者によって支えられ、保たれています（コロサイ1:17、ヘブル1:3、ネヘミヤ9:6）。私の心臓が（毎日8万回も）鼓動しているのは、被造物を保たれる神の力によるのです。造られたものは、神に依存しています！新しい人も同じです。新しい人は、その創造者であるキリストによって生かされているのです。

内なる人は、絶えず新たにされ、生かされなければなりません。キリスト者の霊的ないのちは、絶えず養われなければならないのです。キリスト者は、神の御霊によって、いつも力を増し加えられるべきです。その力は「内なる人の中へと」働きます（エペソ3:16の直訳）。この絶えざる刷新と活性化が

必要なのは、キリスト者がなお死ぬべき弱いからだのうちにあり、古いのちの残り（古い本性）をまだ身に帯びていて、その考え方がしばしばなおそれに影響されているからです。私たちは「すでに今」と「まだ」の中に生きています。刷新が必要なのは、キリスト者が墮落した被造世界の困難と苦しみさらされ、敵意に満ちた、惑わす世の中にいるからです。そしてとりわけ、刷新と活性化が必要なのは、魂の敵、初めから惑わす者であり人殺しである者が、信仰者に立ち向かってくるからです。

キリスト者は、緊張の場に置かれています。私たちのキリスト者としてのあり方は、日々さまざまな戦線で攻撃を受けています。こうした攻撃には一つの目的があります。私たちをそそのかして、生活をこの世に合わせさせ、古い人が生きるように、つまり信仰と従順を気にかけることなく、自分のために生きるようにさせることです。敵は、聖書の助けを借りれば正確に見分けることができます。私のうちには肉、すなわち古い本性があります。私の外には、神を気にもかけない世（人々と彼らの世界）があります。そしてさらに、悪魔またサタンと呼ばれる大いなる敵がいます。天ではもはや刷新は必要ありません。そのときには、これらの敵はもはやいないからです。肉は私たちの死ぬべきからだとともに終わりを迎え、世はその欲とともに過ぎ去り、悪魔は私たちの足の下に踏み砕かれるのです。

『**新しい（人）を着た**』という表現の中の『新しい』という言葉は、ギリシア語で **neos** です。これは単に別のいのちを指しているのではなく、まったく新しい種類のいのちを指しています。つまり、この『人の種類』は若さとみずみずしさのうちに示されており、そこには生きた成長の過程が前提とされているのです。問題になっているのは力強い若いいのちであり、それが日常生活の中で、成長し増し加わることによって形をとっていくのです。この成長の過程は、絶えざる刷新として描かれています。その刷新において、聖霊はこの新しい人に（テトス3:5）まったく新しい考え方と（新しい）特徴を与えてくださるのであって、古い人に若返りの療法を施すではありません。これらの特徴は、新しい人を造られた方のかたち、すなわち神ご自身とキリストのかたちと一致しています。神（エペソ2:10）もキリスト（2:15）も、新しい人に対して責任を負っておられるからです。神とキリス

トは、ともにこの新しい『人の種類』を形づくっている人々が、この創造のみわざをもっと自覚するようになることを望んでおられます——それは『知識に至る』刷新なのです。問題になっているのは、信仰者のうちに住んでおられるキリストが、彼らにとってすべてであるという事実です。『新しい人』とはキリストです。そのご人格の豊かさのすべてにおいて、信仰者のうちに形をとっていかれるキリスト、短く言えば、信仰者のうちにおられるキリストなのです。」⁸⁵

認識と考え方が新たにされます。人が信仰に入ったとき、その人のうちにはまだ古い罪深い思考の型とふるまいがあります。それはその人の肉のうちに残り続けます。しかしそれに対抗して神の御霊が働かれます。そしてその働きは、私たちの司令塔——決断が下されるその場所——から始まるのです。外なる人は、日々の生活の消耗の中で衰えていきます。しかし神のことは、私たちの内なる人（それが新しい人です）が日々新たにされることを保証しています（コリント第二4:16）。その人は、永遠に、つまりキリストご自身に目を向けることによって刷新を経験します。キリストの栄光が私たちの上に照り返し（コリント第二3:18）、私たちを強めてくださるのです（コロサイ1:11）。

13.11 新しい人：衣服のように着る

新しい人は、着る衣服のようなものです。古い人については、その逆のことが言えます。古い人は、衣服のように脱ぎ捨てたのです。『『着る』と『脱ぐ』』というたとえは、衣服を着替えることにかかわっており、アイデンティティの転換に照らした性格の変化を指しています。その人は、古い生活領域（神なし）を、新しい生活領域（神のもと）と取り替えたのです。」⁸⁶ 脱ぐことと着ることは、キリストが私たちの生活に入って来られた、私たちの救いの転換のときに起こりました。

85. G・H・クラマー（G. H. Kramer）、*Christus ons leven*、117ページ。

86. グレグ・ヘリック（Greg Herrick）、*Old Man and New Man in Paul*、1999年、7ページ。

古い人は、あらゆる点で過去のものなののでしょうか。それとも、そうではないのでしょうか。古い人について語っている三つの聖書箇所はすべて、その終わりを描いています。「十字架につけられた」か、「脱ぎ捨てられた」かのどちらかとしてです。どれも、一度限りの、完了した行為を表しています。衣服を脱ぐことは一時点で起こりますが、刷新は絶えず起こります。刷新があるからこそ、この新しい衣服は新しいままであり続け、すり切れたり汚れたりしないのです。

「馬子にも衣装」と言います。衣服は、人から見える部分です。そしてパウロがここで言おうとしているのは、こういうことです。新しい人は単なる賢いアイデアや理論ではなく、いのちを造り出し、新たに神の力が本物の傑作を生み出したのだということが、はっきり見えるようになるべきなのです。その証拠は、新しい人が日常生活の中で目に見えるようになることです。新しい人は今、自分の生活を、その贖い主であり創造者である方に向けています。新しい人は主イエス・キリストを着るのです（ローマ13:14）。ですから大切なのは、新しい人がますます目に見えるようになることです。キリスト（そのご性質、その愛）が、これまでの古い人の自己中心的なあり方を押しのけていくべきなのです。

新しい人の道は、神の道しるべに囲まれています。それは、新しいいのちがどのような表れ方をし、どのような表れ方をしないのかを私たちに示しています。重点は、生活態度の造り変えに大きく置かれています。信仰に入った人は、その生活を古いものから新しいものへと一瞬で変えるわけではありません。もしそうだとしたら、刷新も、新しい人の生活がどのようなものかを示す新約聖書の戒めさえも、必要なかったでしょう。

私たちは、たとえばキリストに似た生活を目指して、無理やり歯を食いしばって努力することによって、新しい人になる必要はありません。そうではないのです！大切なのは、私たちがキリストのうちにあってすでに**そうである**もの、すなわち義であり、聖であり、真実であることを、生活の中で実行に移すことです。

新しい人であるという特権は、そのように生きる義務をも伴います。私たちは、自分がそうであるものになるべきなのです！新しい人であり、同時に新しい人になる——それは逆説のように聞こえますが、そうではありません。一方は救いの直説法——私たちが神の前で揺るぎなくそうであるもの——です。もう一方は救いの命令法であり、この存在から出発して、それにふさわしく生きるよう私たちに求めるものです。この二つの側面のどちらも、もう一方と対立させたり、釣り合いを崩したりしてはなりません。立場、つまり救いの直説法を、実際の実現よりも強調する人は、物事の釣り合いを崩してしまいます。聖書はしばしば、この両面を一息に語っています。それは、私たちがそれを（しばしば口実や言い訳として）神学的な曲芸によって切り分けたりすべきではないことを、はっきり示すためです。新約聖書にとって、救いにおける立場は、それが日常生活に及ぼす影響とまったく同じように重要なのです。この後者の事柄で意味されているのが救いの命令法、つまり神が望み、また可能にくださったように生きるために、全力を尽くして努めることなのです。

13.12 まとめ——一つのたとえ

聖書の真理を絵やたとえで表すことは、とても役に立つことがあります。聖書そのもの（とりわけ主イエス）も、霊的な真理をわかりやすくするために、絵やたとえを用いています。しかし、たとえには限界もあります。たとえは特定の側面をはっきりさせようとするものです。ということは、そのたとえに含まれるすべての側面が、それが説明しようとしている真理に当てはまるわけではない、ということでもあります。たとえや比較の中で挙げられていることには意味があります。それに対して、挙げられていないこと、触れられていないことは、重要ではないのです。

13.12.1 古い木

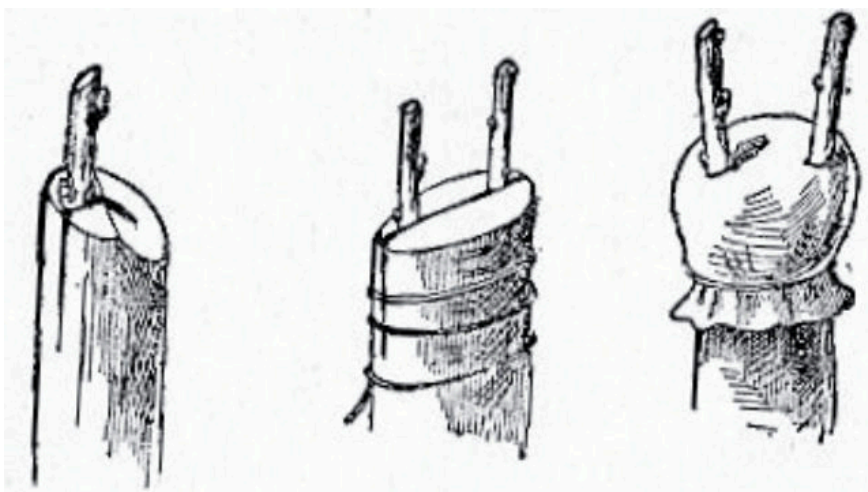
聖書は、人を何度か木にたとえています。典型的な例は、大王ネブカドネツァルです。彼は大きな力強い木にたとえられています。彼はその大きさと力のゆえに高ぶったので、神はその木を切り倒すことを決められました。ただ

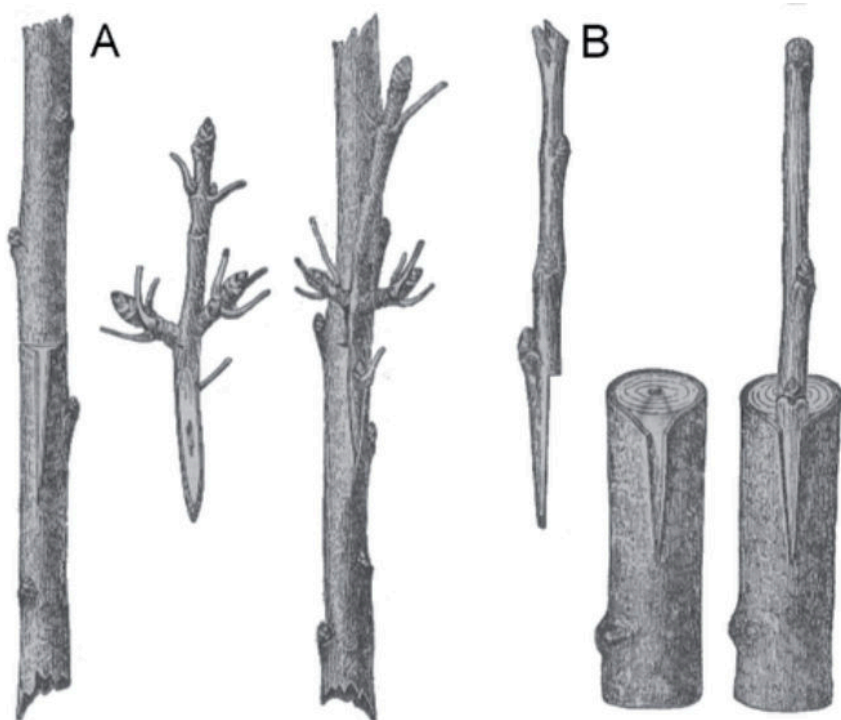
根株だけが残されることになっていました。王は死んだのではなく、しばらくの間、獣の心を与えられ、その後再び王となったのです（ダニエル書4章、士師記9:7-15も参照）。こうしてこの木は、たとえば言えば、神ご自身によって斧で切り倒されました。これは、神なしに生きる人、アダムの子孫の姿です。イエスは、良い実を結ぶ悪い木はない、と言われます（ルカ6:43）。言い換えれば、肉のうちにいる人々は神を喜ばせることができないのです。古い人は、良い実を結ばない木です。それは人類全体についても、一人ひとりの人についても同じように当てはまります（詩篇37:35）。そのような悪い木は、その実に関して言えば、切り倒されて火に投げ込まれる以外に値するものはありません（ルカ3:9）。それが私たちの古い人に起こったことです。古い人は十字架で断罪され、死刑の判決が執行されました。古い人は、いわば神の聖さのさばきの中で焼き尽くされたのです。それによって、私たちの古いのちは終わりを迎えました。それを終わらせたのは私たち自身ではなく、キリストです。私たちのために**身代わり**として死んでくださったのはキリストだったのです。もし私たちが文字どおり死んでいたなら、根も一緒に根絶やしにされていたでしょう。根は——私たちのたとえば——人格を表しています。それは、私が人間として、神の被造物として、何者であるかを体現しているのです。

13.12.2 新しい木

では、神の目的は何でしょうか。神は、私が水路のそばに植えられた木になることを望んでおられます。詩篇1篇で、正しい人についてそのように言われているとおりです（詩篇92:12、エレミヤ17:8参照）。私は良い実を結ぶ良い木になるべきです（マタイ7:17）。御霊の実を結ぶ木です（ガラテヤ5:22-23）。そのためには新しい木が必要です。それは植えられ、成長しなければなりません。そしていつか、強い根と良い実を持つ強い木になるためには、手入れと、何よりも水が必要です。私たちのたとえば、さらにもう一つの側面を表すことができます。私たちは、神のことばという朽ちない種によって新しく生まれました（ペテロ第一1:23）。この種は神の種であり（ヨハネ第一3:9）、人が回心した後、その人のうちで（たとえば言えば）芽を

出し、強い木になるまで成長します。この種はキリストご自身です（ガラテヤ3:16）。こうして私たちは、キリストご自身が**新しい人**であり、私たちのうちにあるキリストのいのちであるという事実との並行関係を得ます（コロサイ3:4、11）。新しい人の成長の可能性のすべてが、どれほど小さくても、この種の中に完全に含まれています。この人が今、開花し、成長し、増し加わり、広がっていくべきなのです。それは一瞬で起こるのではなく、絶えざる成長と絶えざる刷新によってのみ起こります。成長も、刷新も、力も、ただ神だけが与えてくださいます。新約聖書は別の文脈で、オリーブの木について語っています（ローマ11:16-24）。そこに別の若枝が接ぎ木され、古い木の上で成長し続けるのです。私たちが自分の人格にたとえた、あの切り株を思い浮かべてみましょう。今、この切り株に新しい若枝、すなわちみことばの種（キリストご自身）が接ぎ木されます。それが成長し、新しい木となることができるためです。この過程を、専門家は「接ぎ木による品種改良」と呼んでいます。





13.12.3 まだ生きている古い根

古い根（古い、しかし切り倒された木の根株）は、まだそこにあります。それどころか、まだ生きているのです。私たちのたとえば、それは古い人ではなく、むしろ私たちの肉——古い、腐敗した、罪深いアダムの本性——です。それが私たちの古いのち、古い人のいのちを特徴づけていました。これらの真理を繰り返すことで退屈させてしまうおそれがあるとしても、もう一度言うておきます。古い人は肉ではありません。古い人とはむしろ、私が信仰に入る前の、神なしの私の存在を体現しているのです。それに対して肉は、古い人の本性とあり方を表しています。これはまだ存在しています。私たちが生きているかぎり、この古い根は私たちのうちに見いだされるでしょう。そして、この根には再び活動し始めるという性質があります（ヨブ14:7-9）。この根株から、小さな若枝が生えてきます——悪い実、からだと肉の

わざと習慣です。神が新しい木の成長を配慮してくださる一方で、私たちには、地にあるからだの部分、つまり罪深い肉の部分を殺すようにという命令が与えられています（コロサイ3:5、ローマ8:13）。これは信仰によって、また御霊によって行われるべきです。私たちは、こうした若枝を雑草のように取り除き、枝を切り落とし、あるいは（そこからすでに再び小さな幹が育っている場合には）神の力という斧でそれを切り倒すべきなのです。雑草に徹底して取り組む「庭師」の務めは、私たちの責任の範囲に属しています。この働きにおいて、私たちは自分自身にゆだねられているではありません。神の聖霊によって、私たちは生き、歩むのです（ローマ8:13、ガラテヤ5:18）！

13.13 ただ信仰によって

これはただ、神の御子に対する信仰のうちに、またその信仰によってのみ起こります。この方は（パウロが言うように）「私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった」方です（ガラテヤ2:20）。信仰とは、神に依り頼むことです。信仰には、すべてをキリストに期待し、何一つ自分には期待しない姿勢が含まれています。たとえばローマ人への手紙8章13節やコロサイ人への手紙3章5節で描かれている「殺す」ことは、最終的には信仰によって起こるのです。そこには、罪に対して「いいえ」と言い、同時にキリストに対して「はい」と言うことが含まれています（ローマ6:13、19）。義人は（日々）その信仰によって生きます（ローマ1:17）。私たちは信仰によって神に近づき（ローマ5:2）、信仰によって立っています（ローマ11:20、コリント第二1:24）。私は信仰によって、キリストを私の心に住まわせます（エペソ3:17）。私は信仰によって堅く立っており、また堅くされていきます（ペテロ第一5:9）。この信仰を、私は今日働かせなければなりません。それが鍵です。信仰は感情ではありません。信仰にとっては、神が言われることが絶対的に真実であり、有効なのです。それは私の永遠の救いだけでなく、私の日々の生活にもかかわっています。信仰がなければ、神に喜ばれることはできないのです！

13.13.1 怠け者の庭師

箴言24章30～32節はこう言っています。「私は怠け者の畑のそばを、思慮に欠けた人のぶどう畑のそばを通り過ぎた。見よ、そこは一面あざみに覆われ、その地面はいらくさに覆われ、その石垣は崩れていた。私はそれを見つめ、心に留めた。私はそれを見て、教訓を受けた。」

接ぎ木された穂木（この新しい、品質の良い若枝はそう呼ばれます）のすぐ下から、古い新芽がまた生えてくることがよくあります。これは必ず切り落とさなければなりません。それは新しい若枝から水を奪い、さらに成長が進むと光をも奪ってしまうからです。

庭師がその務めを果たさないと、問題が起こります。肉が持っている独自の勢いを、甘く見てはなりません。肉を絶えず、あるいは繰り返し死に渡すのではなく、肉を養い、大目に見ていると、あちこちで古い若枝が伸びてきます。これは新しい木の成長に悪い影響を及ぼします。その成長は妨げられ、根はもはやキリストの中へと伸びていかず、木はもはや養分を受けられなくなります。まるでパウロも同じ絵を思い浮かべていたかのようです（コロサイ2:7）。

肉的で自己中心的な生活は、古い根から出た多くの若枝に囲まれた、枯れかけた木のようなものです。その若枝はあまりに高く伸びて、かつての新しい木がもはや見えなくなってしまうほどです。この新しい木のための水は、古い木の根から出た多くの若枝の中へと流れ込んでしまいます。木は病気になり、枝がまるごと枯れてしまうこともあり、その実は乏しく、小さくなってしまうことがあります。

少し前のことですが、私は驚いたことがあります。ジュースに搾ってもらったためのりんごを、拾い集めたり摘んだりしていたときのことです。一本の木に、二種類の違うりんごがなっているのを見つけたのです。それは接ぎ木の結果でした。以前の持ち主が、一本の木に二種類のりんごを実らせたいと思ったのです。私はすぐにキリスト者の生活のことを考えました。そこにも二

種類の異なる実が見られるのです——御霊が育ててくださる実と、肉が生み出す実です。

13.14 新しい人の未来

ここまで私たちは、過ぎ去っていく世の緊張の場にある新しい人を見てきました。その未来にも、短く目を向けておかなければなりません。新しい人の周りには、黙示録21章に描かれている将来の新しい創造の息吹が、すでに吹いています。私たちのうちでは、この新しい創造がすでに始まっています。私たちは、神の新しい創造の、いわば初穂なのです（ヤコブ1:18）。私たちはキリストにあって、すでに天上に（天の領域に）移されています（エペソ2:6）。神のことは、私たちの立場をそのように描いています。新しい人として、私たちは新しい創造の中に生きることになります。いつの日か、新しいからだをもって生きるのです。そのからだは、今私たちの内なる人に関してそうであるのと同じ、新しい創造の質にふさわしいものとなるのです（コリント第一15:35-57）。新しい人の未来は息をのむほどすばらしく、その創造者ご自身のように、この上なく栄光に満ちています。私たちのいのちであるキリストが現れるとき、私たちもキリストとともに、全宇宙の前で栄光のうちに現れるのです（コロサイ3:1-4）！

しかし、集合的な、あるいは共同体的な側面を忘れないようにしましょう。もしかすると、こちらのほうがいっそう重要なかもしれません。キリストを初めとし、かしらとする新しい人類が、新しい天と新しい地の住民となるのです。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです！

新しい人の救いの現実、ペンテコステに初めて誕生した新約聖書の教会によって体现されています。教会は（すべての信仰者から成り）、キリストが造り、キリストがそのかしらである、この新しい人となるのです。からだのすべての肢体から成るこの一人の人は、永遠にいたるまで、神の、あるいはキリストの栄光と恵みと愛がほめたたえられるためのものとなるのです。

古い人は、欲望によって滅びに向かいます。霊的な死のゆえに、古い人はからだの死に向かっていき、それは最終的に永遠の死へと至ります。古い人は良くなることはなく、腐敗に服して、滅びていきます。新しい人は、そ

の創造者とのいのちのつながりによって新たにされていきます。それは、復活において永遠のいのち、あるいは完全さが始まるときまで続くのです。

13.14.1 未来のいのちを今すでに生きる

新しい人の未来は、抽象的なテーマでも、私たちの生活の現実から切り離されたテーマでもありません。この未来は、一方では私たちの望みを含んでいますが、同時に、私たちの生活を今すでに決定づけているものも含んでいます。こう言い表すことができるでしょう。私たちは目標の側から生きているのです。イエスと、イエスが造られたもの、またこれからなさることに目を注ぎながら。もし私たちのうちですでに新しい創造のいのちが脈打っているのなら、それはとりもおさず、私たちが未来のいのちを今すでに生きている、ということなのです。

聖霊の実、イエスご自身の比類のない模範的な生涯、イエスの愛の戒め、そして新約聖書のすべての戒め全体が、新しい創造における生活が道徳的な面でのどのようなものになるかを私たちに示しています。神の新しい創造においては、すべてが神の愛に満たされています——私たちが今すでに自分の生活の中で実現すべき、あの同じ愛にです。

私たちの教会は、神の新しい世界の橋頭堡であり、前哨基地です。ここで、神とキリストにある贖いを知らない人々が、「新しい人」に、あるいは新しい創造に触れなければなりません。私たちを見て、それがわかるようにならなければなりません。神がまもなく、ご自分の新しい世界のあらゆるところで、当たり前のこととして、また同時にすばらしく栄光に満ちたこととして持たれるものがです。

私たちがこのように神の新しい世界を見つめ、それが私たちのうちですでに始まっているという事実を思うなら、私たちは未来のいのちを、強制からでも、強制の下でもなく、また律法的な動機からでもなく生きようになります。新しい生き方が、私たちにとって当たり前のものとなるべきなのです。まもなく神の永遠の栄光の中でそうなるのと同じように。

そのときには、今日とは違って、新しいいのちの妨げとなりうる敵や障害はもはやありません。ですから今日は、イエスのようになるためには、意志の決断と、努力と、献身が伴うのです。しかし私たちは（たとえば自分の性格を道徳的に改善しようとする信仰のない人のように）自分自身だけを頼りにしているではありません。神の恵みと神の良い御霊が、私たちの側についてくださるのです。

13.15 呼びかけ

恵みは私たちを教え、さらに私たちを訓練し（育て）てくれます（テトス 2:11-12）。それによって、新しい人が実際に私たちの日常の中で場所を得ていくのです。私たちを訓練するのは律法ではなく、恵みです。恵みはまず、私たちがキリストにあってすでにそうであり、これからなる必要のないものを、繰り返し思い起こさせることによって、私たちを訓練するのです。恵みは私たちを、キリストのあふれるばかりの豊かさの中に置き、それで私たちを満たします。変えられた生活は、ただ恵みからのみ可能だからです。

私たちは、古い人をその古い生き方とともに脱ぎ捨てました。しかし、この古い人の考え方、あり方、あるいは本性は、私たちがこのからだのうちにいるかぎり、なお私たちのうちにあります。古い生き方の方向が頭をもたげてくることに對抗するのが、私たちの考え方の絶えざる刷新なのです。

私たちのうちにおられるキリスト——それが新しい人の生活の現実です。イアン・トーマス（Ian Thomas）は、これを手袋にたとえました。手袋は、生きた手がなければ死んだ物にすぎません。それが私たちです——キリストなしには、キリストの外では、まったく無力なのです。しかし、生きた手が手袋の中に入ると、手袋は何でもできるのです！ですから私たちは、私たちを強くしてくださる方によって、どんなことでもできると確信し、信じてよいのです！

14. 新しいいのちへと新しく生まれる

最後の山頂で、私たちはこのテーマについて、おそらく最もよく知られている事柄にたどり着きます。それは新生、つまり新しい永遠のいのちを受けることです。こうして私たちは、新しいものを造り出す福音の、人を変える力について、使徒ヨハネから学ぶことのできる事柄に入っていきます。私たちは罪の力から解放され、聖霊を与えられ、新しい人とされました。それはとりわけパウロのテーマでした。しかし私たちはまた、新しく生まれなければなりませんでした。私たちの古いいのちは、罪によって役に立たないものであることが明らかになり、私たちはそれによって本当のいのちを持っておらず、つまり霊的に死んでいたからです。

しかしまず、私たちがすでに何度か用いてきた一つの言葉を見てみましょう。「**新しい本性と古い本性**」です。聖書には、これらの言葉がそのままの形では出てきませんが、それが表している事柄は聖書の中に見いだされます。「**古い本性**」（それは肉のことです）と対比して私たちが「**新しい本性**」と呼んでいるものは、ほかでもない「**神の本性**」です。ペテロは、その第二の手紙の1章4節でこう書いています。

「……それは、あなたがたがそれら（の約束）によって、神の本性にあずかる者となるためです。」

言葉がどのような文脈に組み込まれているかに目を留めることは、いつも役に立ちます。この箇所の文脈は、次のとおりです。

キリスト者は、神のために生きることができるよう、すべてを神からいただいています。まず第一に、いのちそのものです。それは新しい人のいのちと呼ぶことができます。この神のいのちを日常生活の中で実現することが、「敬虔」（正しい畏れ、神にかなった生活）、つまり神の栄光のための生活を意味します。神はみことばを通して、ご自身の栄光を私たちに示してくださいました。その栄光は私たちをとらえ、神ご自身を私たちの生涯と人生の

旅路の目標として見据えるという、揺るぎない決意を生み出したのです。この旅は世の中を歩いていきます——神の造られた世界だけでなく、人間によって変えられ、損なわれた世界、つまり私たちが生きている社会の中をも通っていくのです。神の本性を受け、それにあずかる者として、私たちは世にある腐敗を免れました。神の本性によって、私たちは今、欲望に特徴づけられた世とは違ったふうに生きることができるのです。ここで、この神の本性が何であり、何でないかもはっきりします。それは神の外面的な栄光にかかわるものではなく、神の道徳的な性質にかかわるものです。それは、神の道徳的、倫理的な特徴を内に帯びている、霊的で超自然的ないのちのことで、ペテロはここで、それを失われた世の営みと対比させているのです。

この本性は、具体的には一つの動的な過程の中に表れます。その過程の中で、新しく生まれた人はあらゆる熱心を注ぎ、霊的な実を結びます。こうして、その人は自分の神からの召しと選びを確かなものとします。こうして、その人は自分の生活の中で、自分に対する神の救いのみわざを確証するのです。「神の本性にあずかる者と（なる）」とは、何かを持つことだけでなく、同様に何かになることをも意味しています。神に似た者となり、それによって神に倣う者となることが問題なのです。

神の本性、あるいは神のご性質が実際に人のうちに入り、人の生活を形づくることができるという証拠は、イエスご自身です。この方のうちに神のいのちがあり、この方ご自身が永遠のいのちです。この方は、このいのちが私たち人間にとって手の届くもの、経験できるものとなるために、人となりました。ですからヨハネはこう言うことができるのです。「それはキリストにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です」（ヨハネ第一2:8）。

14.1 そもそも「本性」とは何か？

本性とは、ある事物を初めから、あるいはある生き物を生まれたときから特徴づけている、あり方、あるいは生まれつきの性質のことです。動物の本性は、人間の本性とは異なります（ヤコブ3:6-7）。私たちの文脈では、本性とは、自分で生み出したものとは区別される、受け継いだものを含んでいま

す。本性という言葉（ギリシア語 *physis*）は「そのように成ったもの」⁸⁷を意味し、その動詞は生み出す、発達する、芽生える、そして（特に植物について）成長するを意味します。その名詞は起源や誕生をも意味します。

私たち人間は、生まれながら、つまり生まれたときから、その本質と本性において、御怒りを受けるべき子らです（エペソ2:3、ガラテヤ2:15）。自然界では、どの種もそれぞれ自分の子孫を生み出すという法則が当てはまります。それは人間についても同じです。からだ、つまり外なる人についても、その心、つまり内なる人についても同じように当てはまります。21世紀の今日もなお、人間はアダム（最初に造られた人）のあり方を体現しています。しかしまた、アダムがその堕落によってなったものをも体現しているのです。私たちは、ヤコブが言及している人間の本性（つまり、私たちが神のかたちに似せて造られた神の被造物としてなったもの）と、私たちが（堕落の後の）アダムから受け継いだ罪深いあり方とを区別します。言い換えれば、「私たちは、人間の本性と、堕落した人間としての私たちの本性とを区別しなければなりません」⁸⁸ 私たちは人間であり、これからもずっと人間です。新しい誕生によって霊とたましいに関してどのような変化を経験しようとも、また主が私たちをご自分のもとに呼び寄せるために来られるその瞬間に、私たちのからだをどのような変化が待っていようとも、そうなのです。私たちは、神が最初に（誕生によって）私たちを造られたときの本質的なアイデンティティを、決して失うことはありません。私たちは同じ人格——同じ個人——であり、そうであり続けます。ですから私たちは、『私たちの人間としての本性』、『私たちの堕落した本性』、『私たちの新しい本性』といった言葉を区別しなければなりません。堕落は、私たちの人間であること（の本性）を廃棄しませんでした。他方、私たちの新しい誕生も、私たちの人間であることを廃棄しません。人間であることにとって本質的なものを、

87. キッテル（Kittel）、*Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*（ギリシア語 *phyein*）。

88. この違いは、イエスというお方によって非常によく説明することができます。イエスは受肉において人間の本性をとられました。古い、したがって罪深い本性はとられませんでした。

私たちは決して失うことがなく、私たちの個性も決して変えられることはないのです。」⁸⁹

墮落したアダムの本性は、もはや人間の霊とその神とのつながりによってではなく（霊を持たない動物とは違って）、たましいとからだによって決定づけられている人間の現実を描き出しています。人間の霊には、その人の神意識と、創造者の存在を認める根本的な能力が宿っています。また、創造者を信じ、創造者に祈り、創造者を求め、創造者をあがめる能力も宿っています。しかしこの働きは、罪によって甚大な損害を受けました。霊は消し去られたものではありませんが、その働きはもはや生ける神に向けられてはいないのです。その結果を、パウロはこう描いています。「**生まれながらの**（ギリシア語 *psychikos*、本来は**たましいの**）人間は……神の御霊に属することを受け入れません」（コリント第一2:14）。墮落は、人間の現実のあらゆる側面に影響を及ぼしました。「人を神の近くにとどめていた、（創造者への）愛着と畏敬と依存のつながりは断ち切られています。人は、屋根が崩れ落ちて床に落ちてしまった家のようなものです。霊とたましいが沈み込んでしまった最も低い側面にちなんで名づけられて、人は『肉』なのです。こうして『肉』は、人の古い、あるいは墮落した本性を表す、聖書にかなった呼び名なのです。」⁹⁰

14.2 神の本性にあずかる者

古い本性によって、私たちは、キリストではなくサタンが支配している世に属していました。しかし**新しいいのち**を受けたことによって、私たちは世の腐敗とその汚れを免れました（ペテロ第二1:4、2:18、20）。からだにおいては、私たちはまだ世の中にいます。つまり私たちは、同時に二つの世界に生きているのです（エペソ2:6、コロサイ2:20、3:1-5）。神のいのちによって、私たちは神の新しい世界に、キリストのうちに、またキリストによって造られた神の新しい創造に属しているのです。

89. F・W・グラント（F. W. Grant）、*The two Natures*、5ページ。

90. 同書、7ページ。

自分で自分を決めていた私たちの生き方は終わりを迎えました。私たちの「自分株式会社」(Ich-AG)はつぶれたのです。私たちの人生という企業、あるいは自分中心の世界という企業は破産しました。その破産手続きはゴルゴタで処理されました。負債はキリストが引き受けてくださいました。しかし今、私たちは神のいのちにあずかる者であり、今や「確かな株」を持っています。私たちは「出資者」なのです。神のいのちにあずかっているからです。この「株」によって、本当の新しい出発があります。神ご自身がその発行者だからです。

14.3 永遠のいのちとはキリストのいのち

私たちは文字どおり、神のいのちに、神の永遠のいのちにあずかるようになりました。それは結局のところ、キリストご自身が人格として私たちの新しいいのちである、という事実にはほかなりません（これは同じ事柄の別の側面を言い表しているにすぎません）。キリストご自身が、私たちがそれへと造られた新しい人であるように、キリストは私たちの新しいいのちを体現しておられるのです。

私たちが神のいのちを持っているという事実は、私たちを神々の地位に引き上げるものではありません。同じように、キリストが私たちのいのちとなっても、私たちがキリストになるわけではありません。私たちは被造物であり、神のかたちに似せて造られた人間であり続けます。そしてこのいのちのゆえに、今再び神との交わりのうちにいることができるのです。私たちはいのちを「キリストのうちに」持っています。キリストはそのいのちの創始者であり、私たちはこの方に依り頼んでいるのです。私たちは、このいのちをキリストから切り離された形で持っているではありません。

14.4 どのようにして私たちは神のいのちにあずかる者となるのか？

本性という言葉は誕生と成長にかかわっており、イエスが律法学者ニコデモに解き明かされたこと、すなわち**新生**に私たちの注意を向けさせます。

その核心にあるのは新生です。それによって私たちは神の本性にあずかる者となるのです。**新生**は聖書の概念であって、東洋の宗教とも、（たとえば仏教のような）「生成と消滅の永遠の循環」とも、どのような種類のものであれ何らかの世界観とも、何の関係ありません。新約聖書の何人かの著者が新生について述べていますが、最も詳しく描いているのは使徒ヨハネです。アダムからキリストへの私たちの移行にはさまざまな側面がありますが、新生という側面を描いているのは、まさにヨハネなのです。新生は、新しい、別のいのちを造り出します。それは、私たちが生まれながらに（アダムから）受け継いだいのちとは異なるものです。

新約聖書のすべての著者が、どのようにして新しいいのちを受けるのか、そしてそれが日常生活の中でどのように表れるのかということについて、それぞれの寄与をしています。すべての著者に共通しているのは、キリスト者であるとは人間の変化を意味し、その変化は人が自分で引き起こすものではなく、上から、神ご自身から来るものだ、ということです。これで私たちは、もうテーマのただ中にいることになります。「上から」とは、まさにイエスが新しい誕生との関連で用いておられる言葉なのです。

14.5 新生——神から生まれる

ニコデモは、イエスと神学的な問題について話し合おうとしました。しかし主イエスには、そのための時間はありませんでした。主にとっては、新しい誕生の必要性のほうが重要だったのです。それによって主イエスは一言で、人がその誕生のゆえに（生まれながらに）そうであるものは、神の国を見ることができず、ましてや神の国に入ることなどできない、と言われるのです（ヨハネ3:1-36）。新しい誕生が必要であるということは、私たちが生まれながらにそうであるものについて、良いところを何一つ残しません。それはイスラエルの教師であるニコデモについても同じです。イエスは彼に、この誕生は人間の生殖によって起こるのではなく、「水と御霊によって」起こるのだと言われます。それは自然な生殖ではなく、上からの、神からの働きなのです。神の子どもたちは、人の意志によってではなく、神によって生まれるのです（ヨハネ1:13）。人は新生によってのみ、神の子どもになるので

す！人が肉の父によって何百回もうけられ、母から生まれたとしても、結果はいつも同じでしょう。肉から生まれた者は肉です。ですから、人が新しく生まれるべきであるなら、その源はまったく別のところに求めなければなりません。では、この不思議な誕生はどのようにしてもたらされるのでしょうか。主イエスが言われるように、それは具体的には、水と御霊によって起こるのです（ヨハネ3:5）。

14.5.1 水から生まれる

ここで問題になっているのは、文字どおりの誕生でも、誕生の際に用いられる道具でもありません。ですから、水は比喩的な意味を表しているに違いありません。水は何を象徴しているのでしょうか。水は神のこことばを象徴しています。パウロがエペソの人々に「……みことばにより、水の洗いをもって」（5:26）と書いているとおりです。神のこことばは、新生における具体的な道具なのです。

「神は、ご自分のみこころのままに、真理のこことばによって私たちを生んでくださいました。」

ヤコブ1:18

「……あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る神のこことばによるのです。」（1:3も参照）

ペテロ第一1:23

「あなたがたは、わたしがあなたがたに話したこことばによって、すでにきよいのです。」

ヨハネ15:3

水とは神のこことばであり、そのきよめる力です。それは神の御霊によって生きたものとなり、罪人に働きかけます。宣べ伝えられ、証しされ、あるいは読まれた神のこことばは、罪を明るみに出し、悔い改めと信仰へと導きます。イエス・キリストを信仰によって迎え入れ、受け入れることが、新生をもた

らします（ヨハネ1:12）。信仰は神のことばが宣べ伝えられた結果です（ローマ10:17）。神のことばは、神の種として新しいいのちを生み出すのです。

みことば、すなわち朽ちない種は、少なくとも二つのことをもたらします。それは、みことばそのものと同じように朽ちない（つまり永遠の）いのちを生み出します。そしてそれは、神のことばが持っているまさにその特徴を備えたいいのちを生み出します。神のことばは、新しいいのちのDNAなのです。種は、植物や生まれてくる生き物がどのような姿になるかについての、すべての情報を持っています。同じように、神のことばは新しいいのちの設計図、「遺伝暗号の全体」なのです。私たちが読むことのできるこのことばが、このいのちがどのように実現し、どのように表れるのかを示しています。この意味でヤコブは、私たちが真理のことばによって生まれたこと、そしてこのことばが同時に、成長することができるように私たちのうちに植えつけられた種であることを語っています（ヤコブ1:18、21）。種の本性が、いのちの形を決めます。神の本性はそれ自体として完全であり、欠けるところがありません（それはその種についても言えることです）。しかし私たちのうちでは、それが形をとり、増し加わることができ、またそうなるべきなのです。

二つ目の道具に移る前に、これまでの考察を踏まえて、ここでは水のパプテスマのことが語られているのではない、と指摘するだけで十分でしょう。水のパプテスマの水は、新しい人を生み出しはしませんし、私たちを神の子どもにするものでもありません。水のパプテスマはむしろ、私たちを**外面的に**（私たちの告白において）キリストと結びつけるのです。

14.5.2 御霊から生まれる

新しく生まれるのは、人間の霊ではありません。また、新しい誕生をもたらすのも人間の霊ではありません。むしろ、新生を引き起こし、成し遂げるのは神の聖霊なのです。

御霊から生まれた者は霊です。新生という賜物が、からだの面や生物学的な面での新しいいのちではないことは確かです。それは、贖われていない人間

の自然な存在とは対照的な、霊的ないのちです。しかしそれはまた、聖霊、すなわち神の御霊と一致しています。それは神のいのちだからです。新しいいのちは聖霊の本性に対応しています。私たちは、神の本性（神のいのち）にあずかる者となったのですから。

ニコデモは、その学識にもかかわらず、手に負えなくなっています。「水と御霊」が神の働きによって人に作用するとき、それが何をもたらすのかを、彼は旧約聖書から知ることができたはずなのです！

14.5.3 エゼキエルの預言：新しい心と新しい霊

エゼキエルは、文字どおりの意味で**新生**について語ったわけではありませんが、水と霊が用いられる同じ出来事を意味していたことは確かです。神は次のことをなします（エゼキエル11:19、36:25-27）。

- きよい水をイスラエルの人々に振りかけて、彼らをきよめる
- 彼らに新しい心と新しい霊を与える
- 石の心の代わりに肉の心を彼らに与える
- 神の御霊が彼らのうちに与えられ、彼らが神の掟に従って生きるようにされる。

ここには、新生における神の救いの重要な要素が挙げられています。まず第一に、過去に決着をつけるきよめです。きよめを必要とした古いのちに代わって、今、新しい心と新しい霊が与えられるのです。

特に「心」という表現も、「霊」という言葉も（「人間の霊」という意味で）、その人の最も内なる部分を指しています（箴言4:23）。問題になっているのは人間の人格の中心であり、それが完全に造り変えられなければならないのです。人はこの造り変えによって意志のない者になるのではなく、むしろそれによって神のみこころを行うことができるようにされるのです。石の心とは頑なな心——神に向かって生きることができず、また生きようともしない死んだ心です。人の意志が新たにされても、神のみこころを実際に行うことができるためには力が必要です。人は神の御霊を受け、それによって実際に神の戒めに従って生きることができるようになるのです。

ここでもはっきりするのは、人は内側から変えられるのであって、外から課され、外面的なふるまいの変化にしか至らない戒めによって変えられるのではない、ということです。人は厳しい自己訓練によってふるまいを変えることができます。しかしキリスト者が違ったふるまいをするのは、新しい心と神の御霊を受けたからです。新しい従順は、その人にとって心からの事柄なのです。その際、自己訓練も同じように大切ですが、決定的なものではありません。

御霊から生まれた者は霊です！ですから、エゼキエルがすでに、新しいいのちに対応する「新しい霊」と、新しく生まれた人のうちに住まわれる人格としての聖霊とを区別しているのです。イエスはニコデモと、聖霊の賜物について直接には語っておられませんが、それはここにも含まれています。ヨハネは何度か、御霊を私たちが持っているものとして述べています（ヨハネ 7:39、14:17、26、15:26、16:13）。

パウロはエゼキエルの言葉を取り上げ、それが私たちにも有効であることを説明しています。神の御霊は私たちの心に書き記されます。その心は、律法の板とは違って、石ではなく肉でできています。これは、私たちの心も完全に造り変えられたことを前提としています。私たちの心に対する神のこの「働き」は、神が私たちをますます御子のかたちへと変えるために何をなさるのかを、もう一度示しています。神が私たちの心に書き記されることには、一つの目的があります。私たちが道徳的な面で、神の御座において栄光を受けておられるキリストと同じかたちへと変えられることです——しかもそれは、御霊によるのです（コリント第二3:3、18）。

14.6 死からいのちへと救い移されて：生かされる

新しい誕生が必要なのは、私たちにいのちがないからではなく、正しいいのちが欠けているからです。肉から生まれた者は肉であり、それゆえ役に立ちません。私たちは御霊から生まれなければなりません。そうしてのみ、私たちは神の国に入り、天のものを所有するようになるのです。

しかし論理的に言えば、誕生の結果は、以前には存在しなかったいのちでもあります。ですから主イエスは、ご自分が今すでに人々を死からいのちへと

移すと言われるのです。将来になってからではなく、今ここで、主はそれをなさいます。「死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きるのです」（ヨハネ5:25）。神のことばが新生の種であるように、ここでも生かすのはことば（御子の声）なのです。人は生まれながら、単なる罪人（つまり、肉に支配された、何の役にも立たない存在）であるだけではありません。人はまた、いのちを必要としている死人でもあるのです。人は生まれながら、自分の罪の中に死んでいます（エペソ2:1、コロサイ2:13ほか）。死とは常に、本来ともにあるはずのものが切り離されることを意味します。ですから人は、生物学的な面でも精神的な面でもまったく元気に生きていますが、**霊的な意味では**、神とのつながりに関して死んでいるのです。この関係も、それに属するあらゆるものも、存在していません。**霊的な**よみがえり（あるいは生かされること。これは結局、新生の別の側面を含んでいます）によって、霊的に死んでいた罪人は永遠のいのちを受けます。それによって、神のいのちからの疎外（コロサイ1:21、エペソ4:18参照）は取り除かれます。このいのちによって、神との関係はただ回復され、墮落前のアダムの子との関係の状態に戻されるだけではありません。むしろ、それによって、私たちが神の子どもたち、神の子たちとする関係が結ばれるのです。私たちは死からいのちに移ったのです！「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の役にも立ちません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです」（ヨハネ6:63）と、主イエスは言われます。

14.7 生まれることと成長することの奥義

新しい誕生の過程について、一般的なことを確認しておくのは役に立ちます。聖書は、神が人に永遠のいのちを与えられるとき、それが人のどの部分にあるのかを語っていません。ある人々は、それが私たちの霊のうちにあると言い、別の人々はたましいを強調します。人のうちで起こる救いの出来事を、人間存在の個々の側面に割り振りたくなる誘惑があります。しかし聖書は、人間学の本ではありません。古い人についても、新しい人についてもそ

うです。⁹¹ 新生において私たちが向き合っているのは一つの奥義です。その一部は啓示されていますが、ある部分は隠されてもいます。それは人間の本性の複雑さに根ざしています。このことは、私たちの認識の限界をもう一度示しています。しかしそれは、私たちが実際に神の永遠の（霊的な）いのちを自分自身のいのちとして持っているという事実を、少しも損なうものではありません。主イエスご自身が、御霊によってもたらされる新しい誕生の過程を風にたとえておられます。その音を聞くことはできます（つまり、御霊が働いておられるその人のうちに、その結果を認めることができます）。しかし、風がどこから来てどこへ行くのかを見ることはできません（ヨハネ3:8）。新生は私たちにとって隠された過程であり、私たちの認識によっても技術によっても目に見えるようにすることはできないのです。

新しいいのちの成長の過程もまた、詳しく描かれてはおらず、当然のこととして前提とされています。新約聖書のほとんどすべての著者が、信仰における成長と（絶えざる）刷新、動き、そして進歩と増し加わる成熟があることを保証しています（ヨハネ3:30、エペソ4:13、ペテロ第一2:2、ペテロ第二3:18、コロサイ1:10、3:10、ヨハネ第一2:12-17、ガラテヤ4:19、ローマ12:2、コリント第二3:18、4:16、エペソ4:23）。これは多かれ少なかれ原則的に描かれています。そこで問題になっているのは常に一つの出来事です。それは一方では神ご自身によって始められ、続けられますが、他方では、私たちの関与、私たちの同意と決断、そしてキリストの戒めに従うことにおける私たちの規律と一貫性によってのみ実現されうるものです（ルカ8:15、ペテロ第二1:8、ヤコブ3:18、テトス3:14）。変化の過程は、常にここに挙げた原則に従って起こります。しかし何百万人ものキリスト者においては、（本質的な性質、生活状況、そして決意の違いによって）その過程は異なる速さと強さで進んでいきます。神である庭師は、一本一本の植物を愛をもって世話してくださいます（ヘブル12:11、ヨハネ15:2）——すべての者において、彼らが御子のかたちと同じ姿になるという、一つの大きな目標をもってです（ローマ8:29）。もしこれが神の最大の目標であるなら、それは私たちの最

91. Hans-Jörg Ronsdorf、それでも死者は生きている（Und die Toten leben doch）、第3章（聖書の間観）、147ページ以下。

大の関心事でもなければなりません。神とのこの交わり、あるいは同じ目標を持つというこの一致は、私たちの生活の多くのことを単純にし、私たちにより大きな目標意識を与えてくれるでしょう。それによって私たちは、日々の生活の状況について、まったく違った——すなわち神の——視点を得ることになるのです。

新しいいのちの誕生も、その成長も、ただ神の知恵だけがもたらすものです。決定的なのは、神の働きがそれによって見分けられる結果、すなわち、キリスト者の変えられた生活の中に結ばれる御霊の良い実なのです。

14.8 成長——いのちは成長する

成長は、きわめて大切な事柄です。神のいのちはそれ自体として完全ですが、人のうちに置かれるとき、それは成長していくべきものです。それはまた、実際に人の全体に浸透していかなければなりません。新しいいのちは、人のふるまい、その認識、あるいはそのあり方を、古いのちから新しいのちへと、ますます変えていきます（つまり、イエス・キリストのご性質が、その人のうちにますます形をとっていくのです。ガラテヤ4:19、コリント第二3:18）。

自然の野を見てみましょう。そこには小麦畑はありません。小麦畑があるのは、人がそれを作り、それにふさわしい種を蒔いたところだけです。同じように、私たちは古い生活の中で、いばらとあざみしか生み出しませんでした（エペソ5:11）。しかし今、みことばの種が蒔かれ、良い穀物が、神のための実が育っていきます（マタイ13:23、ローマ6:22、7:4）。種は、肥えた「心の土地」で芽を出します。こうして、神からの新しいいのちが人を変えるのです。内側で起こったこと、そしてそれ以来起こり続けていることの結果は、新しく生まれた人のふるまいの中に見ることができます。その人は今、自分を生んでくださった方に向けられているのです。

種が蒔かれた人のうちには、まだ悪が存在しています。小麦畑にも、多かれ少なかれ、あざみやいばらがまだ見つかるのと同じです。しかし新しいいのち、新しい実、勝利者のいのちでもあります（ヨハネ第一5:4）。その中で、新しく生まれた人の変化が展開していくことができるのです。その人は

今、自分にいのちを与えてくださった神に倣う者となったのです。良い土地が良い実を結ぶ一方で、私たちは自分の生活という畑から、良い実ではないものを取り除きます。私たちの古い罪深いふるまいのいばら、そして長く深い根を持ち、古い頑固な習慣を表すあざみです。ある雑草は、無害なものにするまでに厳しい自己訓練と忍耐を必要とします。しかし、神が私たちに對して持っておられる目標に自分をゆだねるなら、その苦労は報われます。私たちの生活という畑に転がっている石は、余計な重荷や重りです。ときにそれは、私たちにまわりつきやすい罪であり、私たちの成長と前進を遅らせ、妨げるのです（イザヤ5:1-7、ヘブル12:1）。

聖書の中で成長がどれほど大きな場所を占め、どれほどしばしば人に当てはめられているかは、驚くべきことです。イスラエルは主のぶどう畑であり、良い実を結ぶべきものでした。神ご自身がぶどう園の農夫なのです。

私たちの生活というぶどう畑、あるいは私たちの「自分のぶどう畑」（雅歌1:6）をよく守ることは大切です。キリストはぶどうの木であり、私たちはその枝です。それは御父のために実を結ぶためなのです（ヨハネ15:1-8）。

霊的な成長は、自然の中でも、私たちの人間としての本性の中でも起こると同じ、普通の過程です。この成長には時間と、必要なあらゆる条件が要ります。成長は飛躍的に起こるものではなく、近道ありません——どのような事柄や経験によってであってもです。「聖書のどこにも、肉的な状態から霊的な状態へ、あるいは比較的のんきな生活からキリストに献身した生活へと、突然飛躍することがあるとは教えられていません。それどころか、敬虔さにおける成長は、人が子どもから成熟した大人へと普通に発達していくのと同じように、普通の自然なものであるべき成長として描かれているのです。」⁹²

温室を使えば、季節の法則から逃れて、多くの植物や野菜を一年中いつでも収穫することができます。しかし私たちはみな、温室では、露地で育つ植物が達するような品質の植物を育てることは決してできないことを知っていま

92. ヘンリー・アレン・アイアンサイド（Henry Allen Ironside）、*Heiligung – Zerrbild und Wirklichkeit*、153ページ。

す。それは、温室で栽培された植物の実の味についても当てはまります。同じように、霊的な実も日常生活の中でこそ最もよく育ちます。実は、風雨や暑さ寒さ、日照りや雨にさらされる自然の中でこそ、最適な成長条件を得るのです。私たちは「温室育ちのキリスト者」にはなりたくありません。

14.9 耕し育てる

「耕し育てる」とは、たとえば、以前は森や草原だったところに小麦畑を作ることを意味します。「実を結ぶ」ことの文脈の中で、パウロはこう言っています（ピリピ2:12-13）。

「恐れおののいて、

自分の救いを達成するよう努めなさい。

神はみこころのままに、

あなたがたのうちに働いて、

志を立てさせ、

事を行わせてくださる方です。」

おそらくほかのどのみことばも、行動する私たちの責任と、同時に私たちの行動の中での神の働きとを、これほど短く簡潔に示してはいないでしょう。私たちが「働く」とき、同時に神が働いておられるのです。救いは行動する義務を伴います。私たちは、得た救いの証拠を示すべきなのです——そうです、救いを完成させるべきなのです。このみことばには、私たちの責任と神の働きとの間の大きな緊張が含まれています。しかし私たちは、救いは私たちの働きとは切り離して見るべきものであり、私たち自身の努力とは何の関係もない、と考えることによって、この緊張を簡単に解消してしまってはなりません。神のことばを、あるがままに受け取りましょう！恐れおののきながら（つまり、自分が過ちを犯しうることを自覚しながら）さえ、私たちは救いを生き抜き、たびたび触れてきた「救いの命令法」を真剣に受け止めるべきなのです。いつか目標に到達したとき、私たちは、自分のあらゆる努力

のうちにあって、すべてを成し遂げてくださったのは恵みに満ちた神であったことを知るでしょう。

では、この節は霊的な成長とどのような関係にあるのでしょうか。「達成する（働き出す）」という言葉は、ギリシア語では、農耕、つまり耕地を耕すことにも用いられていました。このことは私たちに確証を与えてくれます。神はみことばを私たちの心に植えてくださり、新しいいのちが私たちに与えられました。私たちは今、この新しいいのちの畑を手入れし、耕し育てなければなりません。その際、妨げとなるものをすべて取り除き、成長を促すものをすべて備えるべきです。さらに、良い収穫を確実に取り入れられるようにすべきです。私たちの生活は畑に似ています。もちろん、これは比喩的な意味で言っているのです。この農夫の仕事は、また神ご自身のみわざでもあります。すべてを働かせ、また働かせようとしておられる神に信頼しつつ、私たちは神が私たちのうちに造られたものを耕し育てるのです。

世のものは、心の土地を硬くし、神の語りかけを受けつけないものにします。これまで硬かった土地は、水を吸い込み、再び実を結ぶことができるように、骨を折って耕さなければなりません。悪い、汚れた思いという雑草も、絶えず取り除かなければなりません。若い草は、深い根を張った古い草よりも取り除きやすいものです。ですから、すぐに、そして絶えずそれに立ち向かおうではありませんか！⁹³

14.10 趣味か義務か？

趣味で園芸をする人は、雑草の世話をします。美しい庭を持つことが、とにかくその人の趣味だからです。その人はそうする必要はなく、だれもそれを強制してはいません。庭師や農夫のたとえを私たちの聖化に当てはめるなら、それは、引き受けることも、なおざりにすることもできる選択肢ではありません。聖化の生活と霊的な成長を選ぶことは、宣教に出たり説教者になろうとしたりする、特別な階級のキリスト者だけのためのものではないのです。救いはむしろ、私たちに聖さを追い求めることを義務づけています。聖

93. C・G・ウィリス (C. G. Willis)、Betrachtungen über den Brief an die Philipper、184 ページ。

さがなければ、だれも主を見ることはできないのです。ある人には聞き慣れないことに聞こえるかもしれませんが、私たちの生活の中に聖さがなければ、私たちは最後に主を見ることはないのです（ヘブル12:14）！

「たびたび降る雨を吸い込んで、耕す人たちのために有用な作物を生み出す土地は、神の祝福にあずかります。しかし、いばらやあざみを生えさせる土地は無用であり、やがてのろわれ、最後は焼かれてしまいます」（ヘブル6:7-8）。

14.11 ヨハネにおける救いの直説法

神のいのち（永遠のいのち）は、ヨハネのテーマです。ヨハネはまた、私たちがこのいのちを受ける新しい誕生についても扱っています。ヨハネの三つの手紙から、私たちが神の子どもとして何になったのか、そして何を与えられたのかを集めてみましょう。ヨハネにおいて、救いの直説法とは次のことを意味しています（パウロとの多くの並行関係に注意してください）。

- 御父および御子イエス・キリストとの交わり（ヨハネ第一1:3）
- 満ちあふれる喜び（1:4）
- 私たちは光の中を歩んでいます（1:7、2:9-11）。
- 神の御子であるキリストは、私たちのためにご自分のいのちを捨ててくださいました（3:16）。
- 御子イエス・キリストの血が、すべての罪から私たちをきよめます（1:7）。
- キリストは私たちの罪のための宥めのささげ物です（2:2、4:10）。
- 私たちの罪は赦されています（2:12）。
- 私たちの罪は取り除かれています（3:5）。
- 絶えざる赦し（告白の後の）と、不義からのきよめ（1:9）
- 私たちが罪を犯したとき、御父の前に弁護者（とりなす方）がおられます（2:1）。
- 私たちのうちで、神の愛が本当に全うされています（2:5、4:12、17）。
- 御父の愛が私たちに与えられています（3:1）。
- 神は私たちを愛しておられます（4:16）。

- 私たちは神のうちにいます (2:5)。
- 私たちは真実な方のうちに、その御子イエス・キリストのうちにいます (5:20)。
- キリストにおいて真理であることは、私たちにおいても同じように真理です。すなわち、神のいのちです (2:8)。
- 私たちは永遠に生き続けます (2:17)。
- 私たちは聖霊を、聖なる方からの油注ぎを持っています (2:20、27)。
- 神は私たちにご自分の御霊を与えてくださいました (3:24、4:13)。
- 私たちは御父と御子のうちにいます (2:24)。
- 私たちに対する神の約束、永遠のいのち (2:25)
- 神は私たちに永遠のいのちを与えてくださいました。そのいのちは御子のうちにあります (5:11、13)。
- 私たちは御子を持っており、御子とともにいのちを持っています (5:12)。
- 永遠のいのちが私たちのうちにとどまって（つまり、住んで）います (3:15)。
- 私たちは神から生まれました (2:29、3:9、4:4、6-7、5:1、3、18-19、ヨハネ第三11)。
- 私たちは神の子どもです (3:1)。
- 神の種が私たちのうちにあります (3:9)。
- 私たちは神の御子に似た者となります (3:2)。
- 私たちは神の御子を、ありのままの姿で見ることになります (3:2)。
- 私たちは死からいのちに移っています (3:14)。
- 私たちは神のうちにおり、神は私たちのうちにおられます (3:24、4:4)。
- 私たちは御子によっていのちを持っています (4:9)。
- 私たちはさばきの日に確信を持っています (4:17)。
- 神の全き愛によって、恐れが私たちから取り除かれています (4:18)。
- 私たちは確信をもって、神のみこころにしたがって祈ります (5:14-15)。

- 私たちは選ばれています（ヨハネ第二13）。
- 神の真理は（神の御霊と同じように）、永遠に私たちのうちに、また私たちとともにとどまります（ヨハネ第二2）。

14.12 ヨハネにおける救いの命令法

祝福と特権があるところには、義務と責任もあります。この認識は新しいものではありませんが、次のようにまとめてみると、私たちの心に語りかけてきます。

- 神の戒めを守ること（2:3-4、3:22、5:2-3、ヨハネ第二5）
- 神のことばを守ること（2:5）
- キリストが歩まれたように歩む義務があること（2:6、4:17参照）
- 兄弟を愛すること（2:10、3:10、14、ヨハネ第二5）
- 世を愛さないこと（2:15）
- 信仰によって世に打ち勝つこと（5:4）
- 御子を告白すること（2:23）
- キリストのうちにとどまること（2:28）
- 義を行うこと（2:29）
- 神の御子であるキリストがきよい方であるように、自分をきよくすること（3:3）
- 罪を行わないこと（3:6、9、5:18）
- 兄弟たちのためにいのちを捨て、彼らに心を開くこと（3:16-17）
- 行いと真実をもって互いに愛し合うこと（3:18、4:7、4:11）
- 愛のうちにとどまること（4:16）
- 神の御前で喜ばれることを行うこと（3:22）
- 神がまず私たちを愛してくださったので、私たちは愛するのです（4:19）。
- 真理のうちを歩むこと（ヨハネ第二4、ヨハネ第三4）
- 自分たちが働いて得たものを失わないように、気をつけること（ヨハネ第二8）
- キリストの教えのうちにとどまること（ヨハネ第二9）

- 真理を堅く保つこと（ヨハネ第三3）
- 神のしもべたちをもてなすこと（ヨハネ第三5-8）
- 善を行い、善に倣うこと（ヨハネ第三11）。

14.13 永遠のいのち——質と量

新しいいのちには、これまでのすべてのもの、また人間が可能だと考えてきたすべてのものを、色あせさせてしまうほどの次元があります。永遠のいのちとは、単に終わりのない存在のことではありません。終わりのない存在なら、すべての人が持っています。新しく生まれていない人もそうです。むしろ新生によって、私たちは、いつか天に、つまり永遠のいのちが「わが家」としていているところにいることができるようにする存在を受けるのです。しかしヨハネのメッセージで問題になっているのは、天によって刻印されたこのいのちの満ちあふれる豊かさです。私たちはそれを、そのときになって初めてではなく、まだ地上にいる今すでに、私たちのうちに持っているのです。このいのちの満ちあふれる豊かさ、その富、その内容は、今、私たちのうちに見いだされます。それによって生まれたのは、単なる存在ではなく、人を人たらしめているあらゆるもの——意志、愛、認識、その他多くのもの——を備えた一人の新しい人なのです。このいのちによって、私たちは御父を知る知識を受けました（ヨハネ17:3）。私たちは、御父と御子との、生き生きとした、愛に特徴づけられた親密な関係と交わりに入れられたのです。もし私たちが、御父と御子が持つておられるのと同じいのちを持っていなかったなら、それは決して可能ではなかったでしょう。

14.14 いのちのしるし

自分の子どもの誕生に立ち会うことができた人なら、私の言いたいことがわかるでしょう。だれもが、子どもの最初の声を固唾をのんで待っています。そして子どもが産声をあげたとき、誕生という奇跡が成し遂げられたのです。霊的ないのちにも、同じようにそのようないのちのしるしがあります。新生について語った少し後で（ペテロ第一1:23）、ペテロは、私たちは生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない神のことばの乳を慕い求めるべきだと言っています（ペテロ第一2:2）。言い換えれば、新しく生まれ

た人は、神のことばに飢え、あるいは関心を持っているのです。その人は、もはや神のことばなしにはいられません。それはその人にとって食物のようなものだからです。私たちがすでに救いの命令法の中で挙げた、そのほかのいのちのしるしは、次のとおりです。

- 神から生まれた者は義を行います（ヨハネ第一2:29）。
- 神から生まれた者は神を愛し、神を知っています（ヨハネ第一4:7）。
- 神から生まれた者は、イエスがキリストであると信じています（ヨハネ第一5:1）。
- 神から生まれた者は、信仰の兄弟姉妹を愛します（ヨハネ第一5:1）。
- 神から生まれた者は世に打ち勝ちます（ヨハネ第一5:4）。

新しいいのちの一つの特徴を、さらに詳しく調べてみましょう（ヨハネ第一3:6、9、5:18）。

「キリストのうちにとどまる者はだれも、

罪を犯しません。

罪を犯す者はだれも、

キリストを見たこともなく、

知ってもいません。」

「神から生まれた者はだれも、

罪を行いません。

神の種がその人のうちにとどまっているからです。

その人は罪を犯すことができません。

神から生まれたからです。」

「私たちは知っています。

だれでも、

神から生まれた者は

罪を犯さないことを。」

14.15 神から生まれた者は罪を犯さない

これは、一見すると私たちを戸惑わせ、もしかすると悲しませもする、いのちのしるしです。ヨハネは、キリスト者はもう決して罪を犯すことができない、と言おうとしているのでしょうか。もしそういう意味なら、ヨハネは自分自身と矛盾していることになるでしょう。2章1節で、ヨハネはこう書いているからです。

「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、

あなたがたが罪を犯さないようになるためです。

もしだれかが罪を犯したなら――

私たちには、御父の前でとりなしてくださる弁護者、

義なるイエス・キリストがおられます。」

さらにその前で、ヨハネはこう言っています。

「もし自分には罪がないと言うなら、

私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。

もし私たちが自分の罪を告白するなら、

神は真実で正しい方ですから、

その罪を赦し、

私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」

ヨハネ第一1:8-9

ヨハネが罪を犯さないようにと勧めているのなら、明らかに、その人がまだ罪を犯しうるのであり、罪のない者になったのではない、という可能性があるのです。私たちの日々の経験も、残念ながら、そうであることの反論の余地のない証拠です。しかし、ヨハネの基準、あるいは尺度は、はっきりと、私たちが（まったく）罪を犯すべきではない、ということです。ヨハネは、私たちならおそらくそう言い表すであろうように、「できるだけ罪を犯さな

のように努めなさい！」とは言っていない。むしろヨハネは、私たちの生活の基準を、イエスご自身が神について言われたことから導き出しています。それによれば、「神は光（絶対的に聖く、正しい方）であり、神のうちには闇（罪）が全くない」のです（ヨハネ第一1:5）。ヨハネが初めに「もしだれかが罪を犯したなら……」と言っていることから、ヨハネがここで規則についてではなく、例外について語っていることがはっきりします。これらの言葉を、神から生まれた者は罪を犯さない、あるいは（さらにはっきり言えば）罪を犯すことができない、と言われている言葉と調和させるために、曲芸をする必要はありません。これほど矛盾しているように見える言葉も、互いに両立するものでなければならないのです。

ヨハネはここで、私たちを、新しいいのちの力と本質を与えられた者として見ています。ヨハネの目には、私たちはここで、みことばという神の種によって生まれたこのいのちを持っている者なのです。そしてそれは、必然的に次の結果をもたらします。キリスト者は、継続的に罪を犯すことはなく（これは文法的には継続相の形でしょう）、習慣として罪を犯すこともありません。パウロの言葉で言えば、キリスト者は罪の力から解放されているのです。「信仰者はときに罪を犯しますが、その生活を支配している原理は罪ではなく、罪の反対のものです。私たちは神の子どもであり、罪は私たちにあって異常で不自然なものなのです。」⁹⁴ キリスト者は、神と神の戒めを愛しています。罪を憎むことは、その人の本質に属しています。その人は、肉の欲望を満たさないように、御霊によって生き、御霊によって歩むのです（ガラテヤ5:16、25）。

ある人々はこれを次のように説明します。ヨハネはもっぱら、罪を犯すことのできない新しいいのち（その人のうちにあるキリストのいのち）のことを言っているのだ、と。この説明は、条件つきでしか正しくありません。もちろん、このいのちは罪を犯すことができません。しかしここで問題になっているのは、新しいいのちの活動ではなく、神から生まれた人格のふるまいなのです。新しいいのちそのものは、何も行いません。むしろ、その人格が、

94. アルフレッド・ブラマー（Alfred Plummer）、ジョン・Ｒ・Ｗ・ストット（John R. W. Stott）、*The Letters of John*、138ページに引用。

そのいのち、その本性と一致して何かを**行う**のです。その人格は、全責任を負い、自分自身で決断して何かを**行い**ます。そしてそのいのち、あるいは本性が、その行いの出どころ——つまり、その人格が汲み上げる源泉——を決めるのです。それぞれの人格を新しく生まれさせたのは種であり、この種は同時に新しいいのちでもあります。ヨハネは今、新しく生まれた人を、このいのちを生きている者、あるいはこのいのちによって決定づけられ、特徴づけられている者として見ています。このいのちには罪は含みません。罪は異物なのです。「ヨハネの手紙には、鋭い対比が含まれています。さらに、多くの抽象的な言明が含まれています。罪と義についても、まさにそうです。いつも、ある事柄にとって特徴的なものが際立たせられているのです。ですから信仰者は、その本質からして義なる者です。その人は義を行い、罪を犯しません。とはいえ、それはその人の生活の性格が良いものだということです。その人は義に生き、したがって罪のうちに生きてはいません。信仰のない人については、その反対が当てはまります。」⁹⁵

ヨハネは、こう**ありうる**という理想について語っているのではなく、実際に**こうである**ということについて語っているのです。ときには、ヨハネが**立場**と実際の**状態**の区別（特にパウロの救いの教えにおいて私たちが用いてきた、理解の助け）を、あっさり飛び越えているような印象を受けることがあります。ですから、この言明は単に「理論的に」、立場として、あるいは客観的に真実であるだけでなく、私たちが日常生活の中で実際にもそうであるもの（救いの命令法）を、本当に描いているのです。それは、私たちが恵みによって立場において（救いの直説法）なったものを超えているのです。

14.15.1 救済史の四つの段階：人間と罪

ヒッポのアウグスティヌス（Augustinus von Hippo、354～430年）は、ペラギウス（Pelagius）⁹⁶との論争の中で、三つのラテン語の言葉を用いて、次のような区分をしました。**posse**（「できる、能力がある、可能であ

95. 同書、137ページ。

96. アウグスティヌスと同時代のブリテン出身の修道士。アウグスティヌスの恵みの教え、あるいは救いの教えを退け、その代わりに人間の意志の自由を強調した。

る」)、**peccare** (「罪を犯す、過ちを犯す、違反する」)、そして **non** (「～ない」) です。

14.15.2 もはや罪を犯さない：可能か不可能か？

明らかなことですが、ヨハネは、信仰者が「罪を犯しうる」という事実を知っています。ヨハネはそれを排除していません。罪を犯すことは、キリスト者の生活においては通常のことでありません。キリスト者が罪を犯さないことが普通なのです。神の力が、神を知る知識を通して、敬虔な生活に役立つすべてのものをその人に与えてくださったからです（ペテロ第二1:3）。

「真のキリスト者とは、罪を犯す能力を失った人ではなく、罪を犯す意志と心構えを失った人なのです。」⁹⁷

ヨハネは、罪のない状態や完璧さがありうるとは言っていませんでした（そうでなければ、ヨハネははっきりと自分自身と矛盾してしまうでしょう）。罪のない状態そのものは、それだけでも不可能です。罪が私たちのうちに住んでおり、私たちのからだと地上の存在に切り離せないほど織り込まれているからです。私たちがもはや罪を犯さないことは、今日、目指すべきことではありますが（「……あなたがたが罪を犯さないようになるため」というヨハネの言葉を参照）、それが可能になるのは、私たちが主に完全に似た者となる栄光のときになってからなのです。

1. 墮落前の人間	2. 墮落した人間	3. 新しく生まれた人間	4. 完成における人間
Non posse peccare	Non posse peccare	Posse peccare	non Non posse peccare
罪を犯すことができた			
(し か し 罪 を			

97. ウィリアム・マクドナルド (William MacDonald)、*Der vergessene Befehl – Seid heilig*, 45ページ。

罪を犯さないで
避けること
もできない。
た）。
ないでいる能力
がない。

罪を犯さないでいるこ
とができる（しかし罪
もはや罪を犯すことが
を犯すこともでき
ない）。

自由意志に
よって、人
は神の戒め
を尊ぶか、
それを破る
かを選ぶこ
とができ
た。

肉のうちにあ
り、罪の下に売
られている。墮
落した人間のす
べての行いが罪
であるわけでは
ないが、罪なし
に生きることは
できない。

霊的な面では、新しい
いのちと古いのちが
その人のうちにある。
罪への強制は打ち砕か
れている。罪を犯さな
いことができる
ようにされているが、
まだ罪を犯すこともあ
りうる。

キリスト者のうちにあ
る罪と肉、すなわち古
い本性は、古い創造に
属する地上のからだの
存在に結びついてい
た。その存在は完成に
おいて終わり、栄光の
からだとキリストとの
絶えざる近さに取っ
て代わられる。

では、私たちは自分の経験から、この目標には決して到達できないと知って、失望しなければならないのでしょうか。それとも聖書の中に、私たちが罪のない者になることはできないと確証する根拠があるのでしょうか。もしそのような言明があったら、私たちはとても驚くでしょう。一方ではキリスト者に罪を犯さないよう励ましながら、同時に、それは決してうまくいかないのだとはっきり示すことなど、どうしてできるのでしょうか。それはつじつまが合いませんし、教育的にもきわめて賢明ではないでしょう。私たちの生活の基準は、いつも神の完全さであり、決してそれ以下ではないのです。

しかし、もしだれかが大まじめに、自分は完全な状態（罪のない生活）に達したと思っているなら、その人はおそらく、罪の本質と現実に対する目と感覚を失ってしまっているのでしょうか。その人の良心は、それに対してはや敏感ではないのです。私たちが行う多くの良いことにさえ、しばしば罪の影が見られるものです。もはや罪を犯さないと主張する人は、その証拠を示し、自分が罪のないことの「証人」を連れて来なければなりません。その人

の配偶者、子どもたち、そして身近にいるほかの人々です。私が知っている、それが当てはまる方はただお一人、イエスだけです。ここで、よく使われる、あらゆる点で真実な言葉を付け加えておきます。「キリスト者は失望させることがあっても、キリストは決して失望させない。」この言葉は言い訳としてではなく、励ましとして用いられるべきものです。

14.16 完全——それは何か？

新約聖書は、私たちの信仰生活について語るときにも、しばしば完全さについて語っています。それは完璧さや罪のない状態のことを意味しているのではありません。この完全さを正しく理解することは、私たちの聖化の理解にとって重要です。この言葉が出てくる聖書箇所では、少なくとも三つの意味を区別することができます。

14.16.1 私たちの救いにおける立場の完全さ

「キリストは、聖なるものとされる人々を、**ただ一つの**ささげ物によって永遠に完成されたのです」（ヘブル10:14）。イエスの完全で、すべてに十分なささげ物によって、私たちは永遠に自分の罪から解放されました。それは変わることもない、完璧な、そして神の目から見て完全な救いです。私たちは洗われ、聖なる者とされ、義と認められました（コリント第一6:11）。神の新しい創造において（コリント第二5:17）、私たちは完全な者です（コリント第一2:6、ピリピ3:15）。キリストにあって、私たちは満ち満ちた状態にされ、つまり完成されているのです（コロサイ2:10）。

この完全さは、恵みの賜物と神の救いのみわざを含んでいます。「この与えられた完全さを、絶対的な罪のなさや倫理的な完全さと混同してはなりません。しかし、根本的な完全さが欠けているなら、道徳的な完全さと成熟へと成長することもないのです。」⁹⁸

98. エーリッヒ・マウアーホーファー（Erich Mauerhofer）、*Der Kampf zwischen Fleisch und Geist bei Paulus*、124ページ。

14.16.2 私たちの生活における完全さ（成熟）：大人になる

第一の意味が実際に、しみのない、変わることもない完全さを指しているのに対して、新約聖書はこの言葉を、生まれ出て、成長あるいは前進の途上にある事柄についても用いています。それは完全さ（ギリシア語では「成熟」）を目標としています。すなわち、霊的に大人であることの成熟です。完全という言葉のこの意味は、コリント人への手紙第一14章20節に見られます。そこでは、コリントの人々は集会において、考え方の点で子どもであってはならず、完全な者、つまり大人、成熟した者であるべきだと言われています。教会全体は、信仰の一致と神の御子についての知識の一致に達し、大人の（完全な、あるいは成熟した）人となり、キリストの満ち満ちた身の丈にまで達すべきなのです（エペソ4:13参照）。ですから、聖書の教える堅い食物は、大人（完全な者、成熟した者）のためのものです。彼らは慣れることによって、善と悪とを見分けるよう訓練された感覚を持っているのです（ヘブル5:14参照）。

イエスが私たちに、天の父が完全であるように完全な者となるように命じておられるとき（マタイ5:48）、そこからは二つのことが見て取れます。一方では、それは神の完全さを示しています。他方では、私たちが父に倣う者であるがゆえに、父のようになっていくという、私たちの生活の中の過程を示しているのです。

14.16.3 将来の完成における全人的な完全さ

私たちの信仰には一つの目標があります。キリストのもとに、キリストとともにいて、キリストに完全に似た者となることです。私たちがキリストに似た者となるとき、それ以外の何を完全、あるいは完成と呼ぶことができるでしょうか。キリストとのこの完全な一体性、しかもその復活における一体性を、パウロは追い求めましたが、まだそれに達してはいませんでした。「私は、すでに得たのでも（死者の中からの復活、したがってからだの贖いをも）、すでに完成されている（完全さに達した、つまり目標に到達した）の

でもありません」(ピリピ3:12)。私たちが変えられる日、あるいは復活する日が、霊とたましいとからだにおいて、私たちを完全な者とし(目標に到達させ、完成させ)てくれるのです(コロサイ1:28参照)。

14.17 責任があるのは私たちの行いであって、私たちの存在ではない

私たちはときに、だれかについて「あの人は本性のままに行動した」と言います。それによって私たちが言おうとしているのは、その人は自分の本性に駆り立てられていたので、何かをするかどうか、何をするかを自分で決めたのではない、ということです。人々は、さばきの日に、生まれながらに何であつたかによってではなく、自分の責任において、まったく意識して行ったことによってさばかれるのです(ローマ2章)。それは信仰者についても当てはまります。信仰者が罪を犯したとき、それは自分の古い本性、古い自分、あるいは肉のせいだった、と言って弁解することはできません。私たちはいつも、御霊によって歩むのか、肉によって歩むのかを決めなければならぬでしょう。神の御霊によって生きるとは、私たちにあって慣れ親しんだ習慣となることができますし、またそうなるべきです。それが神の意図であり、私たちに対する神の目標なのです。それは、絶えず善を選び続けるという、絶え間のない、歯を食いしばるような、疲れ果てる戦いである必要はありません。私たちは信仰によって、自分が新しい人であるという事実を受け入れるべきです——新しい心、新しいいのち、新たにされた霊を持つ新しい人です。この新しい存在を自覚して、私たちは生きてよいのです。蝶は、かつては毛虫でした。変態という奇跡によって、まったくの変化を経験するまではそうだったのです。同じ昆虫であるにもかかわらず、この二つの存在形態の間には何の類似点也没有ありません。蝶は花から花へと飛び回ります。もし蝶が「自分になったものであること」をせず、まだ毛虫のように感じているとしたら、それはとても奇妙なことでしょう。自分は毛虫だと思っている蝶！これはこっけいでありながら、同時に真剣なたとえです。多くのキリスト者が、その生活の中でまさにそのような印象を与えているからです。「地上の」ものでおなかをいっぱいにする毛虫のようにではなく、空を飛び、

「天の祝福」によって生きる蝶のようにふるまおうではありませんか！ 私たちは、自分の新しいアイデンティティを生き抜いてよいのであり、またそうすべきなのです。私は生きています。しかし、もはや私ではありません！ キリストが私のうちに生きておられるのです（ガラテヤ2:20参照）。

14.18 新しい本性と古い本性が同時に私たちのうちにある

古い本性と新しい本性が同時に私たちのうちにあり、（聖書的に言えば）キリストと罪が同時に私たちのうちに住んでいるということは、私たちにとって、今も、そしてこれからも奥義です。しかし聖書はこの事実を教えており、私たちの経験もそれを裏づけています。贖いの日まで悪を私たちのうちに残しておかれることに、神のどのような意図があるのでしょうか。悪は思いのままに行われるべきではありません。しかし、それでも感じ取られるべきなのです。それは、この短い期間に、悪が本当はどのようなものであるのか、そしてキリストにとって罪とされることが何を意味したのかを、私たちがますます深く悟るためです。

キリスト者には一つの本性（すなわち新しい本性）しかないとする教えは、関係するみことばを学んだうえで、はっきりと退けなければなりません。私たちがキリストにあって完全であるのと同じくらい、私たちがまだ身に帯びている肉は腐敗しています。肉は、私たちのからだをもった存在と切り離すことができないほど結びついています（だからこそ「肉」と呼ばれるのです。同じ一つの言葉が、からだのうちにある地上の存在を表すと同時に、そのからだ、すなわち肉のうちに生きている古い罪深いあり方、あるいは古い本性をも表しているのです）。一人ひとりのキリスト者にとって、その罪深い肉が完全に終わりを迎えるのは、からだの死のとき、あるいは携拳の際にすべての信者が変えられるときになって、ようやくのことです。

14.19 結論

新しく、そして上から生まれることがこれほど大きな出来事であるのは、人間のあらゆる知恵も、技術も、力も、それを引き起こすことができないから

です。それに続いて目に見える形で起こる変化も、同じように人間には引き起こせません。

一人の罪人が悔い改めると、天は喜びに沸き立ちます。それはちょうど、子どもが生まれ、最初のいのちのしるしを「聞く」ときの母親と父親のようです。赤ちゃんは、自立するまでに多くの世話と手入れを必要とします。霊的ないのちについても、似たようなことが言えます。被造物はしばしば霊的な現実を映し出しており、それがまた私たちが霊的な真理をよりよく理解する助けとなります。子どもたちは若者になり、やがてキリストにある父親へと成長していきます（ヨハネ第一2:13-14）。

今日私たちが「新しい本性」と言うとき、それは本来、「新しい、あるいは神から与えられた永遠のいのち」のことを指しています。そして、このいのちを同時に主イエスご自身がそのご人格において体現しておられるのです。このいのちには、必然的に一定の性質、一定のあり方、つまり固有の本性があります。ということは、このいのちは単に存在（すなわち「あること」）を表しているだけではなく、だれの筆跡がそれを特徴づけているのか、そしてそれが道徳的な面でどのような仕方で表れるのかをも証しているのです。もう一度指摘しておきます。「神の本性」という言葉は新約聖書の中で一度しか出てきません。そしてそれは、神のご性質と特質が私たちのうちでどのように開花し、私たちの生活の中にどのように表れるのかを指し示しています。

パウロから始めて、ヨハネとペテロ、そしてヤコブとともに、私たちは今、すべての山に登り終えました。多くの魅力的な眺望と洞察があり、それらは神のご性質と救いにおける神の偉大さを、私たちの前に大きく示してくれました。神を知ること、神のご性質とみわざを知ることが、私たちの心を満たしてほしいと思います。

新しく生まれた人のいのちは、単なる存在でも、単に「あること」や天国を待つことでなく、何よりも満ちあふれるところから生きるいのちです。神は喜んで、豊かに与えてくださるお方です。そのことを、天国に行ってから初めて悟るようではいけません。

15. 気質と性格

本当のキリスト者としての歩みは、根本的な刷新から始まります。そしてその土台の上に、キリストに似た者へと向かう絶え間ない変化が続きます。では、気質は、私の信仰生活と勝利の生活にどのような影響を与えるのでしょうか。

インターネット上の自由な百科事典ウィキペディアは、簡潔に次のように説明しています。「気質とは、生き物が行動し、反応する仕方、つまりその行動様式を表す。それは深く根づいており、情動的、運動的、注意に関わる反応と自己調整とから成り立っている。この言葉は、持続力、刺激に対する閾値、気分、テンポなど、比較的変わることのない、それゆえに典型的な行動の特徴を言い表している。」⁹⁹

「ほぼ2500年の歴史を持つ気質論は、人間をその基本的なあり方によって分類するもので、今日では科学的に見て時代遅れの理論である……。それは体液病理説（四体液説）にさかのぼり、この説はコス島のヒポクラテス（Hippokrates）（ギリシアの医師、紀元前460～375年）に帰せられている……。四体液説と四つの気質の教えを結びつけたのは、ペルガモンのガレノス（Galenus）であり、彼はからだの四つの液体（「フモレス」）にそれぞれ一つの気質を割り当てた。四つの液体のどれが優勢であるかによって、それに結びついた気質が特に強く形づくられるという……：

- 血液（「サングイス」）：多血質（陽気、活動的）
- 粘液（「フレグマ」）：粘液質（受け身、鈍重）
- 黒胆汁（「メラス・コレ」）：憂うつ質（悲しげ、思慮深い）
- 黄胆汁（「コレ」）：胆汁質（怒りっぽく、興奮しやすい）。」¹⁰⁰

99. オンラインで閲覧可能：<http://de.wikipedia.org/wiki/Temperament>.

100. オンラインで閲覧可能：<http://de.wikipedia.org/wiki/Temperamentenlehre>.

15.1 聖書と気質論

まず第一に確認しておかなければならないのは、気質論が異教に起源を持つということです。第二に、それが科学的に時代遅れであることも事実です。この二つの確認は、この教えが聖書の中には出てこないし、聖書から導き出すこともできない、という事実と関わっています。聖書の第二の部分（新約聖書）が成立した時代にはすでにこの教えは存在していましたが、聖書はそれをまったく無視しています。

それでも、私たちは産湯と一緒に赤ちゃんまで流してしまうようなことはしたくありません。気質は現実存在します。ですから、（自分の）気質に目を向けることは役に立つことがあります。この教えが時代遅れであっても、人はだれでも一つの気質を持っており、それは多かれ少なかれ、先に挙げた四つのうちのどれか、あるいはそれらの混合に当てはまることがよくあります。

私は新しく生まれた後も、以前と同じ人間のままです。しかし、キリストの本性とご性質を持つ新しい霊的ないのちが、私に与えられました。このいのちが、私の人格を形づくっていくべきなのです。私の気質のいわゆる長所さえ、キリストなしでは価値がありません。キリストに満たされた人格だけが、新しいいのちについての神の基準にかなうのです。キリストこそ、私たちがなった新しい創造の指針であり、基準です。そしてキリストのご性質は、御霊の実のうちに表れます。これが、私たちの人格形成の規範です。気質を調べることには、それがキリスト者であることの本来の目的に従属している限りにおいて、正当な意味があります。

気質の長所と短所を見ておくことは有益です。私たちは毎日それらと関わっており、それらは私たちの生活の一部であり、したがって信仰生活の一部でもあります。私たちは、自分の構造（両親から受け継いだもの）を簡単には変えられないことを知っています。自分がどのように形づくられているかを知ることは、ぜひとも役に立ちます。そうすることで、否定的な事柄や、キリストに似た者へと成長することを妨げ、ふさいでしまうような行動の仕方とも明らかになるからです。粘液質の人の怠惰なふるまいは、たいいてい活発な

信仰生活の妨げになります。胆汁質の人の性急な行動や判断についても同じことが言えます。私たちは、そのような否定的な面を意識して、それに逆らって舵を切ることができるようにすべきです。そのためには、テストも十分に役立つことがあります。

霊的な生活や賜物との関連で気質にあまりにも深くかかわりすぎると、私たちの注意は強く自分自身に向けられてしまいます。自分自身と自分のわがを吟味するようという勧めもいくつかありますが、それでも合言葉は、ほとんどいつも、キリストを見つめなさい、ということです。それが変化をもたらします。もちろん、その変化には私たちもかかわっています。

W・J・アウウェネール（W. J. Ouweneel）：「彼ら（オーレ・ハレスビー（Ole Hallesby）、ティム・ラヘイ（Tim LaHaye）、ヘンリー・ブランド（Henry Brandt））は、心が神から離れ、罪に身をゆだねるとき、四つの気質において生活がどのようになるかを明らかにした。そのとき、気質の悪い面が勝ちを占めるのである。しかし心が神に向けられ、聖霊の導きに身をゆだねるなら、人格の中で長所が伸ばされていき、キリストが形をとられる。それは、多血質の人においては心の温かさ、誠実さ、快活さ、親切さ、樂觀性という形で、胆汁質の人においては指導力、決断力、チームワーク、断固とした意志、進取の気性という形で、憂うつ質の人においては誠実な友情、創造性、献身的な犠牲の心という形で、そして粘液質の人においては落ち着き、上機嫌、人の話を聞こうとする姿勢、几帳面さ、思慮深さという形で表れる……。

生物적および心理的な構造や……気質と性格類型についてのあらゆる研究にもかかわらず、人間は、自分の性格の悪い面に完全にさらされている、あらかじめプログラムされたロボットではない。ここでも、聖書が、そして牧会の実践が教えているのは、すべては心がどこに向いているかにかかっている、ということである。たしかに、人の気質は遺伝的な体質によって定められている。したがってそれはほとんど変わらない（生涯のうちに小さな変化が生じることはあり得るが、それに人間が影響を及ぼすことはできない）。しかし、**気質と性格**とをはっきり区別しなければならない。性格とは人の行

動上の特性の結果であるが、それは気質によってだけでなく、……何よりも心によって決定されるのである。

人がキリストを信じるようになり、したがって新しく生まれるとき、新しい気質を受けるわけではない（ちょうど別のからだを受けるわけではないのと同じように）。しかし『新しい心』を受ける。すなわち、心の根本的に新しい思い、まったく新しい姿勢、態度、新しい生き方の構想である。まったく異なる行動的・動機的な要因が、また新しい認識と新しい考え方（つまり新しい『認知』）、そして新しい方向に向けられた意志（意欲的¹⁰¹な要因）が、その人の生活の中で役割を果たし始める。こうして刷新された人は、自分の気質の（広い！）体質的な限界の中で、まったく新しい性格を育てていくことができる。そしてその性格の中で、先に述べたように、キリストがまったく独特な仕方で形をとられるのである。」¹⁰²

気質、すなわち受け継いだ素質や傾向は、信者においては聖められ、そうして神のために役立つものとなります。たとえば多血質の人の親しみやすさは、神にとって有用です。それは御霊が内に住み、導いてくださることによって、神のための実にあえなるのです。これは、それぞれの気質のあらゆる「良い」面について言えることです。その際、人間であることのうち、素質や気質に関わる面は、神の最初の創造に属しており、したがって墮落の前のアダムにもすでに備わっていたものです。残念ながら罪は気質にも損傷を与えました。そうした損傷は、徹底して取り除いていかなければなりません。

15.2 性格とその変化

性格とは、ある人の目に見える特性です。私たちはこの言葉を、多かれ少なかれよく知っています。たいていそれは、人間の良い、望ましい特性と結びつけられています。つまり、社会に、そして近年では特に金融の世界に欠けているものと結びつけられているのです。歯止めのかかない貪欲、自己愛、利己主義は、これから来るものの前触れを私たちに見せています。社会は、

101. 「意欲的」(konativ) とは、「衝動的な」「努力し求める」という意味です。

102. W・J・アウウェネル (W. J. Ouwenel) 、*Psychologie, Ein bibelorientiert-wissenschaftlicher Entwurf*、168ページ（強調は筆者による）。

誘惑にも抵抗できる、良い、揺るがない性格こそが、道徳的な崩壊を、止めることはできなくても、少なくとも遅らせることができるのではないかと感じています。

けれども、私たち自身の生活に目を向けてみましょう。性格 (Charakter) という言葉は、硬貨や印章に形を与えた刻印のための型に由来しています。何が私たちを形づくっているのでしょうか。そして、私たちのうちの何が人の目に映っているのでしょうか。さらに重要なのは、次の問いです。だれも見ていないとき、私たちは性格の面で、だれであり、どのような者なのでしょうか。「人の顔は光の中でわかり、その性格は暗闇の中でわかる」ということわざがあります。

世界が必要としているものは、イエスにおいて現実となりました。イエスのご性質が、私たちのうちで現実となることができます。良い性格は、聖霊の実によって、したがってイエスによって形づくられています。しかしそれは、ひとりで飛んでくるわけではありません。神もまた、私たちの意志を素通りして、魔法のように私たちの心にそれを置かれるわけではありません。神は、私たちが神の導きのもとで、神の力と恵みによってそれを育てていけるように、すべてを与えてくださいます。私たちは性格を鍛え、そうして強くしなければなりません。そこに私たちの責任があります。愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制という霊的な実を、私たちはいわば新しい言語、あるいは第二言語のように学ばなければなりません。学び、練習することによって、習慣としてそれを話せるようになるまでです。霊的な性格が、私たちの生活の中で当たり前のものとなるべきなのです。

性格は、いざというとき、また圧力のもとにあるときや誘惑の中にあるときに現れます。ですからパウロも、肉のために備えをするのではなく、主イエス・キリストを着るようと言っているのです (ローマ13:14)。しっかりと固められた (つまり鍛えられ、根気強く追い求められた) 性格は、極限状況の中で霊的な原則を捨ててしまう誘惑に抵抗することができます。その原則とは、その人が新しく生まれてから学び、神の道として大切にしてきたものです。

性格はどのようにして鍛えられるのでしょうか。学ぶことと、適用することによってです。この「霊的な性格」がどのようなものであるかを理解するために、学ばなければなりません。それを内面化することが、いわば私に処方されているのです。私たちは小さな歩みで、これらの特性をますます実践に移していきます。そうしたいと願うからです。

気質が生涯ほとんど変わらないのに対して、性格は、良い方向にも悪い方向にも変化します。性格の土台は意志であり、意志が自らを貫き通す力です。私たちは新しい心と、刷新された意志を持っています。それは新しいいのちへの出発点です。このいのちには、ゴールに至るまで、変わろうとする意志が伴っていなければなりません。

気質論と同じように、**性格**という言葉も聖書の中には見当たりません。それに最も近いのは、聖書の「徳」という概念です（ピリピ4:8、ペテロ第一2:9 [神のご性質としての徳]、ペテロ第二1:3、5）。聖書は、その時代の哲学者たちの徳論には従っていません。共通点は、一つには、徳が何によって際立つのかという点にあり、もう一つには、徳が練習され、鍛えられるものだという点にあります。聖書的に見れば、徳あるいは性格と、キリストに似た者へと向かうその変化は、神ご自身と神の国を目的としています。自己目的としての自分の業績ではなく、聖霊によって刷新された意志の力と、そこから生まれる、神の栄光のため、またほかの人の益のための実践こそが、私たちが造り変えられていくことについての聖書の描く姿と目標にかなうのです。そしてこの造り変えは、神の新しい世界という最終目標へと流れ込んでいきます。

「あなたの思いに気をつけなさい。それは言葉になるから。
 あなたの言葉に気をつけなさい。それは行いになるから。
 あなたの行いに気をつけなさい。それは習慣になるから。
 あなたの習慣に気をつけなさい。それはあなたの性格になるから。
 あなたの性格に気をつけなさい。それはあなたの運命になるから。」

16. むすびのことば

物事が手に負えなくなり、何をすべきで何をすべきでないのか、もうわからなくなる時期があります。時には肉が噴き出して、私たちは自分自身に驚き、ぞっとします。時には自分の無関心さに、同じようにぞっとします。地上の存在として完成への道を歩んでいる限り、こうしたことはすべて私たちに起こり、私たちについて回るでしょう。こう確認したからといって、何かを言い訳にするつもりはありません。しかし、霊的な真理が私たちの生活の中でどれだけ実際に花開いているかということについては、正直でありたいと思います。

あきらめずに、勇気を出しましょう！ たとえ心の中ではあきらめてしまいたい気持ちになっても、それは最悪の解決策です。あきらめと降伏は、肉と悪魔に由来するものなのです！

御父は、その一步がどんなに小さくても、どんなに大きくても、一步ごとに私たちを助けてくださいます。私たちは、ゴールへの道を前進していくべきです。たとえ御父から遠ざかってしまう時期を経験することがあっても、御父は私たちの近くにおられます。そして、御父の腕の中に戻るためには、いつでも一步で十分なのです。

もしかすると、山歩きがあまりにも時間がかかり、骨の折れるものだったので、今は木を見て森を見ず、という状態になっているかもしれません。たしかに、このテーマに関する聖書のテキストをすべて合わせれば、それはかなりの分量になります。しかし私たちは、霊的な理解において、神によってもたらされる成長を経験しているのです。そして、それにはどうしても時間がかかります。私たちはそれを無理に押し進めることも、近道をすることもできません。神は私たちとともに、ご自分の道を歩まれます。神は私たちの味方であり、私たちは神の保護のもとにあります。神は、私たちの過ちや失敗にしか関心のない奴隷監督のように、私たちの背後に立っておられるのではありません。むしろその反対です。神は私たちをご自分の子たち、また子ど

もとして受け入れてくださり、私たちが神の栄光のために生きることができるよう、すべてを手渡してくださっているのです。

パウロでさえ、私たちを慰めるように、栄光への道の途上で、自分はまさにそのゴールにまだ達しておらず、まだ完全にされてもない、と語っています。しかし彼の向かう方向は正しく、彼はゴールを目指して走っています。なぜなら、彼はそれによって——キリストによって——捕らえられ、つかまれているからです。それが彼の秘訣です。

陣営の転換、そしてあらゆる献身、あらゆるささげ尽くし、あらゆる労苦、あらゆる断念、あらゆる決断は、報われるでしょう。栄光の中では、私たちはもはやこのかけがえのない機会を持つことはありません。ですから、「からだにあって」（コリント第二5:10）過ごす私たちの時間、地上の存在としての時間は、これほどまでに貴重なのです。それは繰り返すことができません。その中で与えられる機会が、もう一度私たちに与えられることはないのです。

「神が私たちに与えられたのは、臆病の霊

（気後れ、恐れやすさ）ではなく、

むしろ（その霊は）

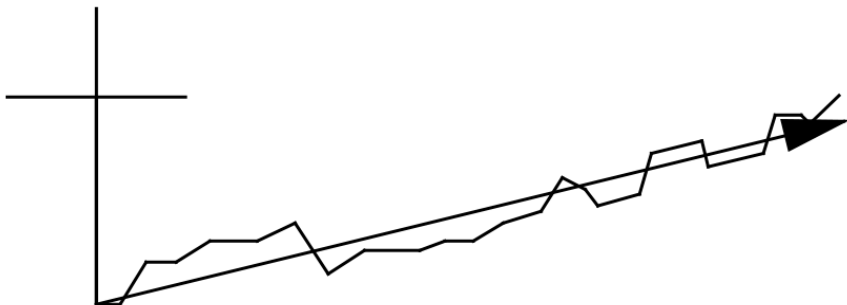
力の、

愛の、

そして慎みの霊です

（訓練、自制、心の平静）。」

テモテ第二1:7



ゴールへの私たちの道は、靈的な成長と聖化において、ただ絶えず上り坂が続くというものではありません。下り坂もあり、停滞や行き詰まりもあります。しかし、上り坂もあるのです。方向が正しくなければなりません。そして私たちは、ゴールそのものによって引き寄せられています——信仰の創始者であり完成者であるイエスから目を離さずに！

17. 参考文献¹⁰³

- Adams, Jay E., *Grundlagen biblischer Seelsorge*, Gießen, 1983.
- Anderson, Neil T., *Neues Leben – neue Identität*, Lage, 1994.
- Anderson, Neil T., *Restored, Experience Life with Jesus*, Franklin, USA, 2007.
- Anderson, Neil T., *Spiritual Warfare*, Ventura, California, USA, 2000.
- Anderson, Neil T., *Steps to Freedom in Christ*, Oxford, 2000.
- Anderson, Neil T., *Winning the Battle within*, Eugene, Oregon, USA, 2004.
- Barclay, William, *Geist oder Fleisch*, Augsburg, 1967.
- Binde, Fritz, *Vom Geheimnis des Glaubens*, Wuppertal, 1979.
- Bullinger, Dr. E. W., *Die zwei Naturen in dem Kind Gottes*, Düsseldorf, 1907.
- Burkhardt, Helmut, *Christ werden, Bekehrung und Wiedergeburt*, Gießen, 1999.
- Custance, Arthur C., *Man in Adam and in Christ*, Grand Rapids, 1975.
- Edman, V. Raymond, *Das ausgetauschte Leben*, Kassel, 1963.
- Eldredge, John, *Der ungezähmte Christ*, Gießen, 2005.
- Gahan, M. C., *The Soul's Transfer from Adam to Christ*, Michigan, 1957.
- Gibson, Jean, *Training im Christentum 3*, Bielefeld, 1990.

103. 私は、ここに挙げた文献を参照し、その一部を引用もしました。しかし、ここに挙げたからといって、これらの本に書かれているすべての主張に私が同意しているという意味では決してありません。

- Heijkoop, H. L., *Der Heilige Geist*, Zürich, 1955.
- Hession, Roy, *Nicht ich – sondern Christus*, Bad Liebenzell, 1980.
- Hille, Rolf (編) , *Ein Mensch, was ist das?*, Wuppertal, 2004.
- Hole, F. B., *Das große Heil Gottes*, Zürich, 1979.
- Ironside, Henry Allen, *Heiligung – Zerrbild und Wirklichkeit*, Bielefeld, 1989.
- Käser, Ernst, *Rechtfertigung des Lebens*, Herblingen, 1989, 第2版.
- Kelly, William, *Die Lehre des NT über den Heiligen Geist*, Neustadt, 1975 (1880).
- Ketting, Siegfried, *Wer bist du, Adam?*, Wuppertal, 1978.
- Lutzer, Erwin W., *Das widerspenstige Ich*, Bielefeld, 2011.
- MacDonald, William, *Der vergessene Befehl: Seid heilig!*, Bielefeld, 1988.
- Markmann, Otto, *Weiter zu etwas Höherem*, ウォッチマン・ニー (Watchman Nee) の本『Das normale Christenleben』に対する批判的見解.
- Mauerhofer, Erich, *Der Kampf zwischen Fleisch und Geist bei Paulus*, Frutigen, 1980.
- Medema, H. P., *Romeinen 7; Het normale en het abnormale christlijke leven*, Vaassen, 1998.
- Modersohn, Ernst, *Die herrliche Freiheit der Kinder Gottes*, Bielefeld, 2008.
- Nee, Watchman, *Befreiung*, Stuttgart, 1978.
- Nee, Watchman, *Das normale Christenleben*, Wuppertal, 1972.
- Nee, Watchman, *Der geistliche Christ*, 第1～3巻, Heerbrugg, 1975.
- Nee, Watchman, *Freiheit für den Geist*, Winterthur, 1969.

- Nee, Watchman, *Geistliche Erkenntnis*, Berneck, 1978.
- Nitsche, Walter / Peters, Benedikt, *Dämonische Verstrickungen – Biblische Befreiung*, Berneck, 1989.
- Nitsche, Walter, *Versagen und innere Zerrissenheit*, Berneck, 1989.
- Ouweneel, Willem J., *Geestelijke Strijd*, Vaassen, 1998.
- Ouweneel, Willem J., *Geloofs-Zekerheid*, Vaassen, 1996.
- Ouweneel, Willem J., *Hoe lief heb ik uw Wet!*, Vaassen, 2001.
- Paxson, Ruth, *Life on the Highest Plane, God's Plan for spiritual Maturity*, Grand Rapids, 1983.
- Pink, Arthur, *Practical Christianity*, Michigan, 1974.
- Ryrie, Charles C., *Ausgewogen statt abgehoben*, Dillenburg, 1994.
- Ryrie, Charles C., *Hauptsache gerettet?*, Dillenburg, 1998.
- Ryrie, Charles C., *Ihr werdet Kraft empfangen*, Dillenburg, 2003 (1965).
- Schirrmacher, Thomas, *Ethik*, 第1卷, *Das Gesetz der Liebe*, Nürnberg, 2001.
- Steidl, Grant, *Konflikt!*, *Der Christ im Widerstreit*, Hückeswagen, 1992.
- Steinberger, Georg, *Das Geheimnis eines siegreichen Lebens*, Stuttgart, 1983.
- Stott, J. R. W., *Men Made New*, London, 1966.
- Thomas, Major W. Ian, *Christus in euch – Dynamik des Lebens*, Holzgerlingen, 2008.
- Thomas, Major W. Ian, *The Indwelling Life of Christ*, Colorado Springs, 2006.
- Thomas, Major W. Ian, *The Saving Life of Christ*, Grand Rapids, 1961.

Thomas, Major W. Ian, Tote können nicht sterben, Neuhausen-Stuttgart, 1973.

Trumbull, Charles G., Befreiung von der Macht der Sünde, Basel, 1986.

Willard, Dallas, Aus dem Herzen leben (原題: Renovation of the Heart), Gießen, 2004.

Willard, Dallas, The Divine Conspiracy, Rediscovering our hidden Life in God, New York, 1997.

このテーマに関する小冊子、記事、論文

Blackburn, John S., Die Befreiung im Römerbrief.

Böhm, Heinz, Die gelegnete Wirklichkeit, Berneck, 1993.

Cutting, George, Die beiden Naturen, Zürich.

Cutting, George, Freedom from Sin: What is it?

Ebertshäuser, Rudolf, Mit Christus gekreuzigt und auferweckt, Leonberg, 2009.

Glassford, Greg, Hey, Fleisch! Hier spricht dein Geist!, Hamburg, 2004.

Grant, F. W., Deliverance: What is it?

Grant, F. W., Life in Christ and sealing with the Spirit, Bedford.

Grant, F. W., Some Themes on the second Part of Romans, Bedford.

Grant, F. W., The two Natures and what they imply, Bedford.

H. E. C., The Believer's two Natures.

Herrick, Greg, Old Man and New Man in Paul, 1999.

John MacArthur's One Nature Teaching,
<http://www.middletownbiblechurch.org/doctrine/1natjm01.htm>

Lüscher, Albert, Der alte und neue Mensch, Langenthal, 1971.

Lüscher, Albert, Euer Leben ist verborgen, Langenthal.

Pink, Arthur W., *The Christian in Romans 7*.

Scofield, C. I., *The two Natures*.

Trachsel, Walter, *Ein reines Herz?*, Frutigen.

Trachsel, Walter, *Gibt es ein Leben im Sieg*, Frutigen, 2003.

Trachsel, Walter, *Heilig sein oder heilig werden?*, Frutigen, 2009.

Trachsel-Pauli, Ernst, *Heiligung nach Geist, Seele und Leib*, Frutigen, 2000.

Wallis, Reginald, *The new Life, Talks with Christians about Practical Victory*, New Jersey, 1932.

ウェブサイト

<http://www.bibelkommentare.de;>

[http://www.biblecentre.org/;](http://www.biblecentre.org/)

<http://www.bodedesheils.nl/>

<http://www.soundwords.de/>

<http://www.streitenberger.com/> : 聖書ギリシア語メーリングリスト（自由に参加でき、ギリシア語に通じた人々が意見を交換する場。聖書本文について言語面からの質問をし、答えを得ることができます）。

注解書

Brockhaus-Kommentar zur Bibel, Wuppertal, 1985.

Calvin, Johannes, *Auslegung der kleinen paulinischen Briefe*, Neukirchen, 1963.

Cecil, A. P., *A Summary of the Epistle to the Romans*.

Coates, C. A., *Ein Überblick über den Brief an die Römer*, Leipzig.

Cousar, Charles B., *Galatians, A Commentary for Teaching and Preaching*, Atlanta, 1982.

- Darby, J. N., *The Collected Writings*, Winschoten, 1972（復刻版）.
- Ellicott, Charles John, *Bible Commentary*, London, 2004（復刻版）.
- Grant, F. W., *The Numerical Bible*, New Jersey, 1901.
- Greijdanus, Dr. S., *Korte Verklaringen*, Kampen, 1932.
- Hoehner, Harold W., *Ephesians, An exegetical Commentary*, Michigan, 2002.
- Jantzen, Herbert, *Vorträge zu Röm 6 – 8*, 1997.
- Kelly, William, *Lectures Introductory*, 1869.
- Kelly, William, *Lectures on the Epistle to the Ephesians*, Oak Park.
- Kelly, William, *Notes on the Epistle to the Romans*, Sunbury, 1981 (1873).
- Kelly, William, *The Bible Treasury*, Winschoten.
- Kelly, William, *The Epistles of Peter*, London, 1904.
- Kramer, G. H., *Christus ons leven*, Vaassen, 1994.
- Lee, Witness, *Der Brief des Paulus an die Epheser*, Stuttgart, 1980.
- Lincoln, William, *Assembly Writer Library*, Glasgow, 1980.
- MacDonald, William, *Kommentar zum NT*, 第1卷, Bielefeld, 1992.
- Medema, H. P., *De nieuwe Mens*, Vaassen, 1991.
- Medema, H. P., *Der Brief an die Römer*, Bielefeld, 1992.
- Medema, H. P., *Het leven is geopenbaard, De Eerste Brief van Johannes*, Vaassen, 1993.
- Nicholson, J. B., および Waugh, G. P., *Was die Bibel lehrt, 1. und 2. Petrusbrief*, Dillenburger, 1991.
- Ouweneel, W. J., *De vrijheid van de Geest*, Vaassen, 1997.
- Ouweneel, W. J., *Christus unser Leben*, Schwelm, 1984.

- Remmers, Arend, *In Christus gesegnet*, Hückeswagen, 2004.
- Schaeffer, F., *Allein durch Christus*, Die zentralen acht Kapitel des Römerbriefs, Holzgerlingen, 1999.
- Smith, Hamilton, *The Epistle to the Ephesians*, Edinburgh.
- Smith, Hamilton, *The Epistles of Peter, An Expository Outline*, Edinburgh.
- Stadelmann, Helge, *Der Epheserbrief*, Neuhausen-Stuttgart, 1993.
- Stallan, Fred, *Was die Bibel lehrt, Römerbrief*, Dillenburg, 2001.
- Stanley, Charles, *On the Epistle to the Romans*, London, 1885.
- Stott, John R. W., *Die Botschaft des Epheserbriefes*, Nürnberg, 2001.
- Stott, John R. W., *The Letters of John*, Tyndale New Testament Commentaries, Nottingham, 1964, 1988.
- Wasserzug, Gertrud, *Der Römerbrief*, Böblingen, 1984.
- Witmer, John A., *Romans*, The Bible Knowledge Commentary, 1983.
- Wolston, W. T. P., *Simon Peter, His Life and Letters*, Edinburgh, 1892.
- Wuest, Kenneth S., *Romans in the Greek New Testament*, Michigan, 1955.

その他の聖書訳に用いた略号

- Elb Elberfelder Übersetzung, nicht revidiert, Berlin, 1961.
- ER Elberfelder Übersetzung, revidierte Fassung, R. Brockhaus Verlag Wuppertal, 第8版, 2001.
- Luther 1912 Die Heilige Schrift nach der deutschen Übersetzung Martin Luthers, Stuttgart, 1912.
- Menge Die Heilige Schrift Alten und Neuen Testaments, Dr. H. Menge 訳, Berlin, 1960.

NeÜ Neue evangelistische Übersetzung, Karl-Heinz Vanheiden 訳 ,
Dillenburg, 2010.

Schl 2000 Die Bibel, übersetzt von F. E. Schlachter (Version 2000),
Genf, 第1版, 2003.

Schlachter Die Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments, F. E.
Schlachter訳, Genf, 1990.

著者について

Hans-Jörg Ronsdorfは1964年生まれ。妻クリスティーネ（Christine）と結婚しており、5人の子どもがいます。一家はバイエルン州のアルゴイ地方（Allgäu）に住んでいます。工具製作工としての職業訓練を終えた後、さまざまな業界で働き、10年以上前から塗装業界のコンサルタント兼サプライヤーとして独立して仕事をしています。

彼はキリスト者の教会ケンプテン（Christliche Gemeinde Kempten）の長老の一人であり、説教と聖書の教えの奉仕に携わっています。

Hans-Jörg Ronsdorf

それでも死者は生きている（Und die Toten leben doch）



魂の不死

240ページ、ペーパーバック

ISBN 978-3-89397-227-2

死者は生きているのでしょうか。それとも、死はすべての存在の終わりなの
でしょうか。人は魂の眠りに落ちるのでしょうか。それとも、死の向こう側
でも意識を持っているのでしょうか。これは、すべての人が気にかける問い
です。これらの問いに答え、同時に希望を伝えること——それがこの本の目
的ですが。その中心テーマは、魂の不死という問いです。生きている死者——
聖書はこの逆説を解き明かします。死は終わりではなく、もはや決して終わ
ることのないいのちの始まりなのです。このことばが真実であることは、死

んでよみがえられたお方によって保証されています。そのお方こそ、死の領域から戻って来られ、いのちへと通じる道を開いてくださったイエス・キリストです。